太宰府市の文化財第 108 集

太宰府・佐野地区遺跡群　25

－殿城戸遺跡第 1・3・4・5・8・9・10・11 次調査、脇道遺跡第 3 次調査－

平成 21 年

太宰府市教育委員会

太宰府市の文化財第 108 集

太宰府・佐野地区遺跡群　25

－殿城戸遺跡第 1・3・4・5・8・9・10・11 次調査、脇道遺跡第 3 次調査－

平成 21 年

太宰府市教育委員会

序

本書は、佐野区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書です。

調査地は太宰府市の西方、大佐野地区の入り口付近に位置し、かつては広がる田園の遥か遠方に、宝満山や四王寺山を望むことが出来ましたが、現在は高速道路が横切り、商業施設が立ち並んでいます。

今回の調査では、古墳時代初め頃の集落跡や中近世以降の井戸など大佐野地区に直接繋がりのある生活遺構も見つかり、地域史を知る上で貴重な所見を得ることが出来ました。

本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用され、ひいては文化財愛護の精神が高揚することを心より願っております。

最後になりましたが、本調査に対しご理解ご協力いただきました、関係各位ならびに諸機関の方々に心からお礼申し上げます。

平成21年3月
太宰府市教育委員会
教育長　關　敏治

例言

1. 本書は太宰府市大字大佐野字殿城戸（とのきど）、脇道（わきどう）で行われた埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
   殿城戸と書いて「とのきど」と遺跡名は呼称しているものの、地元では「とののきど」と呼んでいるため、後者の方が正式な地名の呼び方ということになる。
2. 遺構の実測には、国土調査法第II座標系を利用した。したがって本書に示される方位は特に注記のない限りG.N.（座標北）を示し、本文中に記される遺構の角度もこれを基準としたものである。
3. 調査対象地の表土除去および埋め戻しは㈱白石興業に委託した。
4. 遺構の実測及び写真撮影は担当者のほか、大塚恵治（現八女市教委）、長直信（現大分市教委）、北川高洋、坂本雄介が行った。
5. 遺構全体図のうち第10次調査は航空測量を実施し、これを㈱写測エンジニアリングに委託し図化を行った。
6. 遺構の空中写真撮影は（有）空中写真企画（代表壇睦夫）が行った。
7. 出土品の科学分析は㈱パリノ・サーヴェイに委託した。
8. 出土した鉄製品・木製品の保存処理は下川可容子（現㈱タクト）が行った。
9. 遺物の実測は、担当者のほか久味木理恵、森部順子、福井円、久家春美、木戸雅美が行った。
10. 表入力・写真整理等は瀬戸口みな子、市川晴美、中原順子が行った。
11. 遺物の整理接合・復元作業は馬場由美、住山景子、末永亜由子が行った。
12. 遺物の写真撮影は（有）文化財写真工房（代表岡紀久夫）が行った。
13. 図の浄書は、担当者のほか久味木理恵、森部順子、福井円、久家春美、木戸雅美が行った。
14. 本書に用いた分類は以下のとおり。

弥生土器・・（器形）太宰府市教委『太宰府・国分地区遺跡群1』（太宰府市の文化財第73集）2004
（口縁部）太宰府市教委『太宰府・国分地区遺跡群2』（太宰府市の文化財第94集）2007
須恵器・・・太宰府市教委『宮ノ本遺跡II　－窯跡篇－』（太宰府市の文化財第10集）1992
陶磁器・・・太宰府市教委『大宰府条坊跡XV　－陶磁器分類－』（太宰府市の文化財 第49集）2000
小野正敏「15・16世紀の染付椀、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』1982
土器・・・・太宰府市教委『大宰府条坊跡II』（太宰府市の文化財第7集）1983
瓦質土器・・山村信榮「太宰府出土の瓦質土器」『中近世土器の基礎研究VI』1990 日本中世土器研究会

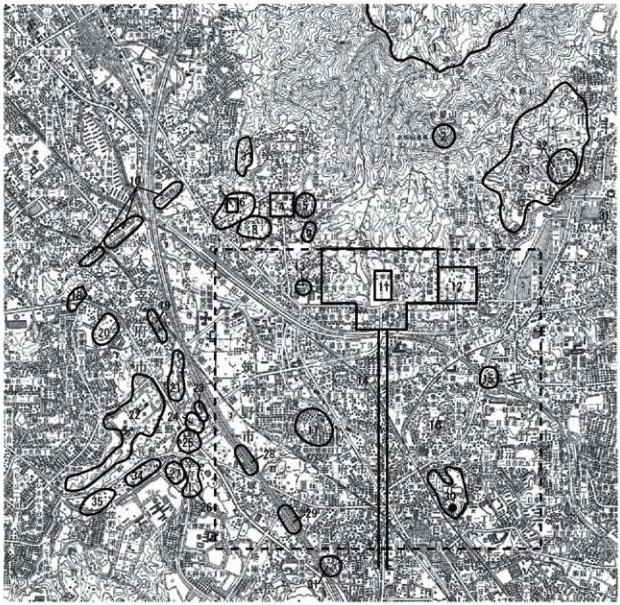
15. 各現場の執筆担当は、目次に記載しているとおりである。
16. 編集は宮崎が担当した。

目次

I、遺跡の位置と歴史 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
II、調査体制 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
III、調査および整理方法 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
IV、調査報告
殿城戸遺跡
1、第1次調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(山村信榮)・ 7
(1) 調査に至る経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
(2) 基本層位 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
(3) 検出遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
(4) 出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
(5) 小結 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
2、第3次調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(中島恒次郎) 12
(1) 調査に至る経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
(2) 基本層位 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
(3) 検出遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
(4) 出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(久味木理恵) 19
(5) 小結 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
3、第4次調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(下高大輔)・ 37
(1) 調査に至る経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37
(2) 基本層位 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 38
(3) 検出遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 38
(4) 出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 42
(5) 小結 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 48
4、第5次調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(宮崎亮一)・ 54
(1) 調査に至る経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 54
(2) 基本層位 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 54
(3) 検出遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 54
(4) 出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 59
(5) 小結 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 67
5、第8次調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(山村信榮)・ 72
(1) 調査に至る経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 72
(2) 基本層位 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 74
(3) 検出遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 74
(4) 出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 76
(5) 小結 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 83
6、第9次調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(山村信榮)・ 90

(1) 調査に至る経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 90
(2) 基本層位 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 90
(3) 検出遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 90
(4) 出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 91
(5) 小結 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 92
7、第10次調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(高橋学) 94
(1) 調査に至る経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 95
(2) 基本層位 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 95
(3) 検出遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 95
(4) 出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 103
(5) 小結 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 120
8、第11次調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(山村信榮) 126
(1) 調査に至る経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 127
(2) 基本層位および検出遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 127
(3) 出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 127
(4) 小結 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 129
脇道遺跡
1、第3次調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(中島恒次郎)・ 131
(1) 調査に至る経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 131
(2) 基本層位 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 133
(3) 検出遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 133
(4) 出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(久味木理恵) 136
(5) 小結 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 140
V、自然科学分析 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(パリノ・サーヴェイ) 145
(1) 殿城戸遺跡第8次調査の自然科学分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 145
(2) 殿城戸遺跡第10次調査の自然科学分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 149
VI、調査まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(宮崎亮一) 156

写真図版・・・主な遺構および遺物写真
付録・・・CD（遺構および遺物写真）



1. 大野城跡
2. 岩屋城跡
3. 陣ノ尾遺跡
4. 筑前国分寺跡
5. 辻遺跡
6. 国分松本遺跡
7. 筑前国分尼寺跡
8. 国分千足町遺跡
9. 御笠団印出土地
10. 水城跡
11. 大宰府政庁跡
12. 観世音寺
13. 遠賀団印出土地
14. 大宰府条坊跡(破線内)
15. 君畑遺跡
16. 般若寺跡
17. 市ノ上遺跡
18. 神ノ前窯跡
19. 原口遺跡
20. 篠振遺跡
21. 前田遺跡
22. 宮ノ本遺跡
23. 雛川遺跡
24. フケ遺跡
25. 尾崎遺跡
26. 脇道遺跡(報告地点)
27. 殿城戸遺跡(報告地点)
28. 剣塚遺跡
29. 唐人塚遺跡
30. 峯・峯畑遺跡(●は峯火葬墓)
31. 太宰府天満宮(安楽寺跡)
32. 浦城跡
33. 原遺跡
34. 京ノ尾遺跡
35. カヤノ遺跡

Fig. 1　太宰府市およびその周辺の遺跡位置図 (1/30,000)

Ⅰ、遺跡の位置と歴史

太宰府市は、北西に福岡平野が、南東に筑後平野が広がるものの、北に四王寺山、北東に宝満山、南に背振山地東端の天拝山に囲まれ、さながら盆地的な様相を示している。

旧石器時代の遺物は、市内各所で散発的に出土し、脇道遺跡第4次調査では約1500点の剥片がまとまって出土している。縄文時代の遺構は多くはないが、大佐野地区の西端に位置するカヤノ遺跡では押型文土器が多く出土するなど低丘陵を中心に居住していた可能性を窺わせる。ちなみに、大佐野集落の背後の丘陵には阿蘇4火砕流台地が残存していた。

弥生時代から古墳時代にかけての集落は、狭い太宰府盆地の中を100～200年ごとに移動しているような状況が窺える。弥生時代の墓地として国分松本遺跡や高雄地区の吉ヶ浦遺跡では弥生時代中～後期の甕棺墓群が確認されている。

古墳時代では、殿城戸遺跡第7次調査で古墳時代初頭の方形区画溝が見つかり、集落と区別するために造られた公共的な広場とみられる。宮ノ本遺跡の丘陵では内部主体が割竹形木棺で鏡を副葬する古墳をはじめ、前期を中心とした古墳群が営まれている。5世紀後半頃には太宰府市唯一の前方後円墳（帆立貝形）である成屋形古墳が築造されているが、立地からすると福岡平野の御笠川沿岸の豪族の墓とみられる。逆に6世紀には市境に近い筑紫野市杉塚に全長42mの剣塚古墳があり、4世紀の古墳群とその上に築造された6世紀中頃～7世紀にかけての前方後円墳は6世紀代の太宰府地域を知る上で欠かせない存在である。その剣塚古墳に程近い大佐野川南岸の京ノ尾遺跡では6世紀代の集落が確認されている。

古代にはこの狭い平野の北端に大宰府政庁を置き、前面にいわゆる大宰府条坊と呼ばれる都市が整備された。その規模は南北22条、東西12坊におよび、南辺部は筑紫野市まで広がっている。この大佐野地区は条坊の外側に位置するが、6世紀前半～9世紀中頃の大規模須恵器窯である牛頭窯跡群に抜ける谷筋に位置し、すぐ東側を官道が通る要衝である。発掘調査では、カヤノ遺跡で7世紀末～8世紀初頭の掘立柱建物群が確認され、周辺の京ノ尾遺跡でも奈良時代の遺物が多く出土している。

中世になると観世音寺や太宰府天満宮などかつての条坊城の東部へと遺構は広がり、宝満山を含め寺社を中心にその周辺一帯は高い密度で遺構が展開している。また、周辺の山々には岩屋城や有智山城など九州の戦国史に名を残す山城が築造され、激しい戦いが繰り広げられている。特に岩屋城の戦いは高橋紹運が760名余りの軍勢で岩屋城に陣取り、九州統一を目指す島津軍を迎え撃ち、14日に渡って激戦を繰り広げたことは有名である。このような情勢に伴い、太宰府周辺では岩屋城や有智山城に関連した中世山城が多く築造されている。本格的な発掘調査はほとんど行われていないが、周辺の山中には良好な段造成や堀切等を見ることができる。今回報告する大佐野地区周辺でも、隣接する筑紫野市杉塚にわくど城（和久堂城、脇道城）があったと伝えられ、現在でもその高まりにタカジョウ、ヒクジョウ、ジョウノコシという呼び名が残っている。調査地南側の古野添遺跡では堀切や段造成が確認され、それに隣接する現在の福岡農業高校やその背後の筑紫野市にも同様の段造成があって、中世山城の可能性が指摘されていたが、未調査のまま住宅街になっている。

近世の太宰府は太宰府天満宮を中心に宰府や五条の町ができ、街道筋の集落として通古賀が形成されているが、その周縁に位置する他の集落は都市近郊型の農村集落であった。今回報告する大佐野集落で行われた京ノ尾遺跡では、中世後期になって多くの遺物が出土するようになり、大佐野集落の始まりとわくど城などの周辺の山城築造との関係性が指摘されている。その後、区画整理が行われる直前までは、田圃と山林に囲まれた静かな農村集落で、戦時中、周辺の山々では防空壕の坑木伐採が盛んに行われていたらしい。現在は大佐野川の両岸を中心に住宅街になり、かつての面影を全く残していない。

II、調査体制

（平成２／1990 年度）　・・・殿城戸遺跡第１次調査

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	西山義則
	社会教育課長	関岡勉
	文化財係長	鬼木冨士夫
	主任主事	岡部大治
	主　　事	白水伸司
調査	主任技師	山本信夫　狭川真一
		城戸康利（2 年 7 月 1 日～）
	技　　師	城戸康利（～ 2 年 6 月 30 日）
		緒方俊輔
		山村信榮（調査担当）
	技師（嘱託）	中島恒次郎　狭川麻子

（平成５／1993 年度）　・・・脇道遺跡第３次調査

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	中川シゲ子
	文化課長	佐藤恭宏
	埋蔵文化財係長	高田克二
	文化振興係長	大田重信
	主任主事	岡部大治　川谷豊
調査	技術主査	山本信夫（5 年 10 月 1 日～）
	主任技師	山本信夫（～ 5 年 9 月 30 日）
		狭川真一　城戸康利　緒方俊輔　山村信榮
		中島恒次郎（調査担当）
	技　　師	塩地潤一
	技師（嘱託）	田中克子
		重松麻里子（5 年 6 月 1 日～）　井上信正（5 年 7 月 1 日～）

（平成６／1994 年度）　・・・殿城戸遺跡第３次調査

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	白木三男
	文化課長	花田勝彦
	文化財保護係長	高田克二
	文化振興係長	大田重信
	主任主事	岡部大治　川谷豊
	主　　事	今村江利子
調査	技術主査	山本信夫
	主任技師	狭川真一　城戸康利　山村信榮
		中島恒次郎（調査担当）

		重松麻里子
	技　　師	井上信正
	技師（嘱託）	田中克子（～6年7月31日）
		下川可容子

（平成9／1997年度）　・・・殿城戸遺跡第4次調査

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	小田勝弥
	文化財課長	津田秀司
	文化財保護係長	和田敏信
	文化財調査係長	山本信夫
	主任主事	藤井泰人
	主　　事	今村江利子
調査	技術主査	狭川真一（9年10月1日～）
	主任技師	狭川真一（～9年9月30日）
		城戸康利（調査担当）
		山村信榮　中島恒次郎　井上信正
	技　　師	高橋学　宮崎亮一
	技師（嘱託）	下川可容子　森田レイ子

（平成11／1999年度）　・・・殿城戸遺跡第5次調査

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	小田勝弥（～6月30日）
		白石純一（7月1日～）
	文化財課長	津田秀司
	文化財保護係長	和田敏信
	文化財調査係長	山本信夫
	主任主事	藤井泰人
		今村江利子（～6月30日）
		野寄美希（7月1日～）
	嘱　　託	鈴木弘江
調査	技術主査	城戸康利
	主任技師	山村信榮　中島恒次郎　井上信正
	技　　師	高橋学
		宮崎亮一（調査担当）
	技師（嘱託）	下川可容子　森田レイ子

（平成12／2000年度）　・・・殿城戸遺跡第8・9次調査

総括	教育長	長野治己（～12月24日）
		關敏治（12月25日～）
庶務	教育部長	白石純一
	文化財課長	木村和美（4月1日～）
	文化財保護係長	和田敏信

	文化財調査係長	山本信夫（～ 10 月 23 日）
		神原稔（11 月 1 日～）
	事務主査	藤井泰人
	主任主事	野寄美希
	嘱　　託	鈴木弘江
調査	技術主査	城戸康利
	主任技師	山村信榮（調査担当）
		中島恒次郎　井上信正　高橋学　宮崎亮一
	技師（嘱託）	下川可容子　森田レイ子
		佐藤道文（調査担当）

（平成 13 ／ 2001 年度）　・・・殿城戸遺跡第 10 次調査

総括	教育長	關敏治
庶務	教育部長	白石純一
	文化財課長	木村和美
	文化財保護係長	和田敏信
	文化財調査係長	神原稔
	事務主査	藤井泰人
	主任主事	大石敬介
調査	主任主査	城戸康利
	主任技師	山村信榮（調査担当）
		中島恒次郎　井上信正
		高橋学（調査担当）
		宮崎亮一
	技師（嘱託）	下川可容子　森田レイ子　佐藤道文

（平成 20 ／ 2008 年度）　・・・殿城戸遺跡第 11 次調査・報告書発行

総括	教育長	關敏治
庶務	教育部長	松田幸夫
	文化財課長	齋藤廣之
	保護活用係長	菊武良一
	調査係長	永尾彰朗
	主任主査	吉原慎一　齋藤実貴男
調査	主任主査	城戸康利
		山村信榮（第 11 次調査担当）
		中島恒次郎
	技術主査	井上信正
	主任技師	高橋学　宮崎亮一
	技師（嘱託）	柳智子　下高大輔　大塚正樹

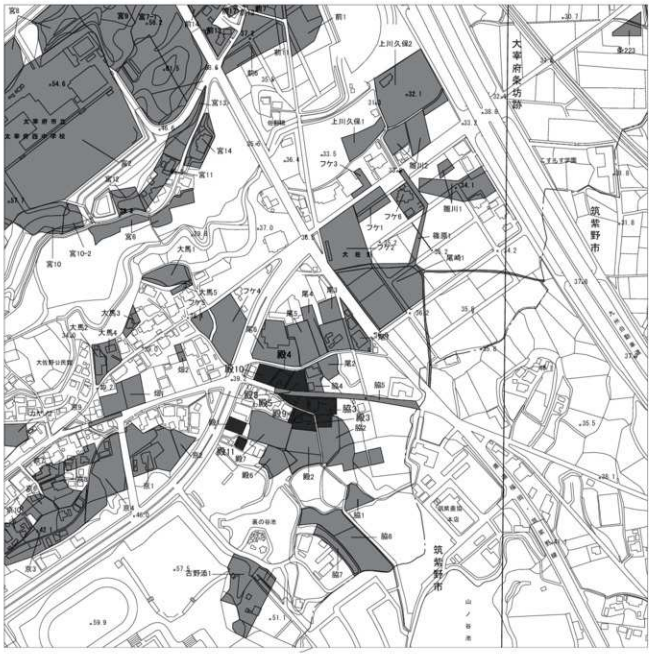


Fig.2　報告調査地および周辺調査位置図（1/5,000）

III、調査および整理方法

略測図は 1/100 で作成し、遺構個別図および土層図は 1/20 もしくは 1/10 で実測を行った。遺構全体図は第 10 次調査のみ航空測量によって図化を行い、その他の調査は手測り実測によるものである。

なお、調査および整理方法については、『佐野地区遺跡群 I』（太宰府市の文化財第 14 集 1989）、『太宰府市における埋蔵文化財調査指針』（太宰府市教育委員会 2001 年 9 月改訂）に基づいている。

IV、調査報告

殿城戸遺跡

1、第1次調査

(1) 調査に至る経過

遺跡は太宰府市大字大佐野字殿城戸181番地の1にあり、調査は区画整理に先行する倉庫建設に先立って行われた。調査は山村信榮が担当した。調査期間は平成2（1990）年8月29日から同年9月6日で、調査面積は86.7㎡である。

(2) 基本層位

天拝山塊に連なる丘陵端部北東側の緩斜面に形成されたもので、戦後の養豚場建築に伴う造成によって著しく削平を受け、調査区東側は完全に花崗岩風化土地盤が露出していた。西側も縦横に豚舎の基礎の撹乱が走っている。

(3) 検出遺構

遺構は弥生時代中・後期の甕棺墓と古代以降のピット群からなる。甕棺は1ST001と1ST005の2基を検出している。両者とも小児棺であり墓壙の掘り方も小さい。土坑1SK010は弥生中期のものであり、1SK002は埋土中に炭を多く含んでいたが、土器はなく時期不明。ピット群の大半は色調から中世以降のものと思われる。

甕棺墓

1ST001(Fig.4)

調査区の中央の西寄りにあり、上半は破壊されて欠失している。長さ0.8m、幅0.6mの楕円形の掘り方に、若干口縁が高くなる傾斜を持って横に甕が据えられている。墓壙の掘り方が口縁より先に延びないため合わせ口式でない単棺式のものと判断される。使用された甕は高さ0.6mほどの日用のもので、口縁部が「く」字を呈してくびれ部外面に三角突帯を有する。弥生後期初頭頃の所産である。遺物の所在がつかめずに図化できていない。

1ST005(Fig.4)

調査区の中央にあり、上半は1ST001同様に破壊されて欠失している。長さ0.6m以上、幅0.6mの楕円形の掘り方に、若干口縁が高くなる傾斜を持って横に甕が据えられている。墓壙の掘り方が口縁より先の南側は1SX003のピットで破壊されている。使用された甕は高さ0.5mほどの日用のもので、口縁部を欠くため時期の詳細はわからないが、底部形状から須玖II式の弥生中期中頃から後半に位置づけられる。

土坑

1SK010(Fig.4)

調査区の中央の西寄りにあり、南側は1ST001同様に破壊されて欠失している。長さ1m以上、幅0.8mの楕円形の掘り方で底面はフラットな状態であった。弥生時代の日用の甕2個体分が出土している。

(4) 出土遺物

甕棺墓出土遺物

1ST005出土遺物(Fig.4)

弥生土器

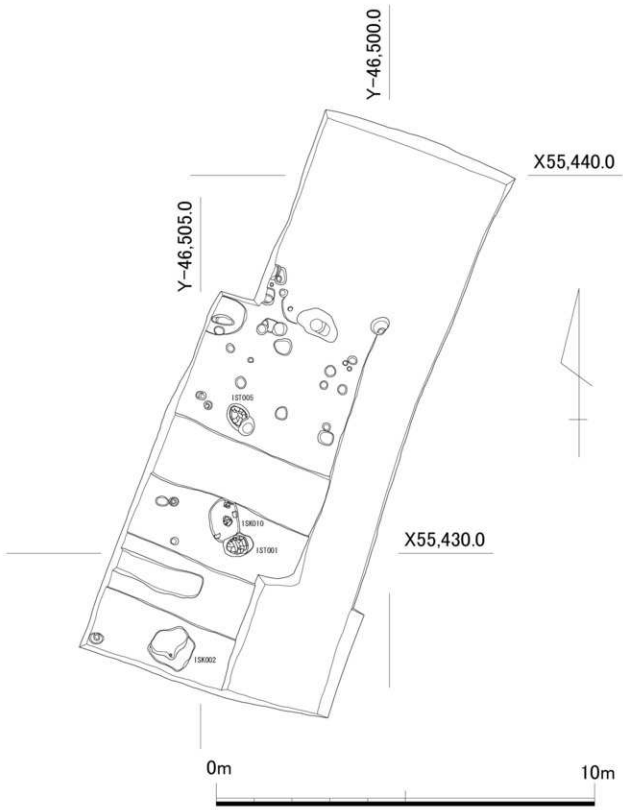


Fig. 3　第１次調査遺構全体図（1/100）

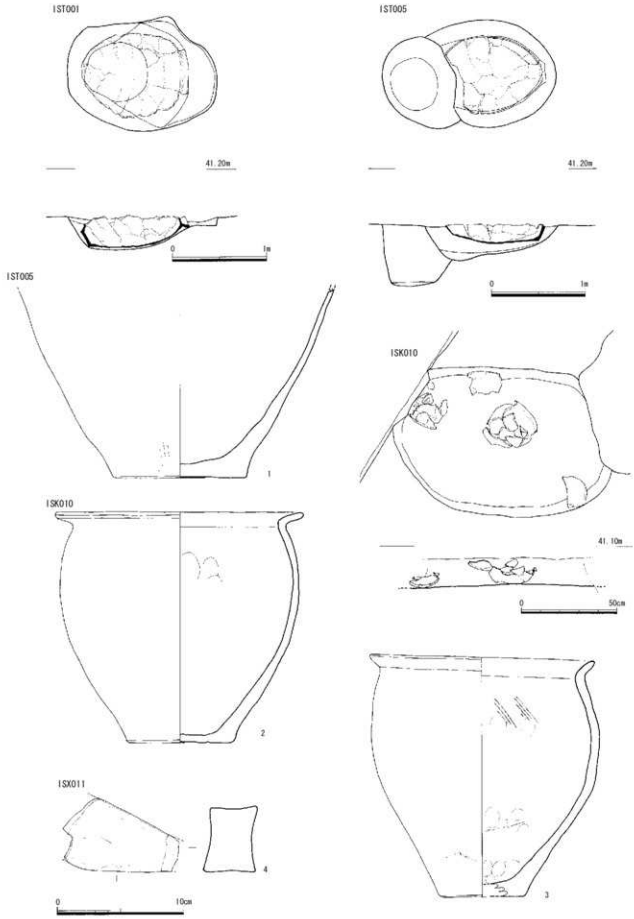


Fig.4　殿城戸遺跡第１次調査甕棺墓（1/40）・土坑（1/20）遺構実測図および出土遺物実測図（1/3）

甕（1） 底径10.6cm、高さ14.7cm以上の法量を測り、色調は淡い茶褐色を呈する胎土を持つ。底部は体部に対しても極端に厚みはなく、外面は角をもつ平たい形状を持つことから、弥生中期須玖II式の所産と考えられる。

土坑出土遺物

1SK010出土遺物（Fig.4）

弥生土器

甕（2、3） 2は口径19.6cm、器高18.3cm、底径7.9cmを測る。色調は茶褐色を呈する。口縁はやや端部が高い「く」字を呈する弥生中期須玖II式の所産のものである。3は口径17.7cm、器高18.9cm、底径6.8cmを測る。色調は茶褐色を呈する。やや体部も底部も1より厚めで、口縁は「く」字を呈する弥生後期高三潴式の所産のものである。

その他の遺構出土遺物

1SX011出土遺物（Fig.4）

石製品

砥石（4） 長さ9.2cm、器高5.8cm、厚さ4.1cmを測る砂岩製の手持ち形式のもの。

(5) 小結

今回の調査では弥生時代中期から後期初頭の甕棺墓と土坑を確認した。検出された甕棺は小児棺のみであったが、遺跡のある大佐野地区に於いては弥生中期の集約性のある集落は検出されていない。しかし、尾崎遺跡第2次調査において古墳時代の旧河川跡から複数の弥生中期の成人棺が出土しており、その上流域にある本遺跡周辺に一定程度の甕棺墓群が展開していたことを示唆している。削平の著しい本調査地点周辺の丘陵裾部には当該期の遺跡が過去には存在していたことが考えられる。1SK010の性格については2個体の甕が出土した状況以外には情報を得られていないが、この存在から案外生活域が至近にあった可能性も想定できよう。

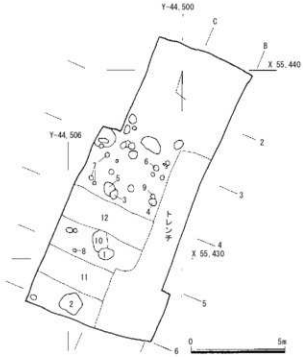


Fig.5 第1次調査遺構略測図（1/200）

表1　殿城戸遺跡第1次調査　遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況（古→新）	遺構間総合（古→新）	時　期	地区番号
1	1ST001	甕棺				弥生後期初頭	C4
2	1SK002	焼土坑				弥生～	C5
3		Pit					C3
4		Pit					B3
5	1ST005	甕棺			3→5	弥生中期～	C3
6		Pit					B3
7		Pit群					C3
8		Pit					C5
9		Pit					B3
10	1SK010	土坑				弥生後期初頭	C4
11	1SX011	撹乱				現代	C5
12		撹乱				現代	C4

表2　殿城戸遺跡第1次調査　出土遺物一覧表

S-2
弥　生　土　器破片

S-3
須　恵　器供膳具
弥　生　土　器中期；破片

S-4
弥　生　土　器破片

S-5
弥　生　土　器甕（須恵II）[1]

S-6
須　恵　器坏c3

S-7
弥　生　土　器破片
石　製　品sb-f(1)

S-8
弥　生　土　器中期；壺?

S-9
弥　生　土　器破片

S-10
弥　生　土　器甕(須恵II)(2)

S-11
須　恵　器坏c3　小甕
肥前系陶器器染付；鉢
国　産　磁　器坏
弥　生　土　器中期；甕口6　甕底(底ノ縁式)
金　属　製　品一銭硬貨
石　製　品砥石

S-12
国　産　磁　器坏

S-13
須　恵　器坏
筑州窯系青磁皿 V-1
国　産　磁　器瓶
弥　生　土　器破片

S-14
国　産　陶　器破片
国　産　磁　器破片

S-16
須　恵　器坏c3
弥　生　土　器破片

S-17
弥　生　土　器破片

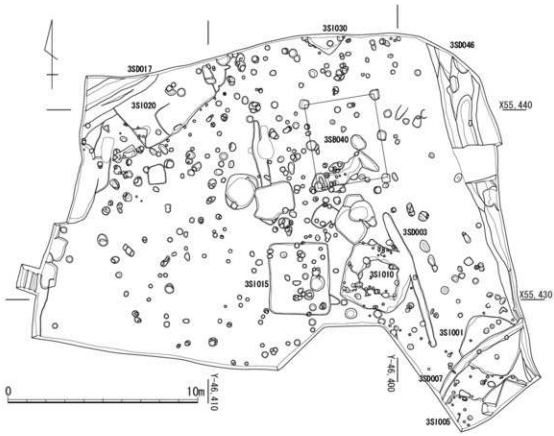


Fig.6　殿城戸遺跡第３次調査遺構全体図（1/200）

2、第３次調査

(1) 調査に至る経過

昭和61年度に事業計画決定がなされた佐野地区土地区画整理事業は、それに先立つ埋蔵文化財記録保存調査として、昭和62年度から開始された。ここで報告する殿城戸遺跡第３次調査も平成６年度に事業計画が担当課である区画整理課よりなされ、平成７(1995) 年２月１日から平成７(1995) 年３月31日の期間実施した。対象面積は587㎡、調査面積は300㎡を測り、調査は中島恒次郎が担当した。

(2) 基本層位

現地表面から約0.25m下位に遺物包含層として茶褐色土が堆積し、その下位0.5mほどに遺構が検出できた。したがって、遺構検出時の遺物は、茶褐色土として取り上げている。

(3) 検出遺構 (Fig.6)

掘立柱建物 (Fig.7)

3SB040

調査区北東寄りに検出した掘立柱建物で、１間×２間の規模を有する。柱間は梁行3.6m、桁行柱間は各2.2mを測り、計4.4mを測る。ただし柱痕跡を十分検討することなく記録を収集したため、任意中点で計測している。柱規模から算出される占有面積は、15.84㎡、約4.756坪になる。座標北に対してN8°7′48″Wでやや西に傾斜した桁方向を有している。梁方向－桁方向－斜方向は、大略3:4:5の割合で施工されている。

竪穴住居

遺構の「併行性」からみると、3SI001・005・010・030が併行に施工され、3SI015ならびに3SI020は前者ならびに相互に異なっている。

3SI001（Fig.8・9）

調査区南東隅で検出した竪穴住居で、遺構北東隅が3SD046によって欠失している。規模は、南北2.98m×東西2.94m×残存する深さ0.2m前後を測り、8.761㎡の占有面積を有している。遺構北辺中央部に造り付けの竈が確認できる。主柱と考えられるものが遺構中央部に4箇所検出でき、東西方向1.26m×東西方向1.04mを測る。また遺構南辺には、南から北へ焼土が流れ込むように確認でき、南に確認できた3SI005など近接した住居に付設された竈崩壊土の可能性もある。下位に3SD007が確認できている。

3SI005（Fig.11）

調査区南東隅に検出した遺構で、周辺調査成果から南に隣接した殿城戸遺跡第2次調査にて検出した2SI005の北西隅部分と考えられる。基盤層削り出しのベッド状遺構が残り、壁溝を考えられるものを確認した。残存する深さは0.2m程度であった。

3SI010（Fig.9・10）

調査区南東寄りに検出したもので、南北3.36m×東西3.46m×残存する深さ0.02m前後と極めて残りが悪いものであった。占有面積は、11.626㎡を有する。遺構中央部に4本の主柱を造るもので、1.38mを前後する規模で柱が建てられていたものと考えられる。遺構北辺中央部に竈らしき痕跡が確認されているが、遺構残存状況から明らかにできなかった。

3SI015（Fig.11）

調査区中央部にて確認した遺構で、南北3.78m×東西3.12m×残存する深さ0.11mを測り、占有面積は11.794㎡を有する。主柱的な痕跡が遺構中央部に検出できているが、極めて浅いことから「掘え置き」式の主柱であった可能性がある。内部には四周を巡るように「ベッド」状の高まりが確認できた。これまで記してきた3棟の建物とは建造方向が明らかに異なっている。

3SI020（Fig.10）

調査区北西部にて確認したもので、遺構北辺部分を3SD017によって、東辺部分を3SX022よって欠失している。したがって遺構規模の計測し難いが、東西規模は4.72m前後を測る。残存する深さも0.3mを測り、残存状況としてはあまり良くなかった。調査区内では主柱痕跡を明らかにし得ていない。東西両方に基盤層削り出しによる「ベッド」状の高まりを有している。

3SI030（Fig.6）

調査区北辺に検出したもので、確認規模からみて住居とし得るかどうかは不安が残る。ただし遺構辺形からすると直角に交わっていることから、住居南東隅部分が検出できているとも考えられたため、この項にて解説した。これが住居ということになれば、先述した3SI020と平行に施工されていると考えられ、同時期の遺構である可能性がある。

溝

3SD003

調査区南東部分で検出したもので、遺構形状から溝とした。確認規模は長さ7.5m前後、幅0.5m前後を測る。

3SD007

調査区南東隅にて検出したもので、3SI001に先行する。やや湾曲気味に調査区南西から北東へ確認できた。

3SD017

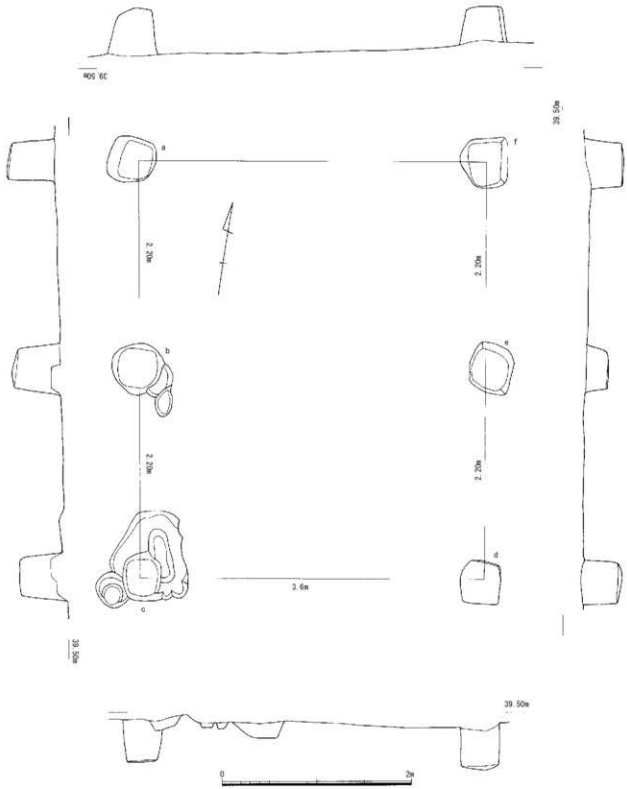


Fig.7　3SB040 遺構実測図（1/40）

調査区北西隅に確認できたもので、上面にのる表土層を除去すると黄色土ブロックを多量に含む淡白灰色土が堆積していた。現場での観察所見からは、現状畦畔との認識であったが、本調査区で確認した3SB040 や隣接する脇道遺跡第 3 次調査検出の 3SB015 と平行関係にあり、また後述する 3SD046 とはほぼ直交する関係にあり、当該遺構の埋没時期が平安後期であることを考慮すると、施工時期が建物施工時期にまで遡る可能性を有している。

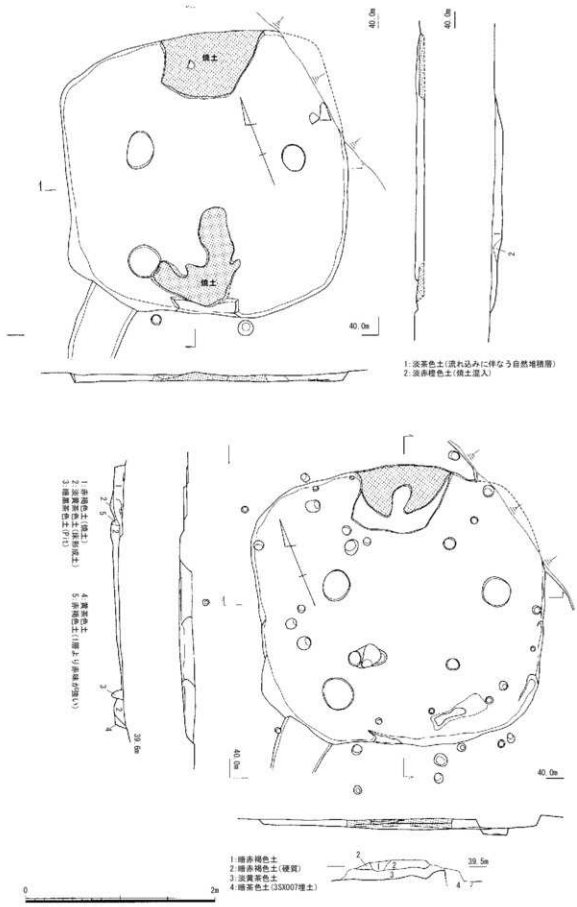


Fig. 8　3SI001 遺構実測図 (1/40)

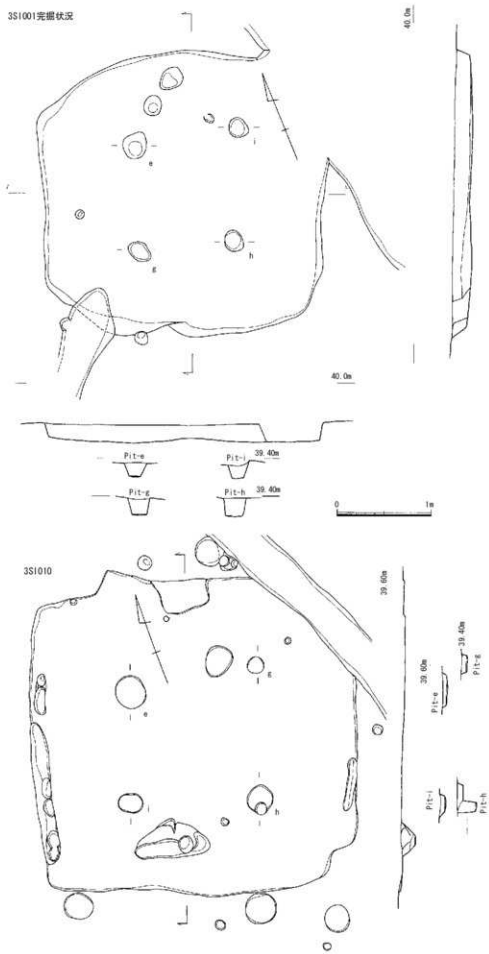


Fig.9　3SI001・010 遺構実測図（1/40）

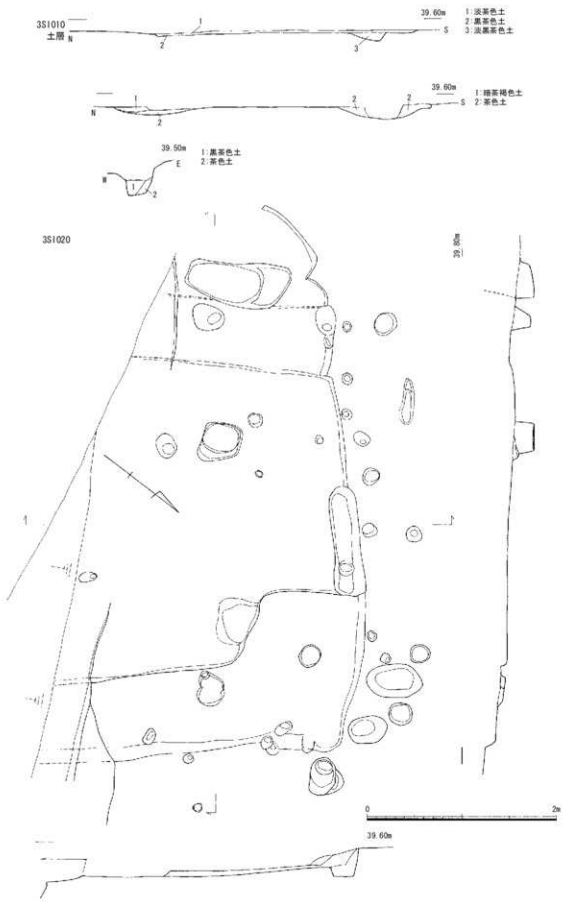


Fig. 10　3SI010 土層図・3SI020 遺構実測図（1/40）

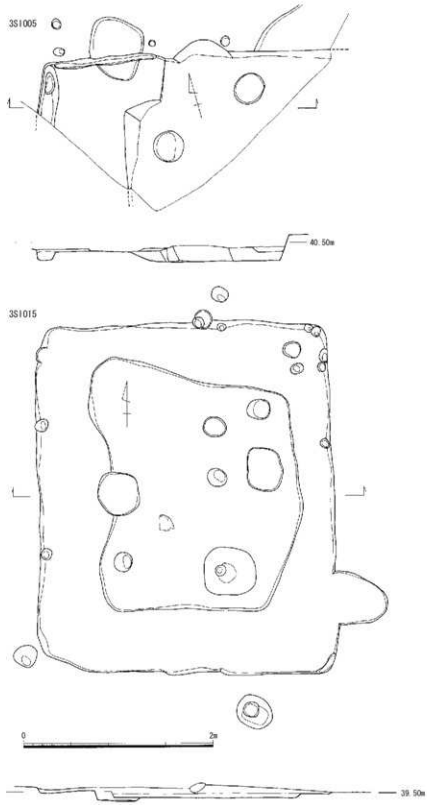


Fig. 11　3SI005・015 遺構実測図（1/40）

3SD046

調査区東辺にて確認した溝で、上位に表土を考えられる灰色土が観察でき、当該土層を除去したところ下位に 3SD046 と認定した茶黒色土ならびに暗灰色砂を確認した、上下関係は暗灰色砂（下位）→茶黒色土（上位）である。やや湾曲しているが、ほぼ直線と考えられ、先述した 3SD017 と直交する関係にあると考えられる。

土坑

3SK021

調査区北辺にて検出したもので、3SI020 より後出するものである。1.60m × 1.25m を測る。

3SK022

3SK021 同様に調査区北辺にて検出したもので、3SI020 より後出する。遺構規模は 3SK021 とほぼ同規模であった。

3SK049

調査区中央部にて確認したもので、長軸長 1.98m ×短軸長 1.82m ×残存する深さ 0.28m を測る。やや長方形を呈するもので、窪み状のものであった。

3SK051

調査区中央部にて確認したもので、1.62m × 1.94m ×残存する深さ 0.45m を測る、やや楕円形を呈する土坑である。堆積土ならびに切り合い関係から 3SK049 に後出する。

3SK058

調査区中央部にて確認したもので、1.10m × 1.30m ×残存する深さ 0.455m を測る。やや楕円形を呈している。切り合い関係は、3SX067 より後出している。

3SK059

調査区中央部にて確認したもので、長軸長 2.00m ×短軸長 0.85m 前後を測り、残存する深さは 0.2m を測る。遺構の先後関係は、3SX066（3SB040）→ 3SX062 → 3SX059 の関係であった。

その他の遺構

3SX002

調査区南東隅で確認した小穴群。

3SX012

調査区北西部で検出した小穴群

3SX027

調査区南西部で検出した小土坑。

3SX037

調査区北東部にて検出した小穴群で、北辺部分で直線的に並ぶ傾向が観察できたが、展開が明らかにし難かったため、小穴群として遺物を取り上げた。

3SX038

調査区北辺部分で検出した小穴群。

(4) 出土遺物

出土遺物全てが時期判別できるものではなく、小破片については弥生－古墳の区別がつかないものが多いため、「出土遺物一覧」において土師器の項に「破片」記載のみのものは、両者の区別がつかない小破片でることから、この項目に記載しかつ時期不明として記述している。

竪穴住居出土遺物

3SI001 出土遺物 (Fig.12)

須恵器

坏蓋 (1)　復原口径 14.4cm。口縁端部は内傾した平坦面を有し、体部外面は明瞭に屈曲した形状を呈する。また外面全体に灰かぶりがみられる。胎土は緻密で焼成、還元とも良好。

土師器

椀 (2)　口縁部から体部の約 1/6 残存。摩耗気味で調整は不明瞭な部分が多いが、内外面の一部に丁寧なナデ調整の痕跡がみられる。胎土は緻密で焼成良好。

甕 (3 ～ 5)　いずれも口縁部から体部の小破片。体部にかけて 4 は緩やかに屈曲し、3 は明瞭な屈曲がみられる。5 はやや直立した形状で屈曲はみられない。3 は内外面にハケ調整がみられるが、内面はその後横ナデ調整される。また外面には炭化物の付着もみられる。4 は体部外面に細かなハケで調整され、5 は体部外面がハケ調整されるが、内面は煤の付着のため調整不明瞭。いずれも焼成は良好で、胎土は 3・4 が粗く、5 は緻密。

3SI001 茶色土出土遺物 (Fig.12)

須恵器

坏蓋 (6)　口縁部から体部の小破片。口縁端部は一部欠損するが、内傾する平坦面を持ち、体部外面は回転ナデで凹凸を形成する。胎土は緻密で硬質。焼成、還元良好である。

土師器

壺 (7)　口縁部から体部にかけての小破片。摩耗した口縁端部の他は横ナデで形成され、口縁部外面には縦方向のハケ目痕がみられる。口径は 17.4cm に復原される。

3SI001 焼土出土遺物 (Fig.12)

土師器

壺 (8)　口縁部から体部の小破片。口縁部内面が横ナデ調整され、一部ハケ目痕がみられる。体部外面もハケ調整される。焼成良好。

古式土師器

甕 (9 ～ 11)　いずれも口縁部から体部の小破片で、口縁部と体部との境はやや明瞭に屈曲する。9・10 は焼成不良で摩耗が著しく、体部内面の強いナデ調整が残るのみである。11 の体部内面も強いナデ調整、口縁部外面の一部に指頭圧痕がみられる。また体部外面下位にハケ目と考えられる痕跡がみえるが、判然としない。また、いずれも外面全体が黒色化し、9・11 には一部煤が付着する。

3SI001 カマド出土遺物 (Fig.12)

弥生土器

高坏 2 (12)　坏部の約 2/3 残存資料。口径は 14.8cm を測る。全体的に摩耗気味であるが、内外面ともに横ナデで調整され、内面の一部にミガキ痕と考えられる部分が観察できる。また、外面の一部が黒色化する。胎土は緻密で、2mm 以下の砂粒を多く含む。

3SI001g 出土遺物 (Fig.12)

弥生土器

甕 (13)　口縁部の小破片。口縁端部はナデ調整され、内外面はハケ目痕がみられる。胎土は 2mm 以下の砂粒を多く含み粗い。焼成良好。

3SI005 出土遺物 (Fig.12)

古式土師器

椀 (14)　復原口径 15.4cm を測る。口縁端部は平坦面を有し、内傾する形状を呈する。口縁部は横ナ

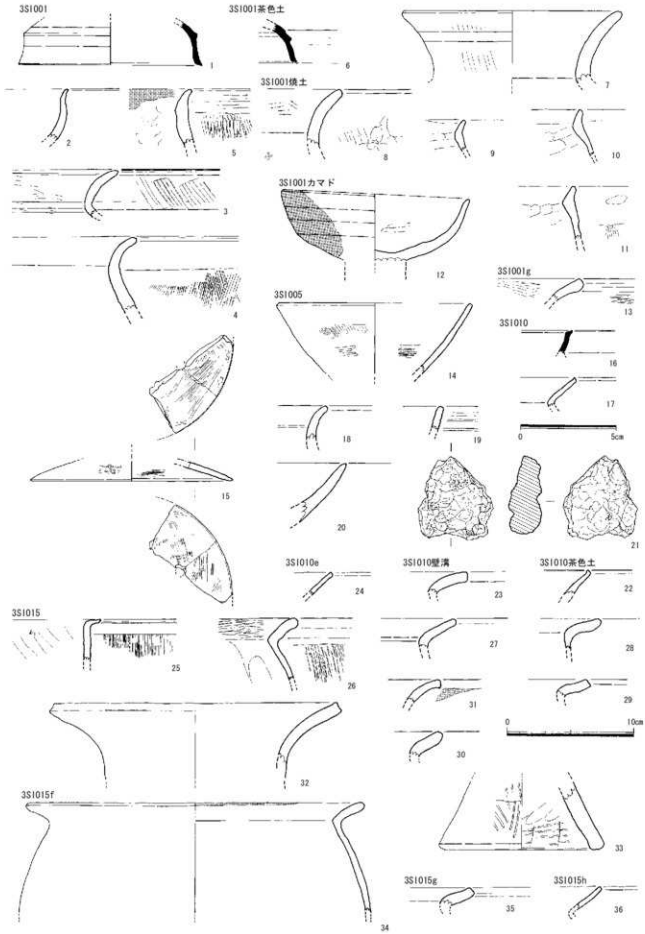


Fig. 12　第３次調査竪穴住居出土遺物実測図①（1/2、1/3）

デされ、体部上位にはハケ目痕、その下方は丁寧なナデで調整され、一部ミガキ痕と考えられる痕跡がみられる。内面はハケ調整されるが、口縁部から体部上位にかけてその後ナデにより調整されている。胎土は緻密で混入物はほとんどみられない。

高坏（15） 脚部の約1/6残存破片。口縁端部はヨコナデ、内外面は細かなハケで調整される。円形状の透かしも確認できる。

3SI010 出土遺物（Fig.12）

須恵器

壺(16) 口縁部の小破片。端部平坦部は内傾気味で、ナデによって成形され、内外面は回転ナデによって調整される。また外面中位以下は青灰色に明瞭に変色することから、重ね焼きの可能性が考えられる。

土師器

甕（17） 口縁部から体部にかけての小破片。頸部は「く」の字に屈曲する形状を呈する。口縁端部と体部内面はナデ、その他はヨコナデで調整される。焼成良好。

弥生土器

壺（18） 口縁部の小破片。内外面ともヨコナデで調整される。胎土は緻密で、焼成良好。

古式土師器

壺（19） 口縁部の小破片。内外面ともヨコナデ調整され、外面には三条の凹線を有す。焼成良好。

鉢（20） 口縁部から体部小破片。焼成不良で、摩耗のため調整は不明。

金属製品

鉄滓（21） 縦4.4cm、横3.9cm、厚さ1.6cm。全体は淡茶灰色を呈するが、部分的に褐色化し、気泡もみられる。

3SI010 茶色土出土遺物（Fig.12）

土師器

甕（22） 口縁部の小破片。口縁端部内面にやや凹面を呈し、内傾気味の形状である。摩耗により調整は不明瞭。焼成不良。

3SI010 壁溝出土遺物（Fig.12）

弥生土器

壺(23) 口縁部の小破片。下方にむかって「く」の字に曲がる形状と考えられる。摩耗のため、詳細不明。焼成不良。

3SI010e 出土遺物（Fig.12）

古式土師器

甕（24） 口縁部の小破片。内外面とも淡褐灰色を呈するが、外面赤味があるため丹塗りの可能性がある。調整は摩耗のため不明瞭。

3SI015 出土遺物（Fig.12）

弥生土器

甕（25～31） 25、26は口縁から体部、27～31は口縁部の小破片。25の口縁端部は外方にほぼ垂直に折れ曲がる。内面は削りとハケ調整後ヨコナデされ、体部外面は細かなハケで調整されている。焼成良好。26は頸部を「く」の字状に屈曲させ、内面に口縁部がハケ目、体部に縦方向のナデがみられ、体部外面は細かなハケで調整される。27～30もやや「く」の字形状の口縁部で、31は残存部分が少なく形状は不明。31の外面には煤の付着が観察できる。

壺（32） ラッパ状に外方に開く口縁部の形状で、口縁部は23.0cmに復原できる。内外面ともヨコナ

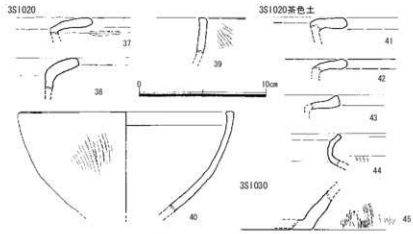


Fig. 13　第３次調査竪穴住居出土遺物実測図②（1/3）

デで調整される。胎土には0.5～1cmの砂粒を多く含み、焼成良好。口縁部の1/5程度の残存資料である。

器台（33）　脚部の残存資料で、脚部口縁部は13.0cmに復原される。内面の上位は斜め方向の粗いナデ、下位は横方向のハケ目がみられ、外面は摩耗気味であるがハケ目調整がみられる。胎土には3mm以下の砂粒を多く含み、焼成は良好である。

3S1015f 出土遺物（Fig. 12）

弥生土器

甕（34）　口縁部から体部の約1/8残存破片。頸部は「く」の字に曲がる形状で、屈曲部外面からその下位にかけてヨコナデ調整が見られるが、その他は摩耗のため調整不明瞭。口縁端部には輪状に黒色化がみられる。口径復原26.8cm。

3S1015g 出土遺物（Fig. 12）

弥生土器

甕（35）　口縁部の小破片。頸部は「く」の字の形状を呈すると考えられる。口縁端部はヨコナデ、他はナデで調整される。胎土は砂粒を多く含み、やや粗い。焼成はやや不良である。

3S1015h 出土遺物（Fig. 12）

古式土師器

甕（36）　口縁部の小破片で、摩耗により詳細は不明。焼成不良。

3S1020 出土遺物（Fig. 13）

弥生土器

甕（37・38）　いずれも口縁部の小破片。37の口縁部はほぼ垂直に屈曲する。外面の屈曲部付近に一部褐色部分がみられる。胎土はやや緻密で、2mm以下の砂粒を多く含む。38はやや緩やかに屈曲する形状で、摩耗のため詳細は不明。

鉢（39・40）　39は口縁部の小破片。外面には斜め方向のハケ目がみられる。焼成良好。40は口縁部から体部まで残存し、口径は17.0cmに復原される。外面には縦方向のハケ目がみられ、内面は不定方向にナデで調整される。胎土には僅かに角閃石が含まれる。

3S1020 茶色土出土遺物（Fig. 13）

弥生土器

甕（41～43）　いずれも口縁部の小破片で、ほぼ垂直に折れ曲がる形状を呈する。摩耗気味で調整は不明瞭な部分が多いが、41の口縁端部には赤色の付着物があり、丹塗りされた可能性がある。

壺（44）　口縁部の小破片。端部はヨコナデされ、外面下位はハケ目痕が僅かにみられる。胎土は緻

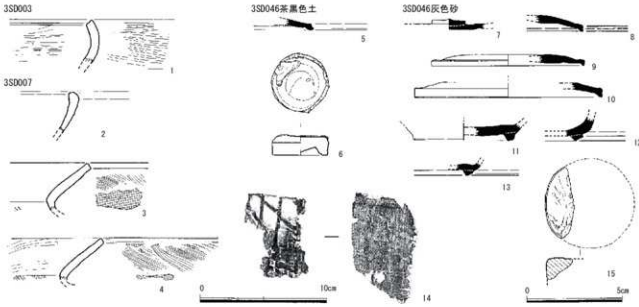


Fig.14　第３次調査溝出土遺物実測図（1/2、1/3）

密で砂粒は少なく、金雲母粒や黒色粒を微量に含む。

3S1030 出土遺物（Fig.13）

弥生土器

壺（45）　底部の小破片。外面には縦方向のハケ調整後ナデ調整、内面はナデ調整と一部指頭圧痕がみられる。胎土はやや粗めで、砂粒を多く含み黒色粒も僅かに含む。

溝出土遺物

3SD003 出土遺物（Fig.14）

弥生土器

鉢ｄ（1）　口縁部の小破片。口縁端部平坦面は内傾気味で、体部に向かって内湾する形状を呈する。内外面ともに細かな横ハケで調整される。摩耗気味。

3SD007 出土遺物（Fig.14）

土師器

鉢（2）　口縁部の小破片。口縁端部は丸みを帯び、下方に向かって内傾する形状を呈する。胎土は緻密で金雲母粒を含む。焼成良好。

古式土師器

甕（3・4）　いずれも口縁部の小破片。３は外面と内面下位に斜め方向のハケ目がみられ、外面下位には黒色の付着物も観察できる。４も外面は斜め方向のハケ目と内面上位は横方向、下位は縦方向のハケ目が確認できる。また、外面の一部に黒色の付着物もみられる。胎土は３がやや緻密で４はやや粗い。いずれも焼成良好である。

3SD046 茶黒色土出土遺物（Fig.14）

須恵器

蓋３（5）　口縁部の小破片。端部はやや外方に傾いた断面三角形を呈する。内外面とも回転ナデされ、内面上位にはその後ナデで調整される。焼成・還元ともに良好。

同安窯系青磁

椀（6）　底部のみで底径4.4cmを測る。断面台形状の高台を有し、外面は回転ヘラ削りされ、高台側面はその後回転ナデされる。内面は黄味がかった透明釉がやや厚めに施釉される。焼成良好。

3SD046 灰色砂出土遺物 (Fig.14)

須恵器

蓋c (7) 扁平な擬宝珠形のつまみが貼付けられる。内外面とも回転ナデされるが、天井部内面はその後ナデ調整される。胎土は緻密で、焼成良好。

蓋3 (8～10) いずれも端部は断面三角形を呈し、9は12.1cm、10は14.8cmに口径復原される。9・10の体部外面上位は回転ヘラ削りされ、9はその後粗くナデ調整される。体部内面上位はいずれも不定方向ナデがみられる。また、9の口縁端部は色調に変化がみられることから、重ね焼きされたと考えられる。

坏c (11～13) すべて底部の小破片。11・12はやや外に傾いた断面台形の高台、13は外に跳ね上げた形状の断面台形の高台を有す。11の底部切り離しは回転ヘラ切りで、その後粗いナデで調整される。13の体部下位はやや丸みを呈する。いずれも焼成、還元良好。

瓦類

平瓦(14) 凸面は格子叩、凹面は布目痕がみられる。胎土は須恵質で5mm以下の砂粒をやや多く含む。

石製品

紡錘車(15) 滑石製で淡黄緑色を呈する。復原径は4.8cmと考えられる。形状から紡錘車と判断した。

土坑出土遺物

3SK022 出土遺物 (Fig.15)

古式土師器

高坏 (1) 脚部の端部破片。内外面ともナデ調整されるが、摩耗気味。端部上位には透かしの一部が観察できる。焼成不良で胎土は5mm以下の砂粒を多く含む。

3SK051 出土遺物 (Fig.15)

弥生土器

壺 (2) 口縁部の小破片。内面は斜め方向、外面下位に縦方向のハケ目が観察できる。内面下位に横方向のハケ目があると考えられるが明瞭でない。胎土は2mm以下の砂粒を多く含む。焼成良好。

3SK058 出土遺物 (Fig.15)

古式土師器

高坏 (3～5) 3・4は坏部口縁部から体部、5は坏部底部から脚部までの破片資料。3は摩耗して調整不明な端部を除いて内外面ヨコナデされ、4は摩耗のため調整不明瞭であるが内外面の一部にミガキ痕がみえる。また体部と底部の境界はやや屈曲する。5も全体的に摩耗気味だが、坏部底部内面と坏部、脚部外面にミガキ、ハケ目の痕跡が僅かにみられる。脚部内面下位はハケ調整され、その内面上方は横ナデ調整される。また、脚部下位には2箇所縦に楕円状の穿孔がみられ、全部で3箇所の透かしがあったと考えられる。

甕 (6～11) 6～8は口縁部、9～11は口縁部から体部の残存破片。6・7は体部の境界が明瞭に「く」の字に屈曲するが、8～11はやや緩やかに屈曲する形状を有す。6は摩耗が著しく調整は不明瞭で、7・8も摩耗気味。7の外面下位には横方向のハケ目、8の内面は上位に横方向、その下方は斜め方向のハケ目、外面は縦方向に一部斜め方向のハケ目がみられる。9・10は内面が不定方向、外面が縦方向にハケ調整され、胎土は両者とも砂粒を多く含み粗い。9の外面下位には2次焼成による黒色化も確認できる。11は1/8程度の残存で、口径16.2cmに復原されるが摩耗により調整の詳細は不明瞭。

二重口縁壺 (12) 口縁部の小破片。やや外方を向いて「く」の字に屈曲する形状を呈する。内外面ともにヨコナデされ、外面下位には僅かに煤の付着も観察できる。

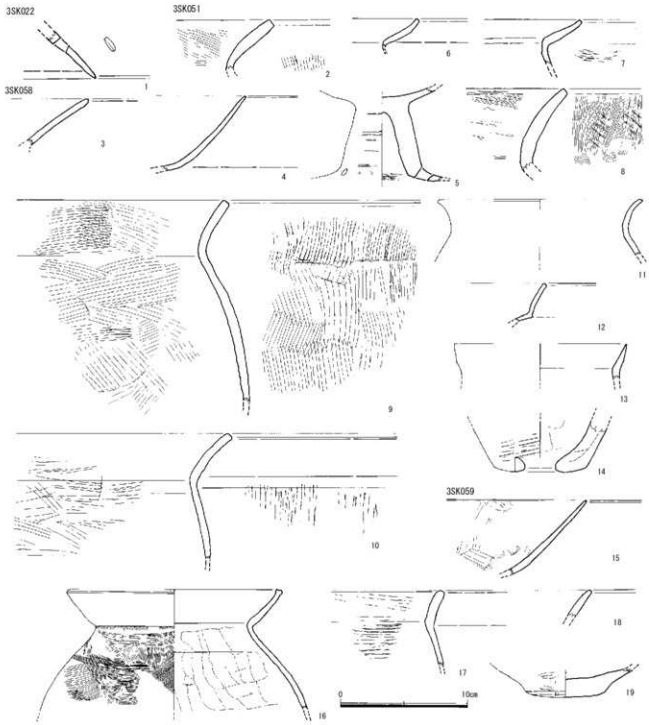


Fig.15　第３次調査土坑出土遺物実測図（1/3）

鉢（13）　口径は 13.5cm に復原される。口縁端部は細く立ち上がる形状で、内面は体部との境に屈曲がみられる。摩耗により調整不明の端部を除いて内外面ヨコナデ調整される。

甑（14）　底径 7.2cm、孔径 2.4cm に復原される。体部外面は斜め方向の叩きで、内面には粘土貼り付け時のナデ押さえ調整もみられる。焼成良好。

3SK059 出土遺物（Fig.15）

古式土師器

高坏（15）　坏部口縁部から体部の小破片。体部と底部の境は緩やかに屈曲する。内面は不定方向の

細かなハケ調整がみられるが、全体的に摩耗が著しくその他は調整不明瞭。胎土に 1mm 以下の角閃石を少量含む。

甕（16） 復原口径 16.8cm。口縁端部は小さく凹凸面を有し、頸部は大きく「く」の字に屈曲し、体部は外方に張り出す形状を呈する。体部内面は横方向の削りされ、体部内面は細かなハケで調整される。また、体部内面にしぼり痕もみられる。

甕 1（17） 口縁部から体部の小破片。体部との境はやや緩やかな屈曲を呈する。全体が摩耗気味であるが、内面は横方向のハケ目調整がみられる。胎土は砂粒を多く含み粗い。

壺（18・19） 18 は口縁部のみの小破片。摩耗が著しく、口縁端部の回転ナデ調整を除いて調整は不明瞭。焼成不良で、胎土は 3mm 以下の砂粒を多く含み、やや粗い。19 は底部から体部の小破片で摩耗が著しい。外面の一部には僅かにハケ目と叩きの痕がみられる。

その他の遺構出土遺物

3SX004 出土遺物（Fig. 16）

弥生土器

甕（1） 口縁部の小破片。内面はナデされ一部に横方向のハケ目、外面は縦方向のハケ目がみられる。また、口縁端部外面には小さな沈線が一条入る。胎土はやや粗めで、焼成は不良気味。

3SX008 出土遺物（Fig. 16）

弥生土器

高坏（2） 坏部底部から脚部上部の破片資料。坏部見込みはナデ調整、内面は全体が粗ナデで調整される。脚部外面は縦方向に丁寧にナデされており、ミガキの可能性もある。胎土は緻密で焼成良好。

3SX009 出土遺物（Fig. 16）

古式土師器

小鉢（3） 1/4 程度の残存資料。口径は 8.1cm、底径 4.4cm に復原される。口縁部はヨコナデされ、その他はナデ押さえの調整がみられる。焼成は良好で、胎土に白雲母粒を多く含む。

3SX012 出土遺物（Fig. 16）

弥生土器

甕（4） 口縁部の小破片。頸部は「く」の字に屈曲し、摩耗のため調整は不明瞭。焼成不良。

3SX014 出土遺物（Fig. 16）

土師器

椀（5） 口縁部から体部の小破片。内面は横方向のミガキ、外面は横方向の強いナデ痕、口縁端部はナデ調整がみられる。内外面ともに明茶褐色を呈する。焼成良好。

壺（6） 口縁部の小破片。全体的に摩耗気味で明瞭でないが、内外面の一部にハケ目痕が確認できる。焼成は不良気味で、胎土には僅かに角閃石を含む。

鉢（7） 口縁部の小破片。端部は回転ナデされ、その他はナデで調整される。焼成良好で、胎土にわずかであるが角閃石を含む。

3SX027 出土遺物（Fig. 16）

弥生土器

高坏（8） 坏部体部の小破片。全体的に摩耗気味。内面に横方向のハケ目、外面に斜め方向のハケ目が観察できる。体部から底部への屈曲部分外面には凹みがみられ、その下方には炭化物とみられる黒色化もみられる。

3SX032 出土遺物（Fig. 16）

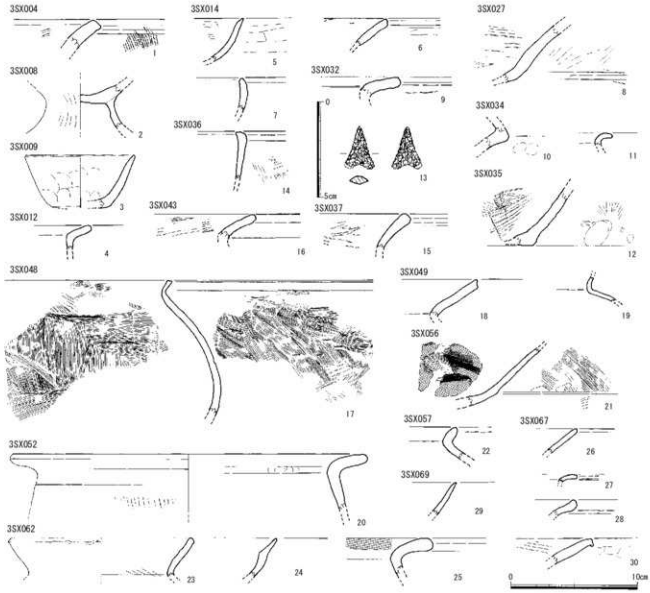


Fig.16　第3次調査その他の遺構出土遺物実測図（1/2、1/3）

弥生土器

甕（9）　口縁部の小破片。全体がナデ調整され、屈曲部内面には僅かに沈線が入り、外面には横方向に粘土紐痕がみられる。

3SX034 出土遺物（Fig.16）

弥生土器

壺（10・11）　いずれも口縁部の小破片。10は二重口縁の屈曲部分で、内面ヨコナデ、外面はナデ押さえ調整されるが、摩耗気味。11は頸部をゆるやかに外方へ屈曲する形状を呈する。摩耗のため調整は不明瞭であるが、屈曲部外面が赤色を帯びることから、丹塗りされた可能性がある。

3SX035 出土遺物（Fig.16）

弥生土器

甕（12）　体部から底部の小破片。内面はハケ調整、体部外面の上位はハケ調整され、下位がナデ調整と一部指頭圧痕がみられる。底部は削り調整される。胎土はやや粗く、焼成良好。

石製品

石鏃（13） 黒曜石製で基部を僅かに欠損する資料。縦 2.25cm、横 0.9cm、厚さ 0.45cm を測る。重さは 0.5g。

3SX036 出土遺物（Fig. 16）

弥生土器

鉢（14） 口縁部の小破片。ほぼ直立した形状で、端部は回転ナデ、外面にはハケ調整がみられるが、摩耗して不明瞭である。胎土は砂粒を多く含み、やや粗い。焼成は不良気味。

3SX037 出土遺物（Fig. 16）

弥生土器

壺（15） 口縁部の小破片。端部は削り後回転ナデされ、内面は横方向にハケ調整される。全体が摩耗気味。胎土は砂粒を多く含みやや粗め。焼成は不良気味。

3SX043 出土遺物（Fig. 16）

弥生土器

甕（16） 口縁部の小破片。内面は横方向のハケ目、端部から外面はナデ調整される。外面屈曲部には僅かに凹みがみられる。胎土は 3mm 以下の砂粒を多く含みやや粗い。焼成はほぼ良好。

3SX048 出土遺物（Fig. 16）

弥生土器

壺(17) 口縁部から体部の小破片。口縁部はやや内傾し、体部は大きく外方に張り出す形状を呈する。口縁部外面にはナデ調整がみられ、内外面は細かなハケで調整される。焼成は良好で、胎土はやや粗い。

3SX049 出土遺物（Fig. 16）

弥生土器

甕（18） 口縁部の小破片。内外面はヨコナデ調整され、外面はやや粗い調整である。焼成良好。

壺（19） 口縁部から体部の小破片で、口縁部と体部との境はほぼ垂直に屈曲する形状を呈する。摩耗のため調整は不明瞭。

3SX052 出土遺物（Fig. 16）

弥生土器

甕（20） 口縁部から体部の破片資料。口縁部はヨコナデ調整され、内面屈曲部分には一部指頭圧痕がみられ、体部内面は丁寧なナデ調整、外面は摩耗気味であるが、一部縦方向にハケ目調整が観察できる。口径は 28.2cm で、胎土は緻密、焼成は良好である。

3SX056 出土遺物（Fig. 16）

弥生土器

高坏（21） 坏部の小破片。内面は摩耗した下位部分を除いてハケ調整がみられ、広範囲に炭化物の付着がみられる。外面もハケ調整され、屈曲部分には指頭圧痕と、明瞭な屈曲が確認できる。胎土はやや粗く、焼成は不良気味。

3SX057 出土遺物（Fig. 16）

弥生土器

壺（22） 口縁部から体部の小破片。端部は丸味を帯びており、体部にかけ「く」の字に屈曲する。頭部外面がナデ調整される他は摩耗により調整不明。焼成良好。

3SX062 出土遺物（Fig. 16）

土師器

甕（23） 口縁部の約 1/6 残存破片。全体的に摩耗が著しく調整は判然としないが、内面の屈曲部分

の一部に僅かにハケ目痕が残る。口径は 14.7cm に復原される。

弥生土器

甕（25） 口縁部の小破片。形状は「く」の字に屈曲し、端部はやや丸味を帯びる。口縁端部内面には黒色化がみられ、外面の一部にはハケ調整されるが、全体的に摩耗気味で明瞭ではない。胎土は緻密。焼成はやや不良気味。

古式土師器

鉢 4（24） 口縁部から体部の小破片。口縁部分は内傾し、内面に段を有する。胎土は緻密で焼成良好。

3SX067 出土遺物（Fig.16）

土師器

高坏（26） 坏部口縁部小破片。摩耗のため調整は不明。焼成不良。

弥生土器

小壺（27） 口縁部の小破片。摩耗が著しく調整不明であるが、内面に丹塗りとみられる赤色塗彩が僅かに確認できる。胎土は緻密で、焼成は不良気味。

鉢(28) 口縁部の小破片。若干摩耗気味であるが、内外面とも回転ナデで調整される。焼成はやや不良。

3SX069 出土遺物（Fig.16）

土師器

坏×高坏（29） 口縁部の小破片。内面はヨコナデ調整が確認できるが、外面は摩耗が著しく調整不明瞭。胎土は緻密で、焼成良好。

古式土師器

甕（30） 口縁部の小破片。口縁端部外面は僅かに折り込む形状で、内外面はヨコナデされ、内面の一部には僅かにハケ目痕、外面は指頭圧痕が残る。焼成良好。

土層出土遺物

茶褐色土出土遺物（Fig.17）

須恵器

壺（1） 口縁部の小破片。外面下位に凸帯を有す形状である。凸帯部分はナデ調整後回転ナデ、その他は回転ナデで全て調整される。焼成、還元ともに良好。

土師器

椀（2 ～ 4） いずれも口縁部から底部の破片資料。2 は口径 10.8 cm、3 は口径 11.7 cmに復原される。2 は口縁端部内面上位に剥離がみられるが、その下方は滑らかにヨコナデ調整され、口縁部から体部外面も滑らかにナデ調整される。底部外面は手持ちヘラケズリ後粗いナデ調整される。胎土は緻密で焼成良好。3 は口縁端部から体部外面にかけて強いヨコナデで調整され、底部外面は不定方向に強いナデで調整される。また、内面はミガキ c がみられる。4 は 2 とほぼ調整や胎土、焼成状況が類似しており、2 と同一個体の可能性がある。

壺（5） 口縁部分の小破片。外方に開き、下位で屈曲する形状なことから二重口縁壺と考えられる。全体的に摩耗気味で、内面は横方向のハケ目、外面は斜め方向のハケ目、外面下位はナデ調整される。胎土はやや緻密で焼成は不良気味。

甑（6） 底部が 3/4 が欠損する他はほぼ残存する資料。体部外面上位には把手が手捏ねで成形され、体部内面は縦方向に削り調整後ナデ調整、体部から底部の外面は縦方向のハケ目と一部指頭圧痕がみられる。また底部外面にはススの付着がみられることから使用されたものと判断できる。口径は 19.1cm を測る。焼成良好。

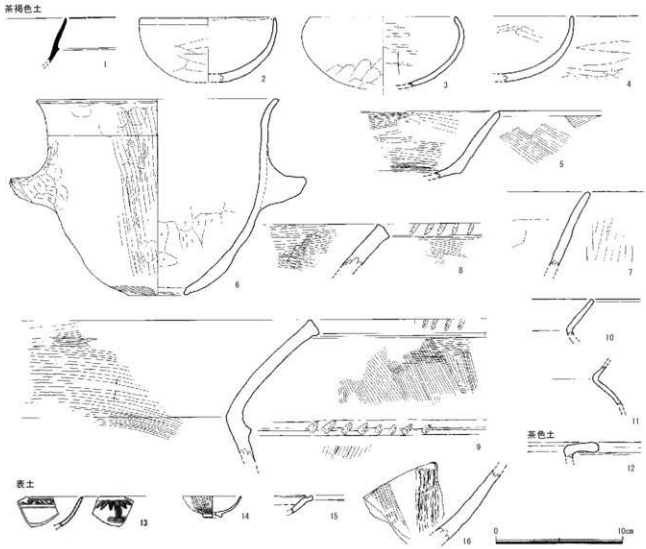


Fig. 17　第３次調査土層出土遺物実測図（1/3）

甕（7）　口縁部の小破片。やや内傾する形状で、内面は工具によるヨコナデ、端部から外面上位にかけてヨコナデされ、その下方はハケ調整される。焼成良好。

弥生土器

大甕（8・9）　8は口縁部、9は口縁部から体部の小破片。口縁端部平坦面にはいずれも斜方向に刻みがみられ、口縁端部はヨコナデ、内外面はハケ調整が確認できる。また、9は体部外面上位に刻みを有す突帯が貼付けられる。いずれも胎土はやや粗く、焼成良好。

古式土師器

甕（10・11）　10は口縁部、11は口縁部下位から体部の小破片である。10は摩耗が著しく屈曲部外面がヨコナデされる他は調整不明。胎土は1㎜以下の砂粒を多く含み、やや粗め。焼成不良。11は屈曲部が内外面ともナデ調整、その他はヨコナデ調整される。胎土は緻密で、焼成は良好である。

茶色土出土遺物（Fig. 17）

弥生土器

甕（12）　口縁部の小破片。下方にほぼ垂直に屈曲する形状で、屈曲部外面には粘土の接合痕と考えられる帯状の筋がみえる。胎土は1.5㎜以下の角閃石が若干含まれ、やや粗い。焼成ほぼ良好。

表土出土遺物（Fig. 17）

染付磁器

小椀（13）　口縁部の小破片。内面には圏線と唐草文、外面には植物と考えられる文様が呉須で描かれている。内外面に薄く施釉される。

白磁

紅皿（14）　口径4.8cm、高台径1.5cmに復原される。肥前系。外面には細かな連弁文がみられ、体部外面下位は施釉されない。肥前系と考えられる。

国産陶器

溝縁皿（15）　口縁部の小破片。全体的に薄く施釉され、細かな貫入がはいる。唐津産と考えられる。

擂鉢（16）　体部の小破片。内面は回転ナデ後縦方向に擂り目がつけられている。外面は回転ナデ軽くナデで調整される。備前系と考えられる。

(5) 小結

本調査区にて検出した遺構群の時間変遷について、主要なものについて概略を記述する。

Ⅰ期（弥生時代後期）3SI015・3SB040

次代のⅡ期との違いを遺物の上から明確に弁別できているのかは不安があるが、遺構建造方向からみると、ほぼ南北を主軸とする点で共通している。これらから出土した遺物が弥生後期に帰属していると考えられた点ならびに切り合い関係から、全ての遺構に先行する時期として捉えた。

Ⅱ期（古墳時代前期）3SI005・3SI020・3SI030

二本主柱を持ち、「ベッド」状遺構を有するものを当該期に含めた。建造方向は、南北とやや西に偏向するものの二者が存在している。相互に切り合い関係が不明であるため、先後関係を明らかにしきれていない。当該期において前後二時期ある点のみを確認しておく。

Ⅲ期（古墳時代後期）3SI001・3SI010

住居北辺に竈を付設するもので、主軸をやや東に偏向しているものである。2棟確認しているが、近接する調査区をみても密集している様子はなく、散在的な居住空間であったと考えられる。

Ⅳ期（奈良時代後期～平安時代後期）3SD017・3SD046

施工時期については、堆積土内から出土した遺物からは明確にし難く、3SD046から平安後期に帰属する遺物が出土しているため、埋没時期の一点を確認することができる。施工時期については、遺構の切り合いから求める必要があるが、本調査区内では明らかにし難かった。

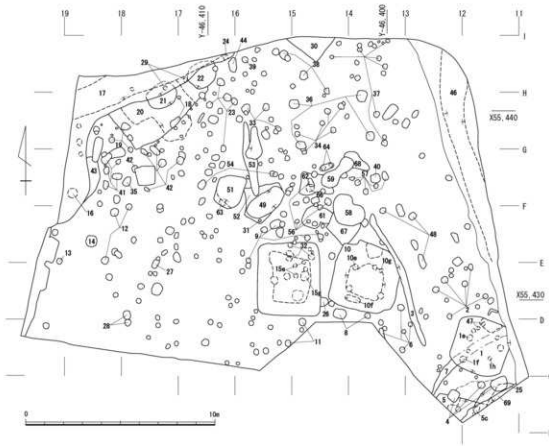


Fig.18　第３次調査遺構略測図（1/200）

表3　殿城戸遺跡第3次調査 遺構一覧表

S番号	遺構番号	遺構性格	堆積土	先後関係	時　期	地区番号
1	3SI001	方形プラン			古墳後期	C11
2	3SX002	Pit群			不明	D11他
3	3SD003	溝			古墳前期	D12他
4	3SX004	Pit			古墳前期	B12
5	3SI005	方形プラン			古墳前期	B12
6	3SX006	Pit		S-5→S-6	古墳前期	C12
7	3SD007	溝			古墳前期	B12
8	3SX008	Pit群		S-10に伴うと考えられる。	不明	D13
9	3SX009	Pit群			不明	E15
10	3SI010	方形プラン		S-10→S-5	古墳後期	D13
11	3SX011	Pit群			不明	C15
12	3SX012	Pit群			弥生期	E18
13	3SX013	Pit			古墳期	E19
14	3SX014	Pit			古墳期	E18
15	3SI015	方形プラン			弥生後期	D15
16	3SX016	Pit			現代	F18
17	3SD017	溝			古墳後期	G18
18	3SX018	Pit群			不明	G17
19	3SX019	Pit群			不明	G18
20	3SI020	方形プラン		S-22→S-21・22	弥生後期	G17
21	3SK021	土坑			不明	G17
22	3SK022	土坑			古墳前期	H16
23	3SX023	Pit群			不明	H16
24	3SX024	Pit			不明	H16
25	3SI025	円形プラン			古墳前期	B11
26	3SX026	窪み		S-26→S-15	不明	D14
27	3SX027	Pit			弥生期	D17
28	3SX028	Pit群			弥生後期	D17
29	3SX029	Pit		S-29→S-20b	不明	H16
30	3SI030	方形プラン			古墳前期	H14
31	3SX031	窪み			不明	E15
32	3SX032	Pit群			弥生中期	E14
33	3SX033	Pit群			不明	G15
34	3SX034	Pit群			古墳前期	G14
35	3SX035	甕埋蔵			古墳前期	F17
36	3SX036	Pit群			弥生後期	G14
37	3SX037	Pit群			古墳前期	H13
38	3SX038	Pit群			弥生後期	H14
39	3SX039	Pit			不明	H15
40	3SB040	掘立柱建物			不明	F13
41	3SX041	Pit群			弥生後期	F18
42	3SX042	Pit群			不明	F17
43	3SX043	窪み			弥生後期	F18
44	3SX044	Pit			不明	H16
45		欠番				
46	3SD046	溝			平安後期	G12
47	3SX047	Pit		S-47→S-1?	弥生期	C11
48	3SX048	Pit			古墳後期	E12
49	3SX049	窪み			弥生期	E15
50		欠番				
51	3SK051	土坑			弥生後期	F16
52	3SX052	窪み		S-52→S-31・49→S-51	弥生中期	F15
53	3SD053	溝			不明	F15
54	3SX054	Pit群			不明	F16
55		欠番				
56	3SX056	Pit群			古墳前期	E14
57	3SX057	Pit群			弥生中期	F13
58	3SK058	土坑			古墳前期	E14
59	3SK059	土坑			古墳前期	F14
60		欠番				
61	3SX061	窪み		S-61→S-56	不明	E14
62	3SX062	窪み			古墳前期	F14
63	3SX063	Pit			不明	F16
64	3SX064	Pit群			不明	F14
65		欠番				
66	3SX066	Pit			不明	F14
67	3SX067	窪み			弥生中期	E14
68	3SX068	窪み		S-68→S-59	古墳前期	F13
69	3SX069	窪み			古墳前期	B11

表4 殿城戸遺跡第3次調査 出土遺物一覧表

S-1
古 式 土 師 器破片

S-1赤褐色土
須　恵　器破片
土　師　器甕

S-1カマド
弥　生　土　器高坏、破片

S-1a d焼土
古 式 土 師 器甕

S-1a
須　恵　器坏蓋
土　師　器瓶、甕
そ　の　他焼土

S-1a茶色土
須　恵　器坏蓋
土　師　器甕
そ　の　他焼土

S-1b
須　恵　器坏蓋（古墳）、甕
土　師　器鉢、甕

S-1b茶色土
須　恵　器破片
土　師　器甕

S-1b c焼土
土　師　器甕

S-1c
須　恵　器坏身、甕
土　師　器甕
石　製　品砥片

S-1c茶色土
土　師　器甕
弥　生　土　器壺

S-1d
須　恵　器坏身
土　師　器瓶、甕

S-1d茶色土
土　師　器甕

S-1e
須　恵　器高坏
土　師　器甕

S-1f
土　師　器破片

S-1g
弥　生　土　器甕

S-1h
須　恵　器甕
土　師　器破片

S-2
土　師　器甕

S-3
弥　生　土　器甕、鉢
古 式 土 師 器甕、鉢

S-4
弥　生　土　器甕

S-5茶色土
弥　生　土　器大甕、甕

S-5a
古 式 土 師 器高坏、甕

S-5b
土　師　器破片

S-5c
土　師　器破片

S-6
古 式 土 師 器高坏

S-7
古 式 土 師 器広口壺、甕
土　師　器鉢

S-8
土　師　器破片
弥　生　土　器高坏

S-9
古 式 土 師 器破片、鉢（ミニチュア土器）

S-10
土　師　器甕、支脚

S-10a
須　恵　器破片、坏×蓋
土　師　器破片、甕、広口壺
弥　生　土　器壺
金　属　製　品鉄滓

S-10b
国　産　陶　器破片（混入）
石　製　品砥片（黒曜石）
弥　生　土　器甕

S-10c
須　恵　器破片（混入）
古 式 土 師 器鉢、壺

S-10d
須　恵　器壺
土　師　器甕
古 式 土 師 器支脚、甕

S-10e
古 式 土 師 器甕

S-10f
土　師　器破片

S-10g
土　師　器破片

S-10茶色土
古 式 土 師 器甕、高坏

S-10カマド
土　師　器破片

S-10硬質
弥　生　土　器壺

S-11
土　師　器破片

S-12
弥　生　土　器甕

S-13
土　師　器鉢、甕

S-14
土　師　器鉢、甕、鉢、壺

S-15
弥　生　土　器甕、壺（丹塗）

S-15a
土　師　器破片

S-15b
弥　生　土　器甕
そ　の　他焼土

S-15c
弥　生　土　器壺

S-15d
弥　生　土　器甕、器台
そ　の　他焼石

S-15e
土　師　器破片

S-15f
弥　生　土　器甕、壺

S-15g
土　師　器破片
石　製　品砥片（サヌカイト）
弥　生　土　器甕

S-15h
古 式 土 師 器鉢

S-16
土　師　器破片

S-17
須　恵　器甕
土　師　器高坏、甕

S-18
土　師　器破片
そ　の　他焼土

S-19
土　師　器破片

S-20
弥　生　土　器破片

S-20茶色土
弥　生　土　器甕、壺
古 式 土 師 器破片

S-20a茶色土
弥　生　土　器甕

S-20a
弥　生　土　器鉢、甕

S-20b
弥　生　土　器破片、甕

S-20b茶色土
弥　生　土　器破片

S-20c
弥　生　土　器甕

S-22
弥　生　土　器高坏
古　式　土　師 器高坏、甕、小形鉢

S-23
土　　師　　器破片

S-24
土　　師　　器破片

S-25
古　式　土　師 器甕

S-25g
土　　師　　器破片

S-26
土　　師　　器破片

S-27
弥　生　土　器壺、高坏、破片
石　　製　　品剥片（黒曜石）

S-28
弥　生　土　器甕

S-29
土　　師　　器破片

S-30
弥　生　土　器甕、鉢
古　式　土　師 器破片

S-31
土　　師　　器甕

S-32
弥　生　土　器甕

S-33
土　　師　　器破片

S-34
弥　生　土　器鉢、壺
古　式　土　師 器二重口縁壺

S-35
弥　生　土　器甕
石　　製　　品石鏃（黒曜石）
古　式　土　師 器甕

S-36
弥　生　土　器鉢、甕

S-37
弥　生　土　器壺

S-38
弥　生　土　器甕、破片

S-39
土　　師　　器破片
石　　製　　品剥片（黒曜石）

S-40
土　　師　　器破片

S-41
弥　生　土　器甕

S-42
土　　師　　器破片
弥　生　土　器破片(弥生中期)

S-43
弥　生　土　器甕

S-44
土　　師　　器破片
弥　生　土　器破片
石　　製　　品剥片(黒曜石)

S-46
縄　　文　器甕、供膳具
土　　師　　器供膳具、貯蔵具
瓦　　類瓦片
弥　生　土　器甕

S-46茶黒色土
縄　　文　器甕3、壺、坏×鉢
土　　師　　器貯蔵具
瓦　　類瓦片（鐵口）

S-46灰色砂
縄　　文　器甕3、壺、甕、坏c、坏身、坏蓋、蓋c、蓋1
土　　師　　器甕、破片
石　　製　　品剥片(黒曜石)、紡錘車（滑石）

S-46暗灰色砂
縄　　文　器破片、蓋
土　　師　　器破片
瓦　　類平瓦（格子）
古　式　土　師 器高坏

S-46黒茶色土
縄　　文　器坏蓋、高坏、甕、坏身
土　　師　　器(小型ミ)、甕
固定資産育成梅ノ破片（1）
国　　産　　陶　器甕
国　　産　　磁　器破片

S-47
弥　生　土　器大甕

S-48
縄　　文　器破片
土　　師　　器破片
弥　生　土　器甕、壺
石　　製　　品剥片（黒曜石）

S-49
弥　生　土　器壺（中期）、小甕、甕
石　　製　　品剥片（黒曜石）

S-51
弥　生　土　器壺

S-52
土　　師　　器破片
弥　生　土　器甕（中期）

S-53
土　　師　　器破片

S-54
土　　師　　器破片

S-56
縄　　文　器破片（混入）
弥　生　土　器高坏、大甕

S-57
弥　生　土　器破片、甕、壺

S-58
弥　生　土　器破片
古　式　土　師 器高坏、大甕、二重口縁壺、台付甕、精製鉢、甕、鉢、壺

S-59
古　式　土　師 器壺、甕、高坏
そ　　の　　他焼石

S-61
土　　師　　器破片

S-62
弥　生　土　器甕、鉢
古　式　土　師 器甕、精製鉢

S-63
土　　師　　器破片

S-64
土　　師　　器破片

S-67
弥　生　土　器甕
土　　師　　器高坏

S-68
古　式　土　師 器鉢、高坏、甕

S-69
古　式　土　師 器高坏、甕

茶褐色土
縄　　文　器破片、ハソク、甕、鉢
土　　師　　器陶、甕、二重口縁壺
国　　産　　陶　器須恵
貯蔵系陶磁器鉢（唐津系）
国　　産　　磁　器破片
弥　生　土　器甕、大甕
古　式　土　師 器甕、壺、高坏、鉢、鉢

茶色土
弥　生　土　器甕
そ　　の　　他焼土

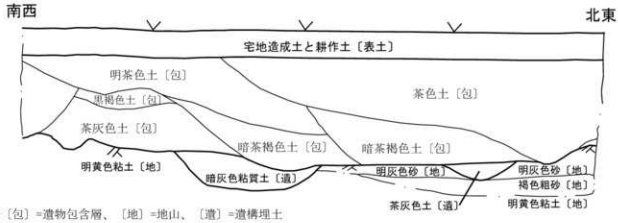
表土
縄　　文　器坏c×蓋c、蓋3、坏身
土　　師　　器破片、鉢
瓦　　類　　土　器鉢
国　　産　　陶　器須恵鉢（瀬戸系）
(1　　磁器焼土破片(唐津)(1)
貯蔵系陶磁器(紅皿、鉢（唐津系）、染付磁器
弥　生　土　器甕
石　　製　　品剥片（黒曜石）
古　式　土　師 器甕

3、第4次調査

(1) 調査に至る経過

調査地は太宰府市大字大佐野字殿城戸172-1である。大佐野川に向かう沖積地に位置し、標高が約36mのところである。佐野土地区画整理事業による工事に先立ち、記録保存のための発掘調査を実施した。調査は城戸康利が担当し、平成9（1997）年4月17日から同年5月30日まで行った。開発対象面積は510㎡で、調査面積は280㎡である。調査前は宅地であった。

Fig.19 第4次調査遺構全体図（1/150）



※〔包〕=遺物包含層、〔地〕=地山、〔遺〕=遺構埋土

Fig.20　第4次調査土層模式図

(2) 基本層位 (Fig.20)

宅地造成土と耕作土を除去すると現地表下0.3～0.5mの地山面において遺構が検出された。ただし、調査区中央付近の東西方向に暗茶色土、その下層の一部に極薄く黒色土が堆積していた。これらは遺物包含層と考えられ、本調査終了直後に行われた東近隣の脇道遺跡第4次調査においても遺構面直上において近似する土層を確認している（太宰府市教育委員会2007)。なお、遺物包含層の暗茶色土・黒色土は厳密に土層観察するとFig.20のように分層でき、標高の高い南西側に向かって堆積が浅く、標高の低い北東側に向かって堆積が深くなっている。

また、調査区北東隅のトレンチによる確認調査によって、遺構面を形成する地山層は、一部に明灰色砂・褐色粗砂が堆積しており、基本的には明黄色粘土によって形成されていることを確認した。

なお、遺構検出時の遺物取り上げ名称は、すべて「暗茶色土」としている。

(3) 検出遺構 (Fig.19・25)

遺構は調査区全面において検出された。以下では、主要遺構と後掲の出土遺物を報告している遺構について詳述する。その他の遺構については、遺構略測図（Fig.25）と出土遺物一覧表（表6）を参照されたい。

溝

4SD019

調査区の西際において検出された幅0.9m程度、深さ0.2m程度の溝である。調査区南壁から約12mにわたって検出したが、調査区の南側にさらに続いていると考えられる。その方向性は南西から北東方向に展開しており、北東側に向かって若干深くなっている。本調査区は一つの現行地割に即して設定しており、この調査区の西壁に平行で溝が展開していることから土地境界線であった可能性が指摘できる。出土遺物から近世段階に埋没したものと考えられる。なお、後述の近世段階に掘削、近代には埋没する4SE001の井戸に切られている。

井戸

4SE001 (Fig.21)

調査区の南西隅において検出された円形の井戸である。井戸枠上部構造は平瓦を縦に積み上げたものと考えられ、一段分のみ確認できた。それより下の構造は立て板を組んでいる。この立て板に関しては桶の可能性も考えられるが、湧水によって最下部と背面状況を確認することができなかった。検出した部分から井戸枠直径は0.75m、掘方直径は1.65mを測る。深さは遺構面から2m程度である。掘方埋土は、明褐色粘土に白色粘土がブロック状に混入していた。枠内埋土は上層が赤色真砂で、平瓦による枠

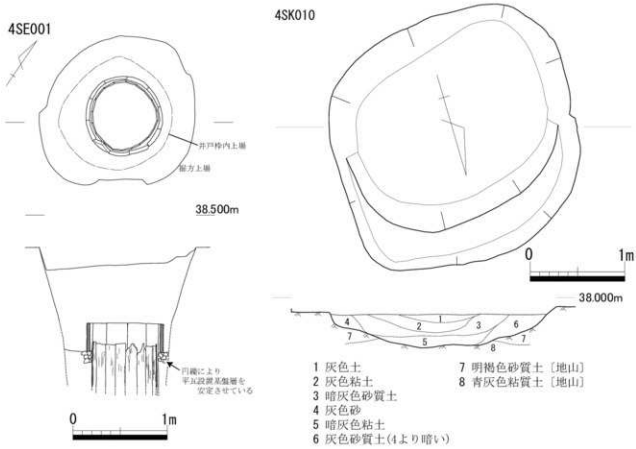


Fig.21　4SE001・SK010 遺構実測図 (1/40)

材が検出された部分より下層については赤くて硬い壁土で埋められていた。井戸枠に使用された平瓦は近世段階のものと考えられ、井戸枠内の出土遺物にはスレートが含まれていることから、近世段階に掘削されて近代には埋め戻されたものと考えられる。埋め戻しの際に建築部材と考えられる壁土が使用されていたことから、近隣の建物解体時か補修時に同時に埋め戻された可能性が想定できる。なお、先述の 4SD019 の土地境界線と考えられる溝を切って検出されている。

土坑

4SK002

先述の 4SE001 の円形掘方に沿った形で南西側に検出された幅 0.5m、深さ 0.3m 程度の土抗である。埋土は二層に分層でき、上層が灰色土と灰色粘土で下層が赤色真砂である。形状が 4SE001 に影響されていることから、付帯施設であった可能性が高い。出土遺物からも近世段階のものと考えられる。

4SK010 (Fig.21)

調査区の南東側で検出された 2.6 × 2.7m 程度、深さ 0.35m 程度の楕円形の土坑である。埋土は土器破片を散漫に包含しており、下層には粘質土が堆積している。この粘質土は有機質物が変色した可能性もあり、廃棄土坑の可能性も想定できる。出土遺物から中世段階に埋没したものと考えられる。

その他の遺構

4SX007

調査区南側ほぼ中央付近にて検出されたピット群である。各ピットの規模は直径 0.5m 程度、深さが 0.2 ～ 0.3m 程度を測る。埋土は茶色土であり、出土遺物から弥生時代後期から古墳時代前期のものと考えられる。

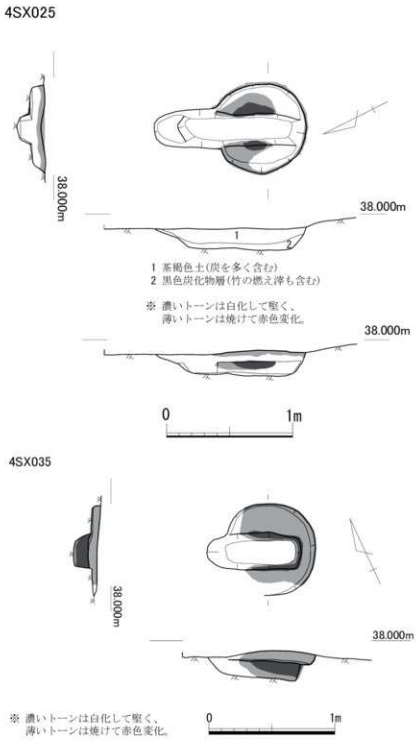


Fig.22　4SX025・035遺構実測図（1/30）

4SX016

調査区の南西側にて検出されたピット群である。各ピットの規模は直径0.5m程度、深さ0.25～0.4m程度を測る。埋土は茶色土であり、古墳時代までのものと考えられる。

4SX020

調査区の南西隅において検出された溜り状の遺構である。埋土は茶色土であったが、遺構面検出の際に除去した暗茶色土にも近似しており、落ち込み状の地形に遺物包含層である暗茶色土が入り込んだ可

能性もある。出土遺物から近代のものと考えられる。本遺構からの出土遺物を後掲しているために詳述した。

4SX022

調査区南側付近でやや東寄りにて検出されたピットである。直径0.7m、深さ0.25mを測る。出土遺物から中世段階のものと想定する。

4SX025（Fig.22）

調査区の南西側、先述の4SE001の北東側にて検出された。長径1.2m、短径0.7mを測り、炉もしくは竈と考えられる形状を呈する。北東側に向いた焚口と考えられる幅は0.3mを測る。一部で土が焼けて赤色に変色した部分や高熱を帯びて白化して硬くなった部分を確認できた。出土遺物から時期を想定することは困難であるが、南西側にて検出した近世から近代にかけての井戸（4SE001）と何らかの関係がある遺構と想定する。さらに4SX035にて詳述する。

4SX033

調査区西側中央付近にて検出された溜り状遺構である。埋土は灰色土であり、出土遺物から近世段階のものと想定する。

4SX035（Fig.22）

調査区の南西側、先述の4SE001の北東側で4SX025北西隣にて検出された。よって、4SX025との位置関係は約90度の角度で存在する形となる。長径0.9m、短径0.7mを測り、4SX025とほぼ同形状を成しており、炉もしくは竈と考えられる。北西側に向いた焚口と考えられ、幅は0.25mを測る。一部に土が焼けて赤色に変色した部分や高熱を帯びて白化して硬くなった部分を確認できた。出土遺物から近代の遺構と考えられ、同時期に位置付けられる4SE001と関係のある遺構の可能性がある。また、4SX025との焚口の位置関係や遺構そのものの位置関係・構造上で近似する部分など、これら3つの遺構は同時期並存で密接な関係を持っていた可能性があるのではないかと想定できる。近世から近代にかけての住居に伴う炊事場部分であった可能性がある。

4SX036

調査区中央やや南寄りにて検出されたピットである。0.8×0.8m程度の正方形を呈しており、深さ0.2mを測る。石包丁が立った状態で出土した。その他の出土遺物から弥生から古墳時代の間の遺構と考えられる。

4SX044

調査区中央付近にて検出された溜り状遺構である。出土遺物より近代のものと考えられる。本遺構からの出土遺物を後掲しているために詳述した。

4SX045

調査区東際中央付近にて検出された溜り状遺構である。2.5×2.5m程度の正方形を呈しており、住居跡の可能性もある。しかし、深さ0.1m程度の埋土である暗茶色斑土を除去した後にも下層よりある程度の規格性を持った配置のピット群が検出されなかったために遺構の詳細な性格については不明である。出土遺物より古墳時代前期のものと考えられる。

4SX066

調査区西側やや北寄りにて検出されたピット群である。各ピットの規模は、直径0.5m弱、深さ0.1m程度を測る。出土遺物より近代の可能性を想定する。

4SX070

調査区の北東側にて検出された幅0.3m程度、深さ0.1m弱程度の規模の自然流路である。その方向性

は北西から南東に走っているが、深さに一定方向の傾斜が確認できなかったことから、突発的な流水があり、砂が入り込んで埋没したものと想定される。

4SX075

調査区の北東側にて検出された溜り状遺構である。先述の4SX070に切られている。長径1.7×短径1.2m、深さ0.45mを測る。出土遺物から古墳時代のものと想定する。

4SX076

調査区の北東側にて検出されたピットである。直径0.6m,深さ0.45mを測る。埋土は黒灰色土であり、出土遺物より弥生時代から古墳時代の間の遺構と想定する。

4SX089

調査区の北東隅にて検出された溜り状遺構である。長径1.25×短径0.7m、深さ0.3m弱を測る。出土遺物より弥生時代から古墳時代前期頃の遺構と考えられる。

(4) 出土遺物

溝出土遺物

4SD019 出土遺物 (Fig.23)

土師質土器

鉢 (7) 口縁部の破片。口縁端部は回転ナデ調整、外面は指頭圧痕、内面は刷け目調整痕が観察できる。色調は内外面ともに淡灰茶色を呈している。胎土はやや密で若干軟質気味である。焼成は良好。

国産陶器

椀 (8) 口縁部の破片。素地は淡茶褐色を呈しており、胎土は密で硬く焼き締まっている。その上に暗緑飴色釉が施される。焼成は良好。

瓦質土器

甕 (9) 口縁部から体部上部にかけて破片。口縁端部はナデ調整。内面と外面口縁部は刷け目調整痕が観察でき、外面体部は一部に刷け目調整痕が観察できるが、基本的にはこれらをナデ消している。色調は内面が淡茶灰色を呈し、外面が淡灰茶色を呈しており、焼成はやや良好。胎土はやや粗く軟質気味である。

鉢 (10) いわゆる火鉢とされる口縁部の破片。口縁端部は刷け目調整後にナデ消している。内面と外面の沈線より上部は刷け目調整が施されている。色調は内外面ともに灰色を呈しており、焼成は良好。胎土は密で硬質気味である。

石製品

用途不明品 (34) 4.45×4.45cm、厚さ1.75cmの軽石である。色調は淡白灰色を呈しており、多数の気泡を確認できる。

井戸出土遺物

4SE001 出土遺物 (Fig.23)

瓦類

平瓦 (31、32) 両方とも同型の完形品である。4SE001の井戸枠材として使用されていた。色調は内外面ともに灰黒色～暗灰色を呈しており、焼成は良好。胎土は3mm以下の白色・ガラス質の砂粒子を多く含む。また、1mm以下の雲母粒子も混入している。胎土密度は緻密で硬質である。

石製品

用途不明品 (33) 4.1×8.2cm、厚さ0.2cmの粘板岩(いわゆる天然スレート)製である。色調は黒灰色を呈している。表面は平滑して光沢を帯びている。

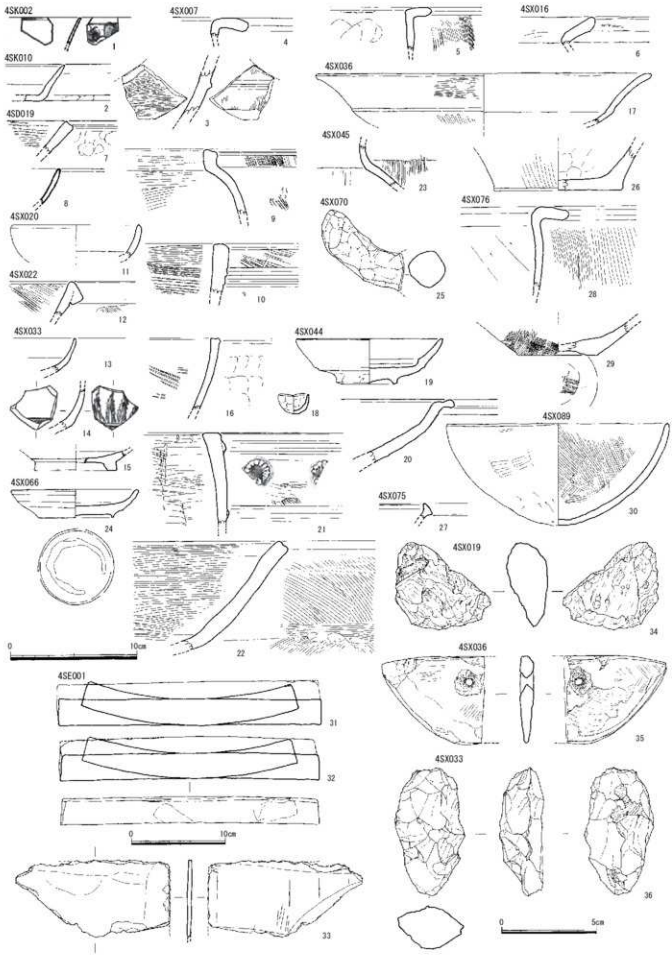


Fig. 23　第４次調査遺構出土遺物実測図（31・32は1/4、33～36は1/2、その他1/3）

土坑出土遺物

4SK002 出土遺物 (Fig.23)

国産磁器

椀 (1)　口縁部の破片。光沢のある透明釉を内外面に薄く施す。内面口縁部と外面体部にかけて色を使った絵付がある。焼成は良好。素地は白色を呈して密である。

4SK010 出土遺物 (Fig.23)

土師器

坏a (2)　口縁部から底部にかけての破片。内外面ともに回転ナデ調整。底部は糸切り痕跡を観察できる。色調は淡白褐色を呈している。胎土は密で硬質気味である。

瓦質土器

風炉 (3)　体部の破片。上部に穿孔がある。内外面ともに刷け目調整を施す。色調は暗褐色を呈しており、内面の一部は煤が付着している。焼成は良好であるが、瓦質化が不十分である。胎土はやや粗いが硬質である。

その他の遺構出土遺物

4SX007 出土遺物 (Fig.23)

弥生土器

甕 (4・5)　2は口縁部の破片。口縁下部は回転ナデ調整が観察できるが、その他に関しては磨耗が著しく調整不明。色調は内外面ともに淡乳茶色を呈し、焼成は不良である。胎土はやや粗く若干軟質気味である。3は口縁部から体部上部にかけての破片。口縁端部は磨耗により調整が不明だが、内面は指押さえ痕、外面は刷け目調整痕が観察できる。色調は淡橙茶褐色を呈し、焼成は良好である。胎土はやや粗いが硬質気味である。

4SX016 出土遺物 (Fig.23)

弥生土器

甕 (6)　口縁部の破片。口縁上部に僅かに刷け目調整痕が確認できるが、その他に関しては磨耗により調整不明。色調は内面が暗褐色～灰褐色、外面が暗橙色～黄灰褐色を呈し、焼成はやや良好。胎土は密で硬質。

4SX020 出土遺物 (Fig.23)

青磁

皿×坏 (11)　口縁部から体部にかけての破片。復元口径10.3㎝、残存器高2.6㎝を計る。内外面に半透明の淡青灰色の釉を施し、ガラス質で光沢がある。釉は薄く施されるが、非常に細かい貫入が観察できる。素地は淡灰白色で密。焼成良好。

4SX022 出土遺物 (Fig.23)

土師質土器

鉢 (12)　口縁部の破片。口縁端部上部は回転ナデ、下部はナデ調整を施す。体部外面と内面は刷け目調整を施す。色調は外面が淡褐色～暗灰褐色、内面が暗橙色～淡灰橙色を呈し、焼成は良好である。胎土は密で硬質である。

4SX033 出土遺物 (Fig.23)

国産陶器

皿 (13)　口縁部から体部にかけての破片。内外面ともに暗緑灰色の薄く光沢のある不透明釉を施す。素地は暗灰色を呈し、硬質である。

国産磁器

椀（14） 体部下部の破片。内外面ともに明青色を呈する絵付けがあり、淡白緑色の薄く光沢のある透明釉を施す。素地は淡白灰色を呈し、硬質である。

白磁

椀（15） 底部から体部下部にかけての破片である。高台から底部にかけては淡白褐色を呈する素地が露呈し、その他は淡白灰色の薄く光沢のある釉が施される。胎土は緻密で硬質。焼成良好。

瓦質土器

鉢（16） 口縁部から体部上部にかけての破片である。口縁端部はナデ調整、内面はナデ調整後に刷け目調整、外面は指押さえ痕が観察できる。色調は内外面ともに灰色を呈し、焼成・瓦質化はともに良好である。胎土は密で硬質である。

石製品

素材×加工中(36) 長径6.7㎝、短径3.6㎝、厚さ2.3㎝を計る安山岩である。色調は灰黒色を呈する。

4SX036 出土遺物（Fig.23）

弥生土器

高坏（17） 口縁部から体部にかけての破片である。復元口径26.5㎝、残存器高4.0㎝を計る。内面上部は磨耗により調整不明であるが、下部は丁寧なナデ調整が施されている。口縁端部はヨコナデ調整、外面上部は刷け目調整痕、中部は丁寧なナデ調整、下部はミガキ痕を観察できる。色調は内外面ともに淡灰黄色～暗橙色を呈し、内面口縁部付近の一部に黒灰色の部分がある。焼成は良好。胎土は密で硬質である。

石製品

石包丁（35） 中央部付近で割れた資料である。きめが細かく硬質の凝灰岩製である。色調は黒灰色を呈する。開穴部は表裏表面から細かい鑿状工具を使用して打ち欠き穴を開けている。一部に滑らかな部分があるが、基本的には表裏面ともに面の調整は滑らかではない。

4SX044 出土遺物（Fig.23）

土師器

手捏ね土器(18) 口径2.5㎝、器高1.2㎝を計る完形品である。内外面ともに指押さえ痕が観察できる。色調は内外面ともに淡褐色を呈し、焼成は良好。胎土はやや粗く軟質気味である。

国産陶器

椀（19） 口縁部から底部にかけての破片。復元口径11.6㎝、器高3.6㎝、高台径4.8㎝を計る。高台底部のみ淡茶褐色を呈する素地が露呈しているが、その他に関しては白褐色の薄い釉が施される。胎土はやや粗く軟質気味である。唐津系。

鉢×皿（20） 口縁部から体部にかけての破片。素地は淡赤褐色を呈し、淡緑色の薄く光沢のある釉が施される。胎土は密で硬質である。唐津系。

瓦質土器

鉢（21） いわゆる火鉢とされる口縁部から体部にかけての破片である。内面は刷け目調整、外面の菊花型スタンプが押された下部付近はミガキ調整が施される。口縁端部は非常に平滑である。色調は内面が淡白灰色を呈し、外面が淡灰色を呈し、焼成・瓦質化ともに良好である。胎土は緻密で硬質である。

鍋（22） 口縁部から体部下部にかけての破片。口縁端部はナデ調整、その他は刷け目調整を施す。外面口縁部付近から体部下部にかけて煤が付着する。色調は内面と外面の煤が付着していない部分が暗灰色を呈する。焼成・瓦質化ともに良好である。胎土はやや粗いが硬質である。

4SX045 出土遺物 (Fig.23)

弥生土器

壺 (23)　体部上部の破片である。内外面ともに刷け目調整が施される。色調は内外面ともに淡黄橙色を呈し、焼成は良好である。胎土はやや粗いが硬質気味である。

4SX066 出土遺物 (Fig.23)

国産陶器

皿 (24)　口径 10.1 cm、器高 2.25 cm、高台径 5.9 cmを計るほぼ完形品である。緑褐色を呈し、光沢・透明度ともに高い釉が施される。全体に貫入が入る。素地は表面が灰色を呈するが、大半が灰黒色を呈し、焼成良好。胎土は緻密で硬質である。

4SX070 出土遺物 (Fig.23)

土師器

把手 (25)　色調は淡褐茶色を呈し、焼成良好。胎土は緻密で硬質である。

弥生土器

甕 (26)　底部から体部下部にかけての破片である。復元底径 10.2 cm、残存器高 3.5 cmを計る。内面は指押さえ後にナデ調整、外面は刷け目調整後にナデ調整が施される。色調は内外面ともに淡白褐黄色を呈し、焼成は良好である。胎土はやや粗いが硬質である。

4SX075 出土遺物 (Fig.23)

須恵質土器

鉢 (27)　口縁部の小破片である。色調は内外面ともに淡灰色を呈し、焼成は良好である。胎土は密で硬質である。東播系。

4SX076 出土遺物 (Fig.23)

弥生土器

甕 (28)　口縁部から体部にかけての破片である。内面は板状工具によるナデ調整後にナデ調整が施され、外面は刷け目調整が施される。口縁部はヨコナデ調整。色調は内外面とも橙褐色を呈し、焼成は良好である。胎土はやや粗いが硬質である。

鉢 (29)　底部から体部下部にかけての破片である。復元底径 6.3 cm、残存器高 2.7 cmを計る。内面はナデ調整、外面は刷け目調整である。色調は内面が淡黄色、外面が淡暗茶褐色を呈し、焼成は良好である。胎土はやや粗いが硬質である。

4SX089 出土遺物 (Fig.23)

弥生土器

鉢 (30)　口縁部から底部にかけての破片である。復元口径 17.6 cm、器高 8.05 cmを計る。内面は刷け目調整が施され、外面体上半部は叩き痕が、下半部は不定方向にヘラ削り痕が観察できる。色調は内外面ともに淡灰褐色を呈し、焼成はやや不良である。胎土はやや密で、軟質気味である。

土層出土遺物

暗茶色土層出土遺物 (Fig.24)

須恵器

坏蓋 c (1)　つまみ部分から体部下部にかけての破片である。残存器高は 3.1 cmを計る。内面下部は丁寧な回転ナデ調整、上部は粗い回転ナデ調整後に不定方向のナデ調整を施す。つまみ部分から外面上部にかけては丁寧な回転ナデ調整、下部は回転ヘラ削り後にナデ調整を施す。色調は内外面ともに淡灰色を呈し、焼成・還元ともに良好である。胎土は緻密で硬質気味である。

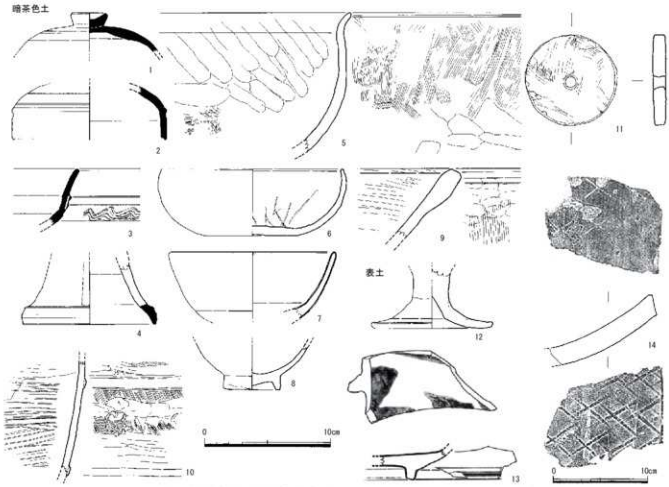


Fig. 24　第４次調査土層出土遺物実測図（11は1/2、14は1/4、その他1/3）

坏蓋（2）　口縁部から体部下半にかけての破片である。復元口径12.0㎝、残存器高4.25㎝を計る。外面上部にかけてはヘラ削り後に回転ナデ調整、その他は回転ナデ調整を施す。色調は内外面ともに淡灰色を呈するが、外面口縁部付近は暗灰色で光沢がない自然釉が付着する。胎土は緻密で硬質である。

高坏（3・4）　3は坏部の口縁部から体部にかけての破片である。基本的に内外面ともに回転ナデ調整を施す。色調は内外面ともに暗灰色を呈し、焼成・還元ともに良好である。胎土は緻密で硬質である。4は脚部の破片である。復元底径10.4㎝、残存器高5.0㎝を計る。内外面ともに回転ナデ調整を施す。色調は内面が灰色、外面が暗灰色を呈し、焼成・還元ともに良好である。胎土は緻密で硬質である。

土師器

鉢（5）　口縁部から体部にかけての破片である。口縁部はナデ調整。内面は強いナデ調整で体部下部の一部に刷け目調整を施す。外面は体部上部が粗いナデ調整、下部が削り調整が施される。色調は内外面ともに淡黄色を呈し、焼成は良好である。胎土はやや粗いが硬質気味である。

鉢×椀（6）　口縁部から体部にかけて一部欠損するがほぼ完形品である。口径14.3㎝、器高5.3㎝、底径7.1㎝を計る。口縁部から外面にかけては磨耗により調整不明。内面は基本的にヨコナデ調整が施されるが、一部にミガキ痕が観察できる。色調は内面が淡橙褐色を呈し、体部外面が淡黄茶色、底部が淡黒色を呈し（煤付着痕跡）、焼成はやや不良気味である。胎土は密であるが、軟質である。

龍泉窯系青磁

椀（7）　Ⅳ類。口縁部から体部にかけての破片である。復元口径13.2㎝、残存器高5.35㎝を計る。内外面ともに淡灰緑色のやや厚みがある光沢度の低い釉が施されている。外面にピンホール状に釉がか

かっていない部分が2箇所ある。素地は淡灰白色で焼成は良好。胎土は密で硬質である。なお、図示出来ていないが、外面口縁部付近に非常に薄い雷文帯を確認でき、上田分類C-Ⅱに属する（上田1982）。

国産磁器

椀（8） 体部下半から底部にかけての破片である。高台径4.6㎝、残存器高3.6㎝を計る。高台から底部にかけては淡白褐色を呈する素地が露呈している。その他は淡緑灰色を呈する薄く光沢のある釉が施されている。貫入もある。焼成は良好。胎土は緻密で硬質である。

瓦質土器

鍋（9） 口縁部から体部上部にかけての破片。口縁端部はナデ調整、内面は刷け目調整を施す。外面は指押さえにより成形した後に体部上半をナデ調整、下半を刷け目調整を施す。色調は内面が淡白褐色、外面が淡白茶黄色を呈する。焼成は良好だが、瓦質化は不十分である。胎土はやや粗いが硬質である。

鉢（10） いわゆる火鉢とされる体部の破片である。内面は刷け目調整、外面は刷け目調整後にナデ消してミガキ調整を施す。色調は外面が灰色を呈し、内面が淡茶褐色を呈しており、内面上部に淡黒色の煤が付着している。焼成・瓦質化ともに良好である。胎土は密で硬質である。

石製品

紡錘車（11） 直径4.8㎝、厚さ0.7㎝を計る。表面に研磨痕が確認できるが、滑石ほど平滑ではない。堆積岩製。色調は灰色～暗灰色を呈している。一部、表面が茶褐色になっている。

表土出土遺物（Fig.24）

土師器

高坏（12） 底径9.6㎝、残存器高4.7㎝を計る脚部である。外面は回転ナデ調整で一部粘土を足した痕跡が認められる。内面は刷毛状工具による刷け目調整後に丁寧なナデ調整を施す。底部中央は工具による穿孔がある。色調は内外面ともに橙色を呈し、焼成は良好である。胎土はやや密で硬質気味である。

国産磁器

皿×大椀（13） 底部から体部下部にかけての破片である。素地は白色で焼成良好。胎土は密で硬質である。内外面ともに呉須彩色が施される。内面は暗青色を呈し、外面は淡青色を呈する。内外面ともに僅かに青みのある透明釉が施され、光沢度は高く、透明度はやや低く白濁する。

瓦類

平瓦（14） 色調は凹面が暗灰色を呈し、凸面は淡白灰色を呈し、焼成良好。胎土は密で硬質である。

(5) 小結

調査の結果、以下のことがわかった。

・古墳時代前期を中心としたピット群を検出し、当該期の集落跡と考えられる一部を確認した。しかし、後世の撹乱・削平により消滅している部分が多い。ただし、深いピット群は良く残っており、調査区外を含めて今後、掘立柱建物が検出されることが考えられる。また、これらの遺構群の中には弥生時代中期から後期にかけての遺物も含まれており、この頃から生活空間となっていた可能性が高い。

・中世段階と考えられる土坑を検出し、出土遺物から16世紀代の遺構であると判断した。当該期の遺構はこの他に認定できなかったが、表土層・遺物包含層を含んだその後に形成された遺構群には16世紀代と考えられる遺物群が多数出土した。この中で、瓦質土器の風炉・スタンプが施された火鉢が複数出土している。最近、その出土傾向として、城館遺跡からの出土が多いという指摘がなされている（水澤1999、佐藤2007）。本調査区を含んだ地区は、戦国期に存続していたと考えられる和久堂城跡に該当する（福岡県教育委員会1979）。今回の調査では当該期における顕著な遺構は検出されなかったが、出土遺物としては注目すべき成果といえる。なお、中世前期段階の遺物も複数出土している。

・近世から近代にかけての遺構は、当該期の宅地内の様子を知る上で参考になる可能性がある。近世・近代の台所土間の復原ができる可能性が高い炉・竈跡と井戸跡を検出している。本調査区は、近世以降は二日市から牛頸へ抜ける旧道沿いにあたり、宅地になっていたと考えられる。また、隣地との境界を示すのではないかと思われる溝を検出している。これは調査前の現行地割に一致しており、当地域の地割が近世段階まで遡ることを示唆している。

(引用文献)

上田秀夫 1982「14 世紀～ 16 世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』2　日本貿易陶磁研究会

佐藤亜聖 2007「瓦質土器の需要―大和における出土傾向とその背景―」『吉岡康暢先生古希記念論集　陶磁器の社会史』吉岡康暢先生古希記念論集刊行会

太宰府市教育委員会 2007『佐野地区遺跡群 23 －脇道遺跡第 4・5 次調査―』(太宰府市の文化財 第 93 集)

福岡県教育委員会 1979『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XX IX

水澤幸一 1999「瓦器、その城館的なるもの」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』9　帝京大学山梨文化財研究所

Fig.25　第４次調査遺構略測図（1/150）

表5 殿城戸遺跡第4次調査　遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況（古→新）	遺構開始合（古→新）	時　期	地区番号
1	4SE001	井戸		明褐＋白色粘土ブロック→赤色真砂土	20→1	近世～近代	CD8・9
2	4SK002	土坑	SE001附帯施設か？			近世～	C9
3		ピット群		灰茶色＋灰褐色の粘土ブロックあり	4→3		B5
4		溜まり	包含層の残り	褐茶色土・砂っぽい	27→4→3		B5
5		溜まり		褐茶色土・粃	14→5		B7
6		窪地		暗灰色土（汚い）	15→6		B8
7	4SX007	ピット群		茶色土	7→8	弥生後期～古墳前期	B7
8		ピット		灰色土	7→8		B7
9		ピット		茶色土			B8
10	4SK010	土坑		暗茶褐色土	10→4	中世	C5
11		ピット群		茶色土		～古代	B8
12		溜まり		茶＋灰＋褐色砂質土	13→12	奈良	C6
13		ピット群		茶色土	13→12	弥生末期	C6
14		ピット群		茶色土	14→5	弥生後期	B7
15		ピット群		茶色土	15→6	～古墳	B8
16	4SX016	ピット群		茶色土		～古墳	C9
17		ピット		茶色土		～古代	C8
18		溜まり				中世～近世	B10
19	4SD019	溝	墓壙の可能性あり		19→20	中世～近世	C9
20	4SX020	溜まり	包含層の残り、又は北西への落ち際		19・22→20	近世～近代	C9
21		ピット群	硬い、土器多い	茶色土		弥生中期～後期	C7
22	4SX022	ピット			22→20	中世？	B6
23		ピット群			4→23	古代	BC4
24		溝	畿漢？			弥生後期	B4
25	4SX025	ピット	かなり焼けている		64→25		B7
26		ピット群				古墳前期	C4
27		ピット			27→4	弥生	B5
28		ピット群			28→20	古墳	C8・9
29		ピット				奈良	B8
30		溜まり	包含層溜まり		32→30	古代	B6
31		ピット群				古墳前期	B8
32		ピット群			32→30→33	弥生後期	B6
33	4SX033	溜まり		灰色土		近世	E7
34		土坑？		暗灰色土	39→34→33	古代？	E7
35	4SX035	ピット	かなり焼けている		63・64→35	近代	B8
36	4SX036	ピット	石包丁片が立って出土		36→30	弥生～古墳	B6
37		ピット群				古墳	B7
38		ピット群				古墳前期	E7
39		溝			39→34	弥生～古墳	E7
40		溜まり？	住居跡の可能性あり		51→40	弥生～奈良	D3
41		ピット群				古墳前期	E8
42		ピット					D7
43		土坑？		黒茶色砂	43→10	古代	D5
44	4SX044	溜まり			58→44	近世～近代	B6
45	4SX045	溜まり	又は住居跡か	暗茶色粃土	45→49	古墳前期	D3
46		土坑？		茶色砂質土		古墳前期	D5
47		土坑？		暗褐色土（砂っぽい）		古墳前期	D3
48		ピット群				古墳前期	D4
49		ピット群		黒色土	45→49	古墳前期	D3
50		欠番					
51		溜まり？		明褐色砂に茶色土混じり	51→40	古墳前期	D4
52		大溜まり		暗茶褐色土	56→52	古墳前期	EF4
53		ピット			53→33	弥生	E6
54		ピット群				古代	B6
55		土坑		粃	55→33	古墳前期	F7・8
56		土坑			56→52		EF4
57		ピット群				弥生	D4
58		ピット			58→44		D4
59		ピット		茶色土	59→44		E5
60		溜まり？					不明
61		溜まり		黒灰色砂質土		弥生	E5
62		溜まり		暗黒茶色土	72→62	弥生	E2
63		ピット	強化物多い、35の壁になっているところは焼けている		63→35		B8
64		ピット	硬い		64→25・35	弥生？	D7
65		土坑？	長方形	赤褐色土粃			D7
66	4SX066	ピット群			66→33	近代？	F7
67		ピット群				古墳前期	E5
68		ピット				古墳前期	D2
69		ピット群			80→72→69	奈良	E3
70	4SX070	自然凹地		砂	75→70		G3
71		ピット	鉄出土？			弥生？	G5
72		溜まり			72→62		E3
73		ピット	大きく硬い。掘立柱建物柱穴？		73→72		E2
74		ピット			74→73	弥生	E2
75	4SX075	溜まり			75→70	古墳？	G3
76	4SX076	ピット		黒灰色土	80→76	弥生～古墳	F3
77		溜まり			87→77	古墳後期	G3
78		溜まり		75に似た黒色砂質土	78→70	古墳後期	G3
79		ピット群				古墳前期	G4
80		溜まりXピット			80→76	弥生	E3
81		ピット群				弥生	E8
82		ピット				弥生末期	F3
83		ピット			83→80	弥生後期	F4
84		ピット			84→86	弥生	G4
85		欠番					
86		溜まり		粃土	84→86	弥生	G3
87		ピット		黒色土	87→77	弥生	G3
88		溜まり		黒色土	88→75→70	弥生	G3
89	4SX089	溜まり				弥生～古墳前期	F2
90		欠番					
91		ピット				弥生	G2
92		ピット群				古墳前期	F1・2
暗茶色土層		遺物包含層					
表土層		耕作土				現代	

表6 殿城戸遺跡第4次調査 出土遺物一覧表

S-1

須　恵	器坏、壺×壺
土　師	器破片
瓦	類平瓦（いぶし）
石　製	品紡石
国　産　陶	器破片
弥　生　土	器破片
土　製	品人形片
そ　の	他スレート

S-2

須　恵	器破片
土　師	器破片
瓦	類破片（宮瓦～）
国　産　陶	器壺
国　産　磁	器破片、椀

S-3

黒　色　土	器人形片
弥　生　土	器破片

S-4

弥　生　土	器破片

S-5

土　師	器破片
弥　生　土	器器台？、甕、壺

S-6

土　師	器破片
弥　生　土	器破片

S-7

土　師	器甕
弥　生　土	器高杯、甕、壺、器台

S-8

土　師	器破片
弥　生　土	器破片

S-9

土　師	器破片
弥　生　土	器破片

S-10

須　恵	器壺
土　師	器坏a、坏d、坏（古墳時代）、壺（布留式）、壺
製　塩　土	器破片（？）
瓦　質　土	器風炉
弥　生　土	器甕、破片

S-11

土　師	器坏片
弥　生　土	器破片

S-12

土　師	器破片
弥　生　土	器壺

S-13

弥　生　土	器甕、破片

S-14

弥　生　土	器破片、壺（丹塗り）

S-15

土　師	器破片
弥　生　土	器破片

S-16

土　師	器破片（古墳時代）
弥　生　土	器壺、甕

S-17

土　師	器破片

S-18

土　師	器破片
瓦　質　土	器鉢

S-19

須　恵	器蓋1、甕
土　師	器甕
土　師　質　土	器鍋蓋、鉢
瓦　質　土	器鉢、片口鉢、甕
国　産　磁	器椀
弥　生　土	器破片、壺
そ　の	他軽石

S-20

須　恵	器甕
土　師	器壺、坏（？）（平安～）、高坏
国　産　磁	器青磁坏×皿
弥　生　土	器壺（弥生後期）、高杯、器台

S-21

弥　生　土	器壺（丹塗り）、甕

S-22

須　恵	器破片
土　師	器破片、坏、器台
黒　色　土	器椀破片
土　師　質　土	器鉢
弥　生　土	器破片、壺（丹塗り）

S-23

土　師	器破片
弥　生　土	器破片

S-24

弥　生　土	器甕

S-25

土　師	器破片
弥　生　土	器破片

S-26

土　師	器破片、小型丸底壺、高坏
弥　生　土	器破片、甕、壺

S-27

弥　生　土	器破片

S-28

土　師	器破片
弥　生　土	器破片

S-29

土　師	器破片
弥　生　土	器破片

S-30

須　恵	器坏（古墳時代）
土　師	器破片、坏a（平安～）
弥　生　土	器破片

S-31

土　師	器壺
弥　生　土	器壺（丹塗り）、破片

S-32

弥　生　土	器甕、破片

S-33

須　恵	器坏蓋（古墳時代）、平瓶
土　師	器破片、高杯、坏a（イ）、甕（布留式）、甕
石　製	品素材（？）（安山岩）
瓦　質　土	器破片、鉢
陸　前　系　陶	器破片
国　産　陶	器瓶
鉄	類鉄釘（？）
弥　生　土	器器台、壺（弥生中期）
そ　の	他焼石

S-34

須　恵	器破片
土　師	器破片
弥　生　土	器破片

S-35

土　師	器破片
瓦	類平瓦（S-1同じもの）
国　産　陶	器破片
弥　生　土	器破片
そ　の	他石英片（火つけ石か？）

S-36

石　製	品石臼？
弥　生　土	器破片、高坏

S-37

土　師	器破片
弥　生　土	器破片

S-38

土　師	器破片
弥　生　土	器破片

S-39

土　師	器破片
弥　生　土	器甕

S-40

須　恵	器壺×甕
土　師	器破片
弥　生　土	器甕、壺（二重口縁）

S-41

土　師	器破片
弥　生　土	器破片

S-42

弥　生　土	器破片

S-43

土　師	器破片

S-44

須　恵	器壺、皿×坏
土　師	器破片、高坏、鉢
瑞　泉　窯　系　青	磁破片
石　製	品砥石
土　師　質　土	器鉢
瓦　質　土	器鉢、鍋
国　産　陶	器坏、鉢×皿
弥　生　土	器器台、甕
土　製	品ミニチュア
そ　の	他軽石

S-45
土　師　器壺
弥　生　土　器破片，壺

S-46
土　師　器破片
弥　生　土　器破片

S-47
須　恵　器破片
土　師　器破片
弥　生　土　器破片，甕

S-48
土　師　器破片
弥　生　土　器破片

S-49
土　師　器甕，破片
弥　生　土　器甕，破片

S-51
土　師　器高坏，甕
弥　生　土　器壺，器台，甕

S-52
土　師　器壺，甕，高坏
弥　生　土　器破片，器台，甕，高坏

S-53
弥　生　土　器破片

S-54
土　師　器破片
弥　生　土　器破片

S-55
土　師　器破片
弥　生　土　器破片
そ　の　他焼石

S-56
土　師　器破片
弥　生　土　器甕，器台，破片

S-57
弥　生　土　器破片

S-58
土　師　器高坏，破片
弥　生　土　器甕，壺

S-59
弥　生　土　器破片
そ　の　他焼石

S-60
土　師　器破片
弥　生　土　器破片

S-61
弥　生　土　器破片

S-62
弥　生　土　器壺(弥生後期)，一重口縁壺，広口壺，高坏，器台

S-63
弥　生　土　器破片

S-64
須　恵　器破片（まじりかワ）
弥　生　土　器破片

S-65
弥　生　土　器破片

S-66
国　産　陶　器小皿(緑釉)
弥　生　土　器破片

S-67
土　師　器鉢，高坏，壺
弥　生　土　器甕

S-68
土　師　器破片
弥　生　土　器破片

S-69
須　恵　器甕
土　師　器破片
弥　生　土　器破片

S-70
須　恵　器破片，甕
土　師　器把手，甕，高坏
弥　生　土　器甕(弥生中期)，鉢，壺(弥生後期～末期)，器台
そ　の　他焼石

S-71
弥　生　土　器破片

S-73
須　恵　器破片
土　師　器甕，鉢，破片
弥　生　土　器甕，壺(弥生中期)

S-74
弥　生　土　器破片，壺(丹塗り)

S-75
土　師　器甕，器台，壺，高坏
弥　生　土　器甕，壺
貴　恵　質　土　器鉢

S-76
弥　生　土　器甕，壺，鉢

S-77
須　恵　器蓋
土　師　器甕，破片
弥　生　土　器破片

S-78
須　恵　器破片
土　師　器壺，高坏
弥　生　土　器破片，甕×壺

S-79
土　師　器破片
弥　生　土　器破片
そ　の　他焼石

S-80
弥　生　土　器破片

S-81
弥　生　土　器破片

S-82
弥　生　土　器高坏，器台，破片

S-83
弥　生　土　器破片

S-84
弥　生　土　器甕，破片

S-86
弥　生　土　器壺

S-87
弥　生　土　器甕，破片

S-88
龍 泉 窯 系 青 磁不明破片(輸入と考えられる)
弥　生　土　器甕×壺，破片(丹塗り)

S-89
弥　生　土　器壺，鉢

S-91
弥　生　土　器壺，破片

S-92
土　師　器破片，大甕
弥　生　土　器破片

トレンチ
須　恵　器破片
土　師　器破片
弥　生　土　器破片

焼茶色土層
須　恵　器器蓋3，坏c，壺蓋，甕×壺，高坏，坏蓋a，坏蓋
土　師　器坏a，皿，器台，甕d（ケ），高坏，鉢
越 州 窯 系 青 磁椀破片，坏破片
龍 泉 窯 系 青 磁椀，IV
丸　　瓦　　粗雑し丸
石　　製　　凸石(2)，茶臼，砥種車
土 師 質 土 器鉢
丸　質　土　器火舎，擂鉢
貯 蔵 系 陶 器器台×坏
国　産　陶　器鉢（ケ），椀(黒釉)
国　産　磁　器破片(白磁，青磁)，椀(白磁)
弥　生　土　器破片，甕，壺，(丹塗り)，高坏
土　製　品滑石，硬玉，土管
そ　の　他焼石，紀伊，石英

表土
須　恵　器甕×壺
土　師　器鉢，甕，高坏，破片
丸　　瓦　　粗平丸(大きな格子)
石　　製　　凸石(2)
土 師 質 土 器高坏(新しい?)
丸　質　土　器滑鉢
貯 蔵 系 陶 器破，瓶，広口瓶
国　産　陶　器甕，染付?
弥　生　土　器破片，甕

4、第5次調査

(1) 調査に至る経過

調査地は太宰府市大字大佐野172-2、173-2、190、191である。

佐野土地区画整理事業に伴って、平成12（2000）年1月17日から3月6日にかけて発掘調査を実施した。調査は宮崎亮一が担当した。調査対象面積は454m²、調査面積374m²である。

(2) 基本層位

現況面から遺構面までは非常に浅く、耕作土の直下0.2m程で遺構面が確認された。遺構面は明灰色土でいわゆる真砂土に似た土質で、その表面の凸凹に灰色土が入り交じっている。調査前は植木が植えられていたためか、バックホーの掘削痕跡や植木を取り除いた穴が全面に確認された。

(3) 検出遺構

掘立柱建物

5SB020（Fig.27）

方位はE-18°32′3″-N。調査区端に位置するため2間以上×2間以上の建物である。掘り方は直径0.44～0.7mの不正円形で、直径約0.2mの柱痕が確認された。柱間は東西が2.3m、南北が約1.8mを測る。西側の掘り方dについては、他の掘り方と深さや形状に若干違いはあるものの、掘立柱建物の掘り方と見て良いだろう。

溝

5SD001（Fig.29）

幅は0.6m、深さは約0.17mで、南北端はそれぞれ調査区外に続いている。溝の形状は方形に近い逆台形を呈している。方位はおよそN-28°13′-Eで、ほぼSD010と平行する溝である。

5SD010（Fig.29）

幅は0.3～0.6m、深さは約0.1～0.2mで、北端は調査区外に続いているが、南端はSD014と重なり合いながら調査区外に続いている。溝の形状は逆台形を呈している。方位はおよそN-24°-Eだが、やや蛇行している。

5SD014（Fig.29）

方位はおよそN-32°9′-E。地番の境界に位置するため、現代まで残っていた区画溝と考えられる。南端はSD010と重なり合っていて、SD010埋土にSD014を掘り込んでいる。

5SD021（Fig.29）

調査区東側を南北に蛇行する流路で、北側に向かってが低くなっている。途中から二股（SD031・032）に分かれていて、埋土はそれぞれ若干異なり、SD031は砂質がやや目立つ埋土である。それぞれ底面には甌穴状の小さなピットが検出され、砂が混ざり込んでいる。このことから流水があったことがうかがえる。遺物は4～5世紀前半のものが殆どであるが、僅かに8世紀代の須恵器が含まれる。

井戸

5SE025（Fig.28）

最初は遺構が切り合っていることを確認できずに掘り下げていった。石積み検出時点で北側に土坑（SK017）が切り合っていることを確認した。よって、石積みは撹乱に犯されていない南側のみ半円状に残っていた。掘り方は直径1.6m、深さ0.7m。石積みの内径は約0.7m、石積みは底面から高さ0.5m分が残存している。石の積み方は、0.25m前後の花崗岩を内面を揃えて積んでいるが、裏込め等の小石は殆ど見られないため石と石の間の空間が目立つ。井戸底面は砂質で、現状で湧水はない。石積み枠内に

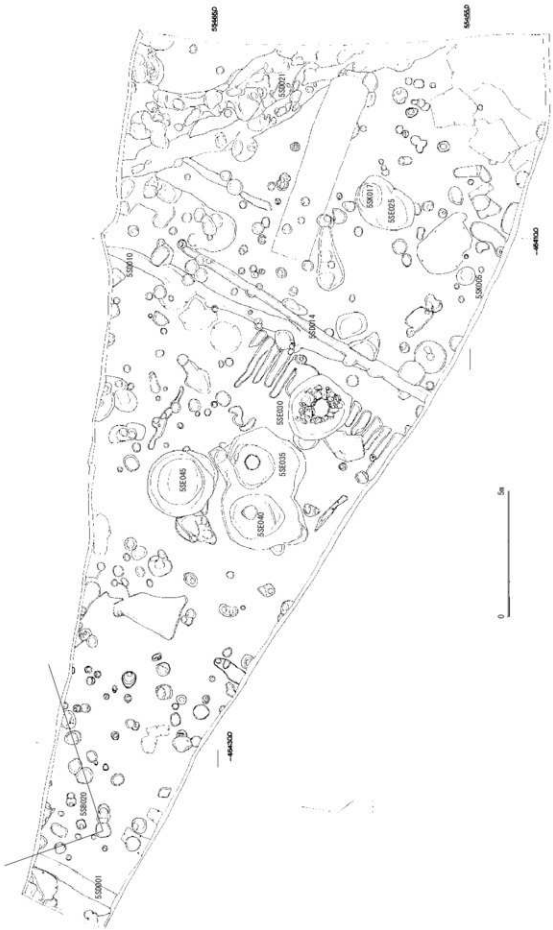


Fig. 26　第５次調査遺構全体図（1/150）

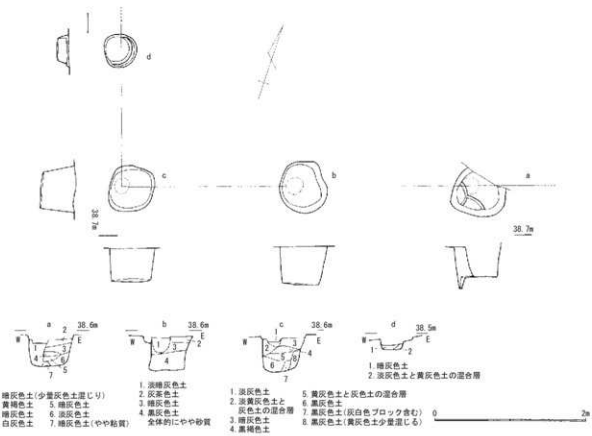


Fig.27　5SB020 遺構実測図 (1/50)

は転落したと見られる石が数個検出された。

5SE030 (Fig.28)

掘り方は直径 2.3 ～ 2.6m、深さ 1.0m。石積みの内径は 0.7m、石積みは底面から高さ 0.7m 分が残存している。石は 0.3 ～ 0.5m ほどの花崗岩の大石を使用している。埋土の上層は瓦が多く出土した。井戸破棄時に捨てられた瓦と推測される。石組み内部の上位でも上層と同じく瓦が多く出土したが、底面近くの 0.3m 程は砂質で瓦は殆ど出土しない。砂層の下になる井戸底は黒色粘土層で、僅かに湧水がある。

5SE035 (Fig.28)

桶を用いた井戸枠を有し、桶部材の遺存状況は極めて良好である。桶枠は内径 0.58m の正円形で、深さ 0.95m 残っていた。桶材は厚さ 0.02m、幅 0.04 ～ 0.11m の木材を 22 枚用いて作られ、桶の外側をタガで 3 ヶ所締めていた。掘り方は径 1.6 ～ 1.75m の不正円形で、深さは 1.45m を測る。

また、井戸底には竹を編み込んだショウケが置かれていた。ショウケの大きさは 0.45 × 0.45 m、深さ 0.05m 程で網目がきれいに確認できるほど良好に残存していた。そのショウケの下には直径 0.2m 程の竹篭のようなものが 3 個分確認された。厚さは 0.02m 程だが、若干バラバラになっていて原形は留めていない。これらの竹製品は井戸底に接しているため、井戸構築時に浄化機能を持たせるために据えられたものではないかと推測される。この井戸は湧水も激しい。

今回の調査で検出された井戸の中で最も新しいものと推測され、昭和初期にはすでに畑だったと地元の人が言われていることから、明治期には埋められていたものと推測される。

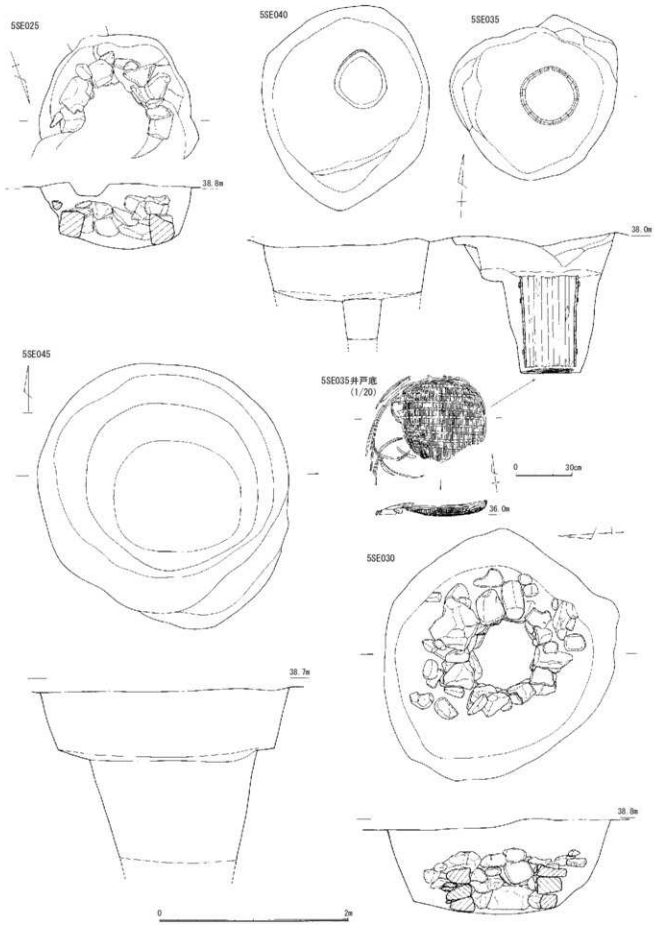


Fig.28　第５次調査井戸遺構実測図（1/20、1/40）

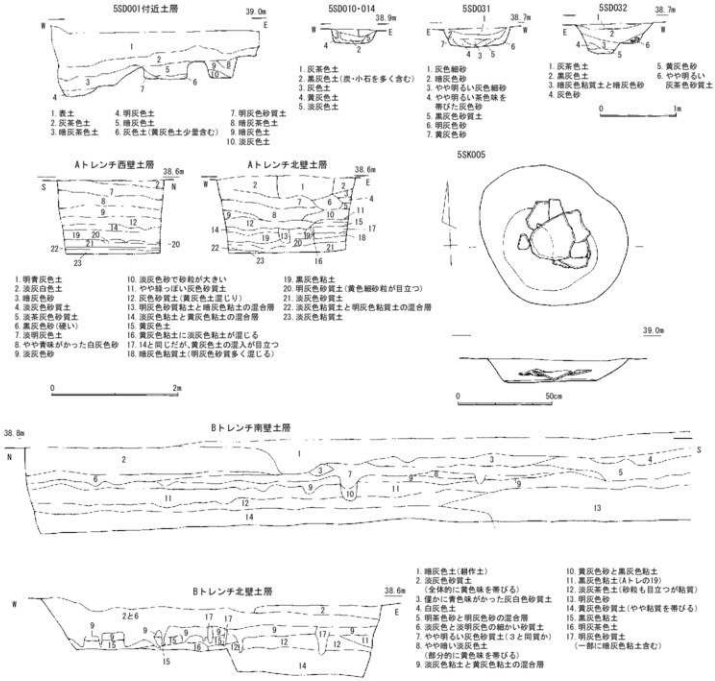


Fig.29　第５次調査溝・土坑・トレンチ実測図（1/50、1/60）

5SE040（Fig.28）

直径約0.55～0.6mの桶を井戸枠に用いている。桶材には厚さ0.025m程の木材を用いているが、腐食が著しく殆ど消滅していた。井戸枠内の埋土はウラゴメと明瞭に異なるため円形状に確認できる。掘り方は直径1.66～2.2m、深さは1m以上で完掘できていない。SE040のプラン検出直後は0.3～0.5cm程の石が集積していた。井戸の埋め戻しの際に入れ込まれたものであろう。

5SE045（Fig.28）

調査区内で最も深い井戸で、掘り方は直径2.65～2.8m、深さ1.8m以上で完掘できていない。井戸枠材は確認されていない。

土坑

5SK005 (Fig.29)

大きさは0.84m×0.67m、深さ0.13mの楕円形をした土坑で、土坑中央に弥生土器片が集中し、人為的に置かれていた、もしくは廃棄されたものと推測される。

5SK017

5SE025の石組みを破壊して、掘り込まれた土坑である。東西2.0m、南北約1.5m、深さ0.88mで、中央付近が径1m程深くなっている。

下層遺構 (Fig.29)

A・B2つのトレンチを設定し、掘り下げた結果、調査区東側のBトレンチで約10点の旧石器剥片が出土した。北側で調査した脇道遺跡第4次調査と同一層から検出されたものであったが、脇道遺跡第4次調査と比較して出土数が少ないこと、西側のBトレンチでは殆ど旧石器は出土しないこと、全体に広がる黒灰色粘土層の質がやや黒色が薄れていることなどから旧石器の堆積層の西端に位置するものと推測される。

(4) 出土遺物

掘立柱建物出土遺物

5SB020b 出土遺物 (Fig.30)

弥生土器

複合口縁壺 (1)　肩部付近の破片で、刻み目のある突帯が巡る。外面ハケ、内面は横ハケの後雑なナデ。胎土は0.1cm未満の砂粒を多く含み、焼成良好で淡褐白色を呈する。

5SB020d 出土遺物 (Fig.30)

弥生土器

甕 (2)　平底で、外面タテハケ、内面ナデ。胎土は0.1cm前後の砂粒を多く含み、焼成良好で淡褐白色を呈する。復元底径9.0cm。

溝出土遺物

5SD001 黒灰色土出土遺物 (Fig.30)

土師器

坏a (3)　復元口径11.0cm。胎土は精製され、焼成は良好で淡褐色を呈する。内外面回転ナデ。

龍泉窯系青磁

椀 (4)　Ⅳ類。内外面は淡緑灰色釉を施し、内面底部は釉を拭き取っている。高台内面は露胎で、一部淡赤灰色を呈する。復元高台径7.9cm。

石製品

砥石 (5)　3面が使用され、一部研磨面にキズを残す。安山岩製。大きさは6.7×3.3×2.2cm。

5SD010 出土遺物 (Fig.30)

瓦質土器

湯釜 (6)　口縁部で復元口径12.1cm。内外面とも回転ナデだが、外面にハケのような痕跡が見られる。色調は灰黒色を呈する。

5SD014 出土遺物 (Fig.30)

土師器

小皿a (7)　口径6.5cm、器高1.3cm、底径5.1cm。底部切り離しは回転糸切り。胎土には金雲母を含み、色調は淡橙灰色を呈する。

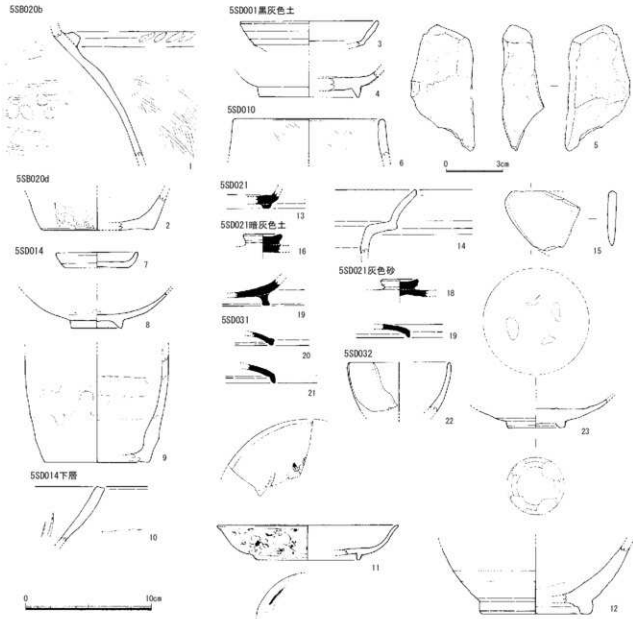


Fig. 30　第５次調査建物・溝出土遺物実測図（1/2、1/3）

肥前系陶器

椀（8）　胎土は淡黄白色で、釉は淡緑灰色釉を薄く施し、内面底部は蛇ノ目状に釉を拭き取っている。外面は外面下半から高台内面にかけて露胎である。高台径は 4.05cm。

国産陶器

徳利（9）　復元底部径は 8.3cm。胎土は淡黄褐色を呈し、外面は暗茶褐色釉を薄く施している。一部釉が流れ、発色不良の細かい気泡を多い部分がある。内面は露胎で、縦方向のナデ調整を施す。焼成は不良。

5SD014 下層出土遺物（Fig. 30）

瓦質土器

擂鉢（10）　全体的に摩滅するが、僅かに内面に擂り目が確認できる。色調は暗灰色を呈する。

染付

皿（11）　復元口径 14.4cm、器高 2.8cm、復元高台径 4.0cm。胎土は乳白色で、内外面に淡青色や暗紺色の釉で草花文を描く。小野分類染付皿 B1 群。

国産陶器

鉢（12） 復元高台径9.0cm。内面は底部以外に淡灰紫色釉を施す。外面は露胎で回転ナデの後、下半は回転ヘラケズリ。色調は明赤褐色を呈する。

5SD021 出土遺物（Fig.30）

須恵器

坏c（13） 内外面とも回転ナデで、内面はその後ナデ調整。焼成は良好で淡灰色を呈する。

古式土師器

複合口縁壺（14） 頸部から口縁部にかけての破片で、やや摩滅するが内外面とも回転ナデを施す。胎土は0.2cm以下の砂粒を多く含み、色調は淡橙色や茶灰色を呈する。

石製品

石包丁（15） 側辺部の破片で、全体を研磨し仕上げている。輝緑凝灰岩製。

5SD021 暗灰色土出土遺物（Fig.30）

須恵器

蓋c（16） つまみ部分で、焼成は良好で灰色を呈する。

坏c（17） やや高い高台を貼付する。外面底部は回転ヘラ切りで、外面は回転ナデ、内面は回転ナデの後ナデ。焼成は良好で、青暗灰色を呈する。

5SD021 灰色砂出土遺物（Fig.30）

須恵器

蓋c（18） つまみ部分で、外面回転ナデで、内面は丁寧なナデ調整。色調は灰色を呈する。

蓋3（19） 外面中位より上方は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデ。色調は暗灰色を呈する。

5SD031 出土遺物（Fig.30）

須恵器

蓋3（20、21） 20の口縁端部は僅かに摘んだ程度の断面三角形をなす。色調は淡灰色と暗灰色で重ね焼きの痕跡を残す。21は口縁部がやや長い。色調は淡青灰色を呈する。

5SD032 出土遺物（Fig.30）

肥前系磁器

椀（22） 復元口径8.1cm。胎土は微細な黒色粒子を僅かに含む。外面に薄い呉須で圏線を描く。

肥前系陶器

皿（23） 内面と高台畳付に砂目の目跡を4ヶ所残す。高台はケズリ出しで、高台径4.6cm。唐津産。内面には浅い段が付いている。胎土は淡灰色を呈し、白色砂や隙間が多く見られる。釉はやや薄い緑色で、底部内側と見込みには細かい気泡があり、表面はボコボコになっている。

井戸出土遺物

5SE030 出土遺物（Fig.31・32）

瓦類

軒平瓦(1) 摩滅が目立つが唐草文が確認できる。凹面はナデ。胎土は0.3cm以下の砂粒を多く含む。焼成はやや不良で灰色や暗灰色を呈する。

平瓦（2～6） 多くの瓦片が出土したが、ここには大きさが確認できる破片やスタンプのある破片を掲載した。殆どの破片が同じ造りをしていて、胎土は0.1～0.2cm前後の砂粒を多く含み、色調は灰色や黒灰色を呈する。側面はヘラ切り、内外面はナデ調整である。2は縦24.4cm、厚さ1.7cm。3は縦24.4cm、厚さ1.55cm。凹面は燻されやや黒光りしている。4は縦24.2cm、幅22.0cm、厚さ1.6cm。

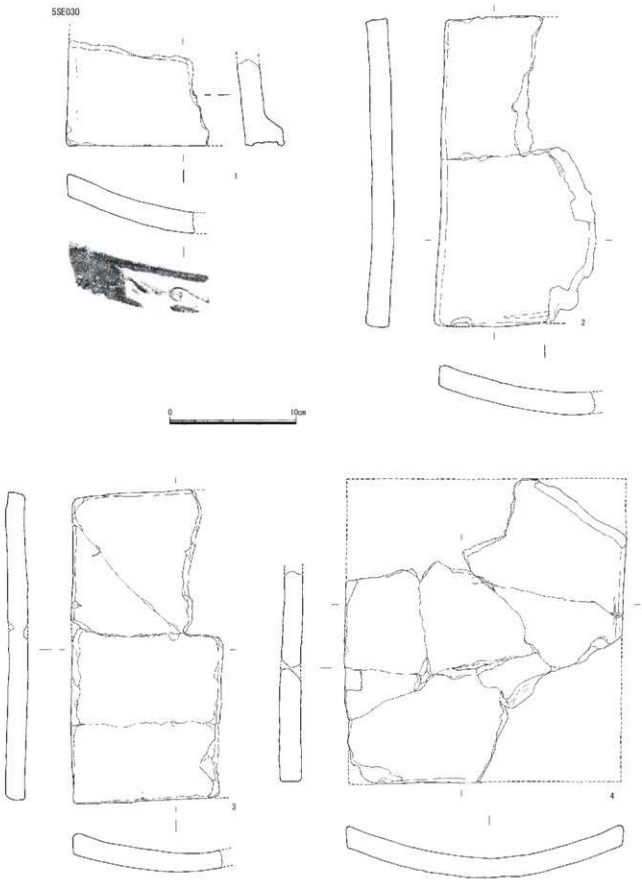


Fig. 31　第５次調査井戸出土遺物実測図①（1/3）

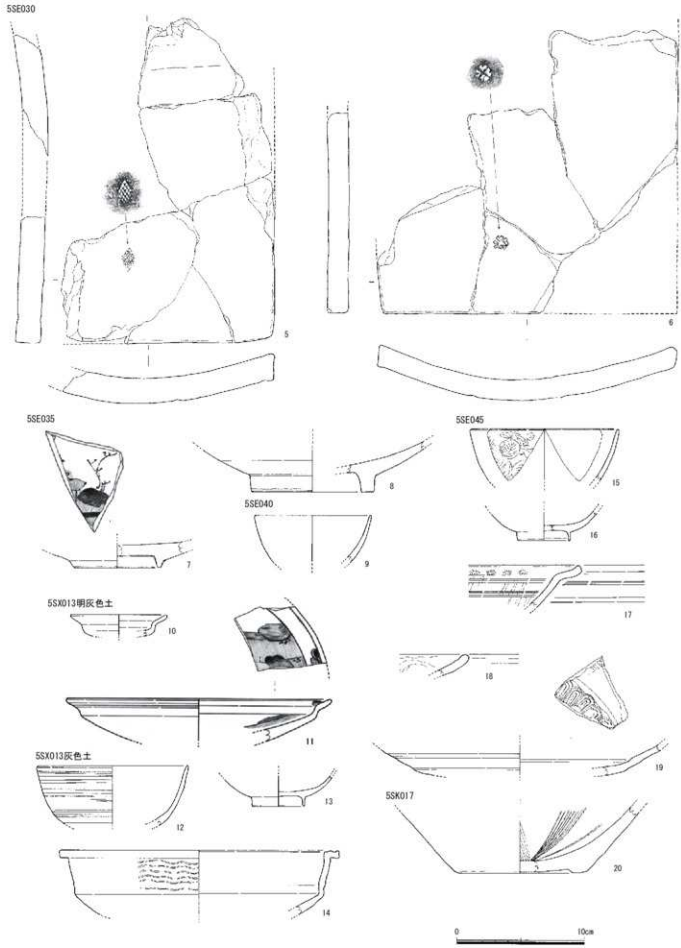


Fig. 32　第５次調査井戸②・窪み出土遺物実測図（1/3）

5は凹面に菱形格子状のスタンプが押されている。6は凹面に花文状のスタンプが押されている。幅23.8cm、厚さ1.65cm。

5SE035 出土遺物 (Fig.32)

肥前系磁器

皿 (7) 復元高台径7.0cm。胎土は明白灰色で、黒色粒子や白色砂を僅かに含む。高台畳付は露胎で、それ以外はやや青みを帯びた透明釉を施す。内面には暗青色釉で草花文を描く。

国産陶器

鉢 (8) 安定感のある高台で、体部より底部の厚みが薄い。復元高台径9.7cm。胎土は灰色で黒色粒子を僅かに含む。体部内外面は褐色釉を薄く施す。透明度も光沢も低い。高台畳付と高台内面は露胎。

5SE040 出土遺物 (Fig.32)

国産磁器

椀 (9) 復元口径9.2cm。胎土は精製され、白濁した透明釉を薄く施す。

5SE035・040 上層 (SX013) 出土遺物

5SX013 明灰色土出土遺物 (Fig.32)

国産磁器

皿 (10) 復元口径7.6cm。体部中位で屈曲し外反する。胎土は淡白灰色で薄い透明釉が施釉されている。釉は光沢があり、貫入がある。

肥前系磁器

皿 (11) 復元口径21.0cm。口縁端部が上方に屈曲した後に外反する。内外面にやや青みがかった淡灰白色釉を薄く施し、内面には暗青色釉で文様を描いている。

5SX013 灰色土出土遺物 (Fig.32)

肥前系磁器

椀(12) 復元口径12.0cm。胎土は淡灰白色で薄い透明釉を全面に施す。釉は光沢があり、貫入もある。外面には淡青色釉で圏線を全面に描く。

国産磁器

椀 (13) 細く高い高台を付す。復元高台径4.2cm。胎土は淡灰白色で僅かに光沢のある透明釉を全面に薄く施し、高台畳付のみ釉を拭き取っている。

国産陶器

鉢 (14) 復元口径22.2cm。体部中位で僅かに屈曲して直上し、口縁端部で外に水平に屈曲する。釉は暗茶褐色釉を全面に施し、体部上半部外面は波状に釉を掻き取っている。

5SE045 出土遺物 (Fig.32)

国産磁器

椀 (15、16) 15は復元口径11.8cm。内外面に透明釉を薄く施す。外面には一見文様は見えないが、光源の当たり具合によって、キズ状の線刻によって草花文が施されていることが確認できる。16は細く高い高台を付す。復元高台径4.2cm。胎土は淡灰白色で透明釉を全面に薄く施し、高台畳付のみ釉を拭き取っている。

国産陶器

皿 (17～19) 17は口縁部を外反させ、端部を若干上げている。内外面の一部に細かい沈線を施す。内外面に淡灰緑色や灰白緑色釉を施す。口縁端部は淡灰白色釉を施し、内面には花文のスタンプが押され、白色釉を施している。18は胎土が淡明茶色で、内面に淡白褐色釉が施され、横に帯状に白色釉を

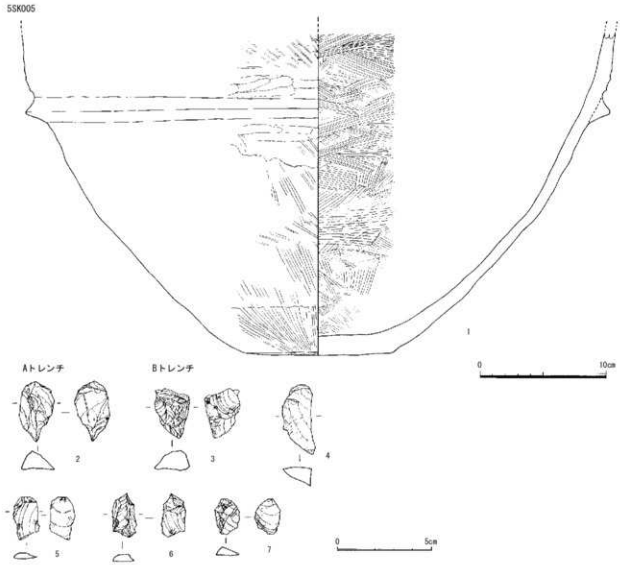


Fig.33　第５次調査土坑・トレンチ出土遺物実測図（1/2、1/3）

かける。体部はさらに淡い緑色釉がみられる。外面は淡白褐色釉で端部ほど白色が強い。19は体部中位で僅かに屈曲する。内外面とも淡灰緑色釉を施釉し、内面底部には文様を描き白色釉を施す。胎土は淡灰茶色を呈する。

土坑出土遺物

5SK017 出土遺物（Fig.32）

国産陶器

擂鉢（20）　低い高台が付き、復元高台径10.5cm。内面にはカキ目が９本単位であり、全面使用によって平滑である。体部外面はヨコナデ、高台内面は回転ナデである。色調は明茶褐色や暗茶褐色を呈する。

5SK005 出土遺物（Fig.33）

弥生土器

甕（1）　体部外面には不定形な突帯を巡らし、その上位はタタキ、下位はタテハケやタタキを施し、その後雑なナデを施しているため、器面が波を打っている。底径12.0cm。外面底部はナデ調整するが、僅かにハケ目が残る。内面は細かいハケを小刻みに施している。0.1cm以下の砂粒を多く含み、焼成は良好で淡茶褐色を呈する。

トレンチ出土遺物

A トレンチ出土遺物 (Fig.33)

石製品

剥片 (2)　縦3.2cm、横1.9cm、厚さ1.0cm。石錐の可能性も考えられる。安山岩製。

B トレンチ出土遺物 (Fig.33)

石製品

剥片 (3～7)　3は縦2.6cm、横1.8cm、厚さ0.95cm、黒曜石製。4は縦3.7cm、横1.5cm、厚さ1.0cm、安山岩製。5は縦2.3cm、横1.3cm、厚さ0.3cm、黒曜石製。6は縦2.3cm、横1.3cm、厚さ0.35cm、黒曜石製。7は縦1.9cm、横1.3cm、厚さ0.35cm、黒曜石製。

その他の遺構出土遺物

5SX009 出土遺物 (Fig.34)

古式土師器

壺 (1)　口径14.4cm、器高17.5cm、底径6.5cm。体部外面には細かいハケが重なり合い、中位には煤が付着する。底部はやや丸味があり、ハケ目を残す。内面上位は若干粗いが細かいハケを施し、下半はナデ調整。胎土は0.15cm以下の砂粒を多く含み、雲母も僅かに含んでいる。焼成は良好で、灰茶色を呈する。

5SX016 出土遺物 (Fig.34)

弥生土器

高坏 (2)　外面は摩滅しているが、部分的に丹塗りが確認できる。内面にミガキ痕がみられる。

5SX018 出土遺物 (Fig.34)

古式土師器

器台 (3)　復元底径8.8cm。脚部中位に円孔を穿つ。焼成はやや不良で全体的に摩滅する。外面にはミガキのような痕跡が残る。脚部上部の欠損部分には坏部接合を良好にするための工具による刺突痕がみられる。

5SX027 出土遺物 (Fig.34)

古式土師器

甕 (4)　復元口径15.9cm。口縁部は横ナデし、端部に向かって若干細く仕上げる。体部内片はヘラケズリ、外面はハケ目が若干残る。胎土は0.2cm以下の砂粒を多く含み、淡黄茶色を呈する。

5SX049 出土遺物 (Fig.34)

弥生土器

複合口縁壺 (5)　頸部の破片で内外面ともハケ目調整。部分的に回転ナデを施す。砂粒を多く含み黄白色を呈する。

高坏 (6)　坏部中位で僅かに屈曲させる。内外面とも摩滅し、調整不明。色調は橙褐色を呈する。

5SX051 出土遺物 (Fig.34)

弥生土器

甕 (7、8)　7は復元口径25.6cm。外面に縦ハケ目、内面は口縁部は部分的にハケ目が残り、体部は斜めナデである。焼成は良好で、淡黄灰色や黄白色を呈する。8は体部外面がタテハケ、内面はナデ調整。口縁部は横ナデ。外面には薄く煤が付着している。

5SX052 出土遺物 (Fig.34)

弥生土器

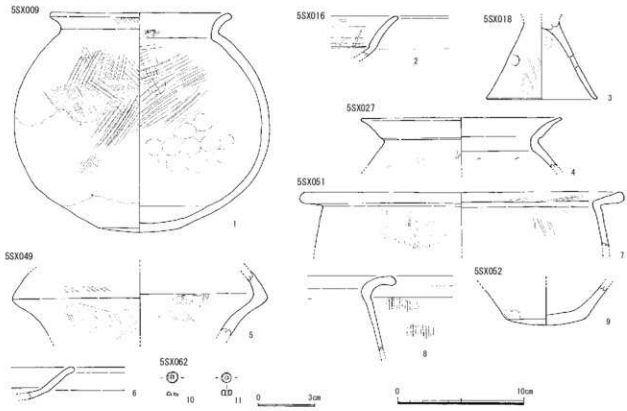


Fig. 34　第５次調査その他の遺構出土遺物実測図（1/2、1/3）

甕×壺（9）　底部はやや丸みがある。全体的にナデ調整がみられる。胎土は0.15cm以下の砂粒を多く含み、焼成は良好で淡灰白色や淡灰褐色を呈する。

5SX062 出土遺物（Fig. 34）

石製品

小玉（10、11）　10は径0.55～0.6cm、厚さ0.2cm、滑石製。11は径0.5cm、厚さ0.3cm、滑石製。2点とも中央に径0.17cmの円孔を穿つ。

(5) 小結

今回の調査地は、旧石器が多量に出土した脇道遺跡第４次調査に近接しているため、旧石器の広がりも予想されたが、少量の剥片が出土しただけであった。

弥生時代になると、弥生時代後期や古墳時代初頭の土器が比較的多く出土するが、直接遺構に伴うものは少なかった。それらの遺物は南側の高台で検出された古墳時代初頭前後の集落から流出したものと推測される。

古代の遺構や遺物は少なく、人の動きは見受けられないが、中世になると調査区を斜めに走る溝が検出されるなど、人の動きが確認できる。5SD001は172-2と173-2の地番境にあり、5SD010・014は190と191の地番境に位置することから、境界溝であることは間違いないであろう。よって、現在の地番に残る区画が中世まで遡ることが理解でき、溝埋没後も区画に大きな変化がなく、現代まで残っていたことを物語っている。5SX015や5SD010の西側に並ぶ畑の畝痕跡も、地割と方位が一致しているため、中世以降の遺構であることがわかる。

井戸は比較的浅いものの現在も湧水が確認できる。飲料用や農業用など井戸の用途はわからないが、それぞれ近接した位置で検出され、掘り直しを行いつつも、殆んど位置を変えず、この付近が取水の場であったことが理解できる。

以上のように、中世以降から現代に繋がる大佐野地区の歴史を知る上で貴重な発見となった。

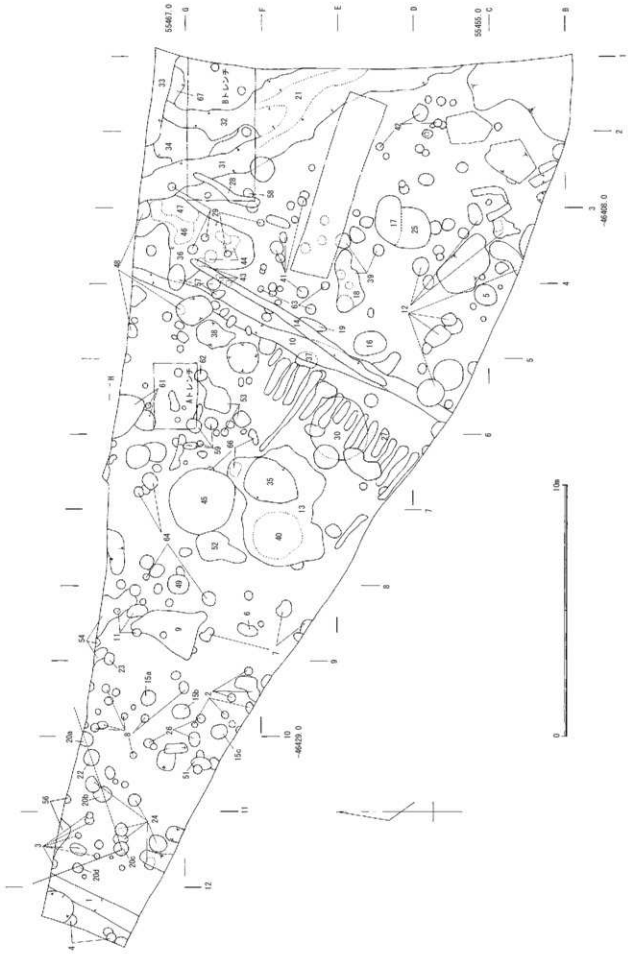


Fig. 35　第５次調査遺構略測図（1/150）

表7　殿城戸遺跡第5次調査　遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	時期	地区
1	5SD001	溝	中世（14世紀代）	H12
2		ピット群		F9
3		ピット群		H11
4		ピット群		H12
5	5SK005	土坑	弥生時代後期	C4
6		土坑		F8
7		ピット群		E8
8		ピット群		G9
9	5SX009	窪み		G8
10	5SD010	溝　S-10→14	中世	4、5
11		ピット群		G8
12		土坑群		C4
13	5SX013	土坑　S-13はSE035・040の上面	近世～	E6
14	5SD014	溝　S-10→14	中世後期～近世初期	E4
15	5SX015	柵列？植木穴？	中世～？	G・F9
16	5SX016	土坑		D4
17	5SK017	土坑	近世前期	D3
18	5SX018	土坑		D4
19		土坑		E4
20	5SB020	掘立柱建物	弥生後期～古墳時代前期？	D3
21	5SD021	流路	奈良時代・近世前期	D・E1
22		ピット		H10
23		ピット		H9
24		ピット群		G1
25	5SE025	石積み井戸　S-25→17	近世～	D3
26		ピット群		F9
27	5SX027	耕作痕跡	近現代	D・E、5・6
28		溝		F2
29		ピット群　S-36→29		F3
30	5SE030	石積み井戸	近世～	E6
31	5SD031	溝　S-21より分岐。Fラインより北	8世紀後半	F2
32	5SD032	溝　S-21より分岐。Fラインより北	近世前期	F1
33		落ち？		G1
34		窪み？		G2
35	5SE035	井戸　S-35→13　S-13はSE035・040の上面	近世～	E6
36		窪み		F3
37		土坑　S-37→10		E5
38		攪乱		F4
39		ピット群		D3
40	5SE040	井戸　S-40→13　S-13はSE035・040の上面	近世～	E7
41		ピット群		E3
42		ピット群		C1
43		ピット群		F3
44		ピット群　S-36→44		F3
45	5SE045	井戸	近世～	F6
46		窪み		G3
47		土坑		G3
48		ピット群		G4
49	5SX049	ピット		F8
51	5SX051	ピット		F10
52	5SX052	ピット		F7
53		ピット群		F5
54		ピット群		H8
56		ピット群		H11
57		ピット群		F4
58		ピット		F2
59		ピット群		F6
61		ピット群		G5
62	5SX062	ピット		F5
63		ピット群		E4
64		ピット群		G7
66		ピット群		F6
67		落ち		G1

表8　殿城戸遺跡第5次調査　出土遺物一覧表

S-1黒灰色土

須恵	器	破片
古式土師	器	破片
土師	器	Fa
朝鮮 瓷系 青磁	器	椀c IV
石製	品	砥石、剥片

S-1黒灰色砂

須恵	器	破片
古式土師器×弥生土	器	破片

S-2

古式土師	器	破片
国産陶	器	甕

S-3

古式土師	器	破片
弥生土	器	甕

S-4

古式土師器×弥生土	器	破片
弥生土	器	壺

S-5

弥生土	器	甕

S-6

古式土師器×弥生土	器	破片
弥生土	器	破片

S-7

古式土師器×弥生土	器	甕、破片
土師	器	杯

S-8

古式土師	器	小甕、破片

S-9

古式土師	器	壺
金属製	品	ヤリガンナヲ、鏃片

S-10

須恵	器	甕、坏身
古式土師	器	甕、高杯
瓦質土	器	浄釜
弥生土	器	破片

S-11

古式土師	器	破片

S-12

古式土師器×弥生土	器	甕、破片
肥前系陶磁	器	破片
石製	品	丸石

S-13黒茶色粘土

古式土師	器	甕
国産陶	器	破片
弥生土	器	器台
瓦	類	隅丸瓦
石製	品	丸石

S-13明灰色土

須恵	器	蓋3
古式土師器×弥生土	器	破片
土師	器	破片
肥前系陶磁	器	椀、皿、破片
国産陶	器	甕、擂鉢、破片
国産磁	器	皿
弥生土	器	複合口縁壺
瓦	類	平瓦(無文)
石製	品	剥片

S-13灰色土

古式土師器×弥生土	器	破片
古式土師	器	高杯
肥前系陶磁	器	椀、皿
国産陶	器	鉢
国産磁	器	椀
瓦	類	平瓦(無文)

S-14

須恵	器	甕、坏身
古式土師	器	甕、破片
土師	器	小皿a(ⅰ)
肥前系陶	器	椀
国産陶	器	壺形
石製	品	焼石
土製	品	焼土塊

S-14下層

須恵	器	破片
土師	器	破片
瓦質土	器	擂鉢
国産陶	器	鉢
染付（輸入）		皿
土製	品	焼土塊

S-15a

古式土師	器	破片
土師	器	破片

S-15b

古式土師	器	?破片
弥生土	器	甕

S-16

弥生土	器	高坏、破片

S-17

須恵	器	破片
古式土師	器	破片
土師	器	破片
国産陶	器	擂鉢
国産磁	器	椀、破片
金属製	品	銭

S-18

古式土師	器	器台、破片

S-19

古式土師	器	?破片
弥生土	器	甕

S-20a

古式土師	器	甕、破片

S-20b

古式土師	器	甕、破片
弥生土	器	複合口縁壺、破片

S-20c

古式土師	器	破片

S-20d

弥生土	器	甕、破片

S-21

須恵	器	坏蓋、Hc
古式土師	器	壺、破片、複合口縁壺
越州窯系青磁	器	椀：I(1)
肥前系陶磁	器	破片
弥生土	器	甕×壺、破片
石製	品	石包丁

S-21暗灰色土

須恵	器	蓋c、Hc、破片
古式土師	器	壺、破片
土師	器	Hc
弥生土	器	破片

S-21灰色砂

須恵	器	蓋3、蓋c、甕
古式土師	器	甕、破片
弥生土	器	甕、破片

S-21黒色砂

須恵	器	破片
古式土師器×弥生土	器	壺×甕
古式土師	器	甕
弥生土	器	甕、破片
石製	品	剥片(安山岩)

S-22

古式土師器×弥生土	器	破片

S-23

古式土師器×弥生土	器	破片
弥生土	器	甕、破片

S-24

古式土師器×弥生土	器	破片
弥生土	器	破片

S-25

古式土師	器	破片
土師	器	小皿a(ⅰ)
国産陶	器	擂鉢

S-26

古式土師器×弥生土	器	破片

S-27

須恵	器	破片
古式土師	器	甕、HC、破片
土師	器	Fa(ⅰ)
肥前系陶磁	器	破片
国産陶	器	破片
瓦	類	破片

S-28

須恵	器	坏蓋
古式土師	器	破片
土師	器	破片

S-29

古式土師器×弥生土	器	甕、破片
弥生土	器	丹後り破片

S-30

縄　　恵	器	坏ヽ、破片
古式土師器×弥生土器	破片
古　式　土　師	器	坏
土　　師	器	把手
肥　前　系　陶　磁	器	破片
国　　産　　陶	器	破片
弥　生　土	器	甕
瓦	類	平瓦、軒平瓦

S-30枡内

古　式　土　師	器	坏
瓦	類	平瓦

S-31

縄　　恵	器	高3、破片
古　式　土　師	器	甕、破片
弥　生　土	器	甕、破片

S-32

縄　　恵	器	甕、破片
古　式　土　師	器	甕、破片
土　　師	器	高坏
肥　前　系　陶　磁	器	皿、破片、椀
弥　生　土	器	甕、破片
瓦	類	平瓦(無文)
石　　製	品	丸石、荒化木

S-33

縄　　恵	器	甕、壺
古式土師器×弥生土器	破片
古　式　土　師	器	高坏
肥　前　系　陶　磁	器	破片
弥　生　土	器	甕

S-34

縄　　恵	器	破片
古式土師器×弥生土器	破片
古　式　土　師	器	甕
土　　師	器	坏a
弥　生　土	器	甕

S-35

古式土師器×弥生土器	破片
肥　前　系　陶　磁	器	皿、破片
国　　産　　陶	器	鉢
瓦	類	平瓦(無文)

S-35ウラゴメ

土　　師	器	破片
石　　製	品	剥片

S-36

古式土師器×弥生土器	?破片
弥　生　土	器	甕

S-37

古式土師器×弥生土器	破片
弥　生　土	器	破片

S-38

古式土師器×弥生土器	破片
瓦	類	熨し瓦
石　　製	品	丸石

S-39

古式土師器×弥生土器	破片
弥　生　土	器	破片

S-40

古式土師器×弥生土器	甕、破片
国　　産　　陶	器	破片
国　　産　　磁	器	椀

S-41

古　式　土　師	器	甕、破片
国　　産　　陶	器	擂鉢

S-42

弥　生　土	器	甕、破片

S-43

古式土師器×弥生土器	破片
国　　産　　磁	器	破片

S-44

古　式　土　師	器	破片

S-45

縄　　恵	器	坏ヽ、甕、破片
古　式　土　師	器	甕、破片
国　　産　　陶	器	皿、破片
国　　産　　磁	器	椀
弥　生　土	器	破片
瓦	類	熨し瓦、破片
石　　製	品	剥片

S-46

古式土師器×弥生土器	破片
弥　生　土	器	破片

S-47

古式土師器×弥生土器	破片
弥　生　土	器	甕、破片
石　　製	品	砥石

S-48

古式土師器×弥生土器	破片
古　式　土　師	器	甕、破片
弥　生　土	器	甕、破片
石　　製	品	丸石

S-49

弥　生　土	器	複合口縁壺、高坏、破片

S-51

弥　生　土	器	甕、破片

S-52

古式土師器×弥生土器	破片
弥　生　土	器	甕×壺

S-53

古式土師器×弥生土器	破片

S-54

古式土師器×弥生土器	破片
弥　生　土	器	破片

S-56

古式土師器×弥生土器	破片

S-57

縄　　恵	器	破片
弥　生　土	器	甕、壺、破片

S-58

弥　生　土	器	甕、破片

S-59

弥　生　土	器	破片
石　　製	品	丸石

S-61

古　式　土　師	器	甕
弥　生　土	器	破片
金　属　製	品	鉄

S-62

古式土師器×弥生土器	破片
石　　製	品	剥片、小玉

S-63

弥　生　土	器	破片

S-64

古　式　土　師	器	坏
弥　生　土	器	甕、破片

S-66

土　　師	器	破片
弥　生　土	器	破片?

S-67

古　式　土　師	器	破片
国　　産　　陶	器	擂鉢、破片

Aトレンチ

弥　生　土	器	破片
石　　製	品	剥片

Bトレンチ

古式土師器×弥生土器	破片
古　式　土　師	器	甕×壺
石　　製	品	剥片

Bトレンチ明灰色土

石　　製	品	剥片

灰色土

縄　　恵	器	坏蓋、坏ヽ、坏身、高坏、甕、破片
古式土師器×弥生土器	破片
古　式　土　師	器	甕、高坏?、坏、破片
土　　師	器	破片
肥　前　系　陶　磁	器	椀、皿、破片
国　　産　　陶	器	椀、擂鉢、破片
弥　生　土	器	甕、壺、破片
瓦	類	平瓦(無文)、破片(熨し瓦)
石　　製	品	荒化木、丸石
金　属　製	品	鉸序、鉄釘

表土

縄　　恵	器	坏、壺、甕
古式土師器×弥生土器	甕
古　式　土　師	器	甕、破片
瓦　質　土	器	破片
肥　前　系　陶　磁	器	椀、破片
国　　産　　陶	器	甕、壺、擂鉢、瓶?、植木鉢、破片
弥　生　土	器	甕、破片
石　　製	品	丸石
そ　　の	他	炭

5、第８次調査

(1) 調査に至る経過

遺跡は太宰府市大字大佐野字殿城戸173番地の1、191番地の6にあり、天拝山塊に連なる丘陵端部北東側の沖積面に形成されたもので、本調査区は、過去に調査が行われている脇道遺跡第４次・殿城戸遺跡第４次の調査区の間に挟まれる位置にある。遺構は地表下30cmで古墳時代初頭と中期の住居跡と弥生後期以降の土坑を含む小穴群が検出され、周辺の調査で認知された集落域に含まれることが確認された。

隣接する脇道遺跡第４次調査では、台形石器等を含む石器が古墳時代の生活面以下で出土していたため、本調査区でも出土の可能性があったため、調査区の南と東側から土色にしたがって順に掘り下げた結果、石器を内包する包含層を検出した。石器の出土状況は散漫であり、脇道遺跡第４次調査同様に高

Fig. 36　第８次調査全体図（1/200）

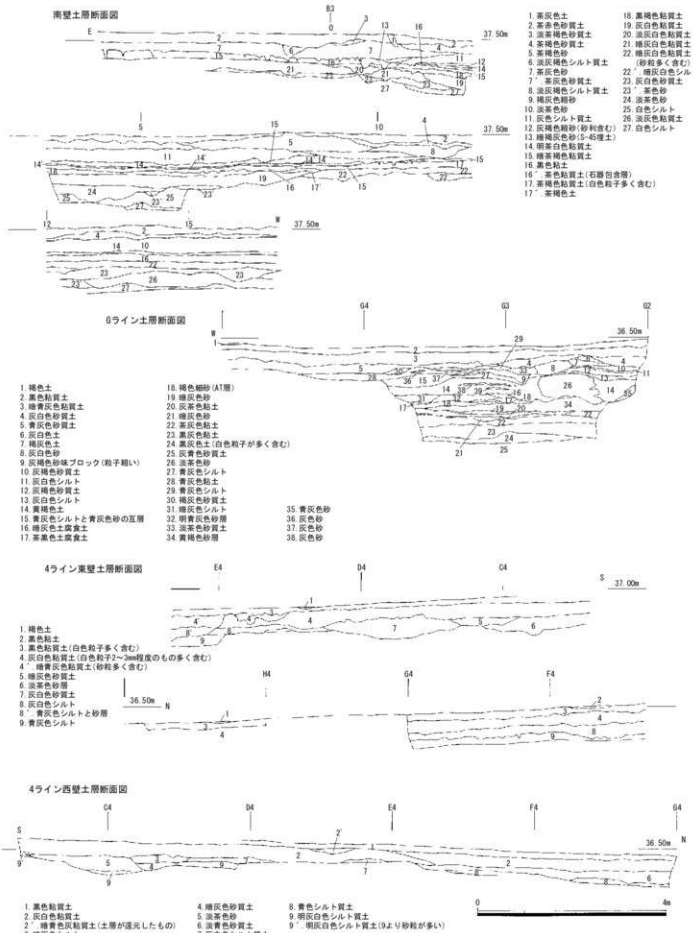


Fig. 37　第８次調査土層実測図 (1/80)

位な西側から流れ広がったものと考えられる。石器は剥片、チップが殆どであり、剥片を利用した不定形石器が少量含まれる。点数は約 120 点程であり、石器群の出土分布をみると、脇道遺跡第 4 次調査を中心として、その西端にあたると考えられる。調査は佐藤道文（現大分市教育委員会）、山村信榮が担当した。調査期間は平成 12（2000）年 12 月 21 日から平成 13（2001）年 6 月 20 日で、調査面積は 421 ㎡であった。

(2) 基本層位

表土（耕作土）の下に遺構がのる黄色土が標高 38.4m 付近にあり、その直下に縄文時代の石器を含む明茶白色粘土、褐色土、茶色粘土層が散在し、その下に安定した黒色粘質土層が標高 36.4m 付近で全体に広がっている。調査区南側東西方向の掘り下げでは、さらにその下には旧石器時代のものと考えられる石器を含む灰白色粘土、明灰白色シルト層が確認された。調査区中央付近南北方向の掘り下げでは黒色粘質土層以下に暗青灰色粘土、灰白色粘質土、青灰色シルト、淡茶色砂、そして厚みのある砂と粘土の互層があり、その下に茶黒色土、茶灰色土（AT 火山ガラス包含層、標高 35m 付近）、茶灰色粘土層、青灰色砂の堆積が確認されている。縄文時代に属する黒色粘質土層は安定した層で、殿城戸遺跡の各地点で認知されており、標高 36m 付近で縄文時代の一時期に水が停滞した環境にあったことを示している。茶灰色土層は科学分析により（後述）、いわゆる給良 Tn 火山灰（AT）の単純層であることが指摘され、その直下の茶灰色粘土層の AMS 法による放射性炭素年代測定では 2.8 万年前との結果が示されており、一定の成果を得ている。

(3) 検出遺構

住居跡

8SI005（Fig.38）

調査区の南西隅にあり、掘り方は削平されて欠失している。6.2m × 6.2+m の方形プランで、3 本の主柱穴が確認され、柱間は東西 3.5m、南北 3.6m を測る。床面には砂質傾向の黄色土が残されており、南側の壁よりの一部に赤色の焼土が 0.5m ほどの規模で広がっている。東側は幅 0.3m、深さ 0.1m ほどの壁溝がL字に廻り、溝の底で不定間隔に杭の痕跡が見られた。柱穴は深さ 0.5m ほどで、土層の断ち割りでは柱痕跡は確認されなかった。古墳時代中期以降の遺物が出土している。

8SI010（Fig.38）

調査区の南側中央にあり、かなり削平されているが深いところで 0.7m の深さがあり、平面は 8.5m × 9m の長方形プランで、2 の主柱穴が確認され、柱間は 4.3m を測る。南西側は幅 0.8m の黄色ブロック土で造りつけたベットがあり、対面は幅 1m、深さ 0.1m の帯状の窪みがある。北東辺の南よりには高さ 5cm で 1.5m × 1.4m ほどの規模で方形の高まりがある。柱間中央には 1.4m × 1m の楕円形で深さ 0.3m の窪みがある。南東辺中央には直径 1m、深さ 0.1m の窪みがある。床面には黄色土が貼られ、その上に暗灰茶色土が堆積する。南東側およびベット周辺には幅 0.2m、深さ 0.1m ほどの壁溝が切れ切れに廻り、溝の底で不定間隔に杭の痕跡が見られた。柱穴は深さ 0.5m ほどで、柱痕跡は確認されなかった。出土遺物の一部に弥生時代後期以降のものが見られるが、量的には古墳時代前期以降の遺物が主体を占める。しかし、柱構造などは弥生時代後期から古墳前期初頭に通有のものであり、帰属時期については検討を要する。

8SI015（Fig.39）

調査区の南東側にあり、掘り方の深い所で 0.3m ほどが残されている。5.2m × 6m の方形プランで、主柱穴は明確でない。床面中央付近には 1.2m × 0.7m の規模で炭化物が残されており、西側の中央付近に高さ 0.2m で 2.5m × 0.8m ほどの規模で高まりが黄灰色土で造りつけられている。南側は幅 0.1m、深

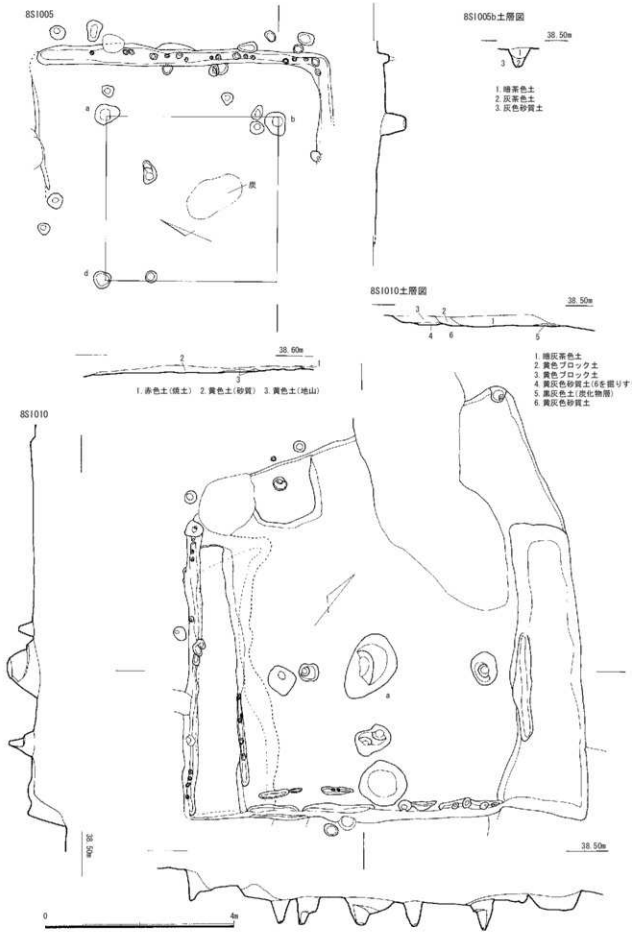


Fig.38 第8次調査住居跡実測図 (1/80)

さ 0.1m ほどの壁溝が 2m ほどの間にのみ検出された。南西隅は床面以下が一段深く掘られていた。土壌は暗灰褐色土、灰褐色土、暗茶色土の順で堆積している。各層より古墳時代前期初頭（布留式）以降の遺物が出土している。

土坑

8SK020 (Fig.39)

調査区北西隅で確認された長さ 0.75m、幅 0.35m、深さ 0.4m の 2 穴状の土坑で、東側の底から坏状の土器が出土している。

8SK030 (Fig.39)

調査区北中央付近で確認された長さ 2.5m、幅 0.7m、深さ 0.3m の長細い土坑で、北側は削平されて欠失している。遺構覆土の上面で弥生後期の土器が出土している。

8SK040 (Fig.39)

調査区中央西付近で確認された長さ 2.5m、幅 1.8m、深さ 0.5m の不定形な土坑で、中央が一段南北に長く深い。遺構床面で礫が置かれたような状態で検出されている。須恵器が出土しており、古墳時代中期以降の所産である。

(4) 出土遺物

住居跡出土遺物

8SI005b 出土遺物 (Fig.40)

土師器

坏 (1)　口径 13.5cm、高さ 5.2cm 以上の法量を測り、色調は淡い灰褐色を呈する胎土を持つが、表面が全体に黒色化している。漆が塗布されていた可能性がある。調整は手持ちミガキによる。外面下半部に削りの跡が見られる。底は平板な丸底で口縁端部は内側に入る形状を呈する。

甕 (2)　く字形に開く口縁端部片で、色調は淡茶灰色を呈する。内面に僅かにハケ目が残る。

8SI005 茶色土出土遺物 (Fig.40)

土師器

坏 (3)　高さ 4cm 以上の法量を測り、色調は淡い橙褐色を呈する。調整は磨耗が著しいが手持ちにミガキによるものと思われる。口縁端部はやや外に開く形状を呈する。

8SI005 黄色土出土遺物 (Fig.40)

土師器

坏 (4)　高さ 3.9cm 以上の法量を測り、色調は明茶褐色を呈する。調整は磨耗が著しく不明。口縁端部は直立する形状を呈する。

手づくね鉢 (5)　口径 4.7cm、高さ 5.7cm、底径 4.1cm を測る。カップ状を呈し、底は平板な形状。色調は淡茶灰色を呈する。指でつくねて下半部は板状工具で調整している。

8SI005 黄色ブロック土出土遺物 (Fig.40)

土師器

甕 (6)　長さ 5cm の把手の部分で、色調は茶灰褐色を呈する。手捏ねで成形されるが、本体との接合面にはハケ目がスタンプで残されており、本体の調整が終了して一端乾いた後に接合されたことが観察される。

8SI010 暗灰茶色土出土遺物 (Fig.40)

土師器

坏 (7 ～ 11)　7 は口径 14.0cm、高さ 5.9cm 以上、8 は口径 12.2cm、高さ 3.9cm 以上、10 は口径

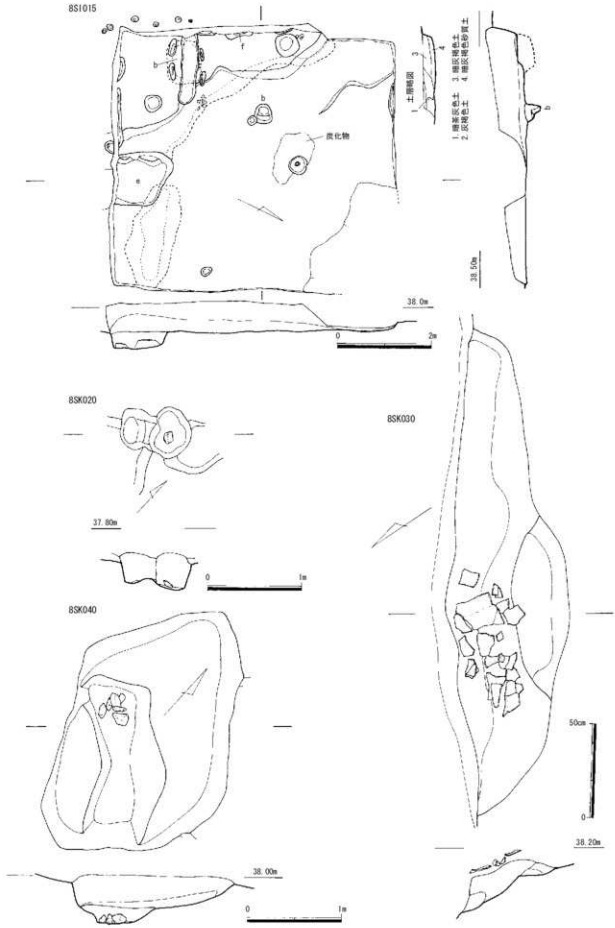


Fig. 39　第８次調査住居跡・土坑実測図（1/20、1/40、1/80）

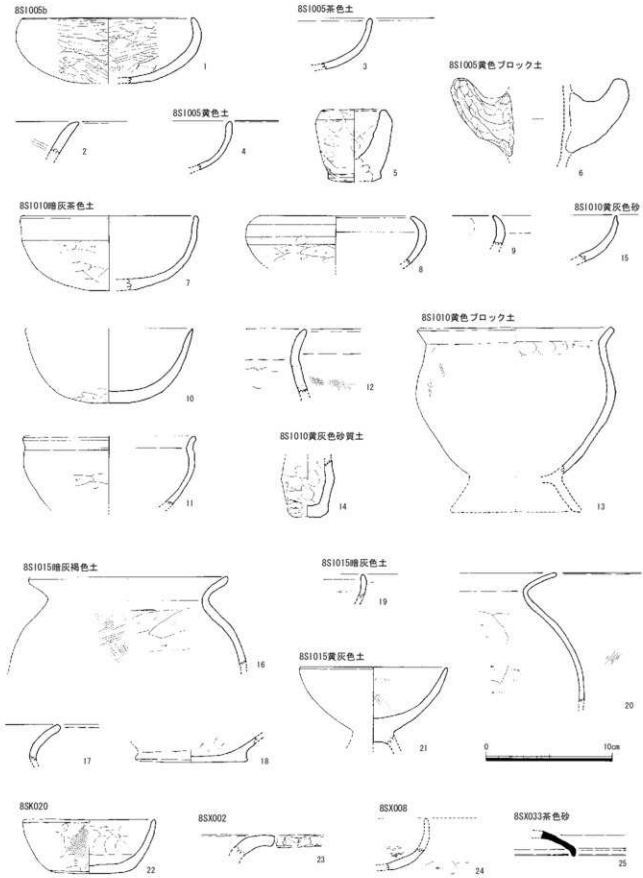


Fig. 40　第８次調査住居跡・土坑出土遺物実測図（1/3）

13.2cm、高さ5.9cm、11は口径13.6cm、高さ5.4cm以上の法量を測り、色調は7と8が灰橙褐色、他が灰褐色を呈する緻密で精良な胎土を持つ。調整は外面下半部に削りの跡が見られる。底は丸底で、口縁端部は、7は直立、8・9は内傾、10は外開き、11は屈曲して外反する形状を呈する。

甕（12） 浅くく字形に開く口縁端部片で、色調は暗茶灰褐色を呈する。外面にハケ目が残る。胴長の形状になる傾向が見られる。

8SI010 黄色ブロック土出土遺物 (Fig.40)

弥生土器

脚付き鉢（13） く字形に屈曲する口縁を持ち、色調は淡灰黄白色を呈する。胴部中央と下半部に黒斑が残る。外面下半の調整の様子から脚が付けられていたものと考えられる。

8SI010 黄灰色砂質土出土遺物 (Fig.40)

土師器

手捏ね坏（14） 胴部径4.2cm、高さ4.4cm以上、底径3.2cmを測る。カップ状を呈し、底は平たい。色調は淡茶灰色を呈する。弥生土器の可能性もある。

8SI010 黄灰色砂出土遺物 (Fig.40)

土師器

坏（15） 高さ3.7cm以上を測る。丸底で球形の胴部を呈し、色調は橙色を呈する。

8SI015 暗灰褐色土出土遺物 (Fig.40)

土師器

甕（16、17） 16はく字形に屈曲する口縁を持ち、口径15.7cm、高さ6.9cm以上を測る。体部外面には斜位のハケ目が、体部内面には斜位の削りが施される。色調は明橙褐色を呈する。器壁が厚く在地産の布留式傾向の甕である。17も同様の口縁部片で明茶褐色を呈する。

弥生土器

壺（18） 底部が円盤状の平らな形状を持ち、内面は削りによって調整されている。畿内Ⅴ様式系統のものである。

8SI015 暗灰色土出土遺物 (Fig.40)

土師器

坏（19） 高さ1.8cm以上の法量を測り、色調は明茶赤色を呈する。調整は磨耗が著しいが内面に横方向の手持ちの磨きが見られる。口縁端部は直立した形状を呈する。

8SI015 黄灰色土出土遺物 (Fig.40)

土師器

甕（20） く字形に屈曲する口縁を持ち、高さ10.1cm以上を測る。体部外面には斜位のハケ目が、体部内面には斜位の削りが施される。色調は淡白褐色を呈する。胴部は球形で在地産の布留式傾向の甕である。

小型高坏（21） 口径11.6cm、高さ6.1cm以上を測る。やや丸みをもって外に広がる口縁を持つ坏部に脚が付けられる。色調は淡茶灰白色を呈する。胎土は砂粒を多く含み、在地産のものか。

土坑出土遺物

8SK020 出土遺物 (Fig.40)

弥生土器

坏（22） 口径10.5cm、高さ4.3cm、底径6.3cmを測り、色調は淡灰褐色を呈する胎土を持つ。手捏ねとハケで調整されている。

8SK030 出土遺物 (Fig. 41)

弥生土器

甕 (1)　高さ 31.5cm 以上の法量を測り、色調は淡灰褐色を呈する胎土を持つ。体部屈曲部下位に刻みを持つ三角突帯を巡らす。成形はタタキ具で叩き絞めた後にハケでなでている。弥生後期後葉の傾向をもつ。

8SK040 褐色砂出土遺物 (Fig. 41)

土師器

坏 (6)　直立する形状の口縁の端部片で、高さ 3.7cm 以上の法量を測る。色調は淡灰褐色を呈する。古墳時代中期以降の所産か。

その他の遺構出土遺物

8SX002 出土遺物 (Fig. 40)

弥生土器

甕 (23)　高さ 1.5cm 以上の法量を測り、色調は淡黄茶色を呈する胎土を持つ。外反して横に伸びる形状の口縁で、端部に刻み目を持つ。弥生後期の所産。

8SX008 出土遺物 (Fig. 40)

土師器

坏 (24)　高さ 1.9cm 以上の法量を測り、色調は淡橙褐色を呈する胎土を持つ。球形の胴部の内面に手持ちのミガキ、外面にケズリが施される。古墳時代中期以降の所産。

8SX018 出土遺物 (Fig. 42)

石製品

柱状片刃石斧 (1)　長さ 3.79cm、幅 2.2m、厚さ 1.8cm 以上を測るホルンフェルス製の柱状片刃石斧の刃部片である。弥生早期から弥生中期前半までの所産。

8SX033 茶色砂出土遺物 (Fig. 40)

須恵器

蓋 3 (25)　高さ 1.9cm 以上の法量を測り、色調は淡灰色を呈する。口縁端部が短く屈曲する。8 世紀前半から中頃の所産。

8SX035 黄色土出土遺物 (Fig. 41)

弥生土器

甕 (2、3)　2 は L 字形の口縁の端部片で、3 は平底の底部片で、高さ 3.2cm 以上、底径 7.8cm の法量を測る。色調は淡灰褐色を呈する。弥生中期須玖 II 式の所産。

土製品

焼土塊 (4)　繊維質の物質を含むもろい状態のもので、図の下半は黒色化している。

8SX035 灰白色土出土遺物 (Fig. 41)

弥生土器

甕 (5)　緩く外反する形状の口縁の端部片で、高さ 2.2cm 以上の法量を測る。弥生後期の所産か。

8SX066 出土遺物 (Fig. 41)

弥生土器

甕 (7)　く字形に外反する形状の口縁の端部片で、高さ 2.9cm 以上の法量を測る。弥生後期の所産。

8SX073 茶色土出土遺物 (Fig. 41)

弥生土器

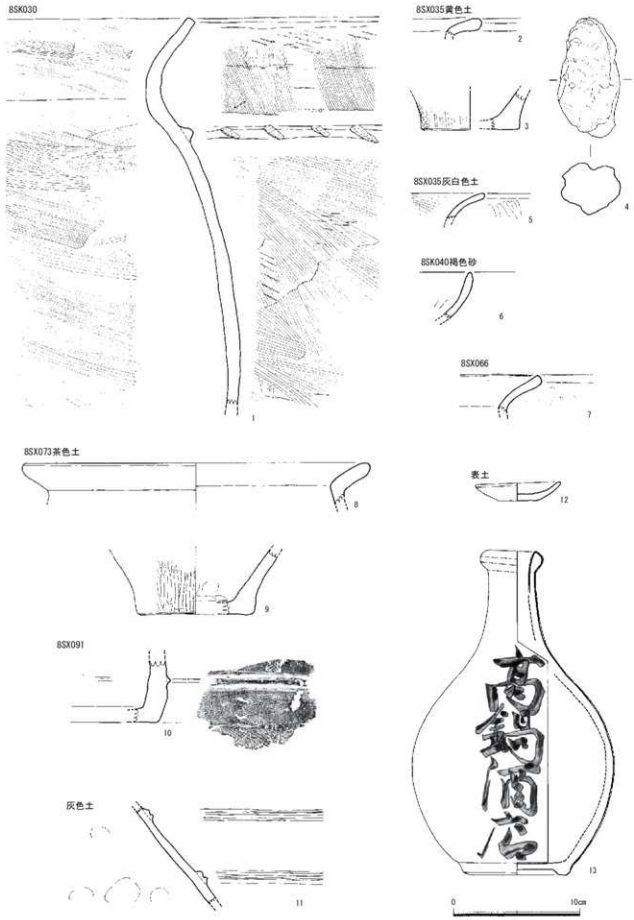


Fig. 41　第８次調査土坑・その他の遺構・各層位出土遺物実測図（1/3）

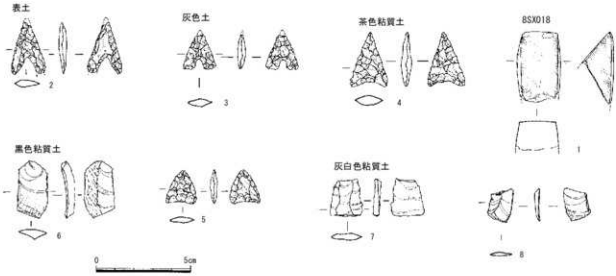


Fig. 42　第８次調査各層位出土遺物実測図（1/2）

甕（8、9）　8はく字形に外反する形状の口縁の端部片で、口径27.4cm、高さ3.5cm以上の法量を測る。色調は茶灰色を呈する。9は平底の底部片で、高さ5.2cm以上、底径9.3cmの法量を測る。色調は茶褐色を呈する。弥生中期須玖II式の所産。

8SX091 出土遺物（Fig. 41）

瓦質土器

火鉢（10）　樽型の胴部下半の小片で、高さ4.9cm以上の法量を測る。色調は淡茶灰色を呈し、燻しによる黒色化は不十分な焼成。台形状のタガを表す突帯の上に×文様のスタンプを施す。中世後期の所産。

土層出土遺物

茶色粘質土出土遺物（Fig. 42）

石製品

石鏃（4）　長さ2.9cm、幅1.5m、厚さ0.6cmの安山岩製の石鏃で、抉りは浅めで二等辺三角形状を呈する。

黒色粘質土出土遺物（Fig. 42）

石製品

石鏃（5）　長さ1.8cm、幅1.6m、厚さ0.4cmの安山岩製の石鏃で、抉りは浅めで三角形状を呈する。

縦長剥片（6）　長さ3cm、幅1.5m、厚さ0.5cmの黒曜石製の縦長剥片で、両側のエッジに微細な剥離が見られる。

灰白色粘質土出土遺物（Fig. 42）

石製品

縦長剥片（7、8）　7は長さ1.8cm、幅1.7m、厚さ0.3cmの安山岩製。8は長さ1.8cm、幅1.4m、厚さ0.4cmの黒曜石製の縦長剥片で、両側のエッジに微細な剥離が見られる。7は上下の折損が人為的なものであれば台形様石器といえよう。

灰色土出土遺物（Fig. 41・42）

弥生土器

壺（11）　高さ7.7cm以上の法量を測り、色調は淡灰褐色を呈する胎土を持つ。2条のM字突帯を持つ。

かなりの大型品と考えられる。弥生中期の中頃以降の所産。

石製品

石鏃（3）　長さ1.8cm、幅1.8m、厚さ0.4cmの安山岩製の石鏃で、抉りの深いいわゆる鍬形を呈する縄文前期以前のものと考えられる。

表土出土遺物（Fig.41）

土師器

小皿（12）　口径6.7cm、高さ1.4cm、底径2.8cmの法量を測り、色調は淡橙褐色を呈する胎土を持つ。切離しは回転糸切り技法で、口縁端部の一部に油煙が付着し、燈明皿として使用されたことがわかる。近世以降の所産のものであろう。

国産染付磁器

酒徳利（13）　口径4.7cm、高さ25.7cm、底径8.4cmの法量を測り、玉縁の口縁に長い頸、球形の胴部に削り出しの高台を持つ。体部外面縦方向に「高鍋酒店」「酒銘喜久鶴」「第二十一号二日市町」と併記されている。いわゆる五合の通い徳利で、近代以降のもの。

石製品

石鏃（2）　長さ2.8cm、幅1.8m、厚さ0.4cmの黒曜石製の石鏃で、抉りの深いいわゆる鍬形を呈する。縄文前期以前のものと考えられる。

(5) 小結

調査の結果、弥生後期の住居跡8SI010と古墳時代前期の8SI015、中期以降の8SI005が確認された。8SI010については古墳時代中期以降の土器が出土しているが、調査段階での覆土の認定で、新規の遺構の埋土が含まれた形になったものと判断している。場合によっては当該期の小規模な住居が重なっていた可能性も考えられる。8SI005については土師器の食器片が主体を占めて須恵器が出土しておらず、調査区全体からの出土も少なく尾崎遺跡とは様相が異なっている。須恵器流通の初期段階において佐野地区内での集落間で不均衡な様相が有るのかもしれない。縄文・旧石器時代の調査については黒色粘質土層までに縄文時代の石器が含まれていたことが確認され、さらにその下の灰白色粘土、明灰白色シルト層から出土した石器は旧石器時代のものと考えられた。旧石器の出土は小規模かつ散漫で分布の中心は脇道遺跡第4次調査にあり、本調査区はその西端にあたるといえる。その下位に姶良Tn火山灰（AT）の単純層である茶灰色土層が確認され、その直下の茶灰色粘土層のAMS法による放射性炭素年代測定では2.8万年前との結果が示されており、AT火山灰降灰以降の長期にわたるシルト質土壌が形成される中で石器が残された形となっている。また、AT層以下の茶灰色粘土層は植物遺存体が目視で確認され、花粉分析の結果では木本類のコナラ類を除けばイネ、カヤツリグサ、ヨモギ、セリなど乾燥地から湿潤地の環境を示す草本類が卓越している状況であり、AT火山灰降灰以前は落葉広葉樹林帯際の丘陵斜面地に草原が広がっている環境であったようである。

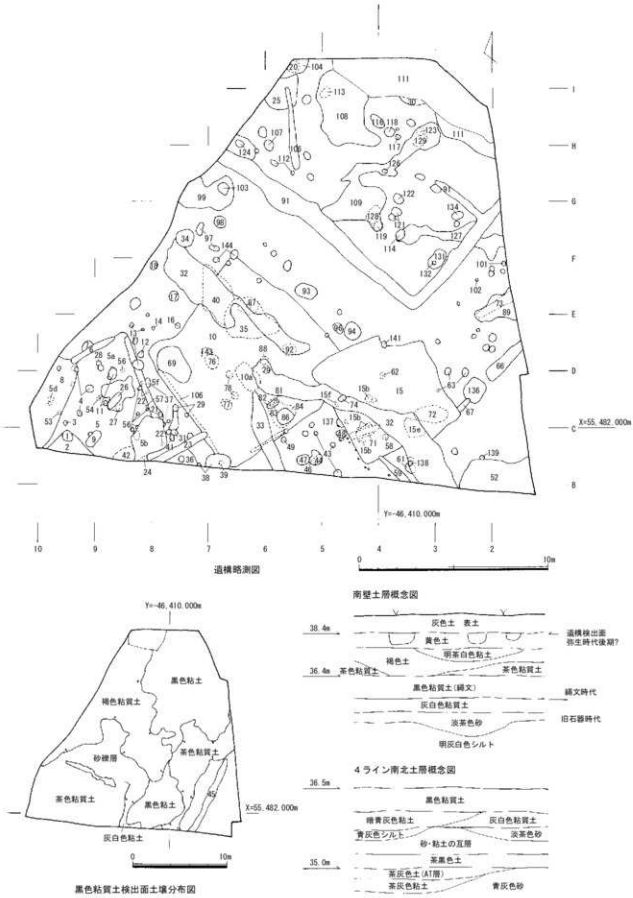


Fig. 43　第8次調査略測図 (1/200)・土壌分布図 (1/400)・土層概念図

表9　殿城戸遺跡第8次調査　遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	掘立柱列（上一層）	建物間仕切（上一層）	時　期	地区番号
1		Pit×植樹痕					B9
2	8SX002	竪穴状遺構				弥生後期～	B9
3		Pit				古墳中期～	C9
4		Pit群					C9
5	8SI005	竪穴住居				古墳中期～	C9
6		溝					D9
7		Pit				弥生後期～	D9
8	8SX008	竪穴状遺構				古墳中期～	C9
9		土坑（植樹痕か）					B9
10	8SI010	竪穴住居			15→10	弥生後期～	D6
11		Pit群					C8
12		Pit					D8
13		Pit群					D8
14		Pit					D7
15	8SI015	竪穴(住居)				古墳前期～	C4
16		Pit					D7
17		Pit					E7
18	8SX018	Pit					E7
19		Pit	原位置不明				C8
20	8SK020	Pit					I5
21		Pit				弥生中期～	C7
22		Pit群（S-5壁溝内抗跡）				弥生後期～	C8
23		溝状					B7
24		Pit					B8
25		土坑					H5
26		土坑					C8
27		Pit					C8
28		Pit					D8
29		Pit群				弥生中期～	C7
30	8SK030	土坑				弥生後期後半～	H3
31		Pit					B7
32		溝状×包含層			15→32	近世～	C3
33	8SX033	溝状				8世紀～	C6
34		植樹痕				近世～	F7
35	8SX035	土坑×貼床状遺構			40→35	古墳～	D6
36		溜まり状					B7
37		Pit群					C8
38		Pit					B7
39		溜まり状					B6
40	8SK040	土坑				古墳中期～	E6
41		Pit					B7
42		溜まり状					B8
43		Pit群					B4
44		Pit					B5
45		溝×墳砂					B2
46		Pit					B5
47		Pit				弥生中期～	B5
48		Pit				弥生中期～	B4
49		Pit				弥生中期～	B5
51		Pit	原位置不明				B8
52		溜まり状					B2
53		Pit				弥生中期～	C9
54		Pit					C9
56		Pit群				弥生後期～	C8
57		Pit				弥生後期後半～	C8
58		Pit				弥生後期～	B3
59		溝					B3
61		Pit					B3
62		Pit					C3
63		Pit群					C2
64		Pit	原位置不明				B2
66	8SX066	溝状				弥生後期～	D1
67		溝状					C2
68		Pit	原位置不明				D2
69		土坑×溜まり状				弥生後期後半～	D7
71		土坑状				弥生後期～	B4
72		土坑×溜まり状					C3
73	8SX073	溝状			73→89		E2
74		Pit				弥生後期後半～	C4

76		Pit					D6
77		Pit					C6
78		Pit群					C6
79		Pit					D6
81		Pit					C5
82		Pit					C5
83		人工層位				弥生後期後半～	C5
84		人工層位					C5
86		Pit				弥生後期後半～	C5
87		Pit					E6
88		Pit					D6
89		人工層位					E2
91	8SX091	溝状			127→91	現代	E3
92		Pit					D5
93		Pit×土坑				近世～	E5
94		Pit×土坑×植樹痕					D4
96		Pit					D4
97		Pit群					F6
98		Pit					F6
99		溜まり状					G7
101		Pit					E1
102		Pit					E2
103		Pit					G6
104		溜まり状					I5
106		溝状					H5
107		Pit群					H6
108		溜まり状				弥生後期～	H4
109		溜まり状					G4
111		溜まり状				近代～	I3
112		Pit群					G5
113		Pit			108→113		H4
114		Pit					F3
116		Pit					H4
117		Pit					H3
118		Pit					H3
119		Pit					F4
121		Pit群					F3
122		Pit					G3
123		Pit					H3
124		Pit					H6
126		Pit					G3
127		溜まり状					F3
128		Pit×土坑					F4
129		Pit				弥生後期～	H3
131		土坑					F3
132		Pit					E3
133		Pit	原位置不明				F2
134		Pit					F2
136		土坑					C2
137		Pit					C4
138		Pit					B3
139		Pit					B2
141		Pit					D3
142		Pit	原位置不明				B1
143		Pit×土坑					D7
144		Pit群					F6

表10　殿城戸遺跡第8次調査　出土遺物一覧表

S-1　灰色土
弥　生　土　縄後期；磨片

S-2　黄灰色土
弥　生　土　縄後期；壺口3

S-3
土　師　　器坏(中期～)

S-4
弥　生　土　縄磨片

S-5　黄色土①
土　師　　器小坏

S-5　黄色土
土　師　　器坏(中期～)　手づくね鉢
弥　生　土　縄後期；壺　支脚
石　製　　品玉状石片(1)

S-5　茶色土
土　師　　器坏　壺貯水
弥　生　土　縄後期；壺口2　壺　高坏　　中期；壺1a
石　製　　品玉状石片

S-5b　暗茶色土
弥　生　土　縄磨片

S-5h
土　師　　器坏　壺　甕
弥　生　土　縄磨片

S-5f　黄色ブロック土
土　師　　器貯水　甕
弥　生　土　縄後期；鉢　器台　脚付鉢

S-6
弥　生　土　縄磨片
石　製　　品玉状独自種(1)

S-7　暗茶色土
弥　生　土　縄後期；壺口3　壺?(丹後)

S-8　茶色土
土　師　　器坏
弥　生　土　縄後期；甕　高坏

S-8　暗灰色砂質土
弥　生　土　縄後期；壺口3

S-9
弥　生　土　縄磨片

S-10
弥　生　土　縄中期；壺口4　壺?

S-10a　茶灰色土
弥　生　土　縄後期；壺

S-10a　黄灰色土
弥　生　土　縄後期；壺　高坏　支脚?

S-10a　暗茶色土
弥　生　土　縄磨片

S-10 aK　黄色ブロック土
弥　生　土　縄後期；甕

S-10 aK　暗茶灰色土
弥　生　土　縄後期；高坏　器台　壺?　甕口8　大甕

S-10 b
弥　生　土　縄後期；支脚　　中期；壺?(丹後)

S-10 b　茶灰色土
弥　生　土　縄後期；大甕

S-10 bK　暗茶灰色土
弥　生　土　縄後期；甕口8　壺　鉢　高坏　支脚　　中期；壺口(5)

S-10 bK　黄色ブロック土
弥　生　土　縄後期；壺　甕?
石　製　　品；鉄石?(砂岩)(1)

S-10 cK
弥　生　土　縄後期；鉢

S-10 cK　黄色ブロック土
弥　生　土　縄後期；小甕　甕　脚付鉢

S-10 cK　暗茶灰色土
弥　生　土　縄後期；大甕　甕　高坏　壺?

S-10 cK　黄色ブロック土
弥　生　土　縄後期；甕口8

S-10 dK　暗茶灰色土
弥　生　土　縄後期；甕　壺　　中期；壺2b(丹後)

S-10 dK　暗灰茶色土②
土　師　　器甕

S-10 dK　暗灰茶色土
土　師　　器甕(河野式)　甕

S-10d　暗灰茶色土①
土　師　　器坏

S-10　暗茶色ブロック土
弥　生　土　縄磨片

S-10　暗茶色ブロック土
弥　生　土　縄後期；甕?

S-10　暗茶灰色ブロック土
弥　生　土　縄磨片

S-10　暗茶灰色土
弥　生　土　縄後期；大甕

S-10　黄灰色砂
土　師　　器坏

S-10　茶灰色土
弥　生　土　縄磨片

S-10　黄白色土
弥　生　土　縄後期；壺

S-10　黄灰色砂質土
弥　生　土　縄後期；甕?　壺　支脚(ニチノ)

S-10　黄灰色ブロック
弥　生　土　縄磨片

S-10　黄色ブロック土
弥　生　土　縄後期；器台

S-10　黄灰色土
弥　生　土　縄後期；器台

S-10　黄灰色ブロック土
弥　生　土　縄磨片

S-10　黒灰色土
弥　生　土　縄磨片

S-11
弥　生　土　縄甕?　支脚

S-12
弥　生　土　縄磨片

S-13
弥　生　土　縄磨片

S-14
弥　生　土　縄甕?

S-15
弥　生　土　縄中期；壺　　後期；甕?

S-15　暗灰黄色砂
庄 式 土 師 縄甕
弥　生　土　縄後期；大甕　壺?

S-15b
弥　生　土　縄磨片

S-15c　暗灰色土
土　師　　器坏
弥　生　土　縄後期；甕?

S-15d
弥　生　土　縄後期；磨片?

S-15d　暗灰色土
弥　生　土　縄後期；壺?

S-15e
弥　生　土　縄後期；大甕

S-15e　灰褐色土
弥　生　土　縄後期；高坏　壺?

S-15f
弥　生　土　縄後期；甕?

S-15　灰褐色土
庄 式 土 師 縄甕
弥　生　土　縄後期；甕　鉢　壺　高坏　　中期；甕1b　壺?(丹後)

S-15　灰色粘
弥　生　土　縄後期；甕　支脚　壺　甕口8

S-15　黄灰色土
弥　生　土　縄後期；器台　甕　　中期；壺(丹後)

S-15　黄灰色土①～③
庄 式 土 師 縄甕　脚付鉢　小型高坏

S-15　暗灰褐色土
庄 式 土 師 縄甕
弥　生　土　縄後期；甕　支脚　壺　大甕　甕(畿内S字式系)

S-16
弥　生　土　縄磨片

S-17
弥　生　土　縄後期；大甕?

S-18
弥　生　土　縄磨片
石　製　　品;玦状片刃石斧(ホルンフェルス)

S-19
弥　生　土　縄磨片

S-20
土　師　　器甕
弥　生　土　縄坏

S-20(1)
土　師　器|坏

S-21
弥　生　土　器|中期；甕口4　壺?

S-22
弥　生　土　器|後期；壺×鉢

S-23　茶色土
弥　生　土　器|中期；甕口5　支脚

S-24
弥　生　土　器|磁片

S-25
弥　生　土　器|後期；甕?

S-26
弥　生　土　器|磁片

S-27
弥　生　土　器|磁片

S-28
弥　生　土　器|中期；甕口3～5

S-29
弥　生　土　器|甕(丹後,須玖II式～)

S-30
弥　生　土　器|後期；大甕

S-30　茶色土(1)
弥　生　土　器|後期；大甕

S-30　茶色土(2)
弥　生　土　器|高坏

S-30　褐色土
弥　生　土　器|後期；大甕

S-30　黒灰色土
弥　生　土　器|磁片

S-30　茶灰色土
弥　生　土　器|後期；甕?

S-31
弥　生　土　器|磁片

S-32
弥　生　土　器|後期；甕底4　甕口7

S-32　灰色砂
弥　生　土　器|後期；大甕

S-32　灰色土
鍛　冶　　器|鞴(XII)
土　師　　器|小皿坏
須　恵　　器|釘状鉄製品?；筒状輪
弥　生　土　器|後期；甕

S-33　茶色土
鍛　冶　　器|小鞴
弥　生　土　器|磁片

S-33　茶色砂
鍛　冶　　器|鞴3
弥　生　土　器|磁片

S-33　暗灰茶色土
弥　生　土　器|甕×鉢

S-34
貯蔵系陶器|鍛冶付；磁片
弥　生　土　器|磁片

S-35　黄色土
弥　生　土　器|中期；甕底3　甕口3～5
土　製　　品|弥土塊

S-35　灰白色土
土　師　　器|甕?

S-36　茶色土
弥　生　土　器|磁片

S-37
弥　生　土　器|磁片

S-39　茶色ブロック
弥　生　土　器|磁片

S-40　暗灰色土
鍛　冶　　器|不明?
弥　生　土　器|後期；甕

S-40　褐色砂
鍛　冶　　器|羽口(XIII)
土　師　　器|坏
弥　生　土　器|後期；甕

S-41
弥　生　土　器|後期；甕?

S-42　灰色土
弥　生　土　器|磁片

S-43
弥　生　土　器|後期；高坏?　甕?

S-44
弥　生　土　器|中期；高坏　　後期；甕

S-46
弥　生　土　器|磁片

S-47
弥　生　土　器|中期；壺

S-48
弥　生　土　器|中期；甕口5

S-49
弥　生　土　器|中期；高坏　甕?(丹後)

S-51
弥　生　土　器|磁片

S-52　褐色土
弥　生　土　器|磁片

S-53
土　　師　　器|甕

S-54
弥　生　土　器|磁片
石　　製　　品|ob-f

S-56
弥　生　土　器|後期；甕口6×7

S-57
弥　生　土　器|甕口8

S-58
弥　生　土　器|後期；甕?

S-59　茶色土
弥　生　土　器|磁片

S-61
弥　生　土　器|中期；壺(丹後)

S-62
弥　生　土　器|磁片

S-63
弥　生　土　器|甕

S-64
弥　生　土　器|磁片

S-66
弥　生　土　器|後期；甕口8　　中期；甕口5　甕底3a

S-67
弥　生　土　器|磁片

S-68
弥　生　土　器|後期；甕

S-69　茶色土
弥　生　土　器|後期；器台　器6b

S-71　暗灰色土
弥　生　土　器|後期；大甕　器台

S-72
弥　生　土　器|後期；破片

S-73　茶色土
弥　生　土　器|中期；甕口5　　後期；壺底　甕口7

S-74　暗灰色土
弥　生　土　器|後期；高坏　甕?

S-76　茶色土
土　　師　　器|坏?
弥　生　土　器|中期；甕口8)　　後期；甕?

S-77　茶色土
弥　生　土　器|磁片

S-77　茶灰色ブロック土
弥　生　土　器|後期；甕?

S-78
弥　生　土　器|後期；高坏

S-79
弥　生　土　器|磁片

S-81
弥　生　土　器|磁片

S-82
弥　生　土　器|磁片

S-83
弥　生　土　器|後期；甕口7×8　高坏

S-84　暗灰色土
弥　生　土　器|甕?

S-86　暗灰色ブロック
弥　生　土　器|後期；高坏　甕

S-87
弥　生　土　器|後期；甕×壺　甕口8

S-87　暗灰色土(炭層)
弥　生　土　器|磁片

S-88
弥 生 土 器/壺 底坪

S-89 灰色土
弥 生 土 器/後期；壺口6 壺底3a 器台

S-91
石 質 土 器/大刀A
肥前系陶磁器/染付；皿 端反型
須 恵 器 器/鉢(須恵) 摂津113
弥 生 土 器/後期；壺 高坪

S-91 茶色土
土 製 土 器/土管
須 恵 器 器/鉢 樽木鉢
瓦 類/平瓦(近代～)

S-91 暗茶色土
弥 生 土 器/破片
瓦 類/平瓦(現代?)
そ の 他/ガラス化粗瓶

S-92
弥 生 土 器/破片

S-93 灰褐色土
弥 生 土 器/中期；壺底3a

S-93 暗灰色土
弥 生 土 器/中期；皿?(丹後)
瓦 類/瓦(近世～)

S-94
弥 生 土 器/破片

S-95
弥 生 土 器/後期；壺? 高坪

S-97
弥 生 土 器/破片

S-98
弥 生 土 器/後期；支脚

S-99 黄褐色土
弥 生 土 器/中期；壺口4 後期；壺2

S-99 黄灰色土
弥 生 土 器/破片

S-99 茶灰色土
弥 生 土 器/壺 壺? 中期；壺底37

S-101
弥 生 土 器/後期；大壺

S-102
弥 生 土 器/破片

S-103
弥 生 土 器/大壺
石 製 品/石石?(花崗岩)

S-104
弥 生 土 器/破片

S-106
弥 生 土 器/破片

S-107
弥 生 土 器/破片

S-108
弥 生 土 器/中期；高坪(丹後) 後期；壺 器台

S-109
須 恵 器 器/陽鉢
弥 生 土 器/後期；壺 小坪(手づくね)

S-109 黒灰色土
弥 生 土 器/後期；壺口6 壺口8

S-111
肥前系陶磁器/染付；皿(ｱﾗｶﾞｷ),近代～) 色絵；広東
弥 生 土 器/後期；大壺
瓦 類/平瓦(近世～)

S-112
弥 生 土 器/破片

S-113
弥 生 土 器/破片

S-114
弥 生 土 器/後期；壺?

S-116
弥 生 土 器/後期；壺?

S-117
土 師 器/壺
弥 生 土 器/後期；高坪

S-118
弥 生 土 器/後期；壺1

S-119
弥 生 土 器/破片

S-121
弥 生 土 器/後期；壺?

S-122
弥 生 土 器/後期；壺口8

S-123
弥 生 土 器/後期；壺

S-124
肥前系陶磁器/染付；皿(近世末～)
弥 生 土 器/破片

S-126
弥 生 土 器/後期；壺?

S-127
弥 生 土 器/後期；壺?

S-129
弥 生 土 器/後期；壺

S-131 黄色土
弥 生 土 器/後期；壺?

S-131 暗灰色土
弥 生 土 器/破片

S-131 茶灰色土
弥 生 土 器/壺? 壺?

S-132
弥 生 土 器/破片

S-133 暗灰色土
弥 生 土 器/後期；壺3

S-134 暗灰色土
弥 生 土 器/後期；鉢台? 壺?

S-134 灰色砂質土
土 師 器/坏(丹後)

S-136
弥 生 土 器/後期；壺1

S-137
弥 生 土 器/壺?

S-138
弥 生 土 器/破片

S-139
弥 生 土 器/破片

S-141
弥 生 土 器/壺?

S-142
弥 生 土 器/破片

S-143
弥 生 土 器/破片

S-144
弥 生 土 器/中期；壺 後期；破片

灰色土
肥前系陶磁器/染付；皿 筒茶椀(銅版手)
須 恵 器 器/壺(竹素RC)
須 恵 器 器/壺
弥 生 土 器/後期；壺口8 壺3 大壺 支脚 壺 中期；壺口3 壺1
瓦 類/平瓦(近世～)
石 製 品/安山岩石臼

暗茶色粘質土
弥 生 土 器/破片(丹後)

灰白色砂
弥 生 土 器/破片

黄色土
弥 生 土 器/後期；壺

淡黄色土
石 製 品/黒曜石フレーク

茶色粘質土
石 製 品/黒曜石フレーク、安山岩フレーク、安山岩石臼

黒色粘質土
石 製 品/黒曜石フレーク、安山岩フレーク、黒曜石石臼、チャートフレーク

明茶白色粘土
石 製 品/安山岩フレーク

青灰色粘質土
石 製 品/黒曜石フレーク、安山岩フレーク

灰白色粘質土
石 製 品/黒曜石フレーク、黒曜石石形種石器、安山岩フレーク

暗青灰色粘質土
石 製 品/黒曜石フレーク

暗灰白色粘質土
石 製 品/黒曜石フレーク、安山岩フレーク

表土
須 恵 器/壺
土 師 器/小皿(近世～,白)
古 式 土 師 器/大壺 高坪(丹後)
須 恵 器/陽鉢12
須 恵 器 器/肥前系染付；徳利利(「高麗徳正」)
陶器(ｱﾗｶﾞｷ)又種,近代) 坏 皿 青磁；坏
弥 生 土 器/後期；壺口8
瓦 類/平瓦(近世～)
石 製 品/安山岩石臼

6、第9次調査

(1) 調査に至る経過

調査地は太宰府市大字大佐野字殿城戸174番地9で、殿城戸遺跡第3・5次調査区の隣接地にあたる。

佐野土地区画整理事業に伴って、平成13（2001）年3月26日から3月29日にかけて発掘調査を実施した。調査は佐藤道文（現大分市教育委員会）が担当した。調査面積は72㎡であった。

(2) 基本層位

近代以降の掘削により、大部分が削平を受けており、廃材などを含む表土の直下で遺構が確認された。

(3) 検出遺構

土坑

9SK005（Fig.45）

調査区の中央北側にあり、掘り方は0.65m×0.6mの方形プランを呈する。弥生後期の土器片が出土している。

9SK010（Fig.45）

調査区の北東側にあり、掘り方は0.9m×0.75mの方形プランを呈する。弥生中期の土器片が出土している。

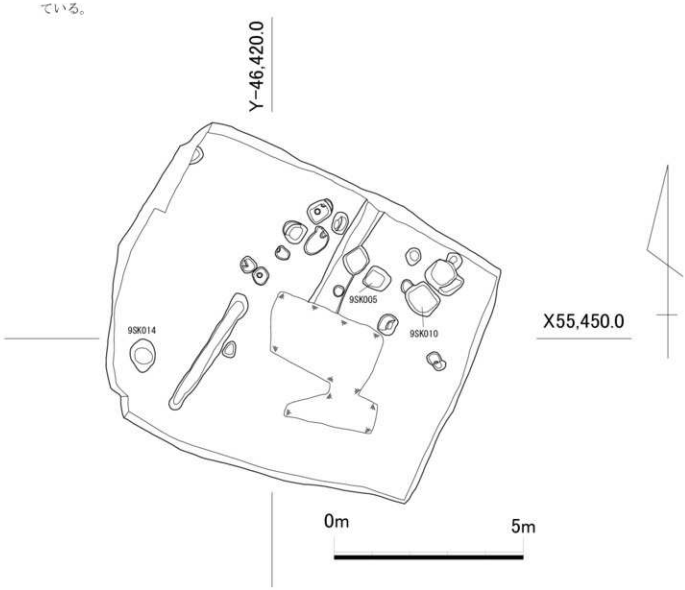


Fig.44　第9次調査遺構全体図（1/100）

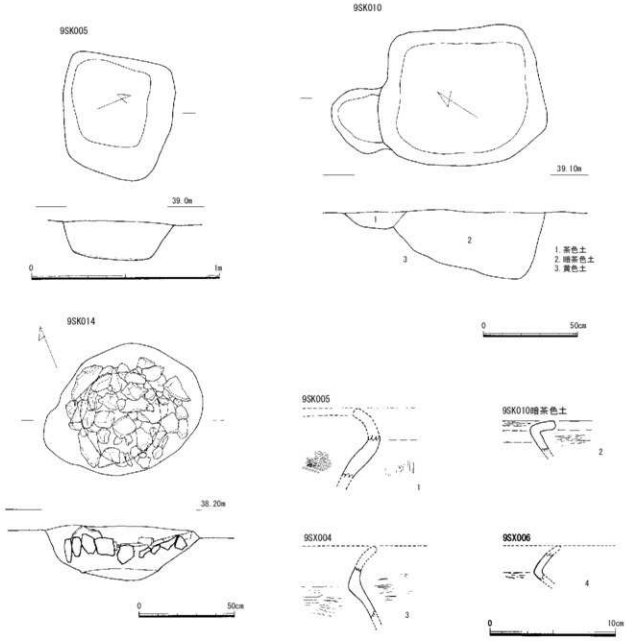


Fig. 45　第９次調査土坑実測図（1/20）及び出土遺物実測図（1/3）

9SK014（Fig. 45）

調査区の南西側にあり、掘り方は0.9m×0.65mの楕円形を呈する。上面に花崗岩礫が敷かれている。形状から建物基礎の可能性もある。江戸後期の肥前系染付の皿片が出土しており、その時期の所産と思われる。

(4) 出土遺物

土坑出土遺物

9SK005 出土遺物（Fig. 45）

弥生土器

壺（1）　袋状口縁を持つ壺の頸部片で、内外面にハケ目が施される。にぶい褐色を呈する。弥生後期中葉以降の所産である。

9SK010 暗茶色土出土遺物（Fig. 45）

弥生土器

壺×鉢（2） L字口縁を持つ壺ないし鉢の口縁部片で、口縁の外面下と上部に手持ちのミガキが施される。胎土は淡茶色を呈し、表面は赤色顔料が塗布されている。弥生中期中葉以降の所産である。

その他の遺構出土遺物

9SX004 出土遺物（Fig.45）

弥生土器

甕（3） く字形口縁を持つもので、胴部は縦長いものと思われる。内外面に横方向のハケ目が施される。弥生後期中葉以降の所産である。

9SX004 出土遺物（Fig.45）

古式土師器

甕（4） く字形口縁を持つもので、胴部内側に削りが施される。古墳時代前期初頭の庄内・布留式以降の所産である。

(5) 小結

周辺の調査では、古墳時代の集落が確認されているが、今回の調査で検出された遺構は、ピット群、石組み遺構（近世以降）のみで、集落様相の詳細は確認できなかった。他の遺構からも遺物は土器片のみであり時期決定できるまでには至らなかったが、小規模な遺構群の存在から集落の周辺地的な様相を示していると言えよう。

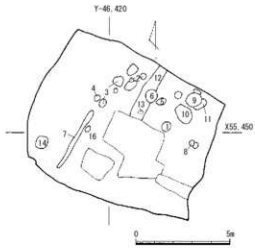


Fig.46 第9次調査遺構略図（1/200）

表11　殿城戸遺跡第9調査　遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況（左→新）	遺構間切合（左→新）	時　期	地区番号
1		Pit					
2		Pit群					
3		Pit群					
4	9SX004	Pit				弥生後期～	
5	9SK005	Pit（茶色ﾌﾞﾛｯｸ土）				弥生後期～	
6	9SX006	Pit				弥生～	
7		溝状（黄色ﾌﾞﾛｯｸ土）				近世～	
8		Pit					
9		現代土坑				近世～	
10	9SK010	土坑（暗茶色土）				弥生中期～	
11		Pit					
12		溝状（灰色土）					
13		Pit					
14	9SK014	土坑（暗茶色土）	上面に石組みを伴う			近世～	
16		Pit					

表12　殿城戸遺跡第9次調査　出土遺物一覧表

S-1
弥　生　土　器破片

S-2
弥　生　土　器破片

S-3
弥　生　土　器破片

S-4
弥　生　土　器後期;甕口8
古　式　土　師　器甕

S-5 黄色ブロック土
弥　生　土　器 中期;甕×鉢×高坏(須玖式,丹塗)
後期;壺口2

S-6
古　式　土　師　器甕口（布留×庄内式）
弥　生　土　器破片

S-7 黄色ブロック
国　産　磁　器椀
弥　生　土　器破片

S-8
弥　生　土　器破片

S-9
瓦　質　土　器破片
肥前系陶磁器染付;皿
国　産　陶　器土板?
弥　生　土　器破片
瓦　類破片（近世～）

S-10 暗黄色土
弥　生　土　器中期;甕（須玖Ⅰ式）　壺×鉢（須玖Ⅱ式,丹塗）

S-11
弥　生　土　器破片

S-12
弥　生　土　器破片

S-14
肥前系陶磁器染付;椀?

S-16
弥　生　土　器破片

表土
弥　生　土　器甕

Fig. 47　第 10 次調査遺構全体図（1/200）

7、第10次調査

(1) 調査に至る経過

調査地は、太宰府市大字大佐野171-1、171-3に所在する。

太宰府市が行う佐野区画整理事業に伴い、太宰府市区画整理課より文化財保護法第58条（現94条）が提出され、埋蔵文化財の発掘調査が行われた。調査は高橋学、山村信榮が担当した。調査期間は平成13(2001)年4月25日から同年10月3日で、開発対象面積は1032㎡、調査面積は752㎡である。

(2) 基本層位 (Fig.48)

区画整理課が協議中だったため西側に建っていた農作業小屋は調査当初は解体撤去ができなかった。そのため調査地を東西に分けて反転調査を行い、遺構の検出を行った。これを第1遺構面とする。また、下層の遺構（主にAT火山灰層）検出を目的に、調査区を全体的に掘り下げた。これについては(3)で記述する。

Fig.48　第10次調査
基本層位図

(3) 検出遺構

第1遺構面検出遺構

溝

10SD016 (Fig.47・49)

調査区東端に位置する南北溝。長さ14.3m、幅0.8m、深さ0.17～0.51mを測る。調査区外に延びる可能性も若干ある。溝の主軸は、N-30°6′49″-Eで、東へ大きく振れる。埋土の堆積順は、下から上へ暗茶色土、暗茶灰色粘質土、淡灰茶色粘質土となる。

10SD035 (Fig.47・49)

調査区南西部に位置する東西溝。長さ10m、幅0.9～1.1m、深さ0.25～0.64mを測る。途中5.5mほど幅が広がっている箇所がある。この箇所は埋土中の石などがまとまって出土している点や急激に遺構の掘方の深さが深くなっている点からも、溝の一部を他の遺構が切っている可能性が考えられる。しかしながら調査時の遺構検出では、平面での遺構切り合い関係を検出できなかったため、同一遺構として掘り下げた。掘り下げた底面の状況をみると、南側の土坑状のところに石が集積していた。状況から判断するに、別遺構性だった可能性が高いと言わざるを得ない。

10SD050 (Fig.47)

調査区北側に位置する東西溝。途中、井戸や攪乱によって壊されているが、長さ27m、幅0.9～1.5m、深さ0.11～0.18mを測る。溝は西側では比較的直線的に掘られているが東側に延びるに従って蛇行している。溝の主軸は、E-9°27′44″-Sでやや南に振れている。

井戸

10SE001 (Fig.47)

調査区北部中央に位置する井戸。円形の掘方で、直径2.7mを測る。土層は遺構検出をした段階で花崗岩まじりの灰色土が堆積しており、掘り下げると暗灰褐色土、最下層に灰色粘質土が一段掘り回めた状態で検出された。底まで掘ると勢いよくしみ出してくる湧水があった。掘方の形成土が砂層で脆弱だったため、遺構検出後に調査途中ながら北側壁面が崩落して埋まってしまった。この遺構は北側調査区の壁面に近いこともあり、今後の調査区の安全確保を考えて再度掘り起こすことをせず埋め戻した。

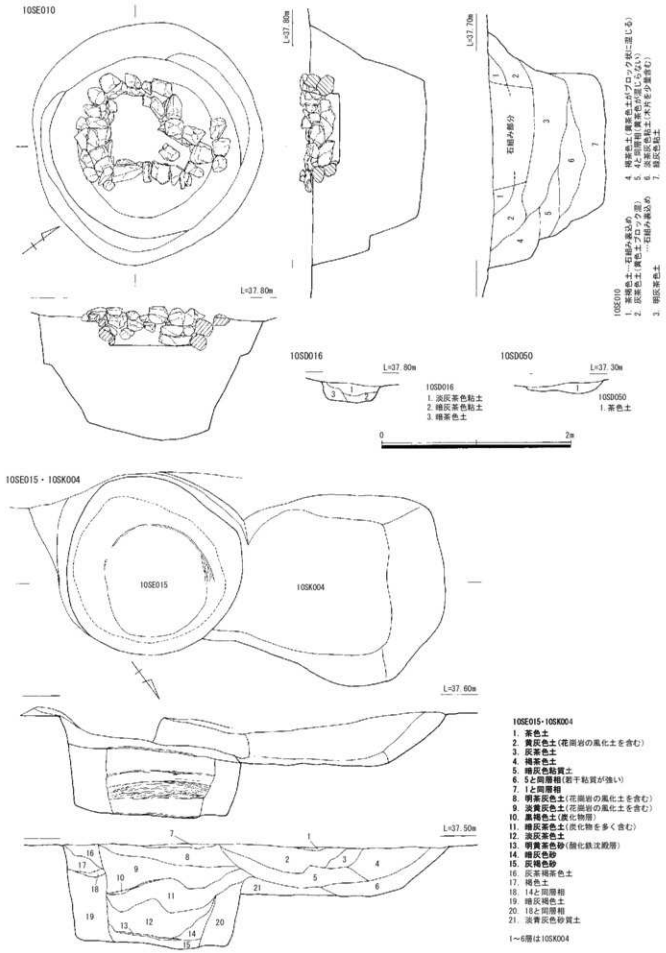


Fig. 49　10SD016・050 土層図および 10SE010・015、10SK004 遺構実測図（1/40）

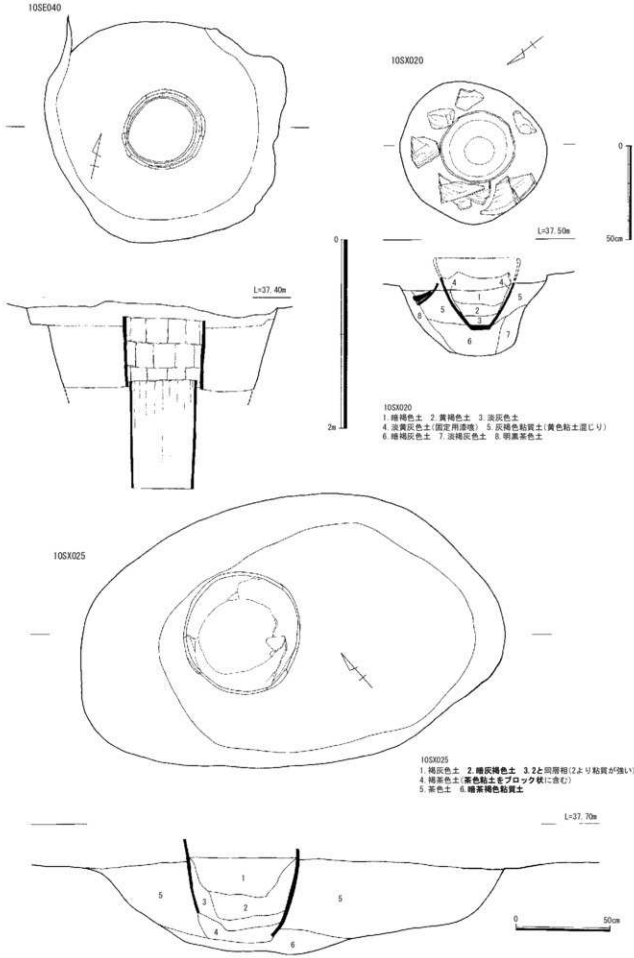


Fig.50　10SE040 (1/40) および10SX020・SX025 (1/20) 遺構実測図

10SE010（Fig.47・49）

調査区南側東端に位置する井戸。円形の掘方で、直径2.3m、深さ1.23mを測る。取り上げ時の土層としては、石組み内は上層から灰茶色土、明茶色土（石組み裏込め）、灰褐色土、青褐色粘質土となる。検出面から少し掘り下げると、石組みが発見された。この石組みは東西0.7m、南北0.5m、深さ0.4mを測る。当初、井戸と推定して石枠内を掘り下げていたが、土層の変化がないため掘り下げを中止した。石組みの平面プランは長方形だが、北側に向かって東よりに片袖型に突出している箇所がある。プランの外側まで伸びて平石を据えている点からも、なんらかの意図があったことを推定できる。石組みは基本的に割石を3段に積んでいる。石材は花崗岩。遺構を断ち割って土層観察を行った所、石組み遺構の掘方は石を組んでいる下部までしか影響を与えておらず、それより下層は基本的に水平堆積をしている。現状ではいかんとも判断しづらいが、枠内まで湧水があったと考えるか、井戸ではない機能を考えるべきかもしれない。

10SE015（Fig.47・49）

調査区中央部南側に位置する井戸。円形の片面プランを持ち、東西長1.9m、南北長1.9m、深さ1.0mを測る。遺構の切り合い関係では、10SK004に切られている。井戸枠は竹製の網籠が使用されている。籠の大きさは東西長1.1m、南北長1.2m、深さ0.7mを測るが、残存率は非常に悪く痕跡を確認するのにとどまる。主に残存しているのは中部位で、薄皮程度に残存している。竹の幅は約3cmほどだったと思われる。籠の外面には箍の痕跡があり0.2m間隔で締められていたことがわかる。遺物取り上げ時の土色は井戸枠内から褐茶色土、明黄色土で、枠外の埋土は地山に近い灰褐色土である。

10SE040（Fig.47・50）

調査区北部中央に位置する井戸。円形のプランを持つが、10SE001に切られて、北側の掘方は明瞭ではない。東西長2.5m、南北長2.4m、深さ1.95mを測る。井戸枠は東西長0.85m、南北長0.85mを測る。井戸枠の構造としては、上段では平瓦を縦置きで組んで、下段を板材で直立させて組んでいる。上段の瓦組みは検出段階では3段残っており、高さ0.75mを測る。しかしながら、井戸枠内に落ち込んでいた瓦の枚数（20～30枚）から考えると、あと最低2段は瓦組みがなされていた可能性がきわめて高い。下段の板材は長さ150cm前後で、幅は9.9cm、厚み1.5cmを測る。安全上の問題から完掘はできなかったが、おそらく井戸の掘方ラインはこのまま斜めに掘り下がり、井戸枠に使われた木材の底面レベルと同じぐらいになったと考えられる。

土坑

10SK004（Fig.47・49）

調査区西部南側に位置する土坑。隅丸方形に近い平面プランを持つが、切り合いのため東側は明瞭ではない。切り合い関係としては10SE015を10SK004が切っている。南北長1m、東西長1.6m以上、深さ0.55mを測る。取り上げ時の土層の堆積状況は、上層から茶褐色土、暗灰褐色土、暗黄褐色土、灰褐色土となる。

10SK030（Fig.47）

調査区南部中央に位置する土坑。円形の掘方プランが確認できる。遺構の切り合い関係は10SX036によって切られる。東西長1.7m、南北長2m、深さ0.6mを測る。土層は上層から暗褐茶色土、淡灰色土、茶灰色土、暗茶色土となる。地山は灰色砂質土。最下層から、出土状態で2段ほど石が積んであるのを確認したが、2点のみだったため石段などの積極的な意味はなさないと思われる。

10SK032（Fig.47）

調査区南部東端に位置する土坑。楕円形の掘方プランを確認した。遺構の切り合い関係としては、S-21に切られている。東西長1.8m、南北長2.2m、深さ0.34mを測る。

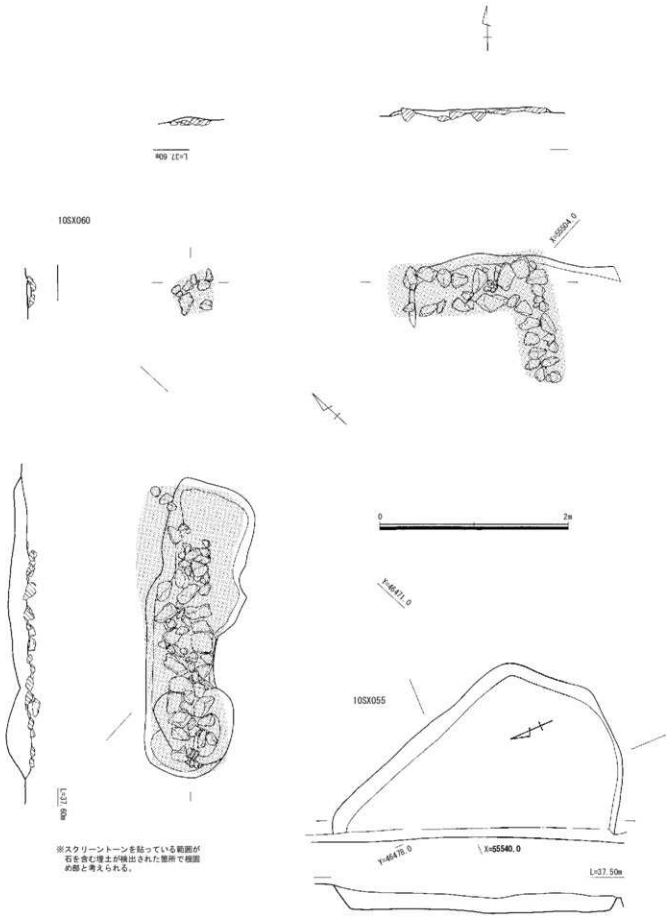


Fig. 51　10SX055・060 遺構実測図（1/40）

10SK033（Fig.47）

調査区南部中央部に位置する土坑。楕円形の掘方プランを持つ。東西長0.8m、南北長0.68m、深さ0.16mを測る。

10SK034（Fig.47）

調査区中央部西側に位置する土坑。長方形に近い不整方形のプランが確認できる。東西長3.35m、南北長1.45m、深さ0.25mを測る。埋土は灰褐色（炭まじり）である。

10SK045（Fig.47）

調査区中部北側に位置する不定形の土坑。東西長2.5m、南北長1.32m、深さ0.49mを測る。平面プランではわからなかったが、西側は深さが0.25mで浅く溝状になっており、東側は段落ちを伴う土坑になっている。本来切り合い関係があった可能性がある。

10SK054（Fig.47）

調査区西部中央に位置する土坑。切り合いによって正確な平面プランは明らかではない。東西長1.7m、南北長1.5m、深さ0.15mを測る。

10SK059（Fig.47）

調査区西側中央部に位置する土坑。平面掘方は長方形を呈する。長軸長1.4m、短軸長0.68m、深さ0.48mを測る。

その他の遺構

10SX020（Fig.47・50）

調査区中央部中央に位置する埋甕遺構。東西長0.75m、南北長0.7m、深さ0.43mを測る土坑の中央部に、復元口径46cm、器高37cmの甕を据えている。甕の口縁部は破壊され、遺構の掘方内に落ち込んで検出された。破片の検出状況から南方向から、口縁全体が周辺に広がるような力が作用して押しつぶれたと推定できる。断割土層観察により、土坑の底面から15cmほど土を入れてから甕を据えて、周りの空間を土で埋めたことがわかる。また、甕の底部は完形を保っている。

10SX025（Fig.47・50）

調査区中央部中央に位置にする埋甕遺構。平面プランは楕円形で東西方向に長い。東西長は2.2m、南北長1.4m、深さ0.5mを測る。土坑の中央やや西よりに甕を据えている。断割した土層から判断するに、底面を抜いた甕を土坑内に設置した後に、口縁近くまで同一埋土である茶色土で埋めている。甕の大きさは、口径が約60cm、残存器高が50cmほど確認できるが底部がないため正確な数値は計測ができない。

10SX036（Fig.62）

埋土は暗褐茶色土、内部から横木とそれに接続されたケーブルとフックが出土していることから現代のものである。隣接する穴に電信柱が確認できるため、おそらくそれを固定するためのワイヤーと重しのための横木であると思われる。位置関係からケーブルワイヤーの張り角は45°程度だと推測される。

10SX039（Fig.47）

調査区東部中央に位置するたまり状遺構。遺構の切り合い関係では、S-72を切って近現代の井戸に切られている。埋土は暗灰色土である。

10SX047（Fig.62）

調査区中央部中央に位置する小穴群。直径0.45～0.6m、深さ0.12～0.35mを測る。

10SX055（Fig.47・51）

調査区西部西側に位置するたまり状遺構。南北長2.0m、東西長1.9m、深さ0.2mを測る。調査区外に遺構の範囲が延びるため全容は不明。

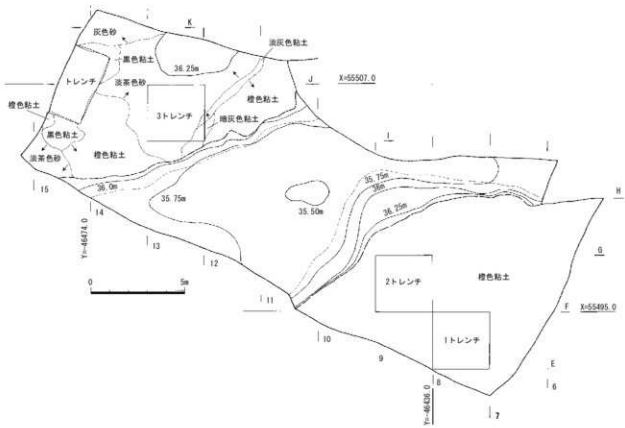


Fig.52　旧地形図およびトレンチ配置図（1/200）

10SX060（Fig.47・51）

調査区西部中央に位置する不明遺構。長さ1.7～3.17m、幅0.5～1.1m、深さ0.05～0.2mの溝が断続的に南北5.3m、東西4mの範囲をコの字状に巡る。主軸は東へ傾いており、N-46°7′24″-Eを示している。また溝の中には石が敷いてある。石の種類はほとんどの個体が約0.2×0.2m以下の花崗岩を中心に構成されていた。溝状に掘り下げているが、石はほぼ上層に露出する状況で敷いてあることと、溝の配置プランから、建物の基礎の根固めだと推定される。

10SX061（Fig.62）

調査区西部北端に位置する落ち込み。調査外に広がっている。遺構の切り合い関係だと10SD050を切っている。

10SX068（Fig.62）

調査区西部北側に展開する小穴群。直径0.5～0.6m、深さ0.22～0.68mを測る。

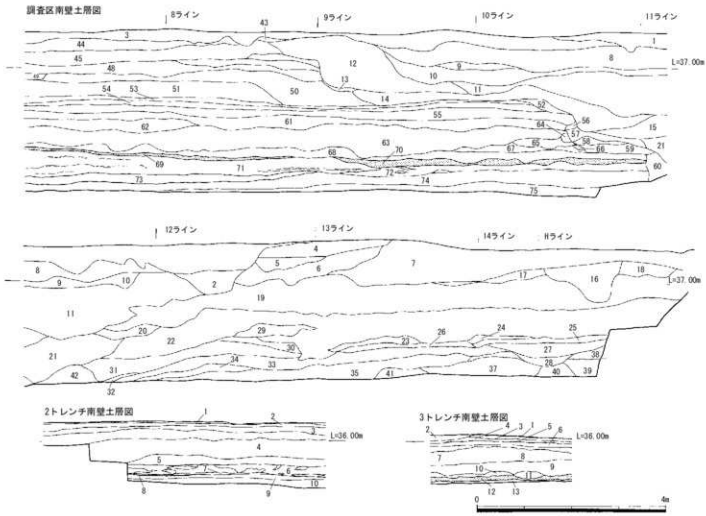
10SX074（Fig.62）

調査区西部中央に位置するたまり状遺構。埋土は茶褐色土←暗褐色粘質土。反転前に検出したS-005と同一遺構だと考えられる。

下層遺構の検出について

今回の調査で、第1遺構面を完掘後、調査区を掘り下げた目的としてAT火山灰層の確認があげられる。

太宰府市域でのAT火山灰層については、向佐野原口遺跡の調査（「太宰府・佐野地区遺跡群1－向佐野・原口遺跡－　太宰府市の文化財第14集」1989　太宰府市教育委員会）によって検出された黒色粘質土



調査区南壁
1. 灰白色細砂(褐色粗砂塊まじり) 2. 淡褐色粘土混じり砂 3. 黒灰色粗砂(上層遺構地山形成土)4. 白色砂 5. 淡黄色土 6. 淡黒灰色土(砂まじり) 7. 白色粗砂 8. 灰黄色粗砂 9. 淡赤褐色粗砂 10. 灰黒色砂 11. 褐色粗砂(淡青灰色シルト塊入り) 12. 灰白色粗砂 13. 淡灰青色土(灰褐色粘土塊まじり) 14. 淡赤褐色粗砂 15. 白灰色砂 16. 黒灰色土と淡青灰色砂の混在土 17. 淡褐色粗砂 18. 淡黒灰色砂質土 19. 淡青灰色細砂 20. 白色砂 21. 灰褐色粗砂 22. 灰褐色粗砂 23. 淡灰青色砂 24. 淡灰青色砂質土 25. 橙色土(流理構造) 26. 橙色と灰色砂の互層 27. 黒色粘土と淡青灰色の互層(流理構造) 28. 暗灰黒色粘土と灰色砂の互層 29. 淡青灰色細砂 30. 灰白粗砂と灰白粗砂の互層 31. 灰色砂と橙色砂のラミナ 32. 白灰色砂 33. 灰色砂と灰白砂のラミナ 34. 橙色粗砂と灰白砂砂のラミナ 35. 淡灰色砂 36. 赤褐色細砂 37. 灰色砂と淡黄橙色砂(酸化鉄)の互層 38. 黒色粘土 39. 淡青灰色土(粗砂入) 40. 暗灰色粘土 41. 黒色粘土 42. 白灰色砂 43. 淡黄色細砂 44. 淡黄色細砂 45. 灰黒色砂質土 46. 淡灰青色シルト 47. 淡灰黄色シルト 48. 灰褐色粘土 49. 灰青色砂 50. 淡灰青色砂 51. 黄灰色粗砂 52. 淡青灰色細砂 53. 橙色粘土 54. 淡黒色粘土 55. 黒色粘土 56. 橙色粘土 57. 灰褐色粗砂 58. 淡灰色粗砂 59. 淡青灰色砂 60. 淡橙色砂 61. 青灰色シルト 62. 灰白色粗砂 63. 青灰色シルト(粗砂入) 64. 淡青灰色土塊 65. 淡灰色粗砂 66. 淡黒色土 67. 黄灰色粗砂 68. 黒灰色粘土 69. 淡茶褐色細砂 70. 淡茶褐色粗砂 71. 淡青灰白色粗砂(部分的に橙色粗砂を含む) 72. 暗黒灰色粘土 73. 淡黒色粘土(灰黒色粘土まじり) 74. 濃黒色粘土(植物入り) 75. 青灰色シルト(白色粘質土砂入り)

2トレンチ南壁
1. 橙色粘土 2. 淡黒色粘土 3. 黒色粘土(黒色粘土層上面に「灰白色微細粒」がごく薄く層まっている) 4. 青灰色シルト 5. 青灰色粗砂 6. 青灰色砂と黒茶色粘土の互層 7. 淡青灰色シルト 8. 淡灰褐色細粒砂(推定AT包含層) 9. 灰渇色細粒砂 10. 明赤褐色細砂

3トレンチ南壁
1. 灰色粗砂 2. 黒灰色シルト(流理層) 3. 橙色粘土 4. 黒色粘土 5. 白灰色シルト 6. 淡黒色粘土 7. 黒色粘土(白色粗砂入) 8. 青灰色シルト(白色粗砂入) 9. 青灰色シルト 10. 淡黒褐色粘土 11. 青灰色粗砂 12. 灰褐色細砂(推定AT包含層) 13. 黒茶色粘土

Fig. 53 調査区南壁・トレンチ土層実測図 (1/80)

層に含まれることがわかっている。その後の調査例の増加により、AT 火山灰は市域の現標高 30 ～ 40m の平坦面で検出されやすいことが判明した。

今回の調査地の近接地でもある脇道遺跡第 4 次調査では、AT 火山灰の純層（2 万 5000 年前）が確認されており、その上層からは台形石器を主体としスクレイパー、剥片先頭器を含む約 1300 点の剥片と石核がまとまって出土している。この遺跡の土層は『太宰府市史』環境資料編 P.99 に詳しい。

このような状況をうけて本調査でも確認作業を行った。

まず、第 1 遺構面を完掘後に重機を使用して、第 1 遺構面のベースとなっていた黒灰色粗砂層とその下層にその下層の褐色粗砂を 1.4m ほど掘り下げた。すると Fig.52 が示すように東西に微高地があり、中央に谷が位置する旧地形を検出した。その谷地形は先ほど述べた褐色粗砂により埋没していた。

Fig.52・53 の図に示したように 3 × 3m のトレンチを 3 ヶ所設定して掘り下げてそれぞれ土層を観察した。また、調査区南壁についても土層を観察するために、壁に沿って北側に 3m ほどのトレンチを設定して掘り下げた。結果として、南壁の 7 ライン～ 11 ラインからは淡茶褐色細砂層と、2 トレンチの南壁から淡灰褐色細砂層を確認できた。このうち 2 トレンチの淡灰褐色細砂層を自然科学分析したところ、「火山ガラスを大量に含むことと斜方輝石の多い重鉱物組成および土層断面における層相」などから AT の降下堆積層である可能性が高いことが指摘された。この推定 AT 火山灰包含層とその下層に淡黒色粘土（灰黒色粘土まじり）層が広がっているのを確認できた。

しかしながら、本調査範囲ではその推定 AT 火山灰包含層の上層から石器など人類が直接関与したと考えられる物や遺構は検出できなかった。

(4) 出土遺物

溝出土遺物

10SD016 茶灰色土出土遺物（Fig.54）

瓦質土器

鉢（1、2） 1・2 ともに口縁部の破片。1 は残存高 4.5cm。口縁端部上面を若干水平に成形しており、内面に刷毛目調整が施される。外面の調整は摩耗により不明。焼成は不良。断面は黒色をしている。2 は残存高 4.2cm。口縁部内面上部に強い横ナデを施しており、その調整の境に稜がつく。外面は指頭圧痕をナデ消すように横ナデ調整が行われている。焼成はやや不良。断面をみると、中心部が黒灰色で外面が灰白色のサンドイッチ構造になっている。外面は茶灰色で、口縁部は黒褐色化しているが、これは噴きこぼれにより茶灰色に変化をして、使用時に火に掛けた時に炭化物が付着したものだと思われる。

国産陶器

椀（3、4） 3・4 は胎土、焼成、施釉などから同一個体の破片と思われる。3 は残存高 2.9cm。4 は残存高 3.3cm。胎土は密で、堅く焼き締まり色調は淡橙茶褐色を呈する。焼成は良好。釉は褐色釉で内面から外面の体部中央下辺りまで施釉している。体部外面下半は回転ヘラ削りにより調整が行われている。

10SD035 出土遺物（Fig.54）

土師質土器

鍋（5） 5 は残存高 5.2cm。胎土は 1mm 以下の白色粒子を少量含む。体部は直線的に立ちあがり、口縁部を強い横ナデで外へ屈曲させている。内面は刷毛目調整。外面は指頭圧痕後にナデ調整。外面は黒褐色炭化物が付着している。焼成は良好。

国産陶器

椀（6、7） 6 は椀の底部で残存高 3.3cm、底径 5.0cm。胎土は淡灰橙色で密。焼成はやや不良。高台部は酸化炎焼成のため、軟質になっている。釉調は灰黄色で、やや細かい貫入が表面に見られる。高台

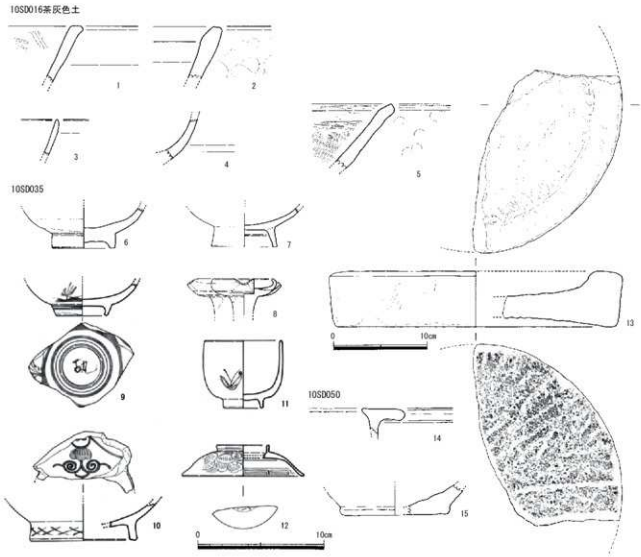


Fig.54　10SD016・035・050 出土遺物実測図（1/3、13 は 1/4）

は削り出し成形。7 は底部の破片。残存高 3.15cm、胎土は暗灰色、精緻で密だが、ごく少量の白色粒子を含む。焼成は良好。色調は内外面に暗赤茶褐色の釉（鉄釉）を施す。高台畳付部は釉掻き取りを行っている。高台が長いのが特徴的。

燭台 (8)　燭台の底部・柱部が欠損したもので、口径 5.0cm、残存高 2.9cm。内弯する口縁部を一部引き出して注口部を作っている。柱状部の直径は残存部の最大で約 1.5cm。胎土は密。1mm 以下の白色粒子が僅かに混じる。焼成は良好で還元炎焼成となっている。色調は内外面ともに暗灰黒青色を呈する。

肥前系磁器

椀 (9、10)　9 は染付椀。残存高 2.6cm、底径 4.1cm。外面に草文、高台内に文字を絵付けする。呉須はぼんやりした発色で薄青色を呈する。10 は染付椀の底部破片。残存高は 3.95cm、底径 8.4cm。素地は白色で密。焼成は良好。釉調は、落ち着いた藍色の呉須で内定面と高台外面に絵付け後、透明釉を施す。内定面は唐草文か、高台外面は×状に文様が帯状に連続する。

湯飲み茶椀 (11)　復元口径 6.2cm、器高 5.4cm、残存底径 3.2cm。素地は白色で密。外面に藍色の呉須で絵付けをしている。文様は V 字形の本体から 2 つの線が延びているもので、少し離れた所に、上下逆転した文様が描かれている。おそらく草花文か、場合によっては蝶の可能性を考えている。

蓋 (12)　復元口径 9.6cm、器高 2.5cm、摘み部直径 4.2cm。薄い藍色の呉須により絵付けを施す。外面に草花文、内面口縁近くに雷文帯を巡らす。内面の見込みに向かって円圏と見込み中央部に絵付けが

行われているのがわかる。呉須の上に透明釉を掛けるが、内面は白色釉が飛び散るように付着しており仕上がりがよくない。

石製品

石臼(13)　復元径31.2cm、現存高5.9cm。残存としては1/4程度、石臼の上部かと思われる。色調は暗灰色～暗茶黒褐色を呈する。底面側に擂目が確認できるが、使用による摩耗により不鮮明である。石材は砂岩。

10SD050 出土遺物(Fig.54)

弥生土器

甕(14、15)　14は口縁部破片。胎土は1.5mm以下の白色粒を少量含む。色調は淡橙色。鋤先口縁か。15は底部の破片。焼成は不良。断面は黒灰色を呈する。胎土は2mm以下の白色粒子を多量に含む。1mm以下の茶色粒子と雲母片を若干含む。

井戸出土遺物

10SE010 明茶色土出土遺物(Fig.55)

土師質土器

鍋(1)　口縁部の破片。残存高4.3cm。胎土は2mm以下の赤色粒を多く含む。0.1mm以下の雲母片を少量含む。焼成はやや不良。断面を観察すると表面は白色系だが、内面は黒色を呈す箇所が多い。直線的に立ち上がった体部にやや外側に広げるような形で口縁部が形成される。口縁内面は稜線の下部は、横ナデ、上部は粗いナデで櫛目状になっている。

国産磁器

壺(2)　底部高台の破片。残存高は3.1cm。素地は暗灰色で、微少の黒色粒子を少量含む。外面～高台内部に淡橙灰色の透明釉が掛けられる。

10SE010 灰褐色土出土遺物(Fig.55)

国産陶器

皿(3)　復元口径13.4cm、器高3.5cm、復元底径4.7cm。素地は淡灰色で密。0.1mm以下の黒色粒子また白色粒子を含む。釉調は黄色がかった透明釉を全面に施釉。内面見込み部を蛇ノ目状に釉剥ぎをしており、この部位が部分的に重ね焼き痕跡として紅赤色に変化している。

蓋(4)　口径9.75cm、器高1.5cm、底径4.8cm。ほぼ完形。素地は暗紫色で密。1mm以下の白色粒子を少量含む。焼成は良好。黒褐色の釉が上面に掛けられる。口縁端部中位から釉は掛かっていない。底面から3mm程度の立ち上がりまで、灰白色の付着物が全面に付いているが、これはおそらく窯詰の際に、釉着を防ぐための窯工具の跡だと思われる。

花瓶(5)　口縁部が欠損している瓶。残存高11.5cm、復元底径3.6cm。素地は灰白色。0.1mm以下の黒色粒子を含む。釉調は緑灰色がかった透明釉で薄く全面に施釉されている。全面に細かい貫入が認められる。焼成は良好。体部に6条の沈線が巡る。

10SE010 青褐色粘質土出土遺物(Fig.55)

国産陶器

皿(6)　高台部の破片。残存高1.7cm、復元底径4.4cm。素地は暗灰色。0.1mm以下の微細な黒色粒子を少量含む。釉調は黄色がかった透明釉を薄く施釉している。見込みに4カ所の胎土目の跡が確認できる。高台にも同様に胎土目を削りとった跡が確認できることから、重ね焼きをしたことがわかる。

肥前系磁器

椀(7)　底部から体部にかけての破片。残存高3.4cm、底径3.6cm。高台部は削り出し。素地は灰暗色で、

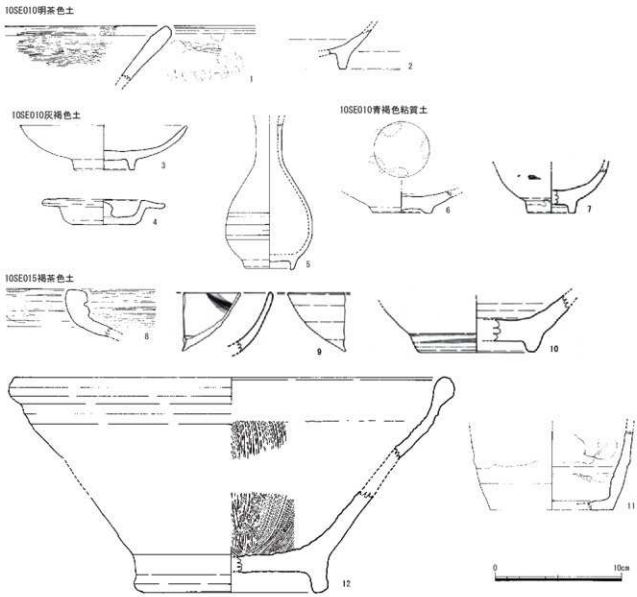


Fig.55　10SE010・015出土遺物実測図（1/3）

0.1mm以下の黒色粒子を僅かに含む。外面に一部呉須が認められることから染付椀と考えられる。高台部近くまで漬け掛けで施釉を施す。釉調は黄灰色釉でやや不透明な釉を施している。表面は貫入が認められる。また、見込み部には白色釉が飛散したように全面に認められる。

10SE015 褐茶色土出土遺物（Fig.55）

瓦質土器

甕(8)　口縁部の破片。残存高3.7cm。胎土は黒色を呈し、1mm以下の白色粒子をごく少量含む。焼成はやや良好だが、焼成温度はそれほど高くない可能性がある。色調は内外面ともに黒褐色。口縁を厚く肥厚させており、口縁外面には沈線が1条巡る。内外面に丁寧なヘラミガキを施す。

肥前系磁器

椀(9)　椀の破片。残存高4.6cm。素地は灰白色。0.1mm以下の茶色粒子を少量含む。釉調は内外面に青みがかった透明釉を薄く施釉し、内面口唇部上～体部外面上位に濃淡がある呉須で絵付けをしている。見込み付近にも圏線の一部が認められる。

壺(10)　底部破片。残存高4.5cm、復元底径9.1cm。素地は灰白色で密。0.1mm以下の白色粒子をご

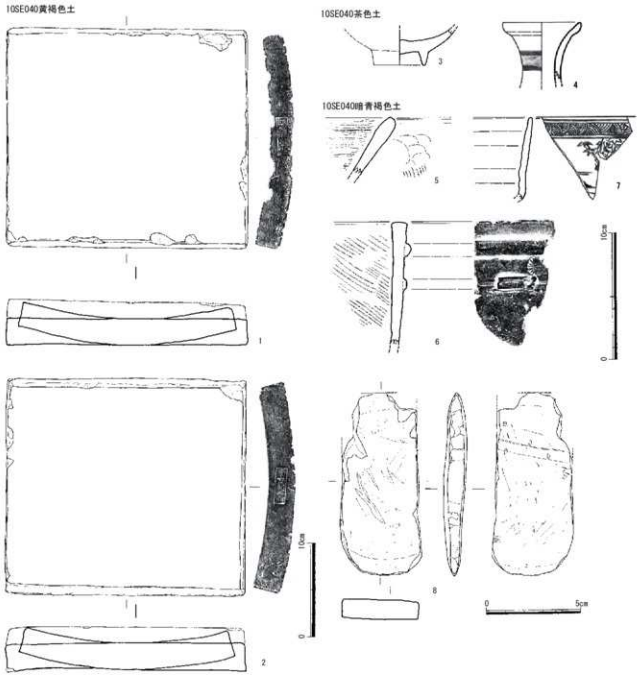


Fig.56　10SE040 出土遺物実測図（1・2は1/4、8は1/2、他は1/3）

く少量含む。釉調は青みがかった透明釉を施す。高台外面にやや薄い藍色の呉須により絵付けを施している。外面は底部まで施釉するが高台の畳付部は釉を掻き取っている。内面は一部釉垂れが認められるが基本的には施釉を施していない。

国産陶器

壺(11)　底部の破片。残存高6.25cm、復元底径9.7cm。素地はやや粗く、4mm以下の白色粒子を少量含む。素地の色調は淡橙色。焼成は良好で還元炎焼成。釉調は褐色釉で破片上部まで垂れてきている。内面には粘土紐の巻き上げ痕跡が確認できる。

擂鉢(12)　底部と口縁部の破片。おそらくは同一個体と考えられる。図上で復元すると、復元口径34.1cm、復元器高17.0cm、復元底径14.1cm。胎土はやや粗く、1mm以下の白色粒子を多量に含む。胎土の色調は淡赤褐色。焼成は良好で堅く焼き締まっている。色調は、内外面に茶褐色の釉を薄く施して

いる。内面に細かい擂目を施している。口縁端部は玉縁状に丸く肥厚させている。高台畳付の部分は釉を削り取った跡が観察できる。

10SE040 黄褐色土出土遺物 (Fig.56)

瓦(1、2)　1・2ともほぼ同型の平瓦。1は全長25.7cm、幅23.4cm、厚さ2.8cm。胎土は0.3mm以下の白色砂粒を大量に含む。0.3mm以下の雲母片を多量に含む。焼成はやや良好だが、凹面には全く燻しが掛かっていない。凹面には調整の痕跡が摩耗により残存していない。凸面は部分的にミガキを施した跡が観察できる。端部はすべてヘラ切りの後にヘラで調整を行っている。広端面の中央部には、「二日市利右ェ門」という銘がスタンプされている[註(1)]。2は全長25.5cm、幅23.1cm、厚み2.8cm。胎土は1.5mm以下の白色砂粒を多量に含む。微細な雲母片も多く含む。焼成は良好。全面に燻しがなされている。端部はヘラにより切り離しをして調整をされている。凹面は端面に対して直行する丁寧なヘラミガキを施しているが、凸面は軽くナデている程度で細かいミガキ調整はしていない。凸面の表面には酸化鉄が吸着しており、茶褐色に変化している。狭端面側に幅1.3～1.5cm、高さは2.0～2.5cmの灰白色に変化した部位が3カ所認められる。これは燻しのときに何かが当たっていたため、燻されなかったため胎土の色が残っているのだと考えられる。おそらくは縦に積んだ際に器壁が釉着しないように置いた窯道具の痕跡かと想定する。広端面の中央部には「二日市利右ェ門」とスタンプが押されている。

10SE040 茶色土出土遺物 (Fig.56)

国産磁器

椀(3)　底部破片。残存高2.9cm、底径4.1cm。素地は0.3mm以下の白色粒子、黒色粒子を多量に含む。焼成はやや不良。そのため素地は淡橙灰色を呈する。釉調は内面がやや青みがかかった灰白色、外面はにぶい発色の白色。細かな気泡を含む。釉は漬け掛けで高台外面まで垂れてきている。高台部は削り出し。

肥前系磁器

壺×瓶(4)　口縁部の破片。復元口径6.2cm、残存高4.6cm。口縁部を若干玉縁状にしている。素地は白色、0.3mm以下の白色粒子をごく少量含むが精緻で密。焼成は良好。釉調は頸部に暗藍色の呉須で圏線を描き、その上から光沢度が高い透明釉を施す。

10SE040 暗青褐色土出土遺物 (Fig.56)

瓦質土器

鉢(5)　口縁部破片。残存高4.5cm。胎土は2mm以下の白色粒子を少量と1mm以下の黒色粒子をごく少量含む。焼成は良好。燻しにより内面は黒灰色、外面は黒褐色。胎土は灰白色を呈する。口縁部を僅かに外反させている。内面は横方向の刷毛目調整を施しているが、先述の外反点を境に工具によると思われる太い沈線が横方向に3条確認できる。外面は指頭圧痕と縦方向の刷毛目調整が確認できる。

火鉢(6)　口縁部から体部への破片。直線的に体部から口縁部まで立ち上がっている。口縁部外面下に2条の貼り付け突帯を巡らし、その突帯により区画された範囲に、菊花文をスタンプする。胎土は1.5mm以下の白色粒子を含み、0.3mm以下の雲母片もごく少量含む。焼成はやや不良で燻しが薄く掛かっている状況。内面調整は斜め方向の刷毛目調整。外面は横ナデの後にミガキ調整をしているが、摩滅してわずかな部位でしか確認できない。色調は灰黒色～淡黒褐色。断面はサンドイッチ構造になっており、中心は暗黒灰色を呈する。

肥前系磁器

鉢(7)　口縁部から体部への破片。破片の下部で僅かに内側に内弯している部位が認められる。残存高6.5cm。素地は白色で密。釉調はやや落ち着いた藍色の呉須を使って絵付けをして、透明釉を施す。口縁部外面には2重の圏線に区画された帯内に、青海波が連続して描かれている。その下部には草木を

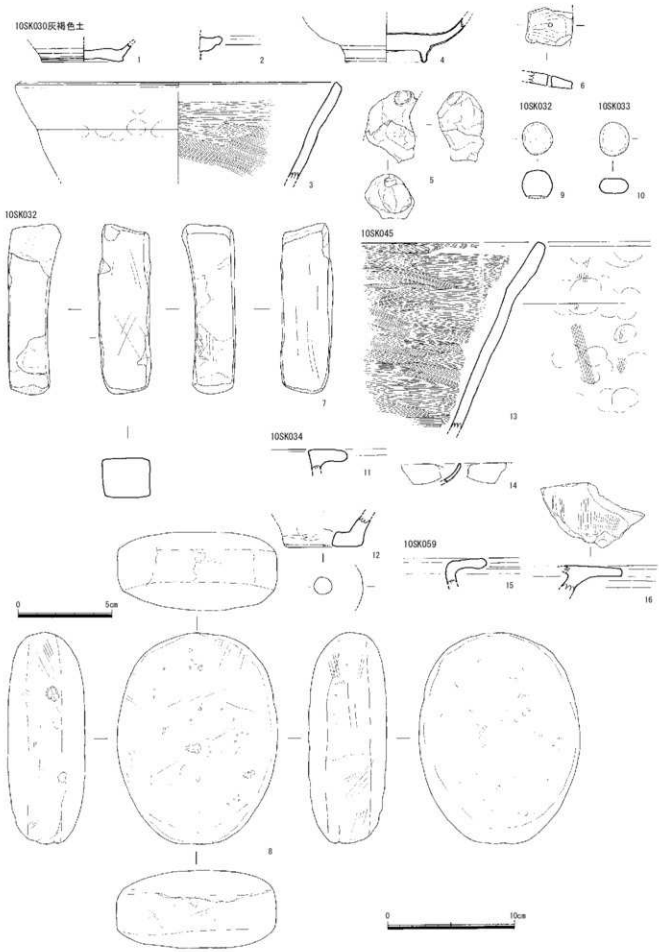


Fig. 57　10SK030・032・033・034・045・059 出土遺物実測図（1/3、7・8は1/2）

中心とした風景を描いていると思われる。

石製品

砥石 (8)　残存している箇所の計測値としては、縦 9.7cm、横 4.35cm、厚さ 1.0cm。石材は砂岩。色調は褐灰色で 0.1mm 程度の黒斑が多く認められる。欠損部を除いて全面砥石として使用され、表面は摩耗して平滑となっている。

土坑出土遺物

10SK030 灰褐色土出土遺物 (Fig.57)

土師器

小皿 a ×坏 a(1)　底部破片。残存高 1.4cm、底径 6.3cm。底部切り離しは糸切り技法。色調は灰黒色。焼成はやや不良。残りが良くないため、判別が難しいが小皿 a の可能性も考えられる。

土師質土器

釜 (2)　鍔の破片。胎土は 0.5mm 未満の砂粒を多く含む。色調は鍔の上面が黒褐色、下面が茶灰色。

鍋 (3)　口縁部から体部の破片。直線気味にたちあがる体部を指押さえで屈曲させて、口縁部は内弯気味に形成している。胎土は 0.5 ～ 1mm 程度の白色砂粒を少量、雲母片を大量に含む。焼成は良好。色調は外面は煤の付着により黒褐色、内面は暗灰黄色を呈する。内面は刷毛目調整。

龍泉窯系青磁

椀 (4)　Ⅲ類の底部破片。

土製品

不明土製品 (5)　高坏の脚部破片か。棒状の粘土塊に巻き付けたような粘土紐が観察できる。5mm 以下の白色砂粒を多量に含む。焼成はやや不良。色調は灰白色。

弥生土器

蓋 (6)　小破片。蓋と仮定すると残存高は 1.3cm。上面に丁寧なヘラミガキをした後に、丹塗りを施している。中央に 3mm 程度の穿孔がされている。胎土は 1mm 程度の灰白色の砂粒を多く含む。

10SK032 出土遺物 (Fig.57)

石製品

砥石 (7)　縦 9.0cm、横 2.7cm、厚さ 2.1 ～ 2.8cm。石材は泥岩。色調は暗灰色～暗灰褐色。表面が剥離した一部分を除いて、砥石として使用されて表面が摩耗して円滑になっている。

叩き石×磨り石 (8)　縦 11.2cm、横 8.4cm、厚さ 4.1cm。色調は淡灰色～暗灰色。石材は玄武岩。針状の角閃石を多く含む。両端部の中央部に敲打痕跡が認められる。

土製品

土玉 (9)　縦 2.6cm、横 2.4cm、厚さ 2.05cm。球形を呈すが一部欠損している。胎土は密。焼成は良好。色調は淡橙白色～乳白色。

10SK033 出土遺物 (Fig.57)

石製品

不明石製品 (10)　縦 1.8cm、横 1.6cm、厚さ 0.8cm。扁平な形状から碁石の可能性が考えられるが、色調が暗赤灰橙色、部分的に茶褐灰色との斑になっている。

10SK034 出土遺物 (Fig.57)

弥生土器

甕 (11、12)　11 は口縁部の破片。若干鋤先口縁状か。12 は底部破片。底部中央に推定 1.4cm の孔が穿たれている。

10SK045 出土遺物（Fig.57）

土師質土器

鍋（13）　残存高 14.7cm。胎土は 4mm 以下の白色粒子を多く含む。焼成は良好。色調は茶褐色～茶色。調整は内面が刷毛目調整。外面が指頭圧痕で、その上から刷毛目調整がなされているが、最終調整としてナデ調整を行っている。口径はおよそ 40cm になる可能性がある。

国産磁器

皿（14）　口縁部の破片。端部の調整から角皿になる可能性がある。素地は白色。釉調は光沢がある透明釉を内外面に薄く施釉している。

10SK059 出土遺物（Fig.57）

弥生土器

甕（15）　口縁部の破片。若干くの字状を呈する。胎土は 2mm 以下の白色砂粒を多く含む。

甕×高坏（16）　口縁部の破片。胎土は 2mm 以下の白色砂粒を多く含む。微細な雲母片も少量含む。焼成は良好。色調は黄茶褐色。口縁上面は横ナデ調整後にミガキを行っている。

その他の遺構出土遺物

10SX004 出土遺物（Fig.58）

国産陶器

鉢（1）　口縁部の破片。端部を折り曲げて内側に折り返している。素地は密で 1mm の白色粒子を含む。暗茶褐色を呈する。釉調は口縁部に光沢のある赤茶色釉を薄く施釉。内外面ともに轆轤による回転ナデを施される。

瓦質土器

火鉢（2）　底部～体部破片。脚は 1 脚残存しているが配置から本来三脚のものと思われる。残存高 8.15cm、復元底径 21.4cm。胎土はやや粗く、1mm 以下の白色・黒色粒子を少量含む。焼成は良好。内面はしっかり燻されている。色調として外面は淡灰色、内面は黒灰色、断面は淡灰色。内底面は同心円状に、工具による回転ナデにより調整されている。底面と体部の立ち上がりの部位には接合のための指頭圧痕が認められる。体部内面は横方向の工具による回転ナデ。外面はヘラミガキ調整が行われているが摩滅のため残りが悪い。外底面はナデ調整で仕上げている。

瓦類

平瓦（3）　破片。胎土は 1mm 以下の白色粒子と 1mm 以下の金色雲母片を多量に含む。還元は不良。色調は灰白色。燻しはほとんど認められない。

10SX020 出土遺物（Fig.58）

瓦質土器

甕（4）　完形品。口縁径 39.4cm、器高 41.5cm、底径 16.0cm。胎土は 2mm 以下の白色砂粒を多く含み、微細な雲母片を少量含む。焼成は良好。色調は内面が暗茶灰色～黒灰色、外面は暗茶灰色～黒灰色である。内面に泥状の付着物が土器に圧着して型状に残っている。この付着物は淡茶色～淡黄茶色を呈する。内面は刷毛目調整だが、付着物により下部は観察ができない。底部外面はナデ調整。先述の泥状付着物は、内部に据え付けた小さい甕を固定したものと推定している。

土製品

瓦玉（5）　縦 6.4cm、横 5.9cm、厚み 1.6cm。平瓦を円形に打ち欠いて加工したもので、円盤状土製品とも称せられるものか。

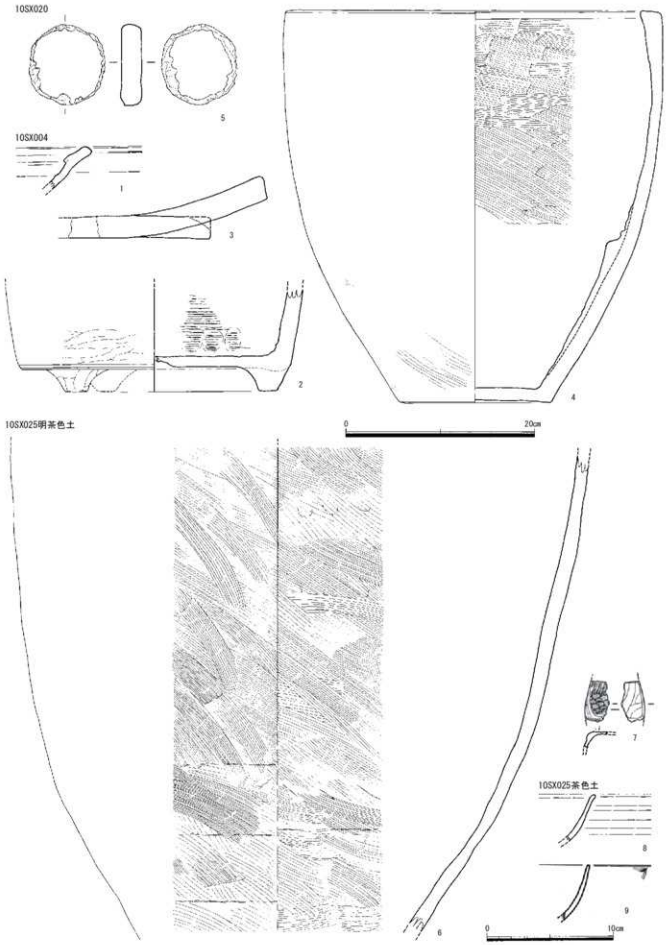


Fig.58　10SX004・020・025出土遺物実測図（1/3、4・6は1/4）

10SX025 明茶色土出土遺物 (Fig. 58)

瓦質土器

甕 (6)　底部と口縁部を欠損する甕。残存高 51.6cm。内外面を粗い刷毛目調整。内外面には粘土紐の痕跡が残る。この痕跡を消すように刷毛目調整を念入りに行っているが、消し切れてはいない。焼成はやや不良。燻しは不完全。色調は暗灰色を基調とする。

国産磁器

水注 (7)　小破片。残存長 3.2cm。外面に色絵で絵付けをしたあと薄く透明な釉で施釉する。緑色で鱗状のものに彩色をしており、あとは赤色の線と黄色の線が確認できる。内面は指による成形で指押さえの跡が残る。また内面には釉垂れが一部見られる。

10SX025 茶色土出土遺物 (Fig. 58)

国産陶器

椀 (8)　口縁部の小破片。残存高 3.75cm。素地は 0.1mm 以下の黒色粒子を含み、暗灰色を呈する。釉調は内外面とも暗紫色で光沢が認められる。

肥前系磁器

椀 (9)　口縁部破片。残存高 3.9cm。素地は密、灰白色を呈する。釉調は青みがかった透明釉を薄く施釉。薄い呉須で文様を描く。文様は一部分のため不明。

10SX036 出土遺物 (Fig. 59)

土師器

坏 a (1)　復元口径 14.3cm、器高 2.6cm、復元底径 9.3cm。底部回転糸切り。XVI ～ XVII 期。

10SX039 出土遺物 (Fig. 59)

土師質土器

擂鉢 (2)　底部の一部と体部の破片。残存高 8.5cm。胎土は 2mm 以下の淡白褐色砂粒を多く含む。雲母片を僅かに含む。焼成はやや良好。色調はにぶい褐茶色、外面は煤のため黒褐色。内面には見込み部分から体部上方にかけて、6 条の擂目が刻まれている。外面は刷毛目調整。外面の煤から火に掛けて調理していた可能性がある。

瓦質土器

釜 (3)　体部中位の破片。残存高 6.0cm。鍔を貼り付けている。胎土は淡白褐色の 0.5mm 以下の砂粒を多く含む。焼成はやや良好。燻しが不完全。色調は暗灰黒色。内外を刷毛目調整する。

10SX047 出土遺物 (Fig. 59)

古式土師器

壺 (4)　口縁部と肩部までの破片。復元口径 20.6cm、残存高 12.8cm。壺 3a (山陰系の二重口縁壺で外反するもの) 胎土は、3mm 以下の白色粒子をやや多く含む。1mm 以下の茶色粒子、0.3mm 以下の雲母片、1.5mm 以下の角閃石などを微量に含む。焼成は良好。色調は淡黄茶色～淡茶褐色。内面が頸部までヘラ削りの後、頸部から口縁部まで横ナデ、外面は肩部まで刷毛目調整で、口縁部端部まで横ナデ調整を施す。

10SX055 出土遺物 (Fig. 59)

弥生土器

壺 (5、6)　体部破片。突帯より下部が残存している。5 は残存高 7.0cm。内外面、ともに縦方向の刷毛目調整。胎土は、4mm 以下の白色砂粒を多く含む。赤茶色の砂粒も少量含む。焼成は良好。色調は黒褐色。6 は残存高 12cm。胎土ともに 5 と相似。内外面、ともに縦方向の刷毛目調整。

鉢 (7 ～ 9)　7 は口径 14.4cm、器高 7.7cm、底径 3.4cm。胎土は 3mm 以下の白色砂粒を多く含み、2mm

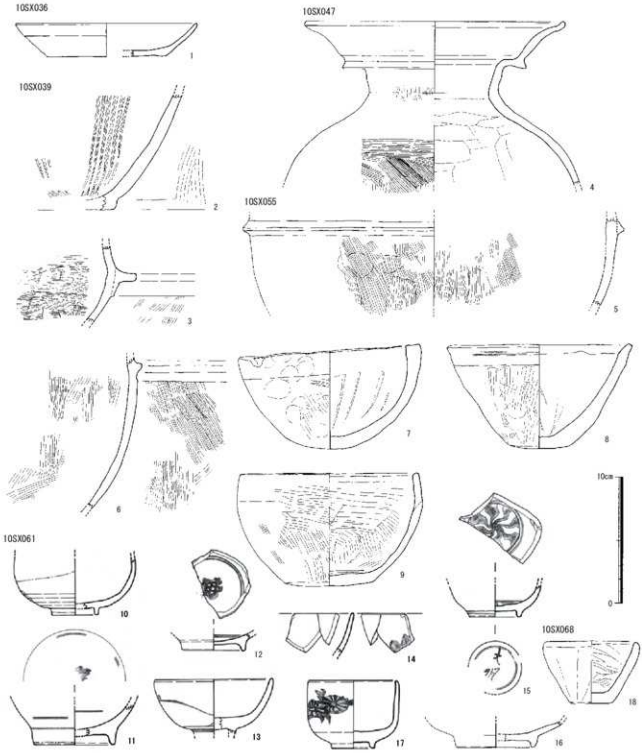


Fig.59　10SX036・039・047・055・061・068 出土遺物実測図（1/3）

以下の角閃石も少量含む。焼成良好。色調は外面が淡茶灰色～にぶい橙色。内面が黄茶灰色～暗茶灰色。内面を丁寧なヘラ削りをしている。外面は刷毛目調整。口縁部はやや内弯気味に立ち上がる。口縁部に一部欠損はあるがほぼ完形。8は口径14.5cm、器高8.5cm、底径4.5cm。胎土は、4mm以下の白色粒子を多く含み、1mm以下の茶色粒子を少量含む。焼成は良好。色調は茶灰色。内面はヘラ削りをしているが、その後摩耗している。底部に回転状のヘラの痕跡がある。口縁部は外反している。残存状況として底部は残っているが他の部位は1/6程度。9は口径14.0cm、器高8.9cm、底径7.0cm。胎土は、5mm以下の

白色砂粒を多く含み粗い。赤茶色の砂粒も若干含む。焼成はやや良好。色調は茶灰色～にぶい橙色。内外面を刷毛目調整する。

10SX061 出土遺物 (Fig.59)

国産陶器

椀(10)　残存高4.6cm、復元底径3.6cm。体部が丸みを帯びて立ち上がり内弯している。素地は赤褐色を呈し、0.1mm以下の砂粒を含む。釉調は内外面に薄く緑灰色釉を施釉する。焼成はやや良好。

肥前系磁器

椀(11～16)　11は残存高3.1cm、復元底径6.4cm。染付椀。いわゆる広東椀と呼称されるタイプ。12は底部破片。残存高1.3cm、復元底径4.6cm。内面見込み部に藍色の呉須で手書き五弁花文を描く。そのまわりに圏線を2重に巡らす。内面は透明釉だが、外面は緑灰色釉を施釉している。外面青磁のタイプかと思われる。13は椀の破片。くらわんか茶碗タイプ。復元口径9.2cm、器高4.4cm。呉須は暗紺色で、外面に花卉文を描く。14は椀の破片。残存高3.1cm。外面にやや暗い藍色の呉須により、草花文らしきものを描いている。15は椀の底部破片。残存高2.55cm、復元底径3.8cm。ややぼんやりした藍色の呉須で内外面に絵付けを施す。内面見込みに二重圏線を描き、その中に捻りを描いている。外面は高台部に二重圏線、底部外面には「大明」を描く。見込み部に釉溜まりが出ている。16は内面に施釉を施していないもの。残存高1.9cm、復元底径5.9cm。外面には暗紺色の呉須により高台部に1重の圏線を絵付けしている。釉の表面には細かい貫入が入る。

湯飲み椀(17)　復元口径7.0cm、器高5.4cm、復元底径3.4cm。素地は密で、堅く焼き締まる。白色を呈し、0.1mm以下の黒色粒子を少量含む。焼成は良好。釉調は青紺色の呉須により絵付けした後に、青みがかった透明釉を施している。外面に草花文を絵付けする。器形としては筒型湯飲み椀と考える。

10SX068 出土遺物 (Fig.59)

弥生土器

鉢(18)　復元口径7cm、器高4.9cm、底径3.4cm。小型の鉢か。胎土は3mm以下の白色砂粒と1mm以下の白色粒子を多量に含む。焼成はやや良好。色調は茶灰色だが、外面は焼成時の影響で部分的に黒褐色化している。調整は外面を縦方向のヘラ削りをしてナデ調整で仕上げている。内面は刷毛目調整。

10SX074 茶褐色土出土遺物 (Fig.60)

瓦質土器

甕(1、2)　1は口縁部破片。直線的な体部から直上した口縁部。残存高7.4cm。胎土は5mm以下の白色粒子を大量に含み、他にガラス質、赤橙色粒子、金色雲母片、茶色粒子などを少量含む。焼成は良好。色調は淡灰色。内面は刷毛目調整後に横ナデ、外面は斜め方向の刷毛目調整で、口縁部端部周辺は横ナデによって仕上げる。大甕の口縁と思われる。2も1と同様な口縁部破片。残存高8.65cm。胎土は、1mm以下の白色粒子、金雲母を少量含む。焼成は不良。色調は淡茶灰色。ただし、断面はサンドイッチ構造になっており、中心部は黒灰色を呈している。内面は表面が剥離しており、調整は不明。外面は頸部まで刷毛目調整で、口縁部近くまで横ナデ調整。

釜(3)　口縁部破片。残存高5.5cm。胎土は5mm以下の白色粒子、0.2mmの金色雲母片を含む。焼成、やや不良。燻しはほとんどかかっていない。内面・外面は刷毛目調整を行い、口縁端部は横ナデ調整を行う。山村編年の釜Bと推定される。

国産陶器

甕(4)　口縁部の破片。復元口径16.6cm、残存高5.0cm。胎土はやや粗く、1mm以下の白色粒子を少量含む。焼成は良好。外面の還元が進む。色調は内面が黒灰色、外面は赤褐色～茶褐色。内外面は横ナ

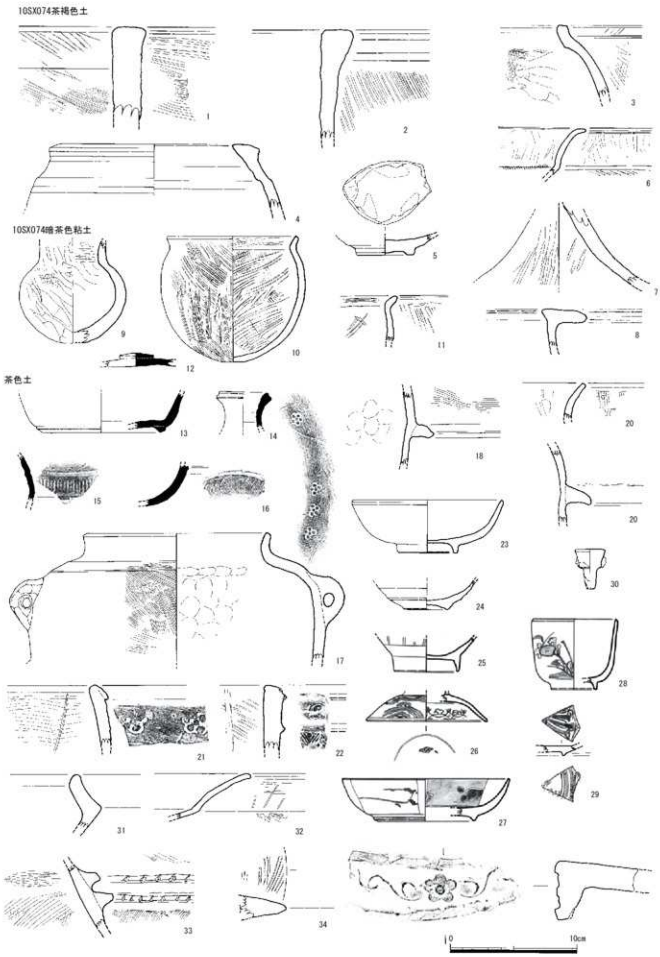


Fig.60　10SX074・茶色土出土遺物実測図（1/3）

デ調整をする。

皿(5)　底部の破片。残存高1.6cm、復元底径4.4cm。素地は密。1mm以下の茶色粒子、白色粒子を含む。釉調は灰白色の光沢がある釉を薄く施釉する。内面に胎土目の目跡が3カ所あり。高台は削りだしの強弱によって畳付の幅が一定でない。

弥生土器

高坏(6、7)　6は口縁部の破片。残存高3.7cm。内外面の調整は横ナデのあとに縦方向の細かいヘラミガキを施す。色調は黄橙色。7は脚部破片。胎土はやや粗く、3mm以下の白色粒子を多量に含む。焼成は良好。色調は、外面は丹塗りのため濃赤橙色。内面は淡橙茶褐色、断面は淡暗灰色。内面に刷毛目調整のコテ当て痕跡が残る。外面は縦方向に綿密にヘラ磨いてから、丹を塗っている。

甕(8)　口縁部破片。甕a。胎土はやや粗、4mm以下の白色粒子を多量に含む。色調は明橙色。

10SX074暗茶色粘質土出土遺物(Fig.60)

古式土師器

壺(9)　残存高7.7cm。頸部から口縁部にかけて欠損している。胎土はやや粗。3mm以下のガラス質粒子と1mm以下の白色粒子を多く含む。1mm以下の金色雲母片を少量含む。色調は暗橙褐色。外面は縦方向の刷毛目調整の後に、太めのヘラミガキを施す。内面は丁寧にナデ調整をするが、頸部は横方向の刷毛目調整を施す。小型丸底壺の在地模倣品か。

鉢(10、11)　10は復元口径10.2cm、器高10.0cm。胎土はやや密。2mm以下の白色粒子を多く含む。色調は内外面ともに淡黄褐色。外面の体部の一部と内定面の一部が黒褐色に変化している。内外面が刷毛目調整。口縁部は横ナデ調整。残存率1/2程度。西新町式に相当すると考えられる。11は口縁部破片。残存高3.65cm。くの字形口縁。胎土はやや粗、4mm以下のガラス質粒子と1mm以下の白色粒を少量含む。焼成は良好。色調は内外面淡黄色。内面は刷毛目調整、外面は刷毛目調整の後に横ナデ調整をする。

茶色土出土遺物(Fig.60・61)

須恵器

蓋(12)　摘み部の破片。残存高1cm。扁平な摘みの直径2.6cm。焼成・還元ともに良好。色調は灰白色。蓋cか。

坏c(13)　残存高3.1cm、残存底径10.2cm。口縁部を欠損する。胎土は密、1mm以下の白色粒子をごく少量含む。焼成・還元はやや良好。色調は暗灰色を呈する。貼り付け高台はやや外側に張る。

壺(15)　15は体部の破片。焼成・還元ともに良好。色調は灰青色。外面に板状工具を使って連続文を施している。

甕(16)　16は体部の破片。体部中位に2mm程度の突帯が巡る。突帯の下には波状文が描かれる。胎土は0.5mm以下の砂粒を僅かに含む。焼成・還元ともに良好。色調は暗青灰色。

土師質土器

釜(17、18)　17は復元口径14.8cm、残存高10.1cm。体部の両側に把手部が貼り付けで2カ所つく。胎土は0.5～1mmの淡白褐色の砂粒を多く含む。焼成は良好。色調はにぶい褐茶色。部分的に煤がついている箇所は黒褐色を呈する。外面は刷毛目調整、内面は指頭圧痕の後に横ナデ。外面頸部に梅鉢文を3つ連続するスタンプを頸部に沿って押していたと考えられる。18は体部の破片。残存高5.6cm。鍔を貼り付けている。内面は鍔を貼り付ける際に指押さえの痕跡が残る。

甕(19)　口縁部の小破片。焼成はやや不良。色調は灰白色。内外面は刷毛目調整。

瓦質土器

釜(20)　鍔の部位破片。残存高5.6cm。鍔は貼り付けで、やや下方へ内弯している。焼成はやや不良。

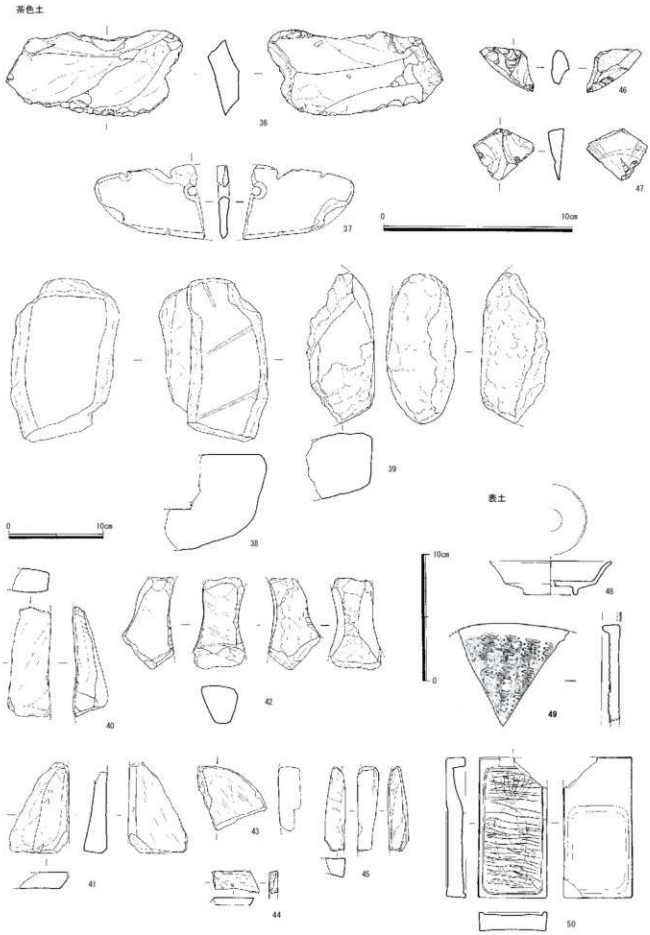


Fig.61　第10次調査茶色土･表土出土遺物実測図（1/4、36.37.46.47は1/2、48.49は1/3）

色調は暗褐灰色。鍔の下面に炭化物が吸着している。

火鉢（21、22）　21は口縁部破片。残存高4.8cm。口縁端部を外側に折り曲げて肥厚させている。胎土は2mm以下の白色粒子を多量に含む。焼成は良好。燻しが内外面にされているが、口縁端部上面だけは燻されていない。色調は暗灰黒色、断面は暗灰色を呈する。内面は刷毛目調整、外面は口縁部の下部に区画帯を設けて、梅鉢文をスタンプしている。22は口縁部破片。外面に口縁下に2重の突帯により区画された区域があり、そこに上部は三巴文、下部は鋸歯文状の文様が見て取れる。

灰釉陶器

壺（14）　口縁部破片。口縁部端部が外側に突帯を貼り付けて、肥厚させている。素地は淡白色で精良。0.5mm程度の白色粒子を僅かに含む。焼成は良好。色調は淡灰白色だが、自然釉が掛かっているところは淡緑灰色を呈する。自然釉が外面、頸部と内面に掛かっている。焼成はやや良好。

国産陶器

椀（23）　復元口径12.0cm、器高4.2cm、復元底径4.8cm。素地は淡灰黄色の0.5mm以下の砂粒を僅かに含む。焼成は良好。釉調は淡緑灰色の透明釉で光沢をもつ。表面に細かい貫入あり。内面見込みを蛇ノ目釉剥ぎをしている。その釉剥ぎをした箇所は赤褐色変化している。

壺（24）　底部破片。残存高2.2cm、復元底径3.6cm。釉調は鈍い褐灰色。

肥前系磁器

椀（25、29）　25は高台の破片。いわゆる広東椀。外面の絵付け文様は2条の縦線が見える。29は小破片。薄い藍色の呉須で絵付けをする染付椀。内外面に絵付けをする。

蓋（26）　破片。釉調は暗青色な呉須で絵付けをする。その後に黄色がかった透明釉を施す。外面は如意頭文と区画文を取り合わせている。内面は口縁から1.5cmほどの幅に幾何学文を連続で描く。内底面にも圏線を描き、見込み部に葉のようなものを描いている。

皿（27）　復元口径13.2cm、器高3.4cm、復元底径8.0cm。釉調はやや暗い藍色をつかって絵付けをしている。内面は見込み圏線から口縁部まで薄く呉須を塗って、墨弾き技法によって文様の縁を白抜きしている。絵柄としては雲をモチーフにしていると考えられる。外面は唐草か。

湯飲み椀（28）　復元口径6.7cm、器高5.6cm、復元底径3.7cm。染付。外面に草花文を深い藍色の呉須で絵付けをする。文様の花の部分が透明釉との関係で化学反応をしたのか、花の部分は透明釉が掛かっていない。全体に呉須は濃い藍色。

国産磁器

栓（30）　最大径2.4cm、器高3.2cm。逆台形部の中位には貫通する孔が開けられており、そこに通されていた金属が僅かに残っている。素地は精良で白色。焼成は良好。釉調は乳白色。逆台形の上部と先細りになっている下部が接合している形状から栓と推定できる。

弥生土器

壺（31、33）　31は口縁部破片。複合口縁タイプ。33は体部破片。残存高5.1cm。胎土は0.5～1.0mm以下の淡白褐色粒子を多く含み、角閃石を少量含む。焼成はやや良好。色調は褐灰色。二重突帯を巡らして、突帯の上部には刻み目を施す。

高坏（32）　口縁部の破片。外反して大きく開くもの。焼成はやや不良。色調はにぶい褐灰色。内面は摩耗によって調整が不明だが、外面は刷毛目調整の後にミガキ調整をしている。

甕×高坏（34）　口縁部破片。上面をヘラミガキした後に丹塗りをしている。

瓦類

軒平瓦（35）　瓦当面の破片。瓦当の文様は、中央に梅鉢文、周辺に唐草を配置している。焼成・燻

しは良好。

石製品

掻器 (36)　縦 4.7cm、横 9.0cm、厚み 1.6cm。石材は安山岩。色調は暗灰色。

石包丁 (37)　縦 3.9cm、横 5.6cm、厚さ 0.5cm。石材は片岩。色調は暗灰色。石包丁の 1/3 程度の破片。穿孔した孔が 1 カ所確認できる。刃部は若干刃こぼれが認められる。

石臼 (38)　縦 17.2cm、横 11.6cm、厚さ 10.2cm。臼の下部破片だと考えられる。石材は花崗岩。若干だが、平らな面に擂目が観察できる。また、割れたあとに火を受けた時に付着した炭化物も見受けられる。

敲石 (39)　縦 8.0cm、横 3.6cm、厚さ 3.5cm。石材は花崗岩。残存部だけではなんとも言えないが、形状から敲石と考えている。

砥石 (40 ～ 45)　40 は縦 11.6cm、幅 4.5cm、厚さ 2.5cm。石材は砂岩。2 面を使用。色調は灰白色。45 は長さ 8.8cm、横 2.1cm、厚さ 2.0cm。石材は安山岩。3 面を使用している。41 は、縦 9.6cm、横 6.3cm、厚さ 1.7cm。石材は片岩。色調は淡灰色。3 面を使用。42 は縦 9.7cm、横 5.4cm、厚さ 4.0cm。石材は砂岩。色調は淡灰褐色。使用面は 5 面。43 は縦 6.8cm、横 8.4cm、厚さ 2.3cm。石材は安山岩。1 面を利用している。44 は縦 4.9cm、横 2.3cm、厚さ 0.9cm。石材はチャート。色調は暗黄褐色。使用面は 1 面。45 は縦 8.8cm、横 2.1cm、厚み 2.0cm。石材安山岩。色調はにぶい灰青色。使用面は 3 面。

剥片 (46、47)　46、47 ともに黒曜石の剥片。

表土出土遺物 (Fig.61)

国産磁器

皿 (48)　復元口径 9.6cm、器高 2.7cm、復元底径 4.3cm。端反り皿。釉調は透明感のある淡緑灰色。内面見込み部に蛇ノ目釉剥ぎを施す。高台畳付は釉を剥いでいる。

国産陶器

卸皿 (49)　素地は茶褐色を呈し、0.5 ～ 2.0mm の白色粒子を多量に含む。釉調は暗褐茶色。内面に細かく幅 2mm、長さ 5mm 程度の擂目が刻まれている。

石製品

硯 (50)　縦 15.0cm、横 7.2cm、厚さ 2.1cm。一部欠損している。石材は安山岩。使用時に細かくひっかき傷のように横方向の溝を入れている。色調は暗赤紫色。

(5) 小結

(3) で詳述したように、この調査地点の人間活動の痕跡はAT火山層降下以後に始まることがわかった。遺物で確認できる土地利用の始まりは弥生時代中期からである。弥生中期から後期にかけての遺物が調査区全般から少量ながらも出土していることから、周辺地の土地利用にともなう小規模な土地利用がされていた可能性を指摘できる。特に 10SD035 や 10SX055 など調査区の南西部では、弥生後期～末にかけての遺構が集中している。10SD050 の東西溝は弥生時代の遺物が出土しているが、僅かに奈良時代の須恵器も混じっているため、弥生時代に埋没年代をさかのぼらせて考えることには躊躇する。

古墳時代初頭の遺物を伴う遺構は 10SX047 のみであり、土地利用が継続しなかったことを物語っている。

遺構・遺物の分析による上記の土地利用変遷の想定案については、花粉分析による古環境復元の成果にも矛盾しない。(分析については、同報告書内の V-(2) 自然分析の項目を参照のこと) AT 火山灰降下層の上層から第 1 遺構面基盤層までの土層から 4 点サンプルを抽出して分析したところ、「コナラ属アカガシ亜種やシイノキ属といった暖温帯性常緑広葉樹林 (いわゆる照葉樹林) の構成様相が含まれていないことから、約 8500 年前に位置づけられる」という成果が得られた。AT 火山灰降下から縄文時代に

かけての土地形成において、このあたりは湿地や河川沿いの開けた地域になっており、背後には丘陵をもつ古環境だったと推定できる。近接する殿城戸遺跡第８次調査で検出されたAT降下火山灰層の上層に広がっている黒色粘質土から縄文時代の石器が検出されていることも、先述の環境と併せて考えると理解しやすい。

時代が下って中世後期になると、土坑や小穴群といった土地利用がなされるが遺物量は依然少量である。

この調査区で土地の利用が明確にわかるのは江戸時代後期から末にかけてである。この段階で、南北方向の溝 10SD016 が掘られる。これは土地の区画的な意味あいを持つ溝であった可能性が高い。現在の土地の境もちょうどこの溝と軸を同じくしているのがその証左になろう。区画された土地内では、井戸や埋甕、土坑などが掘られており、生活空間として利用されたことがわかる。

10SE040、10SE010、10SE015 はそれぞれ出土遺物からは、大きく江戸時代後期～末という括りしかできないが、それぞれ瓦積み（040）、石積（010）、木枠（015）と井戸枠の様式と規模が違うので場合によっては、併存して利用の違いという場合も想定できる。井戸同士の距離が 16 ～ 18m でほぼ等距離にあるのも土地利用に関する区画が存在していた証拠のひとつだろう。埋甕遺構の 10SX020 と 10SX25 が井戸の並びの軸線（010 と 015 を結んだもの、おおよそ E-23°-S と南へ傾く）からおおよそ 9m の空間を開けて並列しているのも意味があると考えている。残念ながらこの区画に伴う住居跡を検出できていないため、生活空間の復元までは出来なかった。

建物跡としては、10SX060 が基礎地業の跡として検出されているが、先述の軸線よりずれていることもあり、おそらく近世末～近代までに建てられたものだと思われる。

その後、この土地は調査直前には畑地として利用されており、土地の西側には農作業小屋が建てられ利用されていることがわかっている。10SE001 や 10SX039 を切っている井戸なども近現代で使われていたものだと考えている。

今後の課題としてはこの殿城戸・脇道地区の AT 火山層の広がりの確認、また大佐野集落の江戸時代後期～末から現在までの土地利用までの変遷を追っていくことがあげられる。

註

(1) 福岡県地理全誌によれば、二日市所在瓦屋として行徳利右衛門の名前があがっている。この瓦に押された「二日市利右ェ門」との関連性については現在調査中である。

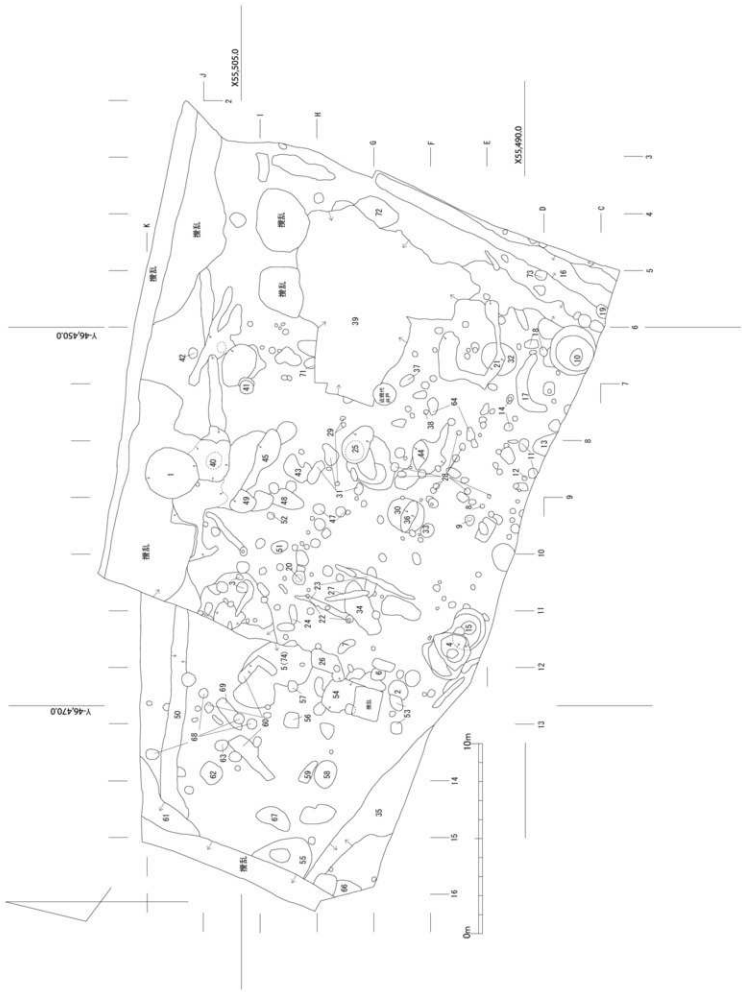


Fig.62　第10次調査遺構略測図（1/200）

表13　殿城戸遺跡第10次調査　遺構一覧表

※「遺構面」で未記入のものは、1面目および遺構面不明のものを含む。

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	時　期	地区番号
1	10SE001	井戸		灰色粘質土→暗灰褐色土→灰色土（花崗岩の風化土混じり）	40→1	江戸末期～明治時代	J8
2		井戸		明茶色土	2→S3	江戸末期～明治時代	F12
3		小穴				弥生後期～	I10
4	10SE004	土坑		黄褐色土	15→4	近代～	E11
5		たまり状遺構	S-74と同一遺構	茶灰色土	36→5	弥生後期～	H11
6		たまり状遺構		明茶色土			F12
7		たまり状遺構		灰茶色土			G11
8		小穴				近代～	E9
9		小穴	柱痕跡あり？				E9
10	10SE010	石組み井戸		青褐色粘質土→灰褐色土→明茶色土→灰茶色土（枠内）		江戸後期～	C6
11		小穴群				弥生時代～	D8
12		小穴					D8
13		たまり状遺構				中世～	D8
14		小穴群				近世～	D7
15	10SE015	井戸		灰褐色土→明茶色土→暗灰色土	15→4	江戸後期～	E11
16	10SD016	溝	南北溝	茶色砂→暗灰色粘質土→茶灰色土		江戸後期～	C5～F3
17		たまり状遺構					D6・D7
18		小穴群					D6
19		小穴				弥生時代～	C6
20	10SX020	焼窪				近世末	H10
21		溝	攪乱の可能性もある		32→21	近現代	D6～
22		小穴群					G10～H10
23		小溝群					F10～H10
24		たまり状遺構					H11
25	10SX025	焼窪				近世末～	G7・8
26		たまり状遺構					G11
27		溝					G10
28		小穴群				中世～近世	EF7～8
29		小穴群				中世～	G7～G8
30	10SE030	土坑				中世後期～	F9
31		たまり状遺構群					G8
32	10SE032	土坑			32→21	中世～近世	D6
33	10SE033	土坑					F8・9
34	10SE034	土坑		炭混じり灰褐色土	34→27	弥生中～後期	F・G10
35	10SE035	溝				近世後期～末期	F13～G15
36	10SX036	攪乱	S-8に伴うケーブルアンカー		30→36	現代	F9
37		小穴					F6
38		小穴				中世後期～	F7
39	10SX039	たまり状遺構		暗灰色土	72→39	江戸末期～	E5～E6
40	10SE040	井戸	瓦積み	暗青褐色土（銅方埋土）→暗茶色土（枠内下層）→黄褐色土（枠内上層）→茶色土	40→1	江戸後期～	I8
41		土坑				江戸時代～	I6, 7
42		小穴				弥生時代～	J6
43		たまり状遺構			43→31	弥生時代～	H8
44		たまり状遺構				近世～	F6
45	10SE045	土坑			46→45	中世～	H7・8
46		土坑			46→45		H7
47	10SX047	小穴群				古墳初頭	G9
48		たまり状遺構				弥生時代～	H8・9
49		たまり状遺構				中世後期～	I8・9
50	10SD050	溝	東西方向に伸びる。途中攪乱で乱される。		40・50→61	奈良時代	J14～I5
51		土坑				弥生時代～	H9
52		小穴				弥生時代～	H9
53		小穴群			2→S3	弥生時代～	F12・13
54	10SE054	たまり状遺構					G12
55	10SX055	たまり状遺構				弥生時代後期～末期	H15
56		小穴群			56→54	弥生時代～	G12
57		小穴			74→57	江戸後期～	H12
58		焼窪				近現代	G13
59	11SE059	土坑				弥生中期～	H13
60	10SX060	石組み遺構	建物基礎か	明茶色粘質土			H11～I13
61	10SX061	落ち込み			50→61	江戸後期～	J13・14
62		土坑				近世～	I13
63		小穴					I13
64		小穴群				弥生時代～	E7
65	欠番						
66		たまり状遺構					G15
67		たまり状遺構				弥生時代	H14
68	11SX068	小穴群				弥生時代	I15～J13
69		土坑				弥生時代	I12
70	欠番						
71		たまり状遺構				弥生時代	H6
72		たまり状遺構				中世～	G4
73		小穴			16→73	近世～	D5
74	10SX074	たまり状遺構		暗褐色粘質土→茶褐色土	74→60・57	近世～	H11・12

表14　殿城戸遺跡第10次調査　出土遺物一覧表

S-1

肥前系陶磁器	碗	破片
国産陶器	擂鉢	甕　破片(唐津)
瓦	類	平瓦

S-1 灰色粘質土

肥前系陶磁器	碗	破片

S-2

肥前系陶磁器	碗	甕　破片
弥生土器	碗	壺
瓦	類	平瓦

S-3

土師	器	壺

S-4

須恵	器	壺
瓦質土器	器	火鉢
肥前系陶磁器	碗	皿
国産陶器	擂鉢	鉢
瓦	類	平瓦　焼し瓦

S-5

弥生土器	碗	壺

S-5 茶灰色土

土師	器	壺

S-6

土師	器	破片

S-7

土師	器	破片

S-8

肥前系陶磁器	碗	破片(近代～)
瓦	類	焼し瓦

S-9

土師	器	破片

S-10 明茶色土

須恵	器	甕片　壺
土師	器	破片
土師質土	器	鍋
肥前系陶磁器	碗	破片
国産磁	器	底部(壺)
石	製	砥石(2)

S-10 灰茶色土

須恵	器	壺
瓦質土	器	破片
肥前系陶磁器	碗	皿　大皿c
国産陶器	鉢	甕(落し蓋)　椀(緑釉)　擂鉢　破片(黒褐釉)
国産磁	器	壺(一輪挿し)
石	製	品 砥石

S-10 灰褐色土

土師質土	器	擂鉢
肥前系陶磁器	碗	破片
国産陶器	碗	壺蓋(褐釉)　花瓶　皿(見込み蛇ノ目釉剥ぎ)

S-10 青橋色土

土師	器	破片
国産陶器	碗	皿(見込み胎土目)
肥前系磁器	碗	椀
瓦	類	焼し瓦

S-11

土師	器	破片

S-12

土師	器	破片

S-13

土師質土	器	擂鉢　平橋底部

S-14

土師	器	壺　破片

S-15

土師	器	破片
肥前系陶磁器	碗	椀

S-15 灰色砂

土師	器	破片
肥前系陶磁器	碗	破片

S-15 橙茶色土

須恵	器	壺
土師	器	破片
瓦質土	器	鍋
肥前系陶磁器	碗	椀　皿
国産陶器	碗	壺　擂鉢
国産磁	器	壺
弥生土器	碗	高杯
瓦	類	焼し瓦

S-16 茶灰色土

須恵	器	高杯(身)　鍋
土師	器	鍋
土師質土	器	鍋
瓦質土	器	鍋　鉢　擂鉢
国産陶器	碗	椀　破片(黄釉)
弥生土器	碗	高杯　鍋

S-16 暗灰色粘質土

須恵	器	破片
土師	器	破片

S-17

瓦	類	破片

S-18

土師	器	破片

S-19

弥生土器	碗	破片

S-20

瓦質土器	碗	鍋
土製	品	瓦玉

S-21

土師質土器	碗	鍋
弥生土器	碗	鍋

S-22

土師	器	破片

S-23

土師	器	破片

S-25

瓦質土器	碗	大鍋

S-25 茶色土

須恵	器	鍋
土師	器	$Fe_2(I)$
瓦質土器	碗	鍋　鍋
肥前系陶磁器	碗	椀
国産陶器	碗	椀(茶釉)

S-25 明茶色土

瓦質土器	碗	鍋
肥前系陶磁器	碗	大皿(色絵)
国産磁器	碗	椀

S-26

土師	器	破片

S-27

土師	器	破片

S-28

土師	器	鍋　破片
土師質土器	碗	鍋
国産陶器	碗	椀(褐釉系)
弥生土器	碗	鍋(底部)

S-29

土師	器	破片
瓦質土器	碗	鍋
国産磁器	碗	破片

S-30 灰褐色土

土師	器	小皿a×$Fe_2(I)$　高杯
龍泉窯系青磁	碗	椀：III(1)
土師質土器	碗	鍋　釜
瓦質土器	碗	破片
肥前系陶磁器	碗	破片
弥生土器	碗	壺(孔あり)　鍋(底部)
土製	品	不明土製品

S-31

土師	器	破片

S-32

須恵	器	鍋　壺
土師	器	$Fe_2(I)$
瓦質土器	碗	擂鉢
石製	品	磨石　砥石
土製	品	土玉

S-33

土師	器	破片
石製	品	不明石製品

S-34

弥生土器	碗	鍋(底部孔)

S-35

須恵	器	高杯
土師質土器	碗	鍋
肥前系陶磁器	碗	皿　椀　藤数み茶椀　大皿c
国産陶器	碗	椀(褐釉)　椀(飴釉)　椀(白色釉,貫入あり)　燭台　鍋　擂鉢
白磁		碗：IV(1)
弥生土器	碗	鍋
瓦	類	焼し瓦
石製	品	石臼

S-36

土　師	器甕(1)
須 恵 器	器破片
瓦	類(埋し瓦

S-37

土　師	器破片

S-38

土　師	器破片

S-39

土　師	器小皿(1)
土 師 質 土	器埦
瓦 質 土	器鍋
白	磁皿：VI×VIII(1)

S-40 茶色土

肥 前 系 陶 磁	器壺×瓶
国 産 陶	器椀(白色釉) 破片
瓦	類(埋し瓦

S-40 暗青褐色土

瓦 質 土	器鉢 火鉢
肥 前 系 磁	器鉢
国 産 陶	器壁 壺 擂鉢 破片
弥 生 土	器壁 壺
瓦	類(埋し瓦
石 製	品紡石

S-40 黄褐色土

瓦	類(埋し瓦

S-41

土 師 質 土	器壁 擂鉢
瓦 質 土	器破片

S-42

弥 生 土	器破片

S-43

弥 生 土	器壁

S-44

肥 前 系 陶 磁	器椀

S-45

土　師	器壁
土 師 質 土	器鍋 擂鉢
国 産 磁	器皿

S-46

土　師	器破片

S-47

土　師	器古式土師器：壺
弥 生 土	器壺

S-48

弥 生 土	器破片
石 製	品sub-f

S-49

土　師	器破片
韓 系 軟 系 青 磁	椀：上田C-2類(1)

S-50

須　恵	器壁
弥 生 土	器壁

S-51

弥 生 土	器破片

S-52

弥 生 土	器破片

S-53

弥 生 土	器壁

S-54

土　師	器破片
弥 生 土	器破片

S-55

弥 生 土	器壁 壺 鉢

S-56

弥 生 土	器破片

S-57

肥 前 系 陶 磁	器皿
弥 生 土	器破片

S-58

土　師	器破片
国 産 陶	器擂鉢

S-59

弥 生 土	器壁 壺×高坏

S-60

土　師	器破片
弥 生 土	器破片

S-61

土　師	器壁
瓦 質 土	器埦
肥 前 系 陶 磁	器形彫刻刷毛目(外面花形文) 染付椀(外面花形文)
	染付椀（内面蛸文・大明銘） 広東椀
国 産 陶	器小皿 椀
国 産 磁	器白磁
弥 生 土	器壁(底部4)
そ　の	他土管

S-62

土　師	器壁
肥 前 系 陶 磁	器破片

S-63

土　師	器破片

S-64

弥 生 土	器破片

S-66

土　師	器破片

S-67

弥 生 土	器破片

S-68

弥 生 土	器高坏 小型鉢

S-69

弥 生 土	器壁口縁

S-71

弥 生 土	器破片

S-72

土 師 質 土	器鍋

S-73

土　師	器破片
弥 生 土	器脚台

S-74 茶褐色土

土 師 質 土	器壺
瓦 質 土	器壁 火鉢 鍋類
国 産 陶	器皿(内面,砂目痕) 壁
弥 生 土	器高坏(丹塗り)

S-74 暗茶色粘質土

古 式 土 師	器壺 鉢

茶色土

須　恵	器壺：坏c 高坏 壁 壺口縁 脚
土　師	器坏a(1) 高坏(薄い) 皿a(1) 壁 鉢 把手
土 師 質 土	器壁 高発 こね鉢(口縁) 擂鉢 七輪(2) 羽釜 竈焚
瓦 質 土	器火鉢(ｽﾀﾝﾌﾟ文) 擂鉢 釜
灰 釉 陶	器小皿
肥 前 系 陶 磁	器 小椀(外面格子文) 染付椀(外面青磁) 型形椀
	染散み椀 大椀 皿 皿(墨弾き) 染付皿(ﾌﾟﾗﾝﾀ)
	大瓶 徳利 注口
国 産 陶	器小坏 椀 大椀 擂鉢 土瓶 壺
国 産 磁	器 椀（外面唐草） 広東椀 紅丸(赤) 盃
	碗片(染付) 碗片(近現代)
白	磁椀：碗片
弥 生 土	器高坏 壁 壁(体部突帯) 壁×高坏 壁(口縁)
瓦	類平瓦(近現代) 平瓦(埋し瓦) 軒平瓦(埋し) 道具瓦(埋し)
石 製	品砥石 砥石(ﾌﾟｰﾄ) 磨石(火を受けている) 石臼
	石包丁 sh-f(2) ｽﾗｲﾄﾍﾞｰ

黄土

土　師	器壁
土 師 質 土	器壁 七輪(白)
肥 前 系 陶 磁	器染付椀(見込み蛇ノ目釉剥ぎ) 椀 (近現代)
	大皿(見込み蛇ノ目釉剥ぎ) ﾌﾟﾗﾝﾀ染付皿
国 産 陶	器ろくろ皿 壁 擂鉢
国 産 磁	器土瓶蓋 皿
白	磁皿：梅皮ろ皿(1)
弥 生 土	器鉢
瓦	類平瓦 埋し瓦
石 製	品硯 紡石
そ　の	他貝

カクラン

肥 前 系 陶 磁	器ﾍﾞﾝｹｲ輪染付椀
国 産 陶	器擂鉢
瓦	類埋し瓦

Z(出土地不明)

須　恵	器高坏
土　師	器壁
土 師 質 土	器擂鉢
瓦 質 土	器火鉢
肥 前 系 磁	器破片
弥 生 土	器高坏 壁
石 製	品sh-f

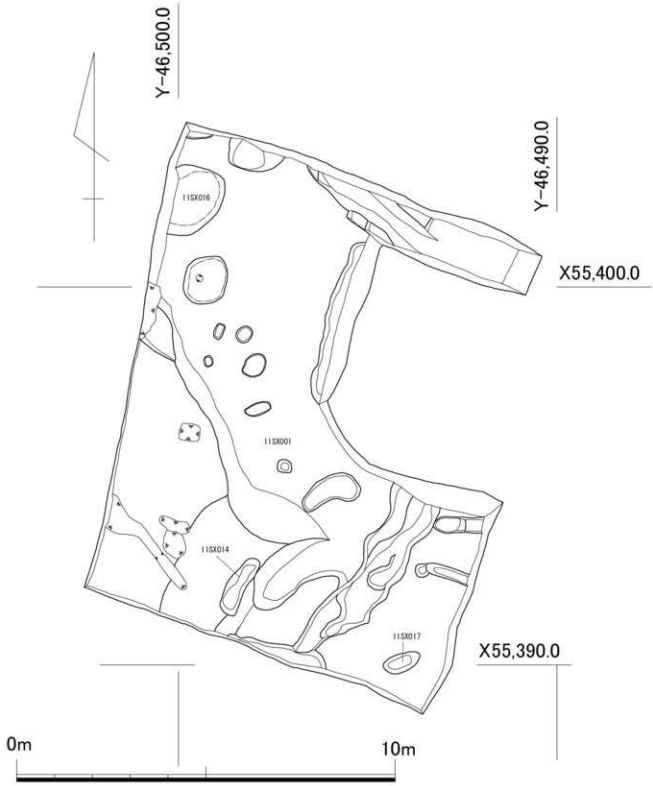


Fig. 63　第 11 次遺構全体図（1/100）

8、第 11 次調査

(1) 調査に至る経過

調査地は太宰府市大字大佐野字殿城戸 182 番地にあたり、背振山系から西に派生する丘陵の端部、標高 40m の位置にあり、基盤層は花崗岩の風化土およびその二次堆積層からなる。遺跡は丘陵端部の谷地および昭和期に造成のため削平された丘陵部であり、調査区西の第 1 次調査側は遺構面が削平され存在しなかった。調査は山村信榮が担当した。調査期間は平成 20（2008）年 5 月 19 日から 5 月 31 日で、調査面積は 95 ㎡であった。

(2) 基本層位および検出遺構

調査区は谷地にあたり、深い所では造成土および旧耕作土下約 80cm の深さで南から北東に流れる旧河川 11SX001 が検出された。黒灰色シルトを主体とする堆積土中からは 6 世紀を前後する須恵器が一定量出土した。重機による河床の掘り下げ時に白磁椀が出土していることから、河川の最終埋没時期は平安後期以降に想定される。地表下約 1m で花崗岩風化土の岩盤が見つかった。河床には 11SX014・017 のような小規模な掘り込みが見られ、古墳時代には水辺の貯蔵施設として利用されていた可能性も否定できないが、ほとんどが水流によるたまり状遺構で、明らかに人為性を帯びた古代以前の遺構は指摘できない。谷部は明治時代以降になって溝や井戸が掘られたり、第 4 紀層の鳥栖ローム粘土で埋められたりして、昭和になって家屋が建てられ、甕が埋められたりして（11SX016）、現在に至っている。

(3) 出土遺物

その他の遺構出土遺物

11SX002 出土遺物（Fig. 64）

須恵器

坏 a（1） 高さ 1.7cm 以上、底径 7cm の法量を測る。硬質な焼成で淡灰色を呈する。胎土は精良。全体に薄手で牛頭産以外の製品である可能性がある。

11SX007 出土遺物（Fig. 64）

瓦質土器

火鉢（2） 桶形の A タイプのもので、高さ 4.3cm 以上の法量を測る。口縁端部が厚い形状で、焼成は軟質でざらつく。色調は暗灰色を呈する。近世以降の所産か。

11SX008 出土遺物（Fig. 64）

白磁

椀（3） V-4 × VIII-2.3 類。高さ 3.6cm 以上の法量を測る。L 字に屈曲する口縁を持つ。光沢と透明度のある釉が施される。河川堆積の終末の時期を示す遺物である。

11SX011 出土遺物（Fig. 64）

古式土師器

甕（4） 外面に横方向の櫛描き状の条痕を持つもので、内面は磨耗のため調整は不明だが、プロポーションから古墳時代初頭頃の甕と考えられる。厚みがあり在地産の製品か。

11SX016 出土遺物（Fig. 64）

国産陶器

甕（5、6） 高取系の半胴甕で、口径 21.2cm、高さ 13.6cm 以上、底径 10.8cm の法量を測る。肩の部位に白掛けした後に波状文を施し、その後に飴釉を上掛けしている。底部は内外面ともに目跡が見られる。光沢が強く近現代の所産。

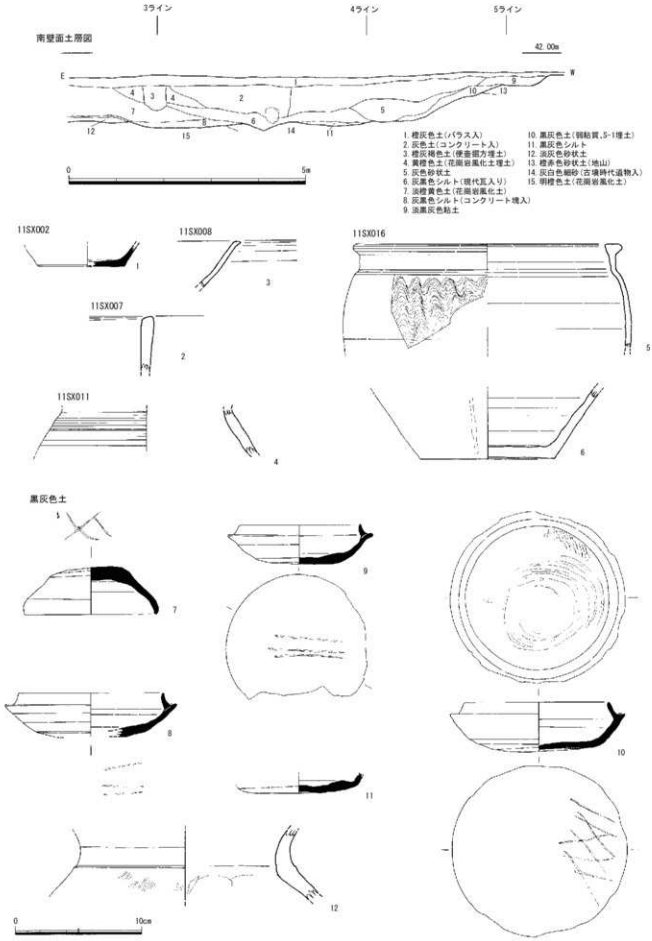


Fig.64　第11次調査土層実測図 (1/80) 及び出土遺物実測図 (1/3)

土層出土遺物

黒灰色土出土遺物（Fig. 64）

須恵器

小蓋（7）　口径 10.3cm、高さ 3.7cm の法量を測る。やや軟質な焼成で灰色から茶灰色を呈する。天井部はヘラ切りのままで井桁状のヘラ記号が施される。

坏身（8 ～ 10）　8 は口径 13.6cm、高さ 3.5cm 以上、9 は口径 11.4cm、高さ 3.1cm、10 は口径 13.8cm、高さ 3.9cm を測る。焼成は硬質で暗青灰色を呈し、底部に 8・9 は 3 本の平行線、10 は「×××」と 2 条の平行線のヘラ記号を施す。10 の内底面には同心円の当て具の痕跡がある。古墳時代後期の所産である。

坏 a（11）　高さ 1.5cm 以上、底径 9.5cm を測る。灰色を呈し硬質な焼成で、胎土は精良。8 世紀中葉以降の所産である。

甕（12）　高さ 5.6cm 以上、くびれ部外径が 16.6cm を測る。く字に屈曲する頸部片でくびれの下部に沈線が廻る。胴部内面は横位のヘラ削りが施される。古墳時代中期以降の所産である。

（4）小結

山裾に形成された小規模な谷の開口部にあたる地点であり、周辺に展開した集落の関連遺物が出土した形となっている。古墳時代 6 ～ 7 世紀の須恵器が比較的まとまって出土しており、至近に当該時期の遺構があったものと考えられる。昭和 55（1980）年に福岡県が作成した遺跡分布図の事前調査では、本地点の南西側にかつてあった丘陵で古墳時代の須恵器が採取されていることと関連する現象と言える。この谷が埋められて積極的に利用され始めたのは、出土遺物から近代以降と見られる。

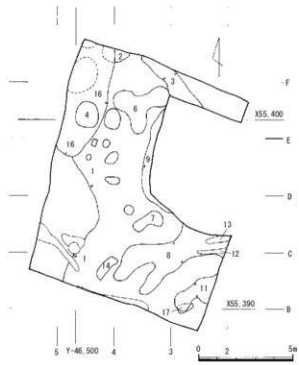


Fig. 65　第 11 次調査遺構略測図（1/200）

表15　殿城戸遺跡第11調査　遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況（左→新）	重複関係（左→新）	時　期	地区番号
1	11SX001	旧河川				古代～	
2	11SX002	溜まり状				近代～	F4
3		溝				近代～	F3
4		井戸（茶灰色粘土）				近代～	E4
6		溜まり状（黒灰色土）				古代～	E3
7	11SX007	溜まり状（黒灰色土）				近世～	C3
8	11SX008	溜まり状（黒灰色土）				11c後半～	C3
9		溜まり状（黒灰色土）					D3
11	11SX011	溜まり状（黒灰色土）			17→11		B2
12		溝（赤褐色砂）					C2
13		溝（灰色砂）					C2
14	11SX014	溜まり状（黒色粘土）					B4
16	11SX016	溜まり状（茶灰色土）				近現代	E4
17	11SX017	溜まり状（黒灰色土）			17→11		B2

表16　殿城戸遺跡第11次調査　出土遺物一覧表

S-2

須　恵	器	坏（小切?未分類）　坏a
土　師	器	破片

S-3

土　師	器	破片
国　産　陶	器	壺(胎細)

S-4

須　恵	器	甕　壺
土　師	器	小甕?
瓦	製	平瓦(近世～)

S-6

土　師	器	破片
瓦	製	破片(瓦質,古代～)

S-7

土　師	器	破片
瓦　質　土	器	鍋A-IV

S-8

須　恵	器	坏身IV　小坏a　小甕　甕　壺b　壺×瓶　ハケ
土　師	器	甕　便把手　壺
瓦　質　土	器	陽鉢
石	製	剣；Y-4×VIII-3(1)
弥　生　土	器	中期；甕×底3a　甕口6
瓦	製	平瓦(瓦質,縄目)

S-9

須　恵	器	坏身IV-B　甕
土　師	器	破片

S-11

古　式　土　師	器	壺6　甕
弥　生　土	器	後期；甕　壺(畿内V様式系) 中～後期；甕胞
土	製	dbb-I(1)

S-12

須　恵	器	甕
古　式　土　師	器	甕
弥　生　土	器	中期；甕口6

S-13

須　恵	器	小甕
土　師	器	甕　壺?
古　式　土　師	器	甕

S-16

須　恵	器	甕
土　師	器	破片
土　師　質　土	器	陽鉢
国　産　陶	器	平制甕(1)
国　産　磁	器	梅

黒灰色土

須　恵	器	小蓋IV　坏a2　坏身IV-B　坏身III-B×IV-A　大甕
土　師	器	甕

表土

須　恵	器	坏蓋III-A　小甕　甕
土　師	器	坏　壺　丸底壺
古　式　土　師	器	高坏脚部3
国　産　陶	器	壺　土瓶(緑釉)
国　産　磁	器	肥前系染付；丸碗(くらわんか手)
白	製	剣；Y-4×VIII-3(1)

脇道遺跡

1、第３次調査

(1) 調査に至る経過

昭和61年度に事業計画決定がなされた佐野地区土地区画整理事業は、それに先立つ埋蔵文化財記録保存調査として、昭和62年度から開始された。ここで報告する殿城戸遺跡第３次調査も平成６年度に事業計画が区画整理課よりなされ、平成７(1995) 年２月１日から平成７(1995) 年３月31日の期間で実施した。対象面積は971㎡、調査面積は500㎡を測り、調査は中島恒次郎が担当した。隣接地である殿城戸遺跡第３次調査とは、事業調整の結果、同時進行にて実施することになった。

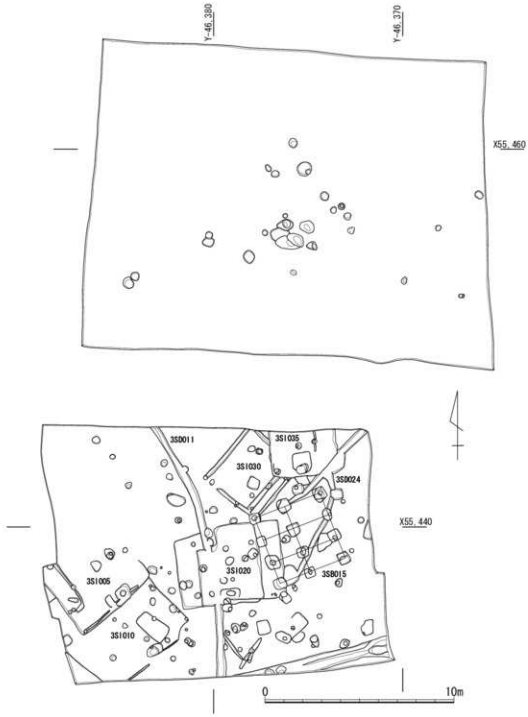


Fig.66　脇道遺跡第３次調査遺構全体図 (1/200)

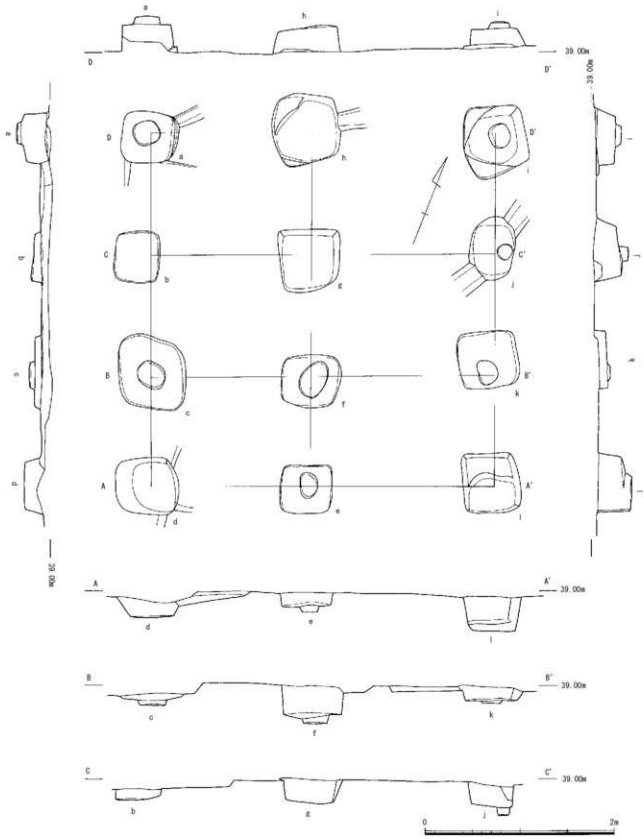


Fig.67　脇道遺跡 3SB015 遺構実測図（1/40）

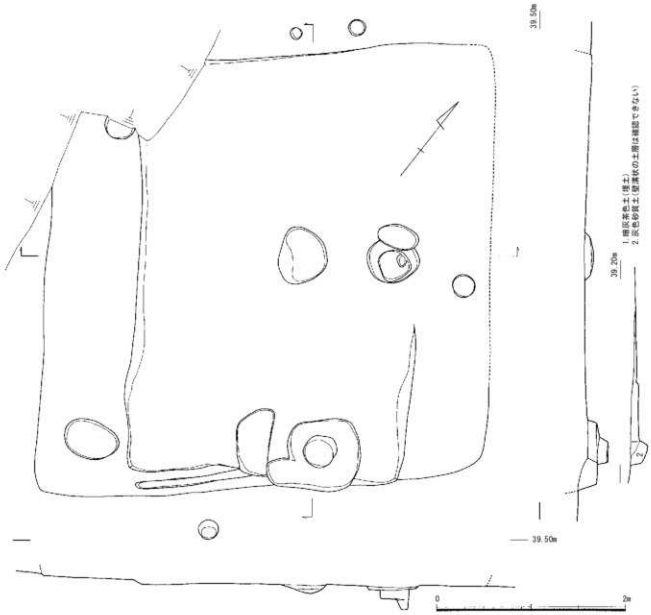


Fig.68　脇道遺跡 3SI005 遺構実測図（1/40）

(2) 基本層位

現地表面から約 0.25m 下位に遺物包含層として茶褐色土が堆積し、その下位 0.5m ほどに遺構が検出できた。したがって、遺構検出時の遺物は、茶褐色土として取り上げている。

(3) 検出遺構（Fig.66）

掘立柱建物

3SB015（Fig.67・70）

調査区東寄りに検出した 2 間×3 間の総柱建物で、柱間から見ると東辺が 1.94m とやや広い。土層観察からみると柱痕跡は一つであることから建替え、修理の痕跡は観察できないが、完掘時に「柱当痕跡」の観察を怠ったため、建築当初の柱痕跡が、土層観察時の柱痕跡と等しい関係であったかどうか判断できていない。建物規模は、梁行 3.62m ×桁行 3.74m を測り、占有面積は 15.539 ㎡、約 4 坪を占めている。桁行からみる建物建造方向は、N21° 10′ 53″W とやや西に向いた建築方向を有している。

竪穴住居

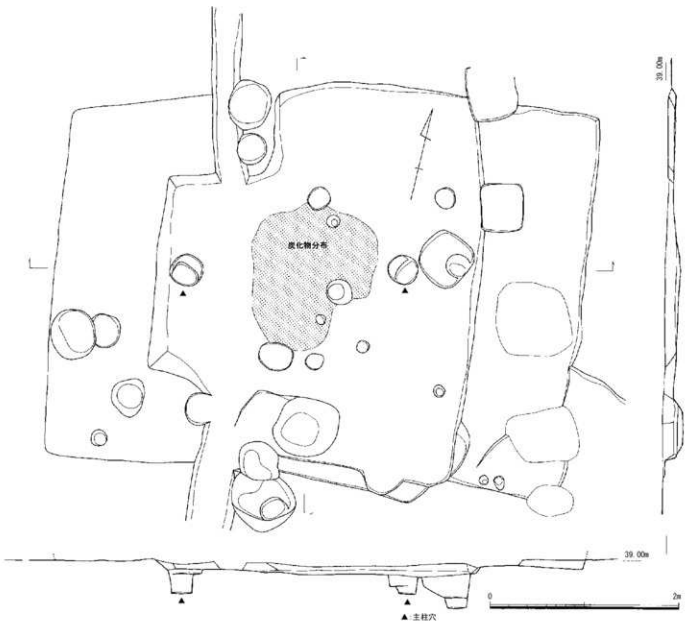


Fig.69　脇道遺跡 3SI020 遺構実測図（1/40）

竪穴住居と認定できたものは２棟で、痕跡から住居と認定したものが３棟ある。後者については遺構検出時に、長方形ないしは壁溝と考えられる痕跡を確認したため、住居として記録収集に努めたが、付帯条件としての柱痕跡の未確認などから、建物と認定するための条件を整備することができなかった。ここでは、遺構形状のみから「建物」であるとして報告する。

3SI005（Fig.68）

調査区南西部にて検出したもので、後述する 3SI010 を切るように検出できた。南北幅 4.60m × 東西幅 4.74m で残存する深さ 0.07m 程度と極めて残存率の低いものであった。そのため遺構北東部はほぼ欠失した状況であり、南東隅ならびに北西隅部分から遺構規模を推定している。主柱と考えられるものが

遺構東部に確認できているが、西部では確認できていない。「ベッド」状遺構の存在から西部にも主柱を想定でき、2本主柱の長方形竪穴住居と考えられる。南部分に0.66m×0.76mの土坑が掘られている。遺構残存状況から断定はできないが、検出時には既に土坑形状は確認できている。

3SI010 (Fig.66)

調査区南西部にて確認したもので、3SI005に切られている。東西幅5.60mを測り、北辺の残存状態が極めて悪いため、遺構規模を掴むに至らなかった。南辺中央部に0.66m×0.94m、深さ0.16mの隅丸長方形の土坑が掘られ、遺構形状から長方形ないしは正方形をイメージさせる状況であったことから竪穴住居の可能性が高いものと判断される。ただし明確な主柱痕跡を確認するには至っていない。

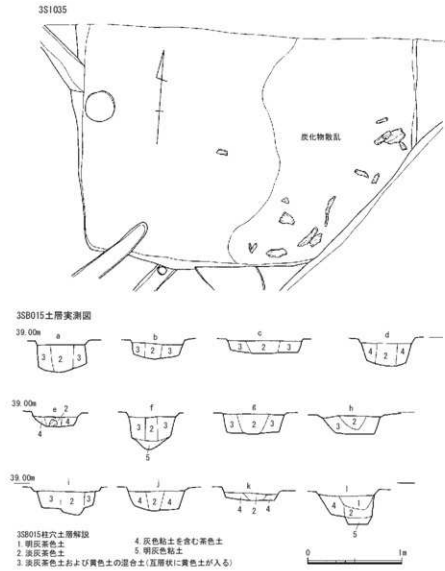


Fig.70　脇道遺跡 3SI035 遺構実測図・3SB015 土層実測図 (1/40)

3SI020 (3SI025) (Fig.69)

調査途上では別遺構として判断し記録を収集していたが、整理段階で一つの遺構としたほうが望ましいと考え、一遺構として報告する。調査区中央部にて検出したもので、3SB015に切られている。東西幅5.60m×南北幅4.24mを測り、残存する深さは0.14mと残りが悪い状況であった。東西両辺に「ベッド」状遺構を付帯しており、主柱2本を有する住居と考えられる。遺構中央部には1.3m前後の不正形に炭化物が散在しており、「炉」であったものと考えられる。主柱間の距離は任意中点間の距離で2.34mを測る。遺構規模から算出される占有面積は23.744㎡、約7.13坪であった。南辺中央部には、0.64m×0.6mの楕円形土坑が掘られており、他の遺構同様に、検出時にすでに確認できている状況であった。

3SI030 (Fig.66)

調査区北辺部分にて検出した溝で四周を囲むものである。東西3.8m×南北3.5mで、南側は二条の溝が検出できている。内部に主柱痕跡が確認できておらず、当初竪穴住居の壁溝と判断していたが、最終的には主柱や他遺構で確認した遺構南辺中央部の土坑も未確認であることなどから、厳密には遺構性格が判断できていない。

3SI035 (Fig.70)

調査区北辺にて検出したもので、調査区によって北辺を欠失している。東西 3.58m を測る。残存している遺構の深さは 0.11m であった。遺構東南隅には木材が散在していたが、加工痕跡が観察できるほど残存状況は悪く、形状を観察するに留めている。

溝

3SD011

調査区中央部を南北に縦断するもので、溝幅 0.5m 前後であった。

3SD024

調査区東半部にて確認したもので、二股に分かれるなど性格を考慮することが困難なものである。

その他の遺構

3SX023

調査区東寄りにて確認したもので、3SI020 の東南隅を切る不正形な窪み (3SX021) の下位に確認した。

3SX028

調査区北西部にて確認した隅丸長方形の土坑状のもので、長軸長 1.00m 前後×短軸長 0.50m 前後を測る。遺構内から顕著な遺物がなかったことから時期を特定できていない。

(4) 出土遺物

掘立柱建物出土遺物

3SB015a 出土遺物 (Fig.71)

弥生土器

高坏×壺 (1)　口縁部の小破片。焼成不良で、摩耗のため調整不明瞭。

3SB015d 掘り方出土遺物 (Fig.71)

須恵器

坏身 (2)　口縁部から体部の 1/6 程度の小破片。体部外面は回転ヘラ削りされるが、灰かぶりのためか表面に細かな凹凸がみられる。体部内面下位にはナデ調整が観察できる。

3SB015f 出土遺物 (Fig.71)

須恵器

坏身 (3)　口縁部の小破片。内面と外面の受部が回転ナデで調整される。焼成・還元ほぼ良好。

3SB015f 掘り方出土遺物 (Fig.71)

須恵器

壺(4)　頸部の小破片。外面には波状文が施され、内外面に灰かぶりがみられる。焼成・還元ほぼ良好。

3SB015g 掘り方出土遺物 (Fig.71)

須恵器

壺 (5)　口縁部の小破片。内外面とも回転ナデされる。焼成・還元ともに良好。

3SB015l 柱痕出土遺物 (Fig.71)

土師器

甕 (6)　口縁部の小破片。口縁端部は内外面ともヨコナデされ、内面下位にはヘラ削り、外面下位にはハケ調整がみられる。

竪穴住居出土遺物

3SI005 出土遺物 (Fig.71)

古式土師器

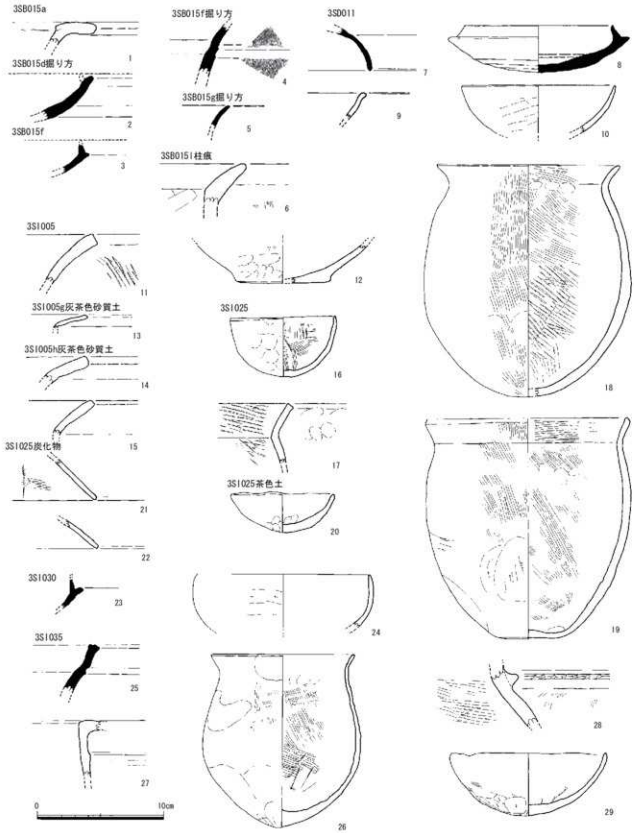


Fig.71　脇道遺跡第３次調査竪穴住居・溝出土遺物実測図（1/3）

甕（11） 口縁部の小破片。内面から口縁端部にかけてヨコナデされ、外面はハケ調整後ヨコナデされる。

壺（12） 底部から体部の約1/3残存。外面はハケ調整後ナデで仕上げられ、内面は工具によるナデ調整がなされる。

3SI005g 灰茶色砂質土出土遺物（Fig.71）

古式土師器

甕（13） 口縁部の小破片。摩耗により調整不明瞭。焼成不良。胎土は軟質で、2㎜以下の砂粒を多く含む。

3SI005 h 灰茶色砂質土出土遺物（Fig.71）

古式土師器

甕（14・15） いずれも口縁部の小破片で胎土に砂粒を多く含む。14・15ともに摩耗が著しいが、外面の一部にヨコナデ調整がみられる。

3SI025 出土遺物（Fig.71）

土師器

小椀（16） 約2/3残存。底部は丸みを帯びた形状で、内面は細かなハケ目がみられ、外面は摩耗気味であるが、指頭圧痕が観察できる。

古式土師器

甕（17～19） 17は口縁部の小破片。内面はハケ目がみられ、外面はヨコナデ調整と一部指頭圧痕が観察できる。焼成良好。18は2/3程度残存し、口径は14.4㎝に復原される。底部は丸みのある形状を呈する。内面は7条を一単位とするハケ調整、外面はやや不明瞭であるが細かなハケで調整される。19の口径は16.15㎝で、底部はやや平坦な形状を有す。外面は摩耗気味で上位はハケ目、下位には削り痕がみられ、内面は細かなハケ目と指頭圧痕が観察できる。

3SI025 茶色土出土遺物（Fig.71）

土師器

椀（20） 約1/2の残存破片。全体がナデで調整され、底部内外面に指頭圧痕がみられる。胎土はやや軟質で、砂粒を多く含む。

3SI025 炭化物出土遺物（Fig.71）

土師器

高坏（21・22） いずれも脚部のみの小破片。21は摩耗気味で調整不明瞭であるが内面には僅かにハケ目がみられる。胎土は緻密で端部内外面は黒褐色に変色する。22は焼成不良で摩耗が著しく調整は不明瞭。胎土は緻密。

3SI030 出土遺物（Fig.71）

須恵器

坏（23） 口縁部から体部の小破片。内外面とも回転ナデ調整される。焼成良好で還元はやや良好。

土師器

椀（24） 口縁部から体部の約1/3残存破片。口径は13.5㎝に復原される。全体的に摩耗気味であるが、内面はヨコナデ、外面には不定方向の削り調整が観察できる。

3SI035 出土遺物（Fig.71）

須恵器

壺（25） 口縁部の小破片。外面中位に凹凸を呈する。口縁端部と凹凸面の凹面はナデ調整され、そ

の他は回転ナデ調整されるが、灰かぶりのため外面下位の調整は不明瞭である。焼成、還元良好。

土師器

小甕（26） 口縁部分の一部欠損するが、ほぼ完存資料。口径は11.2㎝を測る。口縁部から外面にかけて摩耗気味で調整が不明瞭であるが、体部外面にハケ目、底部外面に削り調整がみられる。また内面もハケで調整され、体部下位は削り調整もみられる。底部内面には暗茶褐色の付着物も確認できる。

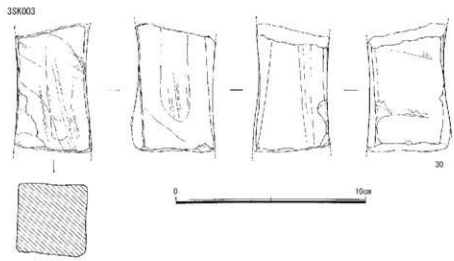


Fig.72 脇道遺跡第3次調査土坑出土遺物実測図（1/2）

弥生土器

甕（27） 口縁部の小破片。外面下位には僅かに突帯が貼り付けられる。焼成不良で摩耗気味。

古式土師器

甕（28） 体部の小破片。外面上位に刻み目を施した凸帯を貼り付ける。内面と外面下位はハケ調整される。全体は淡褐茶色を呈するが、内面下位は淡茶灰色に変色する。

鉢1（29） 底部から口縁部の1/2残存資料。在地系で丸底を呈する。外面は体部から底部にかけて不定方向の削りと若干のハケ目がみられ、内面は当て具痕がみられる。また、内面に煤の付着も観察できる。焼成良好で、胎土は砂粒が多く粗い。復原口径12.1cm。

溝出土遺物

3SD011 出土遺物（Fig.71）

須恵器

蓋（7） 口縁部から体部の小破片。内外面とも回転ナデで調整される。胎土はやや緻密。還元、焼成ともにやや良好である。

坏（8） 口縁端部が1/2程度欠損する他はほぼ残存。内面から体部外面にかけて回転ナデされ、底部外面は回転ヘラ削りされる。外面には自然釉が付着し、底部外面の一部には別個体の粘土の付着がみられるため、重ね焼きされたと考えられる。歪みが著しい。

土師器

椀（9・10） 9は口縁部の小破片で、口縁端部は強くヨコナデされ、平坦面を有する。10は口縁部から体部の小破片。胎土は緻密で全体的に摩耗が著しいが、体部外面に強いナデとみられる調整が観察できる。いずれも焼成不良である。

土坑出土遺物

3SK003 出土遺物（Fig.72）

石製品

砥石（30） 砂岩製で、4面に細かな擦り痕がみられる。淡茶灰色を呈する。

その他の遺構出土遺物

3SX008 出土遺物（Fig.73）

土師器

甕（31） 口縁部の小破片。内面下位に削りがみられるほかは、摩耗のため調整不明瞭。

3SX009 出土遺物（Fig.73）

須恵器

壺（32） 口縁部の小破片。端部は断面三角形を呈し、外面中位には凹線がみられる。また、外面下位には波状文が施される。内面は剥離が著しいが、暗緑灰色の自然釉が全体にかかる。

3SX014 出土遺物（Fig.73）

土師器

甕（33） 口縁部の小破片。焼成不良で、摩耗のため調整不明瞭。

3SX021 出土遺物（Fig.73）

土師器

把手（34） 器種不明の小破片。胎土には淡白褐色の0.5～1㎜の砂粒を多く含む。焼成不良で摩耗気味であるが、指頭圧痕がみられる。

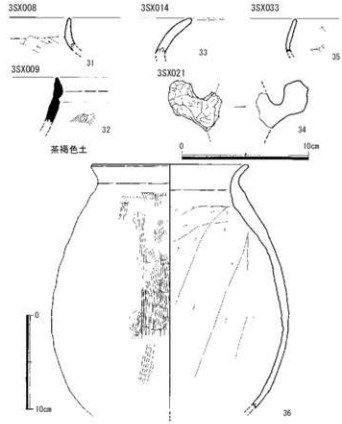


Fig.73 脇道遺跡第3次調査その他の遺構・土層出土遺物実測図（1/3、1/4）

3SX033 出土遺物（Fig.73）

土師器

壺（35） 口縁部の小破片。全体的に摩耗気味だが、外面に僅かにハケ目痕が観察できる。焼成不良。

土層出土遺物

茶褐色土出土遺物（Fig.73）

古式土師器

甕（36） 口径16.6cmを測る。外面は縦方向のハケで調整され、一部指頭圧痕もみられる。体部内面は削り調整が観察できる。胎土は5㎜以下の砂粒を多く含み、粗い。焼成良好。

外面には一部黒色化もみられる。

(5) 小結

本調査によって確認できたものは、下記の諸時期に区分できる。

Ⅰ期（古墳前期）3SI005・SI010・SI020

Ⅱ期（古墳後期）3SB015

調査段階の所見として、古墳から古代にかけての遺構群を確認したと判断していたが、遺物詳細を確認した結果、古墳前期および後期の遺構群であると判断するに至った。本調査区のみで集落景観を想定することは困難なため、隣接する諸調査成果を考慮した上で議論すべきであろう。

Fig.74　脇道遺跡第３次調査遺構略測図（1/200）

表17　脇道遺跡第3次調査　遺構一覧表

S番号	遺構番号	遺構性格	堆積土	先後関係	時　期	地区番号
1	3SX001	Pit群			不明	L2
2	3SX002	Pit群			古墳後期以降	M5
3	3SK003	土坑			不明	L5
4	3SX004	Pit			古墳期	K8
5	3SI005	方形プラン			古墳前期	F8
6	3SX006	窪み		S-5→S-6	不明	E9
7	3SX007	Pit群			不明	F7
8	3SX008	Pit群			古墳前期	F7
9	3SX009	Pit群			古墳後期	E7
10	3SI010	方形プラン		S-10→S-5	不明	F8
11	3SD011	溝			古墳後期	6ライン
12	3SX012	Pit群			不明	G6
13	3SX013	Pit群			不明	G6
14	3SX014	窪み	包含層		不明	E5
15	3SB015	掘立柱建物			古墳後期	G5他
16	3SX016	窪み		S-20付帯土坑	不明	F5
17	3SX017	Pit群			古墳期	F6
18	3SD018	溝		S-18→S-11	不明	F5
19	3SX019	Pit		S-19→S-14	古墳後期	E5
20	3SI020	方形プラン			不明	F5他
21	3SX021	窪み		S-21→S-15d	古墳後期	F5
22	3SX022	Pit群			不明	E4
23	3SX023	Pit		S-23→S-21	不明	F5
24	3SD024	溝		S-24→S-15	不明	G5
25	3SI025	方形プラン		S-25→S-20	古墳前期	G7他
26	3SX026	Pit			不明	F4
27	3SX027	Pit			不明	E5
28	3SX028	Pit			不明	H7
29	3SX029	Pit			不明	H5
30	3SI030	方形プラン			古墳後期	H6
31	3SX031	Pit			不明	I5
32	3SX032	Pit			弥生期	H5
33	3SX033	Pit群			古墳期	G4
34	3SX034	窪み			不明	G4
35	3SI035	方形プラン		S-35→S-31・32	古墳後期	I4

表18　脇道遺跡第3次調査　出土遺物一覧表

S-1

土	師	器	破片

S-2

須	恵	器	甕
土	師	器	甕

S-3

土	師	器	甕
石	製	品	砥石

S-4

土	師	器	甕、高坏

S-5 a

土	師	器	甕

S-5 b

古	式	土	師	器 甕

S-5 d

古	式	土	師	器 椀、壺

S-5 e

土	師	器	甕

S-5 g 灰色砂土

古	式	土	師	器 甕

S-5 h 灰茶色砂土

古	式	土	師	器 甕

S-5 i 灰茶色砂土

土	師	器	破片

S-6

土	師	器	甕

S-7

須	恵	器	破片
土	師	器	破片

S-8

土	師	器	甕

S-9

須	恵	器	壺

S-10

土	師	器	破片

S-10 a

土	師	器	破片

S-11

須	恵	器	坏蓋、坏身
土	師	器	甕、椀、高坏

S-12

土	師	器	破片

S-13

土	師	器	破片

S-14

須	恵	器	甕
土	師	器	破片、甕

S-15 a

須	恵	器	破片
弥	生	土	器 壺（中期）

S-15 a 柱痕

土	師	器	破片

S-15掘り方

土	師	器	破片

S-15 b

須	恵	器	甕
土	師	器	破片

S-15 b 掘り方

土	師	器	破片

S-15 c

土	師	器	破片

S-15 c 柱痕

土	師	器	破片

S-15 c 掘り方

土	師	器	破片

S-15 d

須	恵	器	破片

S-15 d 掘り方

須	恵	器	坏身、甕
土	師	器	破片

S-15 e

須	恵	器	坏身
土	師	器	破片

S-15 e 柱痕

土	師	器	破片

S-15 e 掘り方

土	師	器	破片

S-15 f

須	恵	器	甕、壺、坏身
土	師	器	破片

S-15 f 掘り方

須	恵	器	甕、壺
土	師	器	甕

S-15 g

須	恵	器	甕
土	師	器	破片

S-15 g 柱痕

土	師	器	破片

S-15 g 掘り方

須	恵	器	甕、坏、壺
土	師	器	甕

S-15 h

須	恵	器	破片
土	師	器	破片

S-15 h 柱痕

土	師	器	破片

S-15 h 掘り方

土	師	器	破片

S-15 i

土	師	器	破片

S-15 i 柱痕

土	師	器	破片

S-15 i 掘り方

土	師	器	破片

S-15 j

土	師	器	破片

S-15 j 掘り方

土	師	器	破片

S-15 j 柱痕

土	師	器	破片

S-15 k

須	恵	器	甕
土	師	器	破片

S-15 k 柱痕

土	師	器	破片

S-15 k 掘り方

土	師	器	破片

S-15 l

土	師	器	破片

S-15 1 粧瓶

土	師	器 甕

S-15 1 銅ヵ刀

土	師	器 破片

S-16

土	師	器 破片

S-17

土	師	器 破片
古 式 土 師		器 高坏、甕

S-18

土	師	器 破片

S-19

須	恵	器 甕
土	師	器 破片

S-20茶色土

土	師	器 破片

S-20灰土

土	師	器 破片
石	製	品 剥片（サヌカイト）

S-20 a

土	師	器 破片

S-20 b

土	師	器 破片

S-20 c

土	師	器 破片

S-20 d

土	師	器 破片

S-20 e

土	師	器 破片

S-21

土	師	器 把手、高坏、椀

S-22

土	師	器 高坏、甕

S-23

土	師	器 破片

S-24

土	師	器 破片

S-25

古 式 土 師		器 壺、甕、破片
弥 生 土		器 甕

S-25 a

土	師	器 破片

S-25 b

土	師	器 小椀、甕

S-25 c

古 式 土 師		器 広口壺

S-25 d

土	師	器 破片

S-25炭化物

土	師	器 甕、高坏

S-25茶色土

土	師	器 甕、椀
古 式 土 師		器 小鉢

S-26

土	師	器 破片

S-27

土	師	器 破片

S-28

土	師	器 破片

S-29

土	師	器 高坏、椀片

S-30

須	恵	器 坏身
土	師	器 椀、甕

S-31

土	師	器 破片

S-32

弥 生 土		器 甕（後期）、破片

S-33

土	師	器 高坏、甕、壺

S-34

土	師	器 破片

S-35

須	恵	器 壺
土	師	器 椀、甕、小甕、鉢1
弥 生 土		器 甕（中期）
土	製	品 焼土塊
古 式 土 師		器 大甕

S-35

須	恵	器 壺
土	師	器 椀、甕
弥 生 土		器 甕（中期）
土	製	品 焼土塊
そ	の	他 古式土師器;大甕

S-35 a

土	師	器 破片

茶褐色土

須	恵	器 甕、坏身、坏 c
古 式 土 師		器 破片、甕、高坏
石	製	品 剥片（黒曜石）
肥前系陶磁器		紅皿
国 産	磁	器 香炉、椀

黄土

須	恵	器 壺、高坏
土	師	器 甕
国 産	磁	器 破片

V、自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

(1) 殿城戸遺跡第８次調査の自然科学分析

はじめに

殿城戸遺跡（太宰府市大佐野字殿城戸所在）からは、姶良Tnテフラより下位層準において腐植質堆積物が確認されている。今回は、テフラの確認と泥炭層の年代観、当時の古植生推定を目的とした調査を実施する。

1. 試料

試料は、第８次調査の堆積断面で確認された姶良Tnテフラ層みられる火山灰層と、その直下の茶灰色粘土層と黒色粘土層より採取された３点である。火山灰層に関してはテフラ分析と屈折率測定を実施する。火山灰層直下の茶灰色粘土層については、その中の植物遺体について放射性炭素年代測定を実施する。その下位の黒色粘土については花粉分析を実施する。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

測定は株式会社加速器研究所の協力を得て、AMS法で行った。なお、放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma）に相当する年代である。なお、この時代には、年輪年代との照合等から得られた暦年較正曲線は得られていない。そこで、珊瑚礁をもとに、ウラン－トリウム法と放射性炭素年代測定法との比較によって推測された値（Edouard Bard et al.,1993）を参考にした。

(2) テフラ分析・屈折率測定

試料約20gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。火山ガラスについては、その形態によりバブル型と中間型、軽石型に分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分であるＹ字状の高まりを持つもの、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの、軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く延びた繊維束状のものとする。なお、屈折率の測定は、古澤（1995）のMAIOTを使用した温度変化法を用いた。

(3) 花粉分析

試料約10ｇについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）よる有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸９：濃硫酸１の混合液）処理の順に物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類（Taxa）について同定・計数する。結果は、木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いたものをそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

結果を表19に示す。測定の結果24,200±140年を得た。これを、Edouard Bard et al.(1993)の相関グラフをもとに換算すると、較正年代は約2.8万年前となる。

表19 殿城戸遺跡の放射性炭素年代測定結果

試料名	性状(重量)	方法	補正年代 BP	δ13C (‰)	測定年代 BP	Code.No.
殿城戸遺跡茶灰色土	植物片(5g)	AMS法	24200±140	-26.36±0.64	24,220±140	IAAA-31958

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
3)付記した誤差は、測定誤差σ(測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

(2) テフラ分析・屈折率測定

処理後に得られた砂分のほとんどは細砂～極細砂径の火山ガラスである。軽石およびスコリアは全く含まれていない。また、遊離結晶もほとんど認められない。火山ガラスは、無色透明のバブル型が多く、少量の軽石型が混在する。火山ガラスの屈折率は、n1.500に集中した(Fig.75)。

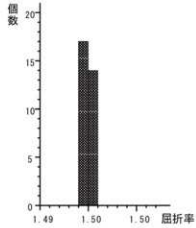


Fig.75 殿城戸遺跡の火山ガラスの屈折率

(3) 花粉分析

結果を表20・Fig.76に示す。草本花粉の割合が高いのが特徴的で、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属、セリ科などがみられる。花粉全体に占める木本花粉の割合は低いが、木本花粉の中だけで見ると、コナラ亜属の割合が高くなっている。

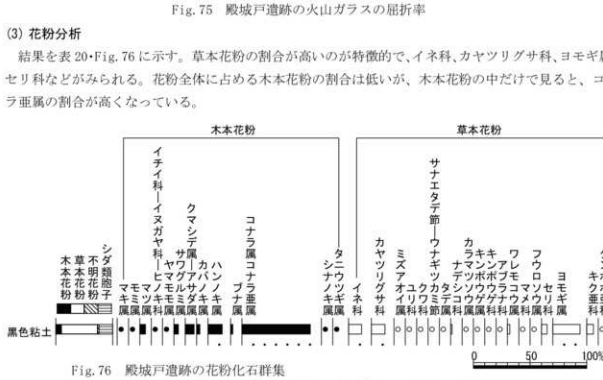


Fig.76 殿城戸遺跡の花粉化石群集

出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満を示す。

4. 考察

今回のテフラ層から検出された火山ガラスは、形態と屈折率から、姶良Ｔｎ火山灰（ＡＴ：町田・新井，1976）に由来することは確実である。また、異質物がほとんど混在しないことから、分析したテフラ層は、ＡＴの降灰層準であると考えられる。町田・新井（2003）は、姶良Tnテフラ降灰層準の放射性炭素年代値をまとめた結果をもとに、降灰年代を2.4-2.5万年としている。また、まだ問題があるとしながらも、暦年較正後の年代を2.6-2.9万年としている。今回のAT直下茶灰色粘土層の年代測定結果は、上記の年代とほぼ同一であり、調和的である。

AT直下の茶灰色粘土層直下に認められた黒色粘土層の花粉化石群集は、草本類が主体の組成で、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属、セリ科等が検出される。当時の調査地点周辺は草地植生が卓越していたと考えられる。また、木本花粉でみられるサワグルミ属、クマシデ属－アサダ属、ハンノキ属などは、河畔や谷筋などを中心に生育していたものと考えられる。これまで北九州地域で行われた花粉分析の結果をまとめた成果によると、姶良Tnテフラ後灰以前は、コナラ亜属などの落葉広葉樹が優勢であったものが、降灰後はマツ属、モミ属、ツガ属、トウヒ属など針葉樹を主体とした組成に変化すると考えられている（Hatanaka, 1985; 畑中ほか，1998）。今回の結果もこれと類似した組成になっており、コナラ亜属などの落葉広葉樹が周辺の丘陵上を中心に広葉樹林を構成していたものと考えられる。

表20　花粉分析結果

種　類	試料番号 H4
木本花粉	
マキ属	1
モミ属	1
マツ属複維管束亜属	1
マツ属(不明)	4
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	1
ヤマモモ属	1
サワグルミ属	4
クマシデ属－アサダ属	8
カバノキ属	3
ハンノキ属	13
ブナ属	2
コナラ属コナラ亜属	62
シナノキ属	1
タニウツギ属	1
草本花粉	
イネ科	121
カヤツリグサ科	129
ミズアオイ属	7
ユリ科	5
クワ科	3
サナエタデ節－ウナギツカミ節	8
タデ属	1
ナデシコ科	13
カラマツソウ属	8
キンポウゲ属	5
キンポウゲ科	3
アブラナ科	2
ワレモコウ属	22
マメ科	2
フウロソウ属	2
セリ科	52
ヨモギ属	256
キク亜科	62
タンポポ亜科	2
不明花粉	28
シダ類胞子	
シダ類胞子	260
合　計	
木本花粉	103
草本花粉	703
不明花粉	28
シダ類胞子	260
総計(不明を除く)	1066

引用文献

Edouard Bard, Maurice Arnold, Richard G. Fairbanks and Bruno Hamelin, 1993, ^{230}Th-^{234}U and ^{14}C ages obteined by mass spectrometry on coral. radiocarbon, 35, 191-199.

古澤明，1995. 火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別．地質学雑誌，101, 123-133.

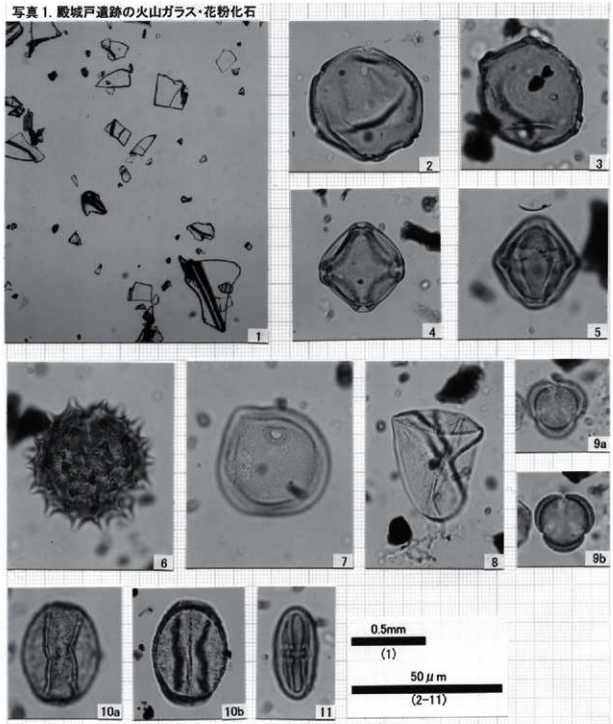
Hatanaka Ken'ichi, 1985, Palynological stadies on the vegetational succession the wurm glacialage in Kyushu and adjacenet areas. Journal of the Faculty of literature, Kitakyusyu Univerasity (Series B), 18, 29-71.

畑中健一・野井英明・岩内明子，1998. 九州地方の植生史．図説　日本列島植生史．安田喜憲・三好教夫編，朝倉書店，151-161.

町田洋・新井房夫，1976. 広域に分布する火山灰－姶良Tn火山灰の発見とその意義－．科学，46, 339-347.

町田洋・新井房夫，2003. 新編　火山灰アトラス．東京大学出版会 336p.

写真 1. 殿城戸遺跡の火山ガラス・花粉化石



1．ATの火山ガラス（AT層）
2．サワグルミ属（黒色粘土）
3．クマシデ属ーアサダ属（黒色粘土）
4．ハンノキ属（黒色粘土）
5．ワレモコウ属（黒色粘土）
6．キク亜科（黒色粘土）
7．イネ科（黒色粘土）
8．カヤツリグサ科（黒色粘土）
9．ヨモギ属（黒色粘土）
10．コナラ亜属（黒色粘土）
11．セリ科（黒色粘土）

(2) 殿城戸遺跡第10次調査における自然科学分析

はじめに

佐野地区遺跡群は、太宰府市域の西南部に広がる標高200～300m程度の低山地から構成される牛頭低山地（磯，2001）の北麓に分布している。佐野地区遺跡群では、弥生時代および古墳時代を中心とした遺構、遺物が検出されており、集落が確認されている遺跡もある。本報告では、遺跡群の中の殿城戸遺跡および脇道遺跡の発掘調査に伴う自然科学分析を行う。

殿城戸遺跡では、古墳時代の集落が検出されているが、本報告では発掘調査所見により縄文時代以前とされる堆積層を対象として、土層断面に認められた砂質の堆積物が火山灰層であるか、火山灰層である場合には、その構成物の特徴を明らかにして既知の火山灰（テフラ）との対比を行う火山灰の分析と堆積層中に包含される花粉化石を検出することにより古植生変遷を推定する花粉分析を行う。なお、火山灰の分析では、類例の分析として大宰府跡蔵司前水路改修で検出された砂質堆積物の分析も行う。

I、火山灰の分析

1．試料

試料は、殿城戸遺跡第10次調査F8区S-2トレンチで作成された土層断面より採取された砂質堆積物2点と大宰府跡蔵司前水路改修で作成された土層断面より採取された砂質堆積物1点の合計3点である。

殿城戸遺跡の断面では、上位より黒色粘土層、青灰色シルト層、青灰色砂層の各層が認められ、試料は、黒色粘土層中に挟まれた「灰白色微砂」とされた堆積物と青灰色砂層の直下に認められた「淡灰褐色細砂」とされた堆積物からそれぞれ1点ずつ採取された。

大宰府跡蔵司前水路改修では、現地表を構成する厚さ約1m程度の盛土層の下位に厚さ40cm程度の耕土層が認められ、その下位に厚い褐色粘土層の堆積が認められている。さらに褐色粘土層の上面から約20cm下位に厚さ約20cmの褐色の砂質堆積層が認められている。試料は、この褐色砂質堆積層から1点採取され、「火山灰？」とされた。

2．分析方法

試料は、色調および粒径などから主に火山ガラスからなる細粒火山灰であることが予想されたことから、その特性として重鉱物組成と火山ガラスの量比および形態を捉える重鉱物・火山ガラス比分析を行う。また、火山ガラスが検出された場合には、その屈折率の測定を行い、テフラ同定の精度を高める。以下に処理手順を述べる。

試料約40gに水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4mm-1/8mmの砂分をポリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96）により重液分離、重鉱物・火山ガラス比分析では重鉱物と軽鉱物分中に含まれた火山ガラス、重軽鉱物分析では重鉱物と火山ガラスを含めた軽鉱物をそれぞれ偏光顕微鏡下にて同定する。重鉱物の同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とした。「不透明鉱物」以外の不透明粒及び変質等で同定の不可能な粒子は、「不明」とした。また、火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は厚手平板状あるいは比較的大きな気泡持つ塊状、軽石型は小気泡を非常に多く持つ塊状および繊維束状のものとする。火山ガラス比分析は、軽鉱物分中における火山ガラスを計数するものである。

火山ガラスの屈折率の測定は、古澤（1995）のMAIOTを使用した温度変化法を用いた。

３．結果

分析結果を表 21、Fig. 77 に示す。殿城戸遺跡の試料２点のうち、灰白色微砂の試料は、回収された砂分自体が少量であり、特に重鉱物粒は 100 粒に満たなかった。検出された重鉱物では不透明鉱物と斜方輝石が多い傾向が窺え、他に単斜輝石や角閃石も認められた。軽鉱物分中の火山ガラスの量は微量であり、バブル型と軽石型（多くは繊維束状）の両者が認められた。これに対して、淡灰褐色細砂の試料では、重鉱物、火山ガラスともに比較的豊富に含まれている。その重鉱物組成は、斜方輝石が非常に多く、これに少量の単斜輝石、角閃石、不透明鉱物が伴われる。火山ガラス比では、バブル型が多く、中量の軽石型（多くは繊維束状）を伴うという組成である。

表21　重鉱物・火山ガラス比分析結果

試料番号	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
殿城戸遺跡　灰白色微砂	4	17	2	1	0	35	30	89	5	0	5	240	250
殿城戸遺跡　淡灰褐色細砂	0	169	17	22	1	33	8	250	160	0	75	15	250
蔵司前水路改修　火山灰？	0	169	36	13	1	23	8	250	79	0	141	30	250

大宰府跡蔵司前水路改修の試料も重鉱物、火山ガラスともに比較的豊富に含まれている。重鉱物組成は、殿城戸遺跡の淡灰褐色細砂試料とほぼ同様であるが、火山ガラス比では、軽石型（多くは繊維束状）の方が多く、バブル型は中量である。

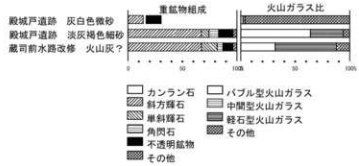


Fig. 77　重鉱物組成および火山ガラス比

３点の試料から検出された火山ガラスの屈折率測定結果を Fig. 78 に示す。いずれも n1. 498 ～ 1. 501 のレンジを示し、特に n1. 499 ～ 1. 500 付近に高い集中を示す。

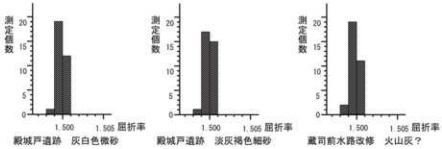


Fig. 78　火山ガラスの屈折率

４．考察

３点の試料から検出された火山ガラスは、バブル型と繊維束状の軽石型が混在することと n1. 499 ～ 1. 500 付近に高い集中を示すことおよび各遺跡の地理的位置とこれまでのテフラの分布（例えば町田・新井，1992）から、いずれも姶良Ｔｎ火山灰（ＡＴ：町田・新井，1976）に由来すると考えられる。ＡＴは、鹿児島湾奥部の姶良カルデラを給源とするテフラであり、その噴出年代は、いくつかの年代測定例（例えば松本ほか（1987）；村山ほか（1993）；池田ほか（1995）など）から、2. 5 万年前頃と考えられることが多い。

殿城戸遺跡の淡灰褐色細砂試料は、火山ガラスを多量に含むことと斜方輝石の多い重鉱物組成および土層断面における層相から、ＡＴの降下堆積層である可能性が高い。したがって、その上位に堆積する殿城戸遺跡の灰白色微砂試料は、ＡＴの火山ガラスを含むものの、ＡＴ噴出時の降下堆積層ではなく、ＡＴの火山ガラスの混在した水成堆積物であると考えられる。

大宰府跡蔵司前水路改修の試料が採取された堆積層は、殿城戸遺跡の淡灰褐色細砂試料と同様の理由により、ＡＴの降下堆積層である可能性が高い。なお、火山ガラスの形態における量比が、殿城戸遺跡の淡灰褐色細砂試料と大宰府跡蔵司前水路改修の試料とで異なるが、降下堆積時の淘汰作用などにより、火山ガラスの形態の量比が異なるユニットの形成などがその原因として考えられる。

Ⅱ、花粉分析

１．試料

試料は、殿城戸遺跡第10次調査F10区南壁土層より採取された試料番号1-1～4-1の、計４点である。土層断面では、灰白色砂層の下位に、上位より順に黒色粘土層、黒灰色粘土層、暗黒灰色粘土層、淡黒色粘土層の各粘土層が認められ、試料番号1-1～4-1の各試料は、これら各粘土層より順にそれぞれ１点ずつ採取されたものである。

２．分析方法

試料約10ｇについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛:比重2.3）よる有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸９：濃硫酸１の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

３．結果

結果を表22・Fig.79に示す。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。

いずれの試料からも花粉化石が豊富に検出される。試料番号2-1・3-1の保存状態は普通であるが、試料番号1-1・4-1はやや悪い。

試料番号1-1は草本花粉の割合が高く、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属などが多産する。その他ではカラマツソウ属、ワレモコウ属、セリ科などを伴う。また、ミズアオイ属、ツリフネソウ属なども検出される。木本花粉では、コナラ属コナラ亜属が多産し、クマシデ属－アサダ属、ハンノキ属、ブナ属などが認められる。

試料番号2-1・3-1は類似しており、木本花粉の割合が高く、ハンノキ属が多産する。その他ではマツ属（特に試料番号2-1では単維管束亜属）、クマシデ属－アサダ属、コナラ亜属などを伴い、モミ属、ツガ属、ニレ属－ケヤキ属なども認められる。草本花粉では、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属が多く産出する。また、わずかではあるが、ガマ属、ミズアオイ属なども検出される。

試料番号4-1では草本花粉の割合が高く、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属が多産し、ミズアオイ属、カラマツソウ属、セリ科などを伴う。木本花粉では、クマシデ属－アサダ属、ハンノキ属、コナラ亜属などが多く産出し、モミ属、ツガ属、ヤマモモ属、カバノキ属、ブナ属、ニレ属－ケヤキ属などが認められる。

４．考察

今回検出された木本類についてみると、ハンノキ属、コナラ亜属などをはじめ、全体的な組成にばらつきが認められる。特に試料番号3-1の暗黒灰色粘土層とその上位の試料番号2-1の黒灰色粘土層では木本類の割合が高く、その多くがハンノキ属である。これらのことから、今回得られた花粉群集は、局

地生が高い群集であると推測される。産出の割合に差違はあるものの、いずれの層準においても、ハンノキ属、コナラ亜属、クマシデ属－アサダ属などが多く、サワグルミ属、ニレ属－ケヤキ属なども認められる。これらは低湿地林や河畔林を構成する種を含む分類群である。よって、低地部の湿地や河畔沿いなどにハンノキ属、コナラ亜属をはじめとするこれらの種類が生育していたと推測される。また、カバノキ属、ブナ属などの落葉広葉樹や、モミ属、ツガ属などの針葉樹は後背の丘陵部やその縁辺付近に生育していたと考えられる。

一方、草本類についてみると、いずれの層準も類似しており、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属が多産するほか、カラマツソウ属、ワレモコウ属なども認められる。よって、遺跡およびその周辺では、これらの種類が分布する開けた状態であったと推測される。また、ガマ属、ミズアオイ属、ツリフネソウ属などの水湿地生の種類も認められることから、ニレ属－ケヤキ属などと同様に、遺跡周辺の湿地や河川沿いなどに生育していたと考えられる。

今回の結果で注目すべき点は、コナラ属アカガシ亜属やシイノキ属といった暖温帯性常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林）の構成要素が含まれていないことである。太宰府市史によると、本遺跡周辺の潜在自然植生は照葉樹林に区分されている（井上，2001）。北九州地方における既存の研究結果では、照葉樹林が発達するのは約 8500 年前以降であるとされ、コナラ亜属、クマシデ属－アサダ属、ニレ属－ケヤキ属などの落葉広葉樹が優占するのは、晩氷期～後氷期初期の約 15000 ～ 8500 年前頃とされている（畑中ほか，1998 など）。よって、今回分析を実施した 4 層準は、いずれも約 8500 年前以前の堆積物である可能性がある。

表22　花粉分析結果

種　類	南壁土層			
試料番号	1-1	2-1	3-1	4-1
木本花粉				
モミ属	－	2	3	5
ツガ属	－	2	7	8
トウヒ属	－	1	－	1
マツ属単維管束亜属	－	27	5	－
マツ属複維管束亜属	－	4	－	－
マツ属（不明）	3	27	19	6
スギ属	1	1	－	2
ヤナギ属	4	1	－	1
ヤマモモ属	7	2	2	11
サワグルミ属	10	－	2	6
クルミ属	2	－	－	－
クマシデ属－アサダ属	28	15	16	32
カバノキ属	2	6	5	12
ハンノキ属	37	173	183	52
ブナ属	12	－	4	8
コナラ属コナラ亜属	134	8	33	41
クリ属	－	－	－	1
シイノキ属	－	－	1	－
ニレ属－ケヤキ属	5	5	7	11
カエデ属	1	1	4	3
シナノキ属	5	2	3	1
ウコギ科	1	1	－	－
イボタノキ属	－	－	2	2
トネリコ属	1	1	1	3
クサギ属	－	1	－	－
ガマズミ属	－	－	1	－
タニウツギ属	1	－	－	3
スイカズラ属	－	1	－	－
草本花粉				
ガマ属	－	－	1	1
イネ科	206	20	39	190
カヤツリグサ科	396	36	32	190
ミズアオイ属	13	－	3	18
ユリ科	－	－	1	3
クワ科	5	－	－	－
サナエタデ節－ウナギツカミ節	11	3	2	1
タデ属	－	－	－	1
アカザ科	1	－	－	－
ナデシコ科	4	1	1	－
カラマツソウ属	16	4	3	29
キンポウゲ属	5	－	3	8
ホンポウゲ科	5	－	1	1
アブラナ科	2	－	－	2
ワレモコウ属	39	1	4	9
バラ科	1	－	－	3
マメ科	4	－	－	1
フウロソウ属	1	1	－	3
ツリフネソウ属	3	－	－	－
セリ科	60	2	8	32
シソ科	－	1	1	－
ヤエムグラ属－アカネ属	1	－	1	1
ヨモギ属	432	16	42	240
キク亜科	20	8	10	30
タンポポ亜科	－	－	2	1
不明花粉	19	13	13	15
シダ類胞子				
ゼンマイ属	－	－	1	－
他のシダ類胞子	49	37	10	8
合　計				
木本花粉	254	281	298	209
草本花粉	1225	93	154	764
不明花粉	19	13	13	15
シダ類胞子	49	37	11	8
総計（不明を除く）	1528	411	463	981

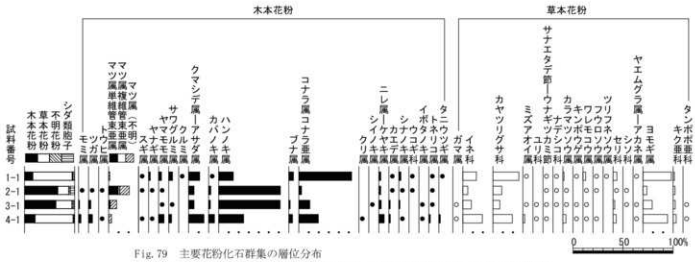


Fig. 79　主要花粉化石群集の層位分布
出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は１％未満を示す。

引用文献

古澤　明（1995）火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別．地質学雑誌，101，p.123-133.

畑中健一・野井英明・岩内明子（1998）九州地方の植生史．図説　日本列島植生史，安田喜憲・三好教夫編，p.151-161，朝倉書店．

池田晃子・奥野充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫（1995）南九州、姶良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による ^{14}C年代．第四紀研究，34，p.377-379.

井上晋（2001）植物と植生．太宰府市史　環境資料編，太宰府市史編集委員会編，p.107-135，太宰府市.

磯望（2001）地形．太宰府市史　環境資料編，太宰府市史編集委員会編，p.7-32，太宰府市.

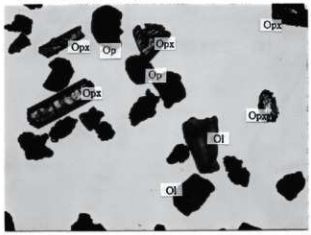
町田洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰－姶良Ｔｎ火山灰の発見とその意義－．科学，46，p.339-347.

町田洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．276p.，東京大学出版会.

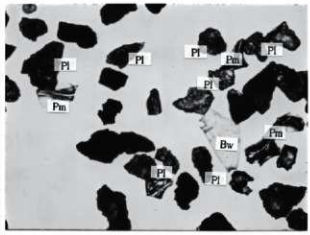
松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗（1987）姶良Ｔｎ火山灰の ^{14}C年代．第四紀研究，26，p79-83.

村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村　真・安田尚登・平　朝彦（1993）四国沖ピストンコア試料を用いたＡＴ火山灰噴出年代の再検討－タンデトロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の ^{14}C年代　－．地質学雑誌，99，p.787-798.

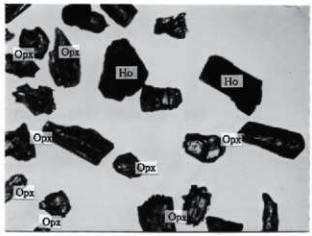
写真 2. 重鉱物・火山ガラス



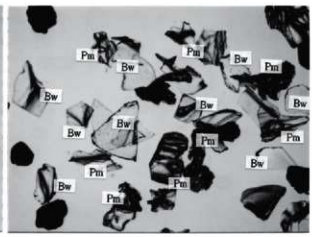
1. 重鉱物　殿城戸遺跡　灰白色微砂



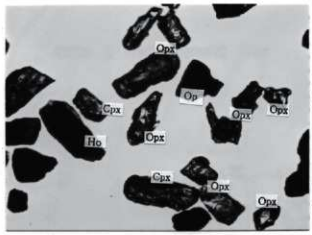
4. 火山ガラス　殿城戸遺跡　灰白色微砂



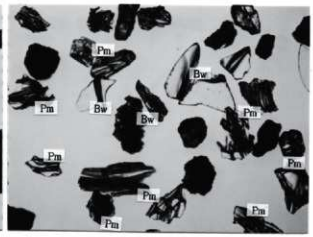
2. 重鉱物　殿城戸遺跡　淡灰褐色細砂



5. 火山ガラス　殿城戸遺跡　淡灰褐色細砂



3. 重鉱物　大宰府跡蔵司前水路改修　火山灰？

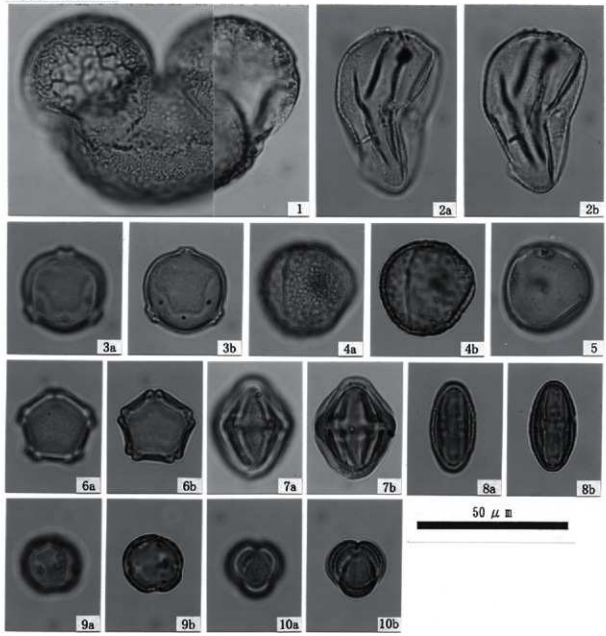


6. 火山ガラス　大宰府跡蔵司前水路改修　火山灰？

Ol: カンラン石. Opx: 斜方輝石. Cpx: 単斜輝石. Ho: 角閃石. Op: 不透明鉱物.
Pl: 斜長石. Bw: バブル型火山ガラス. Pm: 軽石型火山ガラス.

0.5mm

写真 3. 花粉化石



1．マツ属単維管束亜属(南壁土層;2-1)
2．カヤツリグサ科(南壁土層;1-1)
3．クマシデ属ーアサダ属(南壁土層;1-1)
4．コナラ属コナラ亜属(南壁土層;1-1)
5．イネ科(南壁土層;1-1)
6．ハンノキ属(南壁土層;1-1)
7．ワレモコウ属(南壁土層;1-1)
8．セリ科(南壁土層;1-1)
9．カラマツソウ属(南壁土層;1-1)
10．ヨモギ属(南壁土層;1-1)

Ⅵ、調査まとめ

今回報告した調査地の面積は、さほど広くないため、全体像が掴めにくいが、大まかな時代の流れを掴んでみたいと思う。

殿城戸遺跡は旧石器が多量に出土した脇道遺跡第４次調査（太宰府市の文化財第 93 集）の隣接地ということから、旧石器は出土するものの、第４次調査ほどの出土量はなく、その旧石器堆積層の周辺部という状況を示している。

その後遺構・遺物が増加するのは、弥生時代後期になってからである。特に弥生時代後期から古墳時代初期にかけての遺物が多く見られたが、竪穴住居や掘立柱建物は僅かしか検出されていない。

古代になると遺構や遺物は僅かに確認できるものの、当時の景観を知るほどの状況は確認できていない。

中世から現代にかけて、再び遺構・遺物の増加がみられ、第４・５・10 次調査では現在の地割と一致する溝が検出され、中世から始まった土地の開削が近世にかけても行われたとみられ、、調査直前まで維持されていた農村風景が中世に始まったことが理解できる。

殿城戸遺跡周辺の状況をみると、尾崎・脇道遺跡では、弥生時代中期から古墳時代にかけての竪穴住居や掘立柱建物が多く検出され、古墳時代初期前後には殿城戸遺跡第７次調査（太宰府市の文化財第 62 集）の方形区画溝や尾崎遺跡第６次調査の竪穴住居群など遺構が顕著にみられる。南西の脇道遺跡第２次調査では奈良時代の遺構とともに木簡も出土している。このような周辺状況の中で、殿城戸遺跡では遺構が希薄、もしくは大きく削平されている状況が確認された。このことは、現代の土地利用状況が畑地や宅地であったことや明確な水掛かりも確認できないことから、殿城戸一帯は、古代以前は周辺より若干高い微高地であった可能性が高く、中世以降の開発により広く削平されたと推測される。

以上のように中世以降の遺構や遺物の状況は、西側の京ノ尾遺跡と酷似しており、和久堂城をはじめ中世城郭の築造と大佐野集落の出現が直接関係あることが想定される。現在調査地一帯は区画整理が完了し、かつての面影が残されていないが、区画整理が開始される直前には、この殿城戸は丘陵裾に住宅が建ち、その北側前面に田圃が広がっていた。この情景は近代に入ってからは大きな変化がなかったものと考えられる。

参考文献

太宰府市『太宰府市史　考古資料編』1992

太宰府市『太宰府市史　民俗資料編』1993

太宰府市『太宰府市史　環境資料編』2001

太宰府市教委『太宰府条坊跡Ⅴ』太宰府市の文化財第 13 集　1989

太宰府市教委『太宰府・佐野地区遺跡群 XII』太宰府市の文化財第 58 集　2001

太宰府市教委『太宰府・佐野地区遺跡群 13』太宰府市の文化財第 62 集　2002

太宰府市教委『太宰府・佐野地区遺跡群 21』太宰府市の文化財第 85 集　2006

太宰府市教委『佐野地区遺跡群 23』太宰府市の文化財第 93 集　2007

太宰府市教委「古代の木簡」『遺跡だより』第 15 号 1992

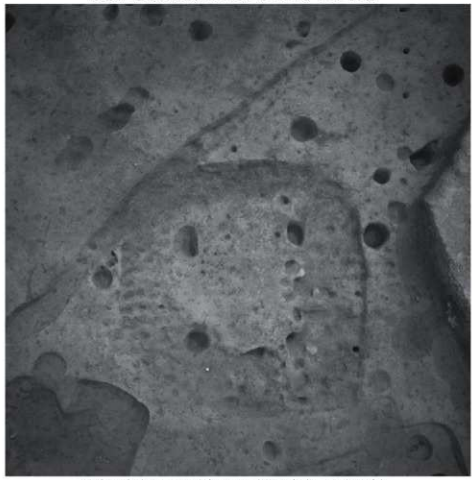
写真図版

写真図版には遺構・遺物の主な写真を掲載している。これらの写真を含めその他の遺構および遺物写真は、付録の CD にカラー情報で収録している。

殿城戸遺跡第１次調査全景（西から）

殿城戸遺跡 1ST001・SK010 遺構検出状況（東から）

殿城戸遺跡 3 次調査区全景（上が北、空中写真）



殿城戸遺跡 3SI010 完掘状況（上が南東、空中写真）

殿城戸遺跡第４次調査区全景（上が南西、空中写真）

殿城戸遺跡 4SE001 井戸枠検出状況（南東から）

殿城戸遺跡第５次調査地全景（上が北、空中写真）

殿城戸遺跡 5SE030 検出状況（南東から）

殿城戸遺跡第８次調査区全景（下が北、空中写真）

殿城戸遺跡 8SI015 全景（北東から）

殿城戸遺跡第 9 次調査区全景（北から、空中写真）

殿城戸遺跡第 11 次調査区全景（右が北、空中写真）

殿城戸遺跡第 10 次調査区全景（上が北、空中写真）

殿城戸遺跡 10SE010 検出状況（北から）

脇道遺跡第３次南調査区全景（上が西、空中写真）

脇道遺跡 3SB015 完掘状況（上が北、空中写真）

殿城戸遺跡周辺の旧観（1991 年、上が南）

尾崎遺跡より殿城戸集落周辺の旧観を望む（1988 年、北東から）

Pla. 10

1SK010 出土弥生土器甕 (Fig. 4-3)

3 次茶褐色土出土土師器甑 (Fig. 17-6)

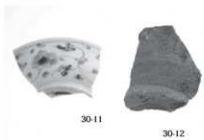
4SX036 出土石包丁 (Fig. 23-35)

4SX044 出土瓦質鉢 (Fig. 23-21)

4 次暗茶色土出土瓦質鉢 (Fig. 24-10)

第 5 次トレンチ出土石器 (Fig. 33)

8SI005b 出土土師器坏 (Fig. 40-1)



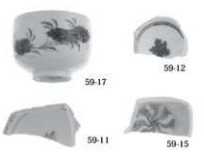
5SD014 下層出土染付皿・国産陶器鉢 (Fig. 30-11・12)

8SI010 暗灰茶色土土師器 (Fig. 40-7)

8 次調査各層出土石製品 (Fig. 42)

10SX025 明茶色土瓦質土器甕(Fig. 58-6)

脇道 3 次 SI025 土師器甕 (Fig. 71-1)



10SX061 出土肥前系磁器椀 (Fig. 59)

10 次茶色土土師質土器釜(Fig. 60-17)

報告書抄録

ふりがな	だざいふ　さのちくいせきぐん
書名	太宰府・佐野地区遺跡群　25
副書名	殿城戸遺跡第1・3・4・5・8・9・10・11次調査、脇道遺跡3次調査
シリーズ名	太宰府市の文化財
シリーズ番号	108集
編著者	宮崎亮一、城戸康利、山村信榮、中島恒次郎、高橋学、下高大輔、久味木理恵、パリノ・サーヴェイ
編集機関	太宰府市教育委員会
所在地	福岡県太宰府市観世音寺1丁目1番1号
発行年月日	2009（平成21）年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	条坊 【概山推定案】	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	座標 X	座標 Y	調査期間 開始	調査期間 終了	調査面積 m^2	調査原因
とのきどいせき 殿城戸遺跡　第1次	条坊外	太宰府市 大字大佐野	40221	297-001	55436.53	−46500.87	19900829	1990906	86.7	区画整理
とのきどいせき 殿城戸遺跡　第3次	条坊外	太宰府市 大字大佐野	40221	297-003	55438.70	−46404.83	19950201	19950331	300	区画整理
とのきどいせき 殿城戸遺跡　第4次	条坊外	太宰府市 大字大佐野	40221	297-004	55495.0	−46435.0	19970417	19970530	280	区画整理
とのきどいせき 殿城戸遺跡　第5次	条坊外	太宰府市 大字大佐野	40221	297-005	55461.79	−46418.44	20000117	20000306	374	区画整理
とのきどいせき 殿城戸遺跡　第8次	条坊外	太宰府市 大字大佐野	40221	297-008	55487.10	−46416.44	20001221	20010620	421	区画整理
とのきどいせき 殿城戸遺跡　第9次	条坊外	太宰府市 大字大佐野	40221	297-009	55445.0	−46418.0	20010326	20010329	72	区画整理
とのきどいせき 殿城戸遺跡　第10次	条坊外	太宰府市 大字大佐野	40221	297-010	55497.0	−46453.89	20010425	20011003	752	区画整理
とのきどいせき 殿城戸遺跡　第11次	条坊外	太宰府市 大字大佐野	40221	297-011	55405.0	−46490.0	20080519	20080531	95	区画整理
わきどういせき 脇道遺跡　第3次	条坊外	太宰府市 大字大佐野	40221	252-003	55453.82	−46375.90	19940201	19940331	500	区画整理

所収遺跡名	遺跡種別	時代	主要遺構	主要遺物	特記事項
殿城戸遺跡　第1次	墓地	弥生	甕棺墓　土坑	弥生土器　甕棺	
殿城戸遺跡　第3次	集落	弥生・古墳 古代	竪穴住居　掘立柱建物	弥生土器　古式土師器 土師器　須恵器	
殿城戸遺跡　第4次	集落	古墳・中世 近世	井戸	弥生土器　古式土師器 瓦質土器　肥前系陶磁器	
殿城戸遺跡　第5次	集落	中世・近世	井戸　掘立柱建物 溝　流路	弥生土器　古式土師器 肥前系陶磁器	
殿城戸遺跡　第8次	集落	弥生・古墳 近代	竪穴住居	弥生土器　古式土師器 瓦質土器　肥前系陶磁器	
殿城戸遺跡　第9次	集落	弥生・近世	土坑	弥生土器　古式土師器	
殿城戸遺跡　第10次	集落	弥生・古墳 中世・近世	井戸　埋甕　溝	弥生土器　古式土師器 瓦質土器　肥前系陶磁器	
殿城戸遺跡　第11次	集落	古墳・平安 近現代	旧河川	古式土師器　須恵器	
脇道遺跡　第3次	集落	弥生・古墳	竪穴住居　掘立柱建物	弥生土器　古式土師器 土師器　須恵器	

太宰府市の文化財　第108集

太宰府・佐野地区遺跡群25

－殿城戸遺跡第1・3・4・5・8・9・10・11次調査－
－脇道遺跡第3次調査－

平成21（2009）年3月

編集　太宰府市教育委員会
発行　〒818-0198
福岡県太宰府市観世音寺1丁目1番1号
印刷　株式会社　四ヶ所
福岡県朝倉市馬田336